

アグネスタキオンは超
光速の夢を見るか

あぬびすびすこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは1人のトレーナーとアグネスタキオンが出会い、トウインクルシリーズを駆け抜けURAFファイナルズを優勝するまでの軌跡を描いた物語である。

※アプリ版ストーリーと育成ストーリーをベースにして作り上げたアグネスタキオン育成ストーリーです。

※前作、前々作とのつながりはありませんがトレーナーは別人です。

前々作再構成の次作 ゴールドシップとの3年間 in アオハル杯

<https://syosetu.org/novel/271816/>

前作

マチカネフクキタルとの3年間 with ゴルシ

前々作 <https://syosetu.org/novel/260697/>

ゴルドシップとの3年間

<https://syosetu.org/novel/255533/>

目次

I n t r o d u c t i o n : 回 顧

1

S t o r y 0 1 : 邂 逅

6

S t o r y 0 2 : 問 題

15

S t o r y 0 3 : 超 光 速

24

S t o r y 0 4 : 果 て

34

I n t e r m i s s i o n : 昼 餉

43

S t o r y 0 5 : 生 活

50

S t o r y 0 6 : 食 事

60

S t o r y 0 7 : 始 ま る 前

69

S t o r y 0 8 : メ イ ク デ ビ ュ ー

I n t e r m i s s i o n : 紅 茶

78

89

S t o r y 0 9 : ト レ ー ナ ー 室

95

S t o r y 1 0 : 次 走

104

S t o r y 1 1 : ホ ー プ フ ル ス テ ー ク ス

113

S t o r y 1 2 : 正 月

125

I n t e r m i s s i o n : 想 い

133

S t o r y 1 3 : 弥 生 賞

139

S t o r y 1 4 : 体 の 強 さ

149

S t o r y 1 5 : 皐 月 賞

159

Story 26	: 2度目の正月		287
Story 25	: 契約		277
Story 24	: 心配		267
260			
Intermission	: 契約		
Story 23	: 菊花賞		246
Story 22	: 扱い		232
Story 21	: 夏合宿 B		220
Story 20	: 夏合宿 A		211
Story 19	: A or B		202
Story 18	: 見合		190
Story 17	: 日本ダービー		177
Story 16	: 出走可否		169

Story 36	: URAファイナルズ開		400
394			
Intermission	: 応援		
Story 35	: 有マ記念		380
Story 34	: クリスマス		370
Story 33	: 天皇賞秋		360
Story 32	: 秋に向けて		351
Story 31	: 夏合宿 D		340
Story 30	: 夏合宿 C		332
Story 29	: 宝塚記念		322
Story 28	: ファン感謝祭		311
Story 27	: 大阪杯		297

epilogue : 私に必要なだったもの	473
Story 43 : うまびよい伝説	461
Story 42 : 超光速のプリンセス	453
勝	444
Story 41 : URAファイナルズ決	444
Story 40 : 果て	430
決勝	430
Story 39 : URAファイナルズ準	422
Story 38 : 準決勝の前に	409
選	409
Story 37 : URAファイナルズ予	

Introduction: 回顧

ん？

やあ、トレーナー君じゃないか。

一体どうしたんだい、こんな時に。

私は今カフェに実験を手伝ってもらおうよう説得をしているところなんだが。

ああそうだ！

トレーナー君も手伝ってくれたまえ。

ほら、実験対象は1人より2人のほうがいいだろう？

それに成人男性とウマ娘の体のつくりは違うからねえ。

もつと多角的に結果を見ることができると思うんだ。そう思わないかい？

え？

カフェをいじめるなつて？

ひどいじゃないかトレーナー君。

君は一体誰のトレーナーなんだい？

カフェじゃなくて私のトレーナーだろう！

私の味方をしないでどうするんだ！

あっ！

君のせいでカフェが逃げてしまったじゃないか！

全く、どう責任をとってくれるんだい？

私の貴重な実験の機会をドブに捨ててくれたんだからね。

もちろん君が協力してくれるんだらう？

ほら、これを飲んでくれたまえよ。ぐいっと。

うんうんいい飲みっぷりだねえ。

すぐに結果が出ると思うが……。

ふうん？ 髪の毛が桃色になっただけか。

つまり失敗ということだよ！ あっはっは！

すぐに戻るのかって？

それはわからないな、何せ君が最初の被験体なのだからね。

さ、トレーナー君。

次はこの薬を……：そういえば、何しに来たんだい？

何か用事があったから私のところに来たのだらう？

次のレースの確認かい？ それなら別の日にしてくれと言っておいたはずだけどね。

えー!?

お弁当を作っていないだつて!?

どうしてそんなひどいことをするんだい、君は!

私にごはんを食べさせてくれるのが君の役目だろう!

要らないって言ったつて?

確かに言ったが、今日メツセージを送つただろう?

おにぎりの具は鮭にしてほしいと指定もしたじゃないか。

ふむ、確かに送つたのは3時ごろだつたねえ。

遅すぎるつて?

いやいや、トレーナー君。それとこれとは話が違うだろう?

だつてお弁当を作るのは朝じゃないか。

なら作つてないのはおかしいと思うんだ。

何でそんなため息を……当日に言うのが小学生みたいだつて?

心外だなあ!

私は小さな彼らと違ってたくさんの知識をもっている。

それに君たち以上に速く走れるんだよ?

小さい子供と一緒にしないでもらいたいねえ。

で？

お弁当はどうするつもりなんだい、トレーナー君。

買ってくるって？

いやだよー！ 君のお弁当が食べたいからメッセージを送ったんじゃないか！

私を餌付けしておいて食べ物を与えないのはひどいんじゃないかい？

ほら、作っておくれよー。

はーやーくー！

いい香りがしてくるねえ。

たまごやきかい？

たくさん砂糖を入れておくれよ。私は甘いのが好きなんだ。

そう言えば、前もこうやって料理を作ってくれたことがあったねえ。

懐かしいよ。

え？

今度の取材で昔のことを振り返るって？

ふうん……それで、勝手に受けたのかい？

学園で受けてほしいと言われていたって、私は知らないよ。

時間を無駄には……えー!? お弁当を人質にするのは卑怯じゃないか!

鬼! 悪魔! それでも私のトレーナーなのかい!

今から振り返っておけば効率がいいって?

そうだねえ、確かにそうかもしれないね。

なら、君がごはんを作っている間に思い出そうか。

——君と私の3年間をね。

Story 01：邂逅

目が覚めると、そこは保健室だった。

な、なにを言っているかわからないと思うけど、俺もなにが起きたのかわからない……。

体を起こして周りを見ると、1人のウマ娘が椅子に座っていた。

「おや、起きたみたいだね。寝覚めはどうだい？」

光のない不気味な目に、少しぼさつとした栗毛の髪。

不健康そうな顔色、そしてこちらを興味深そうに観察する仕草。

誰かはわからないが……なんだろう、居心地が悪い。

「起きてすぐ私を見て苦虫を噛み潰したような表情をされるとは、いささか心外だね」

まあ座りたまえよと言って、保健室の丸椅子を用意してくれる。

イスと彼女を交互に見ていると、ふむ、と楽し気に頷く。

「どうやら少し混乱しているようだね。無理もない、あれだけの衝撃だったのだから」

衝撃？

首を傾げると、少し話をしようか、と彼女は椅子に座り直した。

話を聞くべくベッドを降りて丸椅子に腰かけると、満足そうに話し始めた。

「君は何故ここにいるのか、それが最初に思い出すべき項目だよ。頭は痛むかい？」

少し頭に触れると、後頭部に痛みを感じる。

打撲特有のじんわりとした痛みの感覚に顔をしかめていると、少しずつ何が起きたのかを思い出してきた。

「思い出してきたようだね。因みに君をここまで運んできたのは私だよ」

「故に、『いつ』『どこで』『なにが』起きたのか。君はそれを思い出すといい」

彼女に促されて、保健室の天井を見ながら何が起きたのかを思い出し始める。

——彼女はそんな俺を見て、ニヤリと不気味に笑っていたのだが、何も気づかなかつた。



トレセン学園の新人トレーナーである俺は、お世話になっっている先輩からあることを教えてもらった。

それは、新人トレーナーは1人だけ担当のウマ娘を持つことができるという制度。ここ数年で設立されたこの制度のおかげで、新人ながらもトウインクル・シリーズへ参加できるわけだ。

スカウトのために模擬レースや選抜レースを見に行ったり、先輩たちから話を聞いた。

一緒にトウインクル・シリーズを走ってくれる相手を探してあちこち歩き回っていた。そして今日。

掲示板に張り出されている選抜レースの出走者の名前を確認していたところ、遠くから誰かの声が聞こえてきたのだ。

「アグネスタキオン！」

「うん？ おや、誰かと思えば副会長じゃないか。どうかしたのかい？」
見えたのは生徒会副会長のエアグルーヴ。

そして、もう1人は誰だかわからない栗毛のウマ娘だった。

今日の前にいる彼女であることはわかる。

「貴様、どういうつもりだ。また選抜レースに来なかつただろう」

「おやおや、そんな怖い顔をしないでくれたまえ。眉間のしわが増えてしまうよ」

「誰のせいだと……!」

どうやら何か口論しているようだ。

エアグルーヴが説教をするのはよく見る光景ではあるが、栗毛の娘は気にもせず飄々としていた様子。

「私の意志は研究活動に捧げられているのだよ、副会長。それが理由さ。これで質問は終わりかい?」

「そんなもの答えになるか! 選抜レースに出ない理由にならないだろう!」

「もともと選抜レースは君たちが勝手に登録をしたんじゃないか。私は了承していないはずだけどね」

レースについて何か話している。

出ないとかなんとか……。

エアグルーヴがかなりヒートアップしている。

止めた方がいいのかな……。

「研究の邪魔をされるのはごめんだよ。もういいかい副会長。この後研究材料を買いに行きたいんだ。では」

「待て! 話はまだ終わっていない!」

「アツハツハツハ! 私は終わったよ!」

2人のところに歩いていくと、突如栗毛のウマ娘がこちらに向かって走ってきた!

「おい、そのトレーナー! タキオンを止めろ!」

「ん? おつと!」

エアグルーヴの声を聞いて咄嗟に前に出てしまう。

栗毛の娘が俺を見て咄嗟ブレーキをかけるが……ウマ娘は急に止まらない。

ドン! と体に衝撃が走り、吹き飛んだ俺は鈍い痛みと共に意識が遠のいて……。



「そう。君は私とぶつかって気絶してしまったんだよ。随分と安物のストーリーじゃないかい?」

全て思い出した俺は改めて彼女を見る。

そうだ、俺は君とぶつかって……。

「ところで君。もしかして1つの事柄に集中すると周りが見えなくなるタイプかな」

「少しばかり、自分の状況に注意したほうがいいと思うよ」

そう話す彼女は、楽しそうに俺を見ていた。

うん？ と体を見回すと、足が丸椅子に縛り付けられている！

慌てて解こうと手を動かそうとするが、手も足と椅子に縛られていた。

う、動けない……。

「親切心で言っておくけれど、自分の体のことは常に意識することをお勧めするよ」

「何かあつてからでは遅いからね」

そう言いながら、試験管を1つ取り出した。

中には蛍光色で眩しい色合いの液体が入っている。

「1つ聞きたいんだ。君、私の噂を耳にしたことがあるかな」

噂？

首を傾げると、彼女は楽しそうに笑う。

「アツハツハ！ 私のことを知らないトレーナーか！ あまり見かけない顔だと思つたが、どうやら君は新人トレーナーのようだね」

「私は『健康で元気な成人男性』の被検体を求めてやまない研究者なのだよ。すばらしい巡りあわせだと思わないかい？」

試験管の液体をちやぷちやぷ揺らしながらニヤリと怪しく笑っている。

被検体とか研究者とか言っているが……ここの生徒、なんだよな？

「そうだと。研究熱心な生徒だよ。ただ、最近は目を合わせるだけでみんな逃げ出してしまつてね……ああ、1人だけ気にせず話をしてくれる変なトレーナーもいたな」

「ともあれ、今の私は気分が良い。幸運が足を生やしてやってきてくれたのだからね。副会長からのお説教は必要経費ということにしておこう」

耳が痛かつたよ、と耳をべたりとたたんで擦つている。

あのあとエアグルーヴからこつぴどく叱られたようだ。

「というわけだ。研究を手伝つてくれたまえ。さ、これを……いや、君は健康そうだね。3本ぐらいいけるかな」

懐から新たな試験管を2本取り出した。

何の薬なんだ……?」

「ククク……それは飲んでからのお楽しみさ、モルモット君」

モルモット君!」

「失敬、新人トレーナー君」

モルモットつてどういうことだ!」

「まあまあいいじゃないか。細かいことは気にしないでくれたまえよ」

結局何の薬なんだ……!」

というか飲んでも大丈夫な奴なのか……?」

「最悪の結果だとしても、数時間足の皮膚が発光するだけさ」

発光!?

「黄緑色にね」

黄緑!?

「君、楽しんでいないかい？ まあいいさ。重要なのは薬を飲んだ後に観測される筋肉の収縮さ」

「ウマ娘と人間の人体構造はほぼ同一なのは知られているところだ。その両方のデータが私は欲しいんだよ」

そう話す彼女の表情は真剣だ。それが必要なものだって本気で思っている様子。

だけど流石にどんなものか知らない薬を飲まされるのはちよつと。

「いいじゃないか。ほら、誰しも初めてのことは怖いものさ。ここで1つその恐怖の克服をだね」

「またそんなことをしてるんですか……タキオンさん……」

ヌツと現れたのは真っ黒なウマ娘。

艶やかな黒毛の髪が美しいが、どこか浮世離れたようなオカルト的な雰囲気のある娘だ。

「おや、カフェじゃないか。どうしたんだい？ もしかして、カフェも実験に協力をして

くれるのかい？」

「しません」

きつぱりと断られていた。

慣れているのか、お互いの表情に変化はない。

「先生が呼んでいたので伝えに來ただけです……。選抜レースのことで……。お話があるみたいですよ……」

「ふうん？　しかしだね、私はこのモルモット君に薬を……」

「ほら、早く……。すぐに、行つてください……」

「おっとつと……。そう睨むなよ、カフェ。わかつたわかつた！　しょうがないな。また次の機会に会おう、新人トレーナー君！」

彼女は少し困つた様子で保健室を出ていった。

それを見送つた黒いウマ娘は俺を見てため息を吐いた。

「……。解きます」

助かつた……。

縄を解かれるのを見ながら、大きく息を吐くのだった。

Story 02 : 問題

ウマ娘の実験の被検体にされそうになってから数日後。

俺は今日も今日とてスカウトのために学園内をうろうろしていた。

今日の模擬レースはどのチームが主催なのかなーと掲示板を見ていたら、背中をつつかれた。

何だと思って振り向くと、栗毛のウマ娘の姿が。

「やあやあ新人トレーナー君！　ここで会うとは奇遇だね。もしかして実験をしなさいというお告げかな？」

神は信用していないんだけどね、とクツクツ笑いながら彼女はにじり寄ってくる。

先日のことを思い出して後ずさるが、背後には掲示板。

逃げ場が……！

「ククク……さあ、この前飲めなかったこの薬をだね」

「そこまでにしてほしい、アグネスタキオン」

「うん？」

栗毛のウマ娘——助けてくれたカフェという娘がタキオンさんと呼んでいたからア

グネスタキオンという名前のウマ娘——を止める人物がやってきてくれた。

彼女は……シンボリドルフ？ 生徒会長だ。

「会長じゃないか。どうかしたのかい？ 私はこのモルモツ……失礼、新人トレーナー君に実験の協力をだね」

「見たところ嫌がつているようだが」

「嫌よ嫌よも好きのうちと言うじゃないか。実験に否定的ではないようだからね、少しばかり被検体になってもらいたいんだよ」

うん？ と返事を促すようにこちらを見て顎をくいつと動かす。

いや、協力したくないんだけど。

「つれないな。いいじゃないか、少しぐらい」

「ところで一つ聞きたいことがあるんだ、アグネスタキオン」

「なんだい？ 実験に関係があることだと嬉しいんだけどね」

シンボリドルフは困ったようにアグネスタキオンと俺を交互に見る。

あ、俺は邪魔かな。席をはずそう

「すまないな、少しだけ……」

「ちよつと待ちたまえ。会長、まさか私の実験の邪魔をするために話を延ばそうとしていないかい？ それなら聞きたくない、私はそんなに暇じゃないんだ」

アグネスタキオンは不機嫌そうに腕を組み、指をトントンと動かす。

少し考えたが諦めたのか、シンボリルドルフは眉尻を下げて笑った。

「仕方がないな……新人である君にはあまり聞かせたくない話だったんだ」

「ふうん？ 何やらよくない話題のようだね」

「君の処遇についてさ、アグネスタキオン。昨日の選抜レース、参加しなかっただろう」

「どうやらこのアグネスタキオンというウマ娘、選抜レースをサボったらしい。」

「そういえば先日の保健室でもレースについてどうこうという話をしていた気がするな。」

「頼んでもいないレースの強制参加のことか。生憎だが、私はそんな有象無象に無駄な時間を使いたくないんだよ。それこそ貴重な実験のための機会をドブに捨てるようなものさ」

「何故レースに参加するよう先生方が話していたかは知っているかな」

「学園の成績や態度についてのことだろう？ 小学校の通信簿に記載されてるような評価ならどうでもいいことじゃないか。授業だってそうさ。確かに私は授業に出ていなかったが、それでも私に必要な範囲の知識が得られるものには出ていたはずだよ」

「君にとつてはね。だが、学園にとつては違うんだよ」

シンボリルドルフは真面目な顔つきでアグネスタキオンを見る。

「トレセン学園はやる気ある生徒たちによりよい環境で走るために尽力している。毎日の授業もそうだし、レース慣れさせるための模擬レース。デビューできる力がついているか測る選抜レースも努力の1つだ」

「ふむ……つまりはこうだ。やる気がないウマ娘は必要ない。そういうことだろう？」

「概ねそうだよ」

アグネスタキオンが結論付けて話すと、シンボリルドルフは頷く。

……ということとは、アグネスタキオンは学園にいられないってことか？

「ああ。昨日の選抜レースへの出走。それが最後通告だったというわけなんだ」

「だからあれだけ念を押されたんだね。絶対に行かないと大変なことになるぞと何度も言われたよ」

「それでも行かないという選択ができるのはある意味称賛するよ。参考にはできないけれどね」

危ないよ、と言われていたのに行かなかったのか……。

学園にいられないということは、つまり退学。

え、どうするつもりなんだ？

「私がやる事は変わらないよ。学園じゃないと実験ができないわけではないからね。学園外でも高い能力を持ったウマ娘ならいくらでもいる。彼女たちに頼むこととしよう」

実験器具は何を使おうかな、と退学後のことを考え出すアグネスタキオン。
彼女はレースを走りたいという気持ちはないのか？

「……アグネスタキオン、1ついいかな」

「なんだい？」

「学園から去ってもいい。そう思っているのは変わらないか？」

「そんなことか。もちろん思っているよ。少し不便になるだけだろうからね」

アグネスタキオンはさらっと答える。

彼女の実験は一体何のために行っているんだ。

学園を去ってもやり続けるぐらい追求する価値があるものなんだろうか。

「ふむ……委細承知した。だが私からお願いがあがる」

「会長からの要望か。何かかな？」

「私と模擬レースをしてくれないか？ もちろん、勝ち負けで君の決断を変えるつもりはないよ」

シンボリルドルフと模擬レース……？

最後のはなむけ、ということなのか。

アグネスタキオンはふむ、と顎に手を当てて少し考え、うんと頷いた。

「いいだろう。トップの実力者である会長のデータも欲しかったところだ。付き合う

よ」

「それはよかった。では今日の午後、練習場が空いてからにしよう。ああ、新人くん。君も来るといい。既に君は部外者ではなくなったのだから」

そう言つてシンボルドルフは去つていった。

なんだか大きな流れの中に巻きこまれてしまったような気がする。

うーんと悩みながらアグネスタキオンを見ると、やれやれと首を振つていた。

「何もする気はなかったのにうまく乗せられてしまったね。おまけに君までついてくるんだらう？ おかしなことになってしまったよ」

なんか、ごめん。

そう言つと、不思議そうな顔でこちらを見る。

「君が謝る必要はないよ。元々私が学園を去る話だったのだからね。だがしかし、私に對して自責の念があるというならこの薬を飲んでみないかい？」

いやそれはいいです。

アグネスタキオンがこちらに差し出してきた蛍光色の薬を押し返す。

「なんだよー、ノリが悪いじゃないか。この前はずっと楽しんでただろう」

唇を少し尖らせて不機嫌そうにする彼女に、なんでこんなに実験してるんだと聞いてみる。

ずっと気になってるんだ。レースに走らず、授業にも出ず。

そこまでしてやる価値のある実験というのは一体なんなのか。

「ふむ。そういうええ君には何も言っていなかったね」

「私はウマ娘という生物の肉体の可能性について興味があるんだ。簡単に言うと、最高速度……いや、『最高のその先』といった所か」

アグネスタキオンは腕を組み、泰然とした様子で語り始める。

「そもそもウマ娘という存在がまだまだ未発見のものばかりなんだよ」

「人間の構造とほぼ同一なのにもかかわらず、頭頂部に生えた長い耳に尻尾。それに加えて筋肉は質量に比べて甚大だ。異様なほどにね」

「特に走力は動物界でもトップクラスさ。なにせ車と同じ速さで数キロ走り続けられるんだからね」

うんうんと楽しそうに頷き、どうだい？ とこちらに目配せする。

なるほどと頷くと、そうだろうそうだろう。フン。機嫌よく胸を張る。

「そう、ウマ娘というのは未知の塊！ この体でその可能性の果てを知りたいんだ！」

「すなわち——『限界速度』を！」

両手をぱつと広げ、親指と人差し指と中指の3本を広げる謎のポーズをしながらくわつと目を見開くアグネスタキオン。

つまり、そのために実験を……？

そう言うのと、そうだとともと頷かれた。

「ウマ娘というのは体が急激に成長する『本格化』というものがある」

「それを迎えているのはトウインクル・シリーズに出ているウマ娘たちに当てはまる」

「強者との競争によって、その走力は充実していくからね」

自分の中のデータを思い出し、くるくると手を回す。

「だからこそ、このトウインクル・シリーズへの出走権を手に入れる。それが私の研究を大きく前進させることになる」

「そう思っていたんだが……まあ、色々と事情があるんだよ！ アツハツハー！」

どうやらアグネスタキオンはレースがしたくないわけではないようだ。

ただ、なんというか……選抜レースに出れない事情がある、のだろう。

それが何故なのかは結局わからないけど。

「どうやら今日の模擬レースが学園で走る最後のレースになりそうだ。少し準備をしておきましょう」

「——今日も運が良かったね、新人トレーナー君」

ニヤリと笑って、アグネスタキオンも去っていった。

……彼女の速さに対しての想いは本物だ。興奮気味にしゃべっていたあの話を聞け

ばわかる。

学園を去る彼女のレースを見ても、スカウトには関係ないのはわかっているけど、見に行かなければならない。なんとなく、そう思うのだった。

Story 03 : 超光速

自分の直感と気持ちを信じて、放課後に練習場まで足を運んだ。

アグネスタキオンはどうなってしまうのだろうか。シンボリルドルフの走りを見れることより、そちらのほうが気になってしまう。

うんうん唸りながら歩いていると、後ろから声をかけられた。

「あの……」

振り向くと、そこにいたのはこの前保健室で助けてくれた烏羽色のウマ娘。

えつと……ごめん、名前を聞いてなかった。

「……マンハッタンカフェ、です」

マンハッタンカフェか。

先日はありがとう。

「いえ……。何か、あったんですか……？ ずっと唸ってましたけど……」

不思議そうに首を傾げながらこちらを見てくる。

唸りながら歩いているトレーナー……うん、変質者だったな。

事情を説明しようかとも思ったが、あの3人での話なのでどうしたものかともまた唸っ

てしまう。

一応友人っぽいからなあ。でも、うーん……。

「……もしかして、タキオンさんのこと、でしようか」

言い当てられてしまった。え？ と聞き返してしまう。

これでは彼女のことだとバラしているのと同じだ。

思わず頭に手を当てると、マンハッタンカフェは少し困ったように体を揺らす。

「あの……タキオンさんからは、聞いてますから……」

どうやらアグネスタキオンは彼女に事情を説明していたらしい。

ふう、と息を吐くと少し眉尻を下げて上目遣いに見てくる。

気をつかわせているようだ。ごめんね、と言って手を振る。

君もこの後来るの？ と聞くと、こくりと頷く。

「……最後の、走りですから。見ておこうと……思つて……」

そう言つてマンハッタンカフェは不意にどこか遠いところを眺める。

なんだろうと思つて視線の先を見るが、何も無い。

どうしたんだろうか。

「……？ 行かないんですか……？」

視線をこちらに戻すと、不思議そうな顔でこちらを見る。

俺もマンハッタンカフェの行動がよくわからなくて首を傾げると、彼女も首を傾げた。

なんというか……不思議な娘だなあと思うのだった。

「おや、カフェも来たのかい？　珍しいね。君は私に興味を持っていないと思っていたんだが」

俺がマンハッタンカフェと練習場に到着すると、クリップボード片手に足首の柔軟をしているタキオンを発見した。

こちらを見て、カフェがいることに驚いている。

友達が来たにしては結構ドライというか淡泊というか。

「もう見れませんから……あなたの走り……」

「ふうん？」

「超光速の走り……とても速いことは知ってます……」

超光速。その言葉を聞いてピンときた。

先輩たちがものすごいスピードで走るウマ娘がいる。超光速の走りだ！　なんて盛り上がったのを覚えている。そしてまだスカウトされていないということも。

どの選抜レースや模擬レースに行っても全く姿が見えないと思ってはいたが……アグネスタキオンだったのか！

「超光速とは言うけどね。光というのは等速度運動をしていたら常に一定の速度でしか進まないと言われてるが、この原理だって本当に証明されてないんだ。つまり何もわかっていないんだよ」

「ウマ娘だつてそうさ。まだまだわかっていないことばかりだ。もつと知りたい、そう思わないかい？」

ニヤリと笑つて語りながらにじり寄ってくるアグネスタキオン。

不気味さがすごくて思わず後ずさりしてしまうが、ヌツとマンハッタンカフェが俺の前に体を滑らせる。

「それで、ちゃんと走れるんですか……。最近トレーニングもあまりできてなかったと思いますけど……」

「それは大丈夫だよ。筋力維持のトレーニングは行っていたし、筋力増強のサプリや薬も飲んでるからね」

そう言つて軽く腕や肩を柔軟運動して伸ばしていく。

彼女の走る姿を見たことは無い。どのような走りをするのだろうか。

「やあ、トレーナーくん。マンハッタンカフェ」

「会長さん……こんにちは……」

3人で少し話をしながら待っていると、シンボリルドルフがやってきた。準備運動を事前にやっていたのか、少しだけ髪が乱れている。

俺の視線に気づいて少し笑い、手で髪の毛を直す。

「さて、準備はいいかな。アグネスタキオン」

「もちろんいいとも。会長の走り、じっくり見せてもらおうじゃないか」

「ああ、いいさ。マンハッタンカフェ、スタートの合図をしてもらってもいいかな」

「はい、わかりました……」

練習場のコースに入り、マンハッタンカフェが内ラチ沿いに立つ。

2人は走る構えを取り、体をグツと沈ませる。

思わず手を握り締めてしまう。2人の表情が本当に真剣だったから。

マンハッタンカフェが手を上げ、そして下ろした。

「よーい……スタート……！」



アグネスタキオンとシンボリドルフが同時に駆け出す。

それを見たトレーナーはハッと息をのむ。

デビュー前なのに、模擬レースとはいえあのシンボリドルフと同じタイミングです
ターゲットした！

彼は驚いている。アグネスタキオンは研究ばかりでキチンと走れない。心の中では
そう思っていたところがあつたからだ。

第1コーナー、2人は同じように回っていく。

内はアグネスタキオン、外はシンボリドルフ。

皇帝に気をつかわれてしまっているね、と思いながらアグネスタキオンは観察する。
シンボリドルフの筋肉、関節、尻尾の使い方。コーナーでの負担、力のかけ具合。

余すところなく実験のための情報として手に入れようと、目を見開いていた。

そんな彼女の視線にシンボリドルフは気づいていた。

そして、仕方がないウマ娘だ、と内心苦笑していた。

シンボリドルフはアグネスタキオンというウマ娘について、本当に詳しくはわから
ない。

だが、彼女の速さへの渴望とその探求心、それを満たすためになりふり構わず動く行

動力。

何より、自分自身の体でその速さを証明せんとする覚悟を気に入っていた。

しかし、シンボリドルフが如何に気に入っていても、ここはトレセン学園。学び舎で学ぼうとしない姿勢は褒められたものではない。

どうにかあの才覚を残せないかと理事長や秘書のたづなを頼りに掛け合ってきたが、ついに限界が来てしまった。

それでも諦めきれなかった彼女は、最後の賭けに出た。

自分との模擬レース。

これでアグネスタキオンの力を見せることで、なんとか学園に残そう。そう思っていた。

そう思っていたのだが……提案しても流石にこれ以上は、と言われてしまった。

先日の模擬レースへの強制出走が最後だったのだ。チャンスをあげることは鼻根になっってしまう。

シンボリドルフは自分の無力を感じながら、最後のはなむけになるだろうか。アグネスタキオンに模擬レースの提案をしようとした。

すると、アグネスタキオンがトレーナーに絡みついていないのを見つけた。

最初は止めに入ったものの、そのトレーナーが本気で嫌がっていないのを見て、いけ

るか……? と希望を見出した。

この模擬レースに招待して、彼女の走りを見せる。そうすれば、きっと何かが変わる。頼むぞ、新人トレーナーくん。シンボリルドルフは、彼のトレーナーとしての魂に賭けたのだった。

第2コーナーを過ぎて直線に入ったところで、シンボリルドルフはペースを上げた。

かたやデビュー前のウマ娘、かたやドリムトロフィー・リーグで活躍する皇帝。

今までは合わせて走っていたのだ。シンボリルドルフはついてこれるかと言わんばかりにアグネスタキオンを突き放しにかかる。

「ククク……さすがは皇帝か……!」

皇帝たる堂々とした走りとそのスピードに、アグネスタキオンは汗を垂らしながら食い下がる。

じりじりと距離は離れていき、第3コーナーに入るときには1バ身半差になっていた。

シンボリルドルフはコーナーを回りながら、チラつと後ろを確認する。

悔っているわけではない。アグネスタキオンがいつしかけてくるのか、それを気にしているのだ。

トレーナーとマンハッタンカフェは、シンボリルドルフが後ろを気にしている、と少

し驚きながら、最終直線での走りを待った。

第4コーナー、シンボリルドルフが最終直線へ入り、遅れてアグネスタキオンが入ってくる。

2バ身差。そして相手は皇帝シンボリルドルフ。決まったか。トレーナーはそう思った。

しかし、アグネスタキオンはその時、全く別のことを考えていた。

(特殊相対性理論に矛盾することなく、光速度より速く動く仮想粒子の存在は、いまだ完全に否定されていない！)

(ウマ娘の最高速度である時速70km！ 定説ではそう言われているが、それ以上のスピードで走れる可能性は否定されていない！)

アグネスタキオンはグツと体を沈ませ、ターフを強く踏みしめた。

(そう！ 可能性だ！ ウマ娘には！ この体には！ 私は可能性に満ちている！)
ギューン！ と音が鳴ったかと思うほどの加速。

アグネスタキオンの走りが、明らかに変化した。

「ウマ娘の脚に眠る可能性の果ては！ この肉体で到達し得る限界速度は！」

シンボリルドルフがターフを強く踏みしめたとき、後ろを見た。

そして、凄まじい速度で追い上げてきているアグネスタキオンを見て驚くと同時に、

笑みがこぼれる。

そうだ！ その走りだ！ 見せてみる！ シンボリルドルフはゴールへと一気に駆け出した。

「いまだ影すら見えぬほど、遙か彼方なのだから……!!!」

ゴールへと駆けていくアグネスタキオン。

トレーナーは、その姿を見た。

アグネスタキオンのその瞳は無邪気な少女のようで。

悪魔に魅入られた狂信者のようで。

——呼吸を忘れてしまうぐらい、魅せられる色をしていたのだった。

Story 04：果て

「はあ、はあ……ふう！ 疲れた！ 心底そう思うぞ、アグネスタキオン！」
「ふうー……なんだ、お優しいことだね」

息を整えるシンボルドルフとアグネスタキオン。

2人の走りに夢中になってしまい、終わったことに気づかなかった。

「勝利したのは君だろうか？ もっと誇りたまえ」

「勝利と言ってもハナ差だよ。やれやれ、デビュー前のウマ娘にハナ差とは。私もそろそろ引退かな？」

「ほう？ 会長もとぼけたことをいうんだね。また新しい発見だ」

といつても、あまり意味はないけどね。

アグネスタキオンはそう言っつて額の汗を拭った。

「しかし君を手放さねばならないというのは、やはり惜しいな……心変わりの兆しはなののか？」

「なんだい？ 会長からのお言葉で学園に戻す気にしようということかい？ 残念だがそれはないよ。そもそもそっちから出ていくように言ってきたんだからね」

海外のウマ娘にでも接触しようかな、と顎に手を当てて思索し始める。

そうか……とシンボリルドルフは残念そうに眉尻を下げる。

そして、チラつとこちらを見た。

「ふむ、そうか。彼の話聞いてもかな？」

「彼……うん？」

そう言つてシンボリルドルフは去つていく。マンハッタンカフェもシンボリルドルフと俺をチラツツと見て、練習場から去つていった。

アグネスタキオンが俺を見る。

そして、不思議そうに首を傾げた。

アグネスタキオン。俺がそう声をかけると、彼女は興味深そうに頷く。

「ふうん……うん？ どうしたんだい、君。その目は」

「随分——狂った目をしているじゃないか」

俺の目を見て、アグネスタキオンはそう話す。

——目を灼かれてしまったのだろう。

アグネスタキオンの目指す、可能性の果て。そこに向かって全速力で走ろうとする彼女の走りに。

女の走りに。

だって、さっきの走りが頭から離れないのだから。

アグネスタキオンは『可能性の果ては遙か彼方』と、そう言った。彼女は、さらに速くなるのだ。

もつともつと、もつと！

見てみたい！ 彼女が走るその先を！

超光速の走りを！

「おい。勝手に呆けるなよ」

思わず体を震わせて物思いにふけっていると、アグネスタキオンにたしなめられた。

「なあ、君。まさかスカウトしたいって言うつもりかい？ よしてくれ、研究以外に時間をつかうほど暇じゃないんだよ」

俺のことを嫌そうに見て首を振る。

まともなトレーナーは求めていない。彼女が必要なのは研究のために必要のものだ。

日々のトレーニングでさえ、彼女にとってはきつと、研究の一環なのだから。

それならば！

アグネスタキオン！

「ん？ どうしたんだい、そんなに大きな声を出して」

さつき見せてくれた薬はあるか！

「急にどうしたんだ。あるけど」

そう言つて試験管を3つ取り出した。

俺はその怪しいケミカルな蛍光色の液体を奪い取つて蓋を開ける。

「え、おい！ 君！」

一息に3つ飲み込んだ！

「……驚いたな」

口元を拭つてアグネスタキオンを見ると、彼女は心底驚いたよう目で目を見開いて口をぽかんと開けている。

そして、だんだんと口元が緩み、大きな声で笑い始めた。

「驚いたよ……ク、ククク……アツハツハツハツハ！！！」

「そんなに勢いよく薬を飲むやつがいるか！ すごい速さだったよ！ モルモットかい君の前世は！」

大笑いする彼女に、俺はなんでもする！ と大きな声で宣言した。

それを聞いた彼女はニヤリと笑い、ほう？ と顎に手を当てる。

「なんでも？ つまり君は、自ら被検体になつてくれるのかい？」

モルモットでもいい！

「アツハツハ！ つまり君は実験動物でもいいというんだね？ 人権を放り投げてもいいと？」

それでもいい!

「ふうー……ふうー……?」

君を担当させてくれ!!!

「月並みな言葉だね……しかし、その目は狂気の虜、か」

アグネスタキオンはふむふむと俺を見て満足そうに頷く。

「クツクツク……いいだろう。行こうじゃないか」

行くって?

「なんだ、察しが悪いな。職員室だよ。担当トレーナーが決まったというのに、退学して
いられないだろう?」

彼女からそう言われて、最初は意味が分からなかった。

少しして理解すると、じわじわと嬉しさと衝撃がこみ上げてくる。

い、いいんだな!?

「君から言ってきたんだろ? まあ、君の扱いはモルモットかそれ以下だと思っけどね

……クツクツク」

そう言って笑うアグネスタキオン。

そして、俺に改めて向き直った。

「それでもいいなら来るといい」

「見せてあげよう……誰もたどり着けなかった果てをね」
ニヤリと笑う彼女の笑顔は、狂気と歓喜に満ちている。

——こうして、アグネスタキオンとの研究の日々が始まるのだった！

「フム……いや待て、モルモット君。職員室へ行くのはもう少ししてからにしようじゃないか」

「なんで？」

「無用な混乱は避けた方がいいだろう？ もしこのまま行けば、結局退学になりそうだからね」

「どういうことだろうと不思議に思っただけで首を傾げると、何やら下の方が眩しいような。」

「思わず顔を下に向けると……な、なんじゃあこりゃあ!?」

「気づいていなかったのかい？ 全身が黄緑色に発光しているぞ」

「自分の手やズボンの下から見える足がケミカルに発光していた。」

「まるでライブのペンライトだ。」

現実味が無さすぎて手を振ったり足を動かしたりすると、黄緑の光が滑らかに動く。ど、どうなっているんだこれは。

「ククク！ アツハツハツハツハツハツハ！」

俺が困惑して変な動きをしていると、アグネスタキオンが大声で笑い出した。

「いやあ、まさか私も全身が光るとは思わなかったよ。3つ全部飲むところなるんだね。いやはや興味深い」

メモしておこうとクリップボードの用紙に書き込み始める。

いや、本当にどうということなんだ……。

「確かに最初、君に会った時は健康そうだし3本飲もうと言ったさ。しかしだね、3本一気へのむやつがいるか！ 時間を空けて1本ずつ飲んでもらうつもりだったんだよ」

面白いな、君は。

くつくつと笑いながら俺の体とクリップボードで目を往復させる。

これ、いつ戻るんだ？

「わからないよ」

わからない!?

「だってそうだろう。3本まとめて飲むなんて考えていないんだからね。いつ効果が終わるのかは君の体が教えてくれるよ」

嘘だろ……?」

このままじゃ帰れないんだけど。

学園内のトレーナー寮に住んでいるわけじゃないから、俺は外に出なければいけない。

こんなに光つてたらもう学園外になんか出られない……!」

「自業自得じゃないか……クックック」

どうすれば……げんなりしていると、まあこれも人生だよと謎の励ましを受けた。

しばらくはここで休むほかない。

「ふうー、久々にこんなにも笑ったよ。さて、そんなしよげている君に朗報だよ」

なに?

「今までの経験から察するに、そこまでずっとは発光しないと思うよ。長くても2、30分ぐらいさ」

本当か!?

「ああ、本当だとも。私は嘘はつかないよ」

なんだか怪しいが、アグネスタキオンを信じよう。

先輩もウマ娘は信じてなんぼって言ってたし。

最初の担当ウマ娘と仲良すぎる気がするけど。

「さてトレーナー君。丁度いい機会だ、今の状態で練習場を1周してきてくれ。筋肉の状態が見たいんだ」

え？

「君はモルモットなんだろう？ ほら、はやく行った行った！」

アグネスタキオンに急かされて練習場を走り出す。

——こうして俺の最初の担当であり、超光速のウマ娘と駆け抜ける日々が始まったのだった。

そして30分後。

「戻らないね……アツハツハ！ 思ったよりかかるな、これは」

まだ発光し続ける俺なのだった。

Intermission: 昼餉

ククク……あの時は本当に笑ったよ。

あんなに笑ったのはそれこそ子供の時ぐらいじゃないかな。

トレーナーになりたいからといってモルモットでもいい、なんて。

想像できるかい、君。

しよすがなかったといつてもだね、トレーナー君。

限度つてものがあろう。限度つてものが。

私の提示した薬を一気に3本飲み干すなんて、はつきり言っておかしくなったのかと思つたよ。

いい被検体ができた、とも思つたけどね。その時は。

恥ずかしいって？

君が振り返れつて言つたんじやないか。私のせいじやないよ。

そもそも君のアクションがこういう結果を作つたんじやないか。

誇つていいと思うけどね。

黄緑色に光つていたけれど。

かなりいいデータは取れていたんだよ？

光るのは副作用で、本当の効果は脚力の向上だったわけだし。

実際君の脚力は平常時に比べれば上がっていただろう？

まあ、羞恥と興奮が能力を底上げた可能性は否定できないが。

しかしあんなに長く光るとは思わなかったよ。あの時は悪いことをしたと思って
いるんだ。

本当さ。私は嘘は言わないよ。

自分で飲んでみた時は足が淡く光る程度だったんだ。

ウマ娘のもつ身体の頑強さをもう少し考慮するべきだったね。

いいじゃないか、そんなに文句を言わないでくれよ。

おかげで私の担当トレーナーになれたんだから。

最初はモルモット以下、被検体Bとしか思っていなかったけどね。

そりゃあそうだろう。

だって君がモルモットでいいって言ったんじゃないか。

私は君の言うことを信用してそのように扱ったまでさ。

文句を言われる理由はないと思うけどね。

もしこのことに何か言いたいならきちんとして証明してほしいものだよ、その理由や根

拗つてものを。

なにー!? めんどくさいって言ったな、君!

心外だなあ全く!

私は事実を言っただけじゃあないか。なのに面倒だとはどういうことなんだ。是非とも教えてくれよ、トレーナー君。何が面倒だって言うんだ?

え? その反応だって?

はあー……なあトレーナー君。

私の反応は至つて普通だと思っただけだね。

話をしていたら急に面倒だつて言われたらどう思う?

わかるだろう、君い。

あー! まためんどくさいって言っただろう!

なんだい君は!

もう許さないぞ、トレーナー君。

私のこの怒りは君を実験の対象にしてあらゆるデータをとることではしか解消できないよ。

今日は午前で学園の項目は終わるからね。午後に時間をいくらでも使えるんだ。お昼を食べ終わったら覚悟しておくように。

今更謝ったところでもう遅いぞ。

第一なんだいその適當極まりない謝罪は。

ごめんごめんだなんて、謝意を一切感じられないね。

誠意つてもものを見せるんじゃないのかい、普通は。

さあ見せてごらんよ、誠意というやつを。

お昼を一品増やすって？

……ほう？

まさかとは思うけどね、トレーナー君。

私が食べ物につられるようなウマ娘だと思ってるのかい？

そう考えているのなら君は少し私に対する印象を改めた方が……

うん？ デザートがあるだって？ 買ってきたのかい？ え、トレーナー君が作っ

たって？

新しい茶葉も？ サバラガムワだって？

なんでそれをはやく言わないんだ！

ほら、さつさとお昼ご飯を作ってくれよ。

お湯を沸かすのも忘れないように。

紅茶に入れる砂糖はどこにあるんだい？

いつもの棚の中でいいのかな。

ところでそのデザートは甘いものなんだろうね。デザートといいながら甘さ控えめなんてものは必要ないよ。

前に食べたチーズケーキはチーズが強かったからね。もつと甘さがある物のほうが私は好みだよ。

どうしたんだいトレーナー君、そんなに笑って。包丁とまな板でドラムロールが流れているよ。何かの儀式かい？

そんなことしていいいで、ほら、はやく作りたまえ。

でないと先にデザートを拝借してしまうよ？

ふう、ごちそうさま。

うん。今日の茶葉は当たりだね。香りもいいし味もいい。

次からストックしておいてくれよ。

砂糖入れすぎて味がわからないだろうって？

これでも君に言われて減らしているんだよ。

ほら、きちんと溶解度を超えていないじゃないか。

一口飲んでみるといい。

どうだい、大丈夫だろう？

おいおいどうしたんだそんなに慌てて自分の紅茶を飲んで。

甘すぎるって？ まあ、私は甘党だからね。

うん、いい感じに糖分補給できた。

今日の研究は朝の続きをしようかな。

トレーナー君、早速この前のレポートをだね……。

え？ さっきの続き？

えー!? まだ振り返しをするのかい!

もういいじゃないか、出会いのところが思い出したんだから。

確かに3年間をと言ったよ。

しかしだね、トレーナー君。

貴重な午後の時間が丸々空いているんだよ？

やはり研究や実験に使いたいじゃないか。

その取材はまだ先なんだろう？

そもそも絶対に受けなければいけないものなのかい？

ああ、なるほど。

あの記者か……確かにそれなら、受ける義理はあるだろうね。
うーーーーーん！

仕方がないなあ！

今日は研究を少しだけお休みにしようじゃないか。

トレーナー君、紅茶を作っておくれよ。

それを飲みながら少し話そう。

そうだね……メイクデビューまでのことを思い出してみようか。

あの時も中々どうして、色々あったものだねえ……。

S t o r y 0 5 : 生 活

発光が終わってから職員室へと向かい、新人トレーナー専属システムのための書類をもらった。

このシステムは新人であれば1人ウマ娘をスカウトできれば、その娘をトウインクル・シリーズに参加させてもいいというもの。

有名なのは名家である桐生院家のトレーナー、桐生院葵さん。

そして1番知られているのが俺がお世話になっている先輩だ。

先輩は何のノウハウもない状態からトウインクル・シリーズに参戦。

そのまま担当ウマ娘は連戦連勝で駆け抜けて、URAFアインルズの初代優勝者になつたのだ。

チーム発足後も大活躍も大活躍で、今ではトレセン学園の強豪チームの1つとして数えられている。

そんな先輩トレーナーがたくさんいるから、チームのサブトレーナーになる新人が多い。

俺みたいに専属システムを使うというのはかなり稀。

先輩や桐生院さん以外では俺で5人目なんだとか。

3、4人目のトレーナーも頑張ったけど、何もない状態からのスタートは厳しく、目標を達成できずに終わってしまったとか。

専属システムの珍しさと、問題児で退学が決まっていたアグネスタキオンの担当になるということで、職員室は一時騒然。

退学を撤回できるのか？　そもそもきちんとレースを走るのか？　授業はどうなんだ？　研究も危険だ。

話がうるさかったのか、一緒に来ていた彼女は不機嫌そうに耳を畳んでいた。そんな中、唯一いいじゃん、頑張ろうと言ってくれたのはやはり先輩だった。

「ほら、これが書類。生徒会に出しておいで。理事長とたづなさんにはうまく言っておくよ。頑張れ」

ニツと笑いながら一緒に職員室を出る。

「クセウマ娘だからな、負けるなよ？」

じゃ、俺は理事長のどこ行っていくよ。

そう言ってスタスタと歩いていった。

……か、かっこいい。

「ふうん？　クセウマ娘とは中々言うじゃないか。あのトレーナーのチームリーダーよ

りマシだと思っけどね」

心外だなあと不満をあらわにしている。

まあ確かに、リーダーのウマ娘はなんというか、別次元のクセウマ娘だし……。

そう思って先輩を見ていたら、そのリーダーウマ娘が横から飛び込んできてドロップキックをしていた。

ぐわああああーっ！ とゴロゴゴ転がりながら受け身をとって何事もなかったように立ち上がる先輩と、何事もなかったように一緒に歩いていくウマ娘。

うん……凄いわ。思わずアグネスタキオンと目を見合わせてしまうのだった。



そんなこんなで担当と専属システムが受理され、正式にタキオンのトレーナーとなつて、今日。

職員室にてトレーニング計画を必死に作っていた。

普通はトレーナー室をもらえるらしいのだが、如何せん担当ウマ娘が退学になるはず

の娘。

デビューするまでは経過観察ということで、色々な部分が保留中なのだ。

そういうわけで職員室にいるわけだが……なんというか、視線を浴びている。

新人なのにあんなウマ娘を担当して大丈夫かな……？ と心配してくれているから、見ているのだ。

みんな別に悪い感情の視線ではないから困っているわけで。

今一集中できずにあーでもないこーでもないといヶ月分の計画を何とか作り上げた。

放課後タキオンに確認をしに行こうと思っていたら、肩を叩かれる。

うん？ と振り返ると、学園での授業を受け持っている先輩トレーナーの姿が。

「えっと、昨日アグネスタキオンさんの担当になったってことでいいのよね、あなた」

あ、そうですけど……も、もしかして。

「ええ……2時間目から授業に出てないみたい」

おおお……。思わず変な声が漏れる。

せつかく退学せずに済むような流れになったというのに！

とりあえず探しに行かないと。

……タキオンって普段どこにいるんだ？

「タキオンは大抵理科教室にいるぞ」

そう言つて話に入つてきたのは先輩だ。

理科教室？

「移動教室で行く校舎があるだろ？ 音楽教室とか家庭科室とか。その一番端つこにあるんだ。科学実験の授業とかやらないから、今はタキオンの実験場になつてる」

そ、そんなところに……。

よく知つてるなあと思つてまじまじと先輩を見ると、まだ君より付き合ひが長いからな、肩をすくめた。

改めて場所を教えてもらつて、すぐさま向かう。

移動教室がないのか、周りは静かで誰もいない。

一番奥の教室に向かうと、扉にはめ込まれたガラスの窓に黒いカーテンがかかつていて、中は見えなくなつてゐる。

コンコン、とノックを試みる。中から小さく声が聞こえた。

「誰だい？」

タキオン？ そう口にする、少ししてから扉が開いた。

そこにいたのはタキオンだ。制服の上から白衣を見にまどつてゐる。

「おや、トレーナー君じゃないか。よくここがわかつたね」

不思議そうにしているタキオン。

先輩から教えてもらったんだと話すと、ああ、と頷いた。

まあ入りたまえ、と言つて教室の中に戻つていく。後を追つて中に入ると、試験管やビーカー、フラスコ、それにアルコールランプなどなど。

学生時代の理科教室で見たことのある実験器具がずらりと机に並んでいた。

そしてその近くにはいくつもの紙が。実験のレポートか何かだろうか。

「普段はここで実験しているのさ。流石に寮でやつてしまうと同室相手の迷惑になつてしまうからね」

もつとも彼女は迷惑だと思わなそうだが。そう独りごちながら散乱しているレポートを手にして内容を確認する。

「今は脚の筋力を全体的に強化できるものが作れないかと考えていてね。一部分に効果があるものは作れそうだけど、大腿四頭筋ばかりなんだよ。内転筋群にも効果がある物」と思っているんだ」

タキオンの言っていることは半分ぐらいしかわからない。

専門的な部分は言われても知識が足りないなので、わからないけどそうなんだ、と頷く。

まだ少ししかコミュニケーションをとっていないが、話したいことをとにかく全部話そうとするタイプなのはわかるので、聞き役に徹する。

「昨日のトレーナー君から取れたデータも中々役に立っているよ。あの3つの薬に入っ

ている要素を含めれば長く効果があることがわかったからね」

君にとっては災難だったかもしれないけどね。ククク、と楽しそうに笑いながらレポートにながしかを書きこむ。

その後もつらつらと昨日の薬の効果や今作っているものの基本的な効能などを聞き続けて数十分。

「ところでトレーナー君は私に用事があったんじゃないのかい？」

ようやく本題に入った。

タキオン、授業サボってるよね。

そう話すと、なんだそんなことかと冷めた目で俺を見てくる。

「私に必要なだと思う授業は受けているよ。だけどね、今更レースの種類だとか脚質の種類だとか、当たり前のことを一々聞いていられるかい？ そんなことに時間を割くなら研究をしたほうがよっぽど有意義だし効率的に速くなれるじゃないか」

流れるようにつらつらと授業を受ける意味がないと訴えてくるタキオン。

彼女にしてみれば本当にいらぬ時間だと思っっているのだろう。

しかしあまりにも生活態度が悪すぎると退学までは多分行かないと思うが、何かしらのペナルティを受ける可能性もある。

無駄な問題を起こさないためにも、出席はしておこうとなんとか説得してみる。

「ふむ。確かに授業を受ければ問題は少なくなるだろうね。しかしだね、トレーナー君。ちよつと考えてみておくれよ」

「大きなケーキと小さなケーキがあるとする。授業に出たら小さなケーキと大きなケーキ一切れをあげよう。でも授業に出なければ大きなケーキを全部もらえる。代わりに小さなケーキは没収さ。因みにどちらも同じ量、同じ味のものをもらえるとす。トレーナー君ならどちららを選ぶ？」

それなら大きなケーキを全部もらえる方を選ぶと思うけど。

「そうだろう？ つまりそういうことだよ。私は小さなケーキぐらい無視してもいいと思ってる。私も君と同じさ。大きなケーキが欲しいというわけだよ」

なるほど……そういうことか！

「うんうん。わかってくれたかい？」

嬉しそうに腕を組んで頷くタキオン。

うん、わかった。

とはならないぞ。

「えー!! 今のは納得してくれるところじゃないか。君だつて私と同意見だろうー！」

いや、小さなケーキが君にとって大事になるから授業に出ろつて言ってるわけ。

そもそも、タキオンが大きい方を欲しいとか十分とかつて話じゃなくて、小さい方を

もらわなければ最終的に大きい方も没収されて何ももらえないよつていう話なんだから。

とにかく、ちゃんと授業を受けること！

「なんだ、思ったより強引で強情で頑固だな、君は」

ぶつすーと不機嫌そうに三白眼で俺を睨むタキオン。

だつて、ここでちゃんとしないと担当から外されちゃうかもしれないしさ。

「なるほどね……担当から外れてしまつたら、君がモルモットになるという話もなくなるか。それはほんの少しだけ困るかもしれないね。まあ君ならお願いすれば実験に付き合つてくれる気もするが」

「うーん。うーーん。ううーーーん。仕方がない！ 少しか君の話聞いてあげることによいじゃないか」

やった！

思わず喜んでガッツポーズをとる。

これで少しは安心して……そう思っていると、タキオンからすつと試験管を差し出された。

中には青く発光している薬が。こ、これは……？

「君の要望を聞いてあげるんだ。なら、私の要望も聞くのが道理というわけさ。まさか

断らないだろう？ 君はモルモットなんだから拒否権なんてないけどね」

さあ、と手渡された薬を見て、うーんと後悔する。

しかし、タキオンも言うことを少しは聞いてくれるという。

仕方がない、一気飲みだ！

——その後、青白く発光する大腿部を周りから見られて生活する羽目になるのだった。

代わりにタキオンも少しだけ出席率が上がったのでよしとしよう。

Story 06 : 食事

メイクデビューの予定は7月。

基本的にはその時期にトウインクル・シリーズでの初レース、勝てたウマ娘はそのままジュニア級レースへ。勝てなかったウマ娘たちは未勝利戦へと進む。

みんなトレーニングをしたり勉強したりと、デビューに向けて様々な努力をするのだ。

「成程、こうなるのか。トレーナー君、もう1度坂路を走ってもらおうよ」
俺たちも同じだ。

タキオンと坂路トレーニングを行っている。

俺も一緒に走ってるんだけどな！

一緒にやってくれているだけまだマシとも言えるだろう。

「脚に疲労を貯め込みたまえ。ククク……」

そう言って先に駆け出して坂路を上っていくタキオン。

ひいひい言いながら必死に駆け上がる。もちろん、坂路で走っている誰よりも遅い。

俺たちと同じように坂路トレーニングをしているウマ娘や先輩トレーナーたちは、俺

を見て気の毒そうな視線を向けてくる。

なんともいたたまれない……! !

「はやくここまで来るといい、モルモット君! これが終われば1度休憩だ!」

タキオンの声を聞いて、最後の力を振り絞り走っていく。

フォームもボロボロだしほとんど歩いてるみたいなスピードだし、何度かつんのめつて転びかける。

研究に必要なのだろうか、遊ばれてるだけか。色々考えながら走り切り、タキオンのところにたどり着いてべちゃりと地面に倒れ込む。

このまま溶けて u d d o に食べられるんだ……と息を切らしていると、頬に冷たい何かが触れた。

顔を上げるとタキオンが俺の顔に試験管をピトツとくつつつけている。

「ウツドチップとお楽しみのところすまないね、トレーナー君。疲労回復に効く薬があるんだ。飲んでみないかい?」

拒否権はないんだけどねと言いながらくつつくと笑う。

好きにしてくれ、と言って仰向けになる。

タキオンはなら飲ませてあげようと口に試験管を突っ込んできた。

薬品臭い匂いが鼻を抜け、なんとというか苦くて甘い感じというか。子供向けの歯磨き

粉みたいな味というのだろうか？

ううーんと顔をしかめながら飲み干すと、不思議そうに俺を見てくる。

「どうかしたかい？ 今日薬は刺激的な要素はないと思っただけだね」

子供用歯磨き粉みたいな味がすると訴えると、ふうんと首を傾げて試験管を見る。

「味も少しは調節してみたんだが……どうやらお気に召さなかったみたいだ」

甘くして見たんだけどね、とタキオンは薬のメモを取り始める。

俺は息を少し整えて体を起こし、自分の足を見る。

光って……ないな、うん。

「うん？ ああ、今回の薬は君のデータを参考にして作ったものでね。データサンプルが少ないから強い効果が出ないように調整したのさ」

次からはまた発光すると思うよと言われて淡い希望が砕かれる。

ふくらはぎをぺたぺたむにむに触られること数分。タキオンはメモを取ってこちらを見た。

「薬を飲んで5分ほど経ったことだし、もう1度坂路を走ってきてくれないかい？」

効果を確認するためにまた走らなければならぬらしい。

タキオンも行くこうと声をかけると、うーんと顎に手を当てて首を横に振る。

「私はさっきので終わりだよ。さ、早くやってきてくれたまえ」

すげなく断られてしまった。

彼女は一定のトレーニング量をこなすとすぐに止めてしまう。

筋力を維持するぐらいの運動量＋アルファぐらいだ。

何か考えがあるんだろうが、聞いても教えてくれない。

渋々坂路を下つてもう一度駆け上がる。

先ほどまでの疲労もあつて、ちよつと走つたぐらいでへろへろだ。

これもタキオンに走つてもらつたため……走つてもらつたため……。

自分に言い聞かせてなんとか坂路を走り切り、タキオンのいる所で地面にへばりつく。

「ふうん……少し足を見せてもらおうよ」

ジャージをめくらられてふくらはぎを触診される。

とてもくすぐったい。

「疲労は変わらさず。回復も……なるほど」

真面目な顔で手元の用紙に結果を書きこんでいく。

結果はあまり芳しくないようで、笑みを見せることは無い。

「効果を弱めたせいかな、今一薬が効いているのかわからないな。君は何か感じるかい？」
とてもつかれた。

「疲労だけか。なら今度は効果を強めるとしよう。明日も坂路だ、楽しみにしてくれたまえ」

ニヤリと笑うタキオン。

マッドサイエンティストにしか見えないなあと地面から見上げながらそう思うのだった。



タキオンのメイクデビューの日程とレース場が決まったので、早速教えに理科教室へと向かう。

彼女は何故か渋っていたが、流石に今年デビューしないと学園側から何を言われるかわからないからな。

なんとかお願いして出走にこぎつけた。かわりに薬を3本飲まされてふくらはぎが黄緑色に発光していたのはご愛敬。

理科教室に近づくと、何やらウィーンと機械の稼働音が聞こえてくる。

なんだろうかと思いながらノックすると、タキオンが扉を開けてくれた。

「やあやあモルモツト君。今日も薬を飲みに来たのかい？ ドリンクバーを頼んでサーバーへと何度も赴く学生のようなだねえ」

楽しそうに話しながら中に入れてくれる。

理科教室に入ると、机の上にミキサーがあつた。

中身は……うん……なんだそのどろどろしたやつ。

「これかい？ 私の昼食だよ」

昼食!?

何を言われたのかわからず、ミキサーに近づいて確認する。

中身はいまいちわからないが、なんとというか色々なものをとりあえずミックスしました！ という見た目だ。

どう考えてもお昼に食べるご飯には見えない。

何が入っているんだ？

「トマトに鶏肉、チーズ、バナナ、ヨーグルト。あとは豆腐と牛乳、それにお米だよ」

本当にごはん食べるもののミックスジュースだった。

どろっとしているのはお米も入っているからか……いやしかしラインナップ的に別々に食べれば成立するやつじゃないか。

「食事は足りない栄養を補給するだけの行為だよ。経口摂取で一々時間をかけていられないじゃないか」

そもそも生で食べても栄養は取れるんだからね、とタキオンは話す。

確かにそうだけど、なんかこう……あるだろうか？

楽しみたいいやつがさ。

「生憎食事が楽しいと思つたことがあまりなくてね。ああ、紅茶を飲む時間はいい時間だと思つているよ。休憩して頭を整理できるからね」

なんか違う。

話をすればするだけタキオンの食生活が心配になつてくる。

というか普通にカフェテリアに行けばいいんじゃないのか。

今日も普通に開いてるぞ。

「私も行くこうと思つていたんだけどね。今やめてしまうと研究が途中になつてしまう。だから今日はこれでいいだろうと思つたわけだ」

普段はサンドイッチやおにぎりを注文しているよ、と話すが本当かどうかからない。信用するけど。

じゃあ閉まつてる休みの日とか朝夕とかは……。

「これだよ。私は用意なんてしないからね。やれやれ、サプリメントで栄養補給ができ

れば楽なんだが」

タキオンはそう言って頭を振る。

うーん、なるほど。

わかった。ちよつと待っててほしい。

彼女に声をかけて外に出た。

カフェテリアに出向いてウマ娘用のサンドイッチを注文し、テイクアウトして理科教室へと戻る。

不思議そうにしていたタキオンに渡すと、ほう？ と俺とサンドイッチを交互に見た。

「これはこれは献身的というか従属的というか。いや、まずはありがとうと言うべきなのかな」

ニヤリと笑ってサンドイッチを取り出し、食べ始める。

今度から俺が用意するよ、ごはん。

そう話すと、ふうん？ と怪しく笑う。

「私に尽くすことが君のコミュニケーションだったりしないかい？ 時間をとられるわけでもないし、私としては好都合だけだね」

くつつつと笑い、ビシッと俺を指さす。

「存分に尽くしたまえ！ アツハツハ！ はむっ」

そういつて笑いながらサンドイッチを食べるタキオンなのであった。

ちなみにミキサ―食はもつたいないので俺が飲んだ。すごいまづくて泣きそうになつたのは秘密。

Story 07 : 始まる前

タキオンのメイクデビューに向けて、相手の調査をしてみたり短時間で効率的なトレーニングを調べてみたり。

先輩からチームで好評だったというトレーニングやケガ防止の対策などを教えてもらったので、今日の放課後タキオンに相談してみよう。

そんなこんなで、朝から職員室でトレーニングメニューを作っていると、肩を叩かれた。

誰だと思つて振り向くと、先輩が扉を指さして立っている。

職員室の出入り口を見ると、タキオンが眠そうな顔でこちらを見ていた。

どうしたんだろうとタキオンのところに向かい職員室を出ると、あくびをしながらで包みを渡される。

「ビタミンやたんぱく質、それにミネラル。脂質と糖質もバランスよく含まれていたよ」押し付けられたのは弁当箱だ。

早速昨日の夜に弁当を渡したわけだが、きちんと夕食で食べてくれたらしい。

よかったよかったと思つていたら、すいっと人差し指を立ててこちらを見てくる。

何か言いたいことがあるらしい。

「悪くはなかった。しかしだね、弁当について指摘する点が2つある」

「1つは箸を使うことさ。研究しながら食べるには手間だった。もつと簡単に食べられるものもいいね」

「2点目は白米の量だよ。おかずに対して白米の量が少なすぎる。バランスを考えたらもつと増やした方がいい」

「すごい指摘を受けた。栄養補給のためと言うから味への指摘はない。」

確かに研究しながら食べるなら、おにぎりやサンドイッチみたいに片手が空くものが好ましい。

トータルバランスを考えてほしいというのも分かる。

ただ、食べる時ぐらいは休憩してほしいと思っただけだなあ。

「言っただろう？ 研究時間が削れるのが問題なんだよ、モルモツト君。あ、失礼。トリーナー君」

やれやれと肩をすくめてこちらを見るタキオン。

次は気をつけるよ。そう言うのと、是非そうして欲しいと言われた。

「今日の分は仕方がない。次回以降は頼むよ」

そう言っって手を差し出された。

ん？ と首を傾げると、タキオンも不思議そうに俺を見てくる。

今日の分ってなんだ？

「もちろん朝食のことだよ。ほら、出したまえ」

ないけど。

「な、なんだって!?!」

タキオンは本当に驚いたらしく、目を見開いて1歩後ろによるめいた。

「冗談だろう!?! わざわざ研究途中で取りに来てやったというのに……!」

ぶんすか怒り始めた。

え、だって毎日ご飯作るとは言っでなかったじゃないか。

「私の食事を用意すると約束しただろう！ ならいつでも用意するのが君の仕事じゃないか！」

いか!」

ヒートアップするタキオン。

どうしたんだと周りの先輩たちやウマ娘が心配そうに俺を見てくる。

いや、大丈夫だから。そんな目で見ないで。

「そもそもなんで作ってないんだい!?! 毎回約束しろってのか! 非効率だよ!」

「私の面倒を見るのが君の役目だろう! 早く私にご飯を食べさせろ!」

そう言われてもないものはない。

朝食は自分の部屋で食べてきたから持つてないし。

「えー!?!」

本日2度目の驚愕だ。

尻尾もピンとたち、わなわな震えている。

別に俺は悪くないのにかわいそうになつてきたな……。

とりあえずお昼までに何か作つておくよ。

「い・まー！ 今食べたいんだ！」

「この欲求はご飯を食べるか君にあらゆる実験を行うかしなければ解消できないよ」

どれだけ食べたんだ!

あまりの理不尽な申し立てにこちらが驚いてしまう。

なんか女性のトレーナーたちがかわいそうな目で俺を見ている。

うん、なんとなくこう、小学生の子供のわがままを思い起こすよ、今のタキオン。

「ほら、選びたまえよ。ご飯を食べさせるのか実験されるのか」

……多分これどっち選んでも実験はさせられるんだよなあ。

仕方がない。担当ウマ娘の要望を聞くのもトレーナーとしての仕事だつて先輩も

言つてたし。

とりあえずご飯作るよ。そう話すと、当然だと頷かれた。

「はあ、実験は午後に戻すとしよう。とりあえずは朝食だ」

やっぱり実験されるじゃないか！

「それはそうだろう。実験はモルモットとしての業務さ。ご飯はトレーナーとしての業務だよ、トレーナー君？」

そう言つてニヤリと笑うタキオン。

ままならないなあ。

「口から文句を垂れ流していいのではやく作つてくれよ。ほら！ はーやーくー！」

パチパチと手を叩いて急かしてくるタキオンを見て、ため息を吐きながらカフェテリアにキツチンを借りに行くのだった。



そしてついにメイクデビュー前日。

阪神芝2, 000m。右回りで内コースだ。

タキオンは自分の脚質を先行差しの中長距離向きだと俺に説明してくれた。

実際それに最適化されたフォームやストライドになっているため、その判断は確かなものだ。

前乗りで阪神レース場近くの宿泊施設に泊まることにしたわけだが、俺とタキオンがやることはトレセン学園にいる時とあまり変わっていなかった。

つまり、研究と実験だ。

「火は使えないし実験器具は持ち運べる程度の簡易キットだけだからレポートは取れないね。材料もないし作ってきた薬しかない。まあ、とりあえず一本飲んでもらえるかい？」

そう言つて試験管を手渡される。

今日はオレンジ色に発光している薬だ。

この薬はどういう効果に繋がる物なんだ？

「それは大腿二頭筋や……ああ、つまりはハムストリングスの収縮データを取りたいんだ。これまでは表側の筋肉に注目していたからね。今度は裏側の筋肉も確認したい」

膝関節にも多大に影響を与える筋肉だからね、と話す。

とりあえず飲んでみると、これまたいつも通り変なおいに変な味だ。

「効果が出るまで大体5分ほどだね。それまでは明日のレースについて少し話そうじゃないか」

俺は思わずタキオンをまじまじと見つめてしまった。

レースについて言及することはほとんどなかったし、レースでの作戦や距離なども全部俺任せだった。

あまりにも信じられないという目で見てしまったためか、タキオンが少し不機嫌そうにしている。

「なんだ、君は。まるで私がレースをどうでもいいものだと思っていると、そう言いたい目をしているね」

いささか心外だな、と腕を組む。

今までそういう話はしてこなかったから、と言うと、少し考えて確かにそうだねと言って機嫌を直した。

「メイクデビューでのレースは研究において必要かどうか考えていたし、よりよい実験結果が出るにはどのタイミングで出走するのがいいのか計算していたんだ」

「私の予定ではそもそもメイクデビューでは欲しい研究結果は出ない。そう考えていたし今もそう思っているよ」

「理由は簡単さ。レースのレベルの問題だよ。私が必要としているのはGIレースで激走して1着で勝てるようなウマ娘のデータさ。それこそ会長や君の先輩のチームリーダーのようなね」

会長ことシンボリルドルフはトレセン学園最高峰のウマ娘。この前取れたデータは最高だったとタキオンはよく話していた。

先輩のチームリーダーのウマ娘は、GIを勝ちまくりURAFファイナルズも2連勝しているのにケガをしない上、長距離もバンバン走る。

丈夫な身体のデータは是非とも欲しいな、と外の星を眺めながら彼女は話す。

「目的の人物に自由な時に接触できるだろう？ デビューしてしまうとトレーニングやレースで時間が足りなくなってしまうからね」

「だから出走しないつもりでいたんだ。まあ、君が登録してしまったから出ざるを得ないけどね」

それはごめん。

でもタキオンのことを考えたらここで走ってもらわないと退学に……。

「ああ、そんなに気にしなくてもいいよ。君が実験に付き合ってくれていることの方が何よりもメリットだからね」

「自由に実験させてくれるモルモットがいつでも近くにいるなんて、こんな素晴らしい環境を逃すのはそれこそ問題だよ」

くつくつ笑って俺を見て、そして足を見てくる。

俺も自分の足を見ると、ほんのり光が。

あ、ハムストリングスだからももの後ろが光ってる！

俺がわたわたして自分の足を確認していると、タキオンは小さくつぶやいた。

「ククク……君のおかげでなんとか走れそうだ。これからも頼むよ、モルモット君？」

怪しく笑うタキオンと副作用に慌てる俺。

そんな凸凹で変な2人組は、明日のメイクデビューに向けて相談を続けるのだった。

Story 08 : メイクデビュー

メイクデビュー当日。

トレーナーとして初めてのメイクデビューのため、俺はガチガチに緊張していた。

パドックでのお披露目を終えて控室でレースの順番を待っているが、どうにも落ち着かない。

タキオンはタキオンで珍しく静かに椅子に座っている。ぼーっと何かを考えているようだが……。

緊張してるのか？ そう聞くと、ん？ と不思議そうにこちらを見た。

「ああ、別に緊張で黙っているわけではないよ」

そう話す彼女は特に何もなくいつも通りと言った感じだ。

武者震いのようなものもなく、落ち着かない様子でもなく。

しかし何か気になることがあるようで、うーんと唸っている。

「実はね、トレーナー君。私のラボにある紅茶が切れそうなんだ」

ラボとは理科教室のことだ。

というか、紅茶？

「私は紅茶が好きでね。飲むと落ち着くし、砂糖を入れればブドウ糖が脳を活性化させてくれる。いいものじゃないか」

楽しそうにそう話すタキオン。

つまり、気にしていたのは紅茶のことだったのか……。

「そうだよ。それで1つ頼みがあるんだ」

タキオンからの頼みとは珍しい。

いつもなら強制させられるのに。

「私がレースから帰ってくるまでに茶葉を買ってきてくれないかな。私はローグロウンが好みなんだ。サバラガムワがあると嬉しいね。なければアッサムでもいいよ。あ、キーマンがあるならそちらをお願いしよう」

レースから帰って来るまでだったらタキオンのレースが見れないんだけど。

そう訴えると、何当たり前のことをというような表情でこちらを見てくる。

いや、どう考えてもタキオンがおかしいぞ。

「おかしくはないだろう。紅茶が切れることの方が私にとっては一大事だよ」

俺にとってはタキオンのレースを見れないことが一大事なだけだ。

「む、そろそろ時間か。私は行ってくるよ」

そうやって話をぶった切り、颯爽とレースへと向かうのだった。

だ、大丈夫なんだろうか……？

応援するならここだと先輩に勧められたので、人の海をかき分けてなんとかゴール前を陣取った。

担当ウマ娘が走る初めてのレースだ。

緊張で心臓がはちきれそうだが、なんとか深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

しばらくするとタキオンが走るレースの番になった。

続々とゼツケンをつけたウマ娘たちが地下バ道から現れる。

メイクデビューを頑張るぞ！ という力強い気持ちが満ち溢れた表情だ。

タキオンも同じように出てきたが、こちらはいつも通りの感じだが、少しだけ真剣な表情だ。

控室でも確認したが、体の仕上がりは悪くない……はず。

パドックや今見ても、他のウマ娘たちより明らかに仕上がりはいいと感じている。

頼むぞ……祈りながら様子を窺っていると、時間になってゲートへと向かう。

ファンファーレが鳴り、各ウマ娘がゲートインしていく。

今回のレースは8人立て。タキオンは4枠4番。位置としては真ん中だ。

果たしてどうなるのか。

うう、心臓が……。

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました』

アナウンスが読み上げられ、全員が走る体勢をとった。

始まる！

——ガタンッ

『スタートしました！ 7番ミニキヤクタス出遅れたか！ 他は好スタートです！』

出遅れたウマ娘はいたものの、おおむね好スタートだ。

タキオンも問題なくスタートしている。

『最初にながってききたのは6番モルフリツス！ 5番タヴァアティムサ！ 続いて2番リ

ボンヒムヌスと4番アグネスタキオンが続きます！』

タキオンは想定通り先行の動きだ。

本人が自分の脚質を先行差しと言っていたから、メイクデビューでは先行で走っても

らうようお願いした。

理由は簡単で、デビュー戦は逃げと先行が勝ちやすいと思われるからだ。

単純に前のほうにいて最後にスパートをかけて抜け出す。これが1番王道で1番強

い。

脚を溜めてからの差しでもいいとは思うんだが、差しは経験値がものを言う……と
思っている。

いぶし銀な走りをするブロンズコレクターのナイスネイチャや、シニア級で大活躍中のスペシャルウィークなど。

どちらも素晴らしいウマ娘だけど、差しウマ娘としての完成度で言えば、誰もがナイ
スネイチャを推すはず。

それは長いレース歴を経て培った勝負勘や技術力が誰よりも優れているからだ。シ
ンボリルドルフという例外はいるけど。

つまり、デビュー戦に限り先行有利！

と、思っているわけだが……。

『続いて8番リズムカルリーフ！ 7番ミニキャクタスもグングン上がってきた！ 1
番マジャールロンドと3番リボンカプリチオは後方待機……おっとアグネスタキオン
が少し下がりました！』

……な、なんで下がったんだ、タキオン!?



(なかなか強引だね)

アグネスタキオンは7番のミニキャクタスを見てフツと笑う。

出遅れたことでもかなり焦ったのだろう。ミニキャクタスはここがスパートだと言わんばかりに追い上げてきて、タキオンの隣に来る。

そして急激なスタートダッシュによつて体がブレてしまい、内にいたタヴァアティムサのほうに体がヨレる。

もちろん距離を詰められたタヴァアティムサは驚いて内に動く。

その一連の流れを受けたタキオンも内に動こうとしたわけだが。

「……………」

チラツとタキオンの様子を窺ったのはリボンヒムヌス。

内にいた彼女は外の動きを見て、逆に外へ動いたのだ。

これでは挟まれてしまうし、リボンヒムヌスは自分よりも少し前にいる。

そして目の前は6番のモルフリッス。迫りくるタヴァアティムサ。

つまり、タキオンは後ろに下がるしかなくなった。

(誰の入れ知恵かわからないが、なかなかやるじゃないか)

デビュー戦にしては苛烈なポジション攻めだ。

リボンヒムヌスのいるチームにはさぞ素晴らしい先輩ウマ娘がいるのだろうねと思
いながら、レースプランを考え直す。

後半にやられたのであれば困るところだが、まだスタートして300m程度。

特に問題は……そう思っていると、タキオンの外側にすうつと入ってくるウマ娘が。

「おや？」

「ふん……」

隣に現れたのはリボンカプリチオ。

ふむ、成程。

どうやらコンビプレーを受けているらしい。

昨年の有マ記念を思い出すね、とタキオンは先輩の霸王の包囲網を思い出す。

それよりはよっぽどかわいいものだが、これはこれで困る。

何が原因でこうなったんだろうね。

そう思いながらタキオンは第1コーナーを回る。

研究とレースへの姿勢だろうよとトレーナーなら言うだろうが、彼は本当に困った顔
でレースを見ているから何が起きているかはわかっていない。

第2コーナーを回って向こう正面へ。

変わらず最後方で走っていくタキオンと、その隣にぴったりとくっつくリボンカプリチオ。

体を寄せてきたリボンヒムヌスはタキオンの正面を陣取った。ここから出さないぞという布陣だ。

レースの半分が終わったところで、タキオンはどうしたものかなと考え出す。

このまま走っていたら勝てないだろう。かといって前には出れない。

いやあ困ったね。アツハツハ。

何も困っていないさそうな表情でタキオンは第3コーナーに差し掛かろうとしていた。

リボンカプリチオとリボンヒムヌスは激怒した。

必ずあの生活態度の悪いウマ娘を除かなければならぬと決意した。

だって本当に必死な思いで入学して、レースで勝ちたくて頑張っているのに。

こんなふざけた相手がレースで走るなんて認められない。そう思ったのであった。

今回だけは、絶対に邪魔してやる。

2人の怒りは本物だった。本気で走らないような、真面目に取り組まないようなウマ娘は学園から去れ！

デビューしたてのウマ娘とは思えないオーラを出しながら走るリボンの2人。

2人の想いは、まあ大抵の人がわかる。そう思うことだ。

トレセン学園に入るだけでも大変で、そこからスターになれるのは一握りだ。本気で走らないウマ娘など、許せないことだろう。

だが、1つだけ失念していることがある。

確かにタキオンは生活態度も悪いし、選抜レースすら出ずに研究ばかり。

挙げ句の果てに担当トレーナーをモルモット呼ばわりで実験三昧だ。

——しかし。

タキオンがレースに本気じゃないとは言っていないのだ。

つまりは。

「君たちには悪いけどね」

タキオンは第3コーナー終わりにペースを緩めてリボンカプリチオより後ろに出る。

そして流れるように外に動き、ターフを強く踏みしめる。

「速さを求めないような有象無象に構っている暇はないんだよ」

そう話し、タキオンは凄まじい勢いで走り出した！

「なッ!？」

あまりにも自然。

あまりにも速い。

コーナーで体に負担がかからないように膨らみながら、一気に先頭集団へと肉薄。ただ1人だけで逃げていたモルフリツスに追いつき、第4コーナーを終え直線に入るまでには2番手の位置にいた。

一緒に走っていたウマ娘たちも観客たちも、トレーナーさえも驚いてその走りを見ていた。

気づけば前にいて、今にもモルフリツスを追い抜きそうだ。

(こんなものか)

アグネスタキオンはモルフリツスに追いつくまでに、自分にとって最適なタイミングで息を入れていた。

つまり、最後の直線で一気に走れるわけだ。

『最終直線に入った！ 誰が抜け出すのか！』

『先頭に立ったのはアグネスタキオン！ 驚異的なスピード！ グングン差が開いていく！』

直線に入ったところでグツとターフを踏み締め、末脚を爆発させる。

トレーナーが惚れ込んだ、超光速の走り。そのほんの1粒の輝き。

あまりの速度に誰もが驚く。デビューしたばかりのウマ娘が出せるスピードではない！

その場にいる全ての心を惹きつけて、アグネスタキオンは1着でゴール板を駆け抜けたのだった。

Intermission: 紅茶

ね。一番最初のレースは覚えているよ。正直言うと、本当につまらないものだったからね。

だってそうだろう。私はウマ娘の限界を超える速さを求めて研究しているし、その結果をレースで確認したかったんだから。

それなのに最初からレースをまともにできないように包囲して来るなんてね。

いやはや困ったものだよ。

うん、確かにあれは私の生活態度のせいだよ。今ならわかるさ。

でもねえトレーナー君。

どれだけ怒りがあってもレースという自分の成果を発揮する場でああいったプレーはよくないよ。

自分が培ってきた全てをドブに捨てるようなものじゃないか。

彼女たちもあのあとこっぴどく叱られたと聞くしね。自業自得だよ。

レース以後何か話したかって？

ああ、うん。クラシック後半にはなるが、少し話したよ。

デビュー戦であんなひどいことをして悪かったと謝罪されたんだ。

本気でレースを走ってない、許せないと思っただけだ。

私の本気で取り組んでいることがわかって納得したから、悪いと思っただらうね。クラシック後半は色々あったからね……彼女たちも思うところがあつたんじやないかな。

ところでトレーナー君。

紅茶をもう一杯もらいたいんだが。

うん、ありがとう。

ふうー……：：～

茶葉を買うように頼んだのに、君ときたら何も買わないでレースを見ているんだ。

あの時は結構怒つたよ、私は。ククク、君も覚えてるか。

レース後に茶葉を買いに行つたが、店につくまでずっと君への文句を言っていたからね。

紅茶は大事なものなんだよ、トレーナー君。

君には3年間びつちりと言いつけたからわかっていると思うけどね。

糖分によつて脳が活性化するし、香りでリラックス効果もある。

研究には最適だよ。

え？ コーヒーでもいいじゃないかって？

とんでもないことを言うなあ、君は！

あんな苦いものを飲むなんて信じられないよ！

君も知っているじゃないか、この前の出来事を！

お昼ご飯を食べていたら隣にカフェが座った。

そして私が一口飲み物を口にしたら、それがコーヒーだったんだぞ！

今思い出しても口が苦くなる！ ああ……苦いよー。

早く紅茶で中和しなくては。

全く、私のコーヒー嫌いを君は知っているだろう？

何故すすめてくるんだ、全く。

……ふうん？ そうか、そういうことか。

そういえば君、カフェと仲がいいね。

この前だつてカフェテリアと一緒にコーヒーを飲んでいただろう。

なんとおぞましい光景かと思つたよ。

君はあれだろう？

カフェと一緒にコーヒーを飲んでいる方がいいんだらう？

私は君にたくさん注文をするからね。

彼女は物静かで落ち着いている。私とのストレスをカフェとの逢引で解消しているわけだ。

なんとも嘆かわしいことだよ。

そうは思わないかい、トレーナー君。

自分の担当ウマ娘を放って別のウマ娘とコソコソあっているなんてね。

しかもよりによって同期でライバル的存在とだなんてね！

あー、やる気がなくなってしまったなー。

これじゃあ次のレースは出走取り消しかもしれないなー。

……なんだ、別に言い訳しなくていいよ。

別にカフェと一緒にいいなら……うん？

私に薬を散々押し付けられるから2人で話し合っているって？

君い、それこそ失礼じゃないかい？

私は決して押し付けているわけじゃないよ。断じてね。

というか、そもそも君はモルモットになるって言ったじゃないか。

自由意思で飲んでいるだろう、君に限っては！

カフェも困っているって？

なあなあトレーナー君。君は一体誰の担当なんだい？

カフェに菓を飲んでもらうことで研究が進むならそれに協力するのが担当トレーナーとしての責務だろう。

そう思わないかい？ うん？

思わないだつて!?

なんでだ！ 君は私に全面的に協力するべきだろう!?

他人に迷惑かける時はその限りじゃないって？

なんだよー、別にカフェならいいじゃないか。

カフェは特段気にしてないよ。シャカール君と違つてね。

あーあ、なんだか話す気もなくなつてきてしまったよ。

振り返りを終わりにして研究に戻つてもいいかい？

ダメだつて？ えー……。

でもね、トレーナー君。

正直ジュニア級の記憶はあまりないと思うよ。

君だつて特別残っているものはないだろう？

クラシック級からが濃密すぎたからね。色々あつたものだし。

え？ 覚えていることがあるって？

なんだ、それ？

私は特に何も覚えがないんだが……。

……ああ！ ホープフルステークス！

そういえばそんなものがあつたね。

いやはやよく覚えているものだ。

けど、あのレースについては特にいい思い出も悪い思い出もない。

トレーナー君もそうじゃないかい？

別に走ってないんだからね、あのレースは。

Story 09 : トレーナー室

メイクデビューにて圧倒的な勝利を収めて数日後。

俺は理事長に呼び出しを受けていた。

まさかタキオンの処遇が……とビクビクしながら理事長室に入る。

「歓迎！ よく来てくれたー！」

「どうぞこちらにお越しください！」

理事長とたづなさんの言われた通り、机の前に立つ。

満足そうにしている理事長がたづなさんに目配せすると、彼女は俺に書類を渡してきた。

これは……トレーナー室の申請書類だ。

「アグネスタキオンのデビュー戦、みごとだった！」

「素晴らしい結果でしたね。見ていてドキドキしてしまう走りでした」

「肯定！ 故に、改めて処遇を決めた！ もちろん、在学だ！」

おお！ 思わず声が出る。

これでタキオンは退学せずに済む！

「うむ！ これからの活躍に期待している！」

「学園側からのサポートとして、トレーナー室の使用許可を出します。本当はすぐに出すべきだったのですが……遅くなってしまい申し訳ありません」

頭を下げるたづなさん。すぐに頭を上げてもらおうよう話す。

そもそもタキオンが悪いわけですし。

「学園はやる気のあるウマ娘でも、スターになれるのはほんの一握り。悔しいが、やる気が見られないウマ娘を置いておける余裕がなかったのだ」

それはそうだ。

トレセン学園はものすごい数のウマ娘がいるし、毎年新入生だって入学してくる。

走るつもりがないウマ娘なんて周りの迷惑にしかならないだろうからな。

モチベーションの低下につながるんだ、やる気のなさっていうのは。

「しかし！メイクデビューを見て確信した！」

「アグネスタキオンには夢を見せる魅力がある！」

ピシッと扇子で俺を差し、力強くそう話す理事長。

「激励！ これからの活躍に期待する！」

「私も応援しています。頑張ってくださいね、トレーナーさん」

はい！

大きな声で返事をする、2人とも嬉しそうに笑ってくれた。

タキオンと一緒にトウインクル・シリーズを走り抜くぞ！　そう気合を入れ直す。

「ところで、トレーナーさん」

ぐつと拳を握っていると、たづなさんがもじもじして何かを言いづらそうにしている。

なんだろう？

「タキオンさんが理科教室をつかっていることなんですけど」

あつ。

「あそこは教室なので、実験の場所を移してほしいんです。その……トレーナー室に」

ということとは……。

「うむ。残念だが……」

もらったトレーナー室がラボになるってことですか！

「決定！　いや、決定ではないのだが……すまない！」

困ったようにそう言った理事長を見て、がっくりと肩を落とすのだった。



「へえ、思ったより広いじゃないか。水場もあるし、中々いいところだね」

タキオンと一緒にトレイナー室に入って室内の状態を確認する。

トレイナー用の机と、ミーティングをする用のテーブルと椅子。あとはニュースなどを確認するためのテレビもある。

結構広いんだな……。

「とりあえず私は実験道具を持つてくるよ。やれやれ、面倒だが教室を私物化していたのも事実だからね」

便利だったんだけどなーとぶつぶつ言いながらトレイナー室から出ていった。

俺は持つてきていた資料とノートパソコンを机に置いて、仕事の環境を整える。

ある程度整理できたところで、タキオンも戻ってきた。

「トレイナー君、手伝っておくれよ。私一人では時間がかかりすぎる」

ガチャガチャと試験管やらビーカーやらをテーブルに置いている。

どれだけ量があるんだ、それ……。

「実験には色々必要なんだよ。物を溶かして混ぜたり薬を冷やしたりね。それに清潔でなくてはならないから掃除の用品だっているんだ。実験器具以外がかさばるんだよ」

ひとまとめにしてあるから取ってきてくれと言うので、渋々取りに向かう。理科教室に入ると確かに器具やその他の用品がひとまとめにしてあった。

何にも包まれず、全て裸のままです。

見た瞬間にもうげんなりしてしまう。

なんだろう……小さな子どもの片付け方だ。

片付けておいて。はい。そう言っただけで部屋のすみっこにとりあえず全部かためて置いておく。

それは片付けじゃないんだよ。

ガラス製品ではない頑丈なものを別の何かよくわからないものが入ったダンボールに叩きこみ、まとめて持って行く。

そりゃあ時間かかるわ！　そう言えばさつき戻ってきたタキオンは両手で持てるだけのビーカーなんかを持ってきただけだった。

効率を気にする割にはえらい雑だなあ。

「おや、ずいぶんたくさん持ってきてくれたんだね」

トレーナー室に戻るとタキオンがニヤリと笑って俺を見る。

テーブルにダンボールを置くと、うんうんと頷きながら中身を取り出して行く。

……最初から俺に全部運ばせるつもりで適当にしていたな？

「おや？ その顔はどうやら気づいてしまったようだね。まあまあ、私の世話をするのが君の役目じゃないか。頼むよトレーナー君」

悪びれもせずそう言ってきた。

なんてひどいウマ娘なんだろうとタキオンを見ると、視線を感じたのか俺のほうを見た。

「なんだい、トレーナー君。そんなカフェみたいな目で私を見て。もしか、薬でも飲みたくなつたのかい」

怪しく笑いながらどこからともなく薬入り試験管を取り出してゆらゆらと俺の前で揺らす。

慌てて別の話題を考える。

か、カフェってよく一緒にいるマンハッタンカフェ？

「そうだよ。君も面識があるだろう」

マンハッタンカフェとはちよこちよこ会う。

というのも、俺がタキオンの薬を飲んで体を光らせたりしている時に気にしてくれるのはあの子ぐらいしかいない。

困った顔で大丈夫ですか、とコーヒーを差し入れてくれるのだ。

「君はカフェのコーヒーをよく飲んでるが……信じられないよ」

彼女がくれたコーヒーを思い出していると、タキオンが苦虫を噛み潰したような顔でこちらを見てくる。

今まで見た時のない表情だ。何が悪かったのだろうか。

「何が悪いって？ そんなの決まっているじゃないか」

そう言つてタキオンはビシツと俺を指さす。

え、俺？

「コーヒーだよ、コーヒー！ なんであんなに苦い飲み物を飲むのかな、君たちは！」

コーヒー？

首を傾げていると、やれやれと肩をすくめて首を振られる。

「いいかい、トレーナー君。私は基本的に紅茶を飲むんだけどね。紅茶は香りとおほんの少し茶葉の苦みがあるだろう？ わかるかい？」

それはわかるよ。

「コーヒーも同じようだね。苦みに香り。同じなら紅茶でいいじゃないか。そこに砂糖、気まぐれでミルクを1差し。どうだい？ うん？」

つまりはタキオン。

コーヒーが飲めないってことだな。

「飲めないんじゃない、飲まないんだ。何故あんな泥水みたいなものを飲むのか意味が

わからないよ」

「泥水じゃありません……」

突然第3者の声が聞こえてきてビクツとなる。

誰だと思つて入り口を見ると、マンハッタンカフェが物陰からじ……とタキオンを睨んでいた。

「おや、カフェじゃないか。どうしたんだい、そんなところで睨みつけて。もしかして実験に協力を……」

「コーヒーを侮辱されたので……すみません、トレーナーさん……」

いや、別にいいけど。

作業が止まっていたので、ダンボールから物を取り出してテーブルに置いていく。

その間、タキオンとマンハッタンカフェは舌戦を繰り広げていた。

「コーヒーは、おいしい飲み物、です……奥深い味わいがあるんです……」

「紅茶だつて奥深いものだよ？ 産地で味が違うし、香りも違うんだ。味だつてそうさ。入れ方で味も変わるからね」

「コーヒーには、パリスタという専門の人もいます……紅茶とは、違います……」

「おいおいおいおいカフェ？ ティーインストラクターという人たちだっているんだよ？」

マンハッタンカフェがコーヒー党でタキオンが紅茶党のようだ。

正直俺はどっちも飲むからどうでもいい。

空になったダンボールを持ってトレーナー室から出ていくと、まだ室内から話し声が聞こえていた。

トレーナー室をもらって頑張らなきゃと身構えていたけど、なんとかなるか、とタキオンとカフェの戦いを聞いて気が緩むのだった。

荷物を持って戻ってきた時に「どっち派なんだ」と詰め寄られて恐怖を覚えたのは割愛する。

S t o r y 1 0 : 次 走

「次のレースについて？」

アルコールランプで試験管を熱しているタキオンは不思議そうにこちらを見た。

メイクデビューを終えて、研究とトレーニングを続けている。

ならば次に出走するレースについて考えなければならぬ。

だってトウインクル・シリーズに参戦するのにレースに出ないとか意味が無いからな。

「と言ってもだね、私は研究に忙しいんだよ。君も研究に付き合ってくれているのだからわかるだろう？」

日夜研究と薬の開発をしているタキオンは、本当に最低限のトレーニングしかしないし、レースについての勉強や調査もしない。

その他の時間を全て研究につきこんでいるわけだ。

結局研究の最終目標が何なのかは教えてくれないので、どうしたいのかさっぱり。

だが、目標と言うか期限を決めなければタキオンは動いてくれない。それはメイクデビューを設定した時にわかった。

逆に言うと、期限さえ決めれば渋々やってくれるということだ。本当に渋々だけだ。

「確かに期限を決めるということは大切だ。時間は有限だし、効果がでない配合はある程度の試行を経て切り捨てるべきだからね」

試験管を揺すって溶けたものを丁寧に混ぜる。

少しずつ中の液体が赤色になってきた。

「うーん、でもなあ。前にも言ったけれど、レースのレベルが問題なんだよ。最低でもG I レースでのデータが欲しい。しかし、ジュニア級ではほとんどないだろう？ G I レースなんて」

確かに、ジュニア級では挑戦できるG I レースが少ない。

阪神ジュベナイルフィリーズ。阪神フューチャリティステークス。

そしてホープフルステークス。この3つだ。

タキオンはレベルの高いレースなら出てもいいということを言っているならば簡単だ。この3つのどれかを目標にすればいい。

この不健康なマッドサイエンティストウマ娘の適正は中距離だと思われる。となると、出走するレースは1つだ。

ホープフルステークスに出よう！

「ホープフルステークス？ ああ、確かに今はG Iレースだったね」

元々はG IIレースだったのが、G Iレースに格上げされたホープフルステークス。中長距離を目標にしている、実力のあるウマ娘が挑むレース。

かなりいいデータが取れるんじゃないかと思うんだけど。

「ふうん……誰が出るのか決まっているのかい？」

まだ先だから確定じゃない。

今のところ素晴らしい実力派なウマ娘が参戦予定ではあるみたいだけど。

例えばそう、アマゾントリップ。もしくはミナモトライコウ。

デビュー戦でタキオン同様とてつもない力を見せて話題になっている。どちらもかなり強いウマ娘だ。

あとはマンハッタンカフェだろうか。

メイクデビューで3着だったが、最近体調不良になっていたらしい。

調子を戻してから未勝利戦を頑張りますと言っていた。

「ああ、みんな知っているよ。そうか、彼女たちが出るのか」

アルコールランプにキャップを被せて火を消し、試験管を揺らしてこちらを見る。

「いいだろう！ ホープフルステークスに出ようじゃないか」

ニヤリと怪しく笑いながら、出走を決意してくれた。

よし！ 思わずガッツポーズをとる。

そんな俺に、スツと試験管を差し出してくるタキオン。

「その代わり、わかつているだろう？ まあ、対価と関係なく飲んでもらおうけどね」

まあ、うん。

知ってたよ！

げんなりしながら試験管をもらって薬を飲むのであった。

作ったばかりで熱すぎて一気に飲めず、タキオンが不機嫌になったのは割愛させていただく。



練習場にタキオンを呼び出した俺は、せっせとトレーニングの準備をしていた。

それを見た彼女は不思議そうに持ち込まれたものを見て声をかけてくる。

「なあトレーナー君。これはなんだい？ 見たところぱかプチのようだが」

ぱかプチだよ。

そう言つて紐でくくられたばかプチをタキオンに手渡す。

「おいおいモルモツト君。トレーニングだと聞いて渋々来てやつたんだぞ？ それなのにぬいぐるみ遊びかい？ ふざけているなら研究に戻るぞ、私は」

何を失礼な！

これは先輩から教えてもらった、由緒正しいトレーニングだぞ！

効果があるかどうかはウマ娘の相性次第だつて言われたけど。

「トレーニング……？ これが？」

困惑してばかプチを見ているタキオンをよそに、彼女にひもをくくりつける。

縛り終えて、とりあえずばかプチを落とさないように1周2,000mを走つてきて

ほしいと話した。

「ふうん。私のこの滑稽な姿を見てまだトレーニングだと言うんだね。やれやれ、とんだトレーナーを担当にしたものだよ」

ぶつぶつ言いながらタキオンは走り出した。

スタートダッシュで直線を走っている時は全く問題はない。

ウッドチップが跳ね、引っ張られて宙に浮くばかプチに当たる以外は。

しかし、コーナーに入ったところで減速すると、ばかプチが地面に落ちてずるずると引きずられていく。

音で気づいたのかタキオンが振り返り、一瞬ムツとした表情を見せる。

コーナーから出るとまたスピードが上がり、ぽかプチは宙に浮く。しかし既にウッドチップが刺さったり繊維に引っかかかっていて、何とも言えない姿に。

向こう正面を終えてコーナーに入ると、今度は外側に膨らみながら走ってくる。

コーナーでの減速によってぽかプチが地面に落ちたのがわかって修正したんだろう。

だが膨らんでも何度か地面に落ちてウッドチップを削る。

パチパチと音が鳴り、そのたびにぽかプチがボロボロになっていく。

最終直線に入ってまたも宙に浮き、そのままゴールする。

減速してぽかプチを確認したタキオンは、かなり不満そうに満身創痍のゴルシちゃんを持ち上げた。

「ぬいぐるみは無駄に重いし遠心力でコーナーは回りにくい。それにスピードを落とせばすぐに地面に落ちる。速度を維持して走るトレーニングだね、なるほどなるほど」

思ったより失敗したのが悔しいのか、むすつとしながらウッドチップを取り除いては地面にばいばい落としていく。

多少綺麗になったが、ほつれや傷はかなり目立つ。

一応これ、先輩からもらったトレーニング用のぽかプチなんだけど……いいのだろうか。愛バをこんな扱いにして。

「これを落とさない最低限の速度で走れば効率よくコーナーを曲がれそうだ。思っていたよりはいいトレーニングだよ。このぬいぐるみを使うところ以外はね」

ボロボロになってしまいうじゃないか、全く。タキオンはそう言いながら、また走り出していった。

コーナーでの走り方を工夫しているタキオンを見ながらタイム測定やフォームの確認をしていると、後ろから声をかけられて振り向く。

そこには目がキラキラと輝いているウマ娘が。

「グレイト！ 楽しいトレーニングをしてマスネー！」

両手をバツと広げてニコニコと笑う。

この体も声も感情表現も大きなウマ娘は、トレセン学園内最強のマイラーことタイキシャトルだ。

急に大活躍中のスターウマ娘に話しかけられて驚いていると、オウ、と逆に驚かれた。

「ソーリー、見たことあるトレーニングだったので、つい話しかけてしまいマシタ！」
そりゃあそうだろう。

だって教えてくれた先輩のチームに所属しているんだから。

もしかして今日は先輩もこの練習場をつかっているのか？

「トレーナーさんは坂路デス！ ワタシはトオリガク……カガリ……？」

どうやら通りがあったところに自分のチームのトレーニングをやっていたから話しかけてくれたみたいだ。

なんとこのコミュニケーション能力……!

「た、タイキさんのアグレッシブなコミュニケーション……! やはりすごいですう……」

そんな中、近くの木の陰から怪しげな声と共に覗き見る視線が。

誰だと思つてそちらを見ると、ピンク色の髪をしたウマ娘がだらしのない笑顔でこちらを見ていた。

……あれ、あの娘つて。

「オウー! 探しマシタ! デジタルー、ハウディーー!」

「ひよええくく!!!! 元気ですうくく! うつ、フレンドリーなウマ娘ちゃん尊い……!」

「おや、デジタル君じゃないか」

覗き見ウマ娘の奇行を眺めていると、タキオンが戻ってきた。

やっぱりそうか。彼女があのアグネスデジタル。

というか知ってるんだ。

「彼女は私と同室だからね。いやはや、デジタル君が相手だと私が観察される側になつてしまうんだよ。いささか新鮮だね」

そうなのか。

おひよ〜とかはえ〜とか謎の声を上げながらタイキのハグで膝崩れしているけど。

アグネスデジタル、彼女は今話題のウマ娘だ。

なんといつても芝とダートを選ばず、どちらでも活躍しているのがすごい。

というかレースのローテーションがおかしい上多い。

ダートで3、4連戦してからマイルチャンピオンシップで芝のマイルGIレースを勝つってどういうことなんだ……。

そんな彼女はタイキシャトルと同じく先輩のチームに所属している。

距離適性的にタキオンとは被らないだろうが、もし戦うことになればかなりの強敵だろうな。

悲鳴を上げる彼女を見ながら、タキオンの周りは個性派が多いなーと思うのだった。

Story 11 : ホープフルステークス

12月の中山レース場。

そこに俺とタキオンはいた。

月日が経つのが速いもので、薬で足が発光するのを繰り返していたらもうホープフルステークスの日になってしまった。

基本的にはばかプチを腰にくくって走ってもらうのを練習場でも坂路でもやっていた。

俺も一緒に走っていたが、このレースにくるまでに最後までぬいぐるみを地面に叩きつけていたのを覚えている。

見ている以上に相当難しいらしく、速すぎても遅すぎても安定しないから擦ってしまっただとか。

そんなこんなで、若干不機嫌そうなタキオンを連れて控室に入り、勝負服へと着替えてもらう。

タキオンの勝負服は本人の探求心を現したかのような、袖余りの白衣のコート。中の服は黒いシャツにショートタイ、黄色のベスト。

女子高生が白衣を着たらこうなるんだろうなという格好だ。手が外に出ていないのが気になるところだが。

「おや、随分私の勝負服に興味津々だね。確かに私も気になるところだ。何故勝負服を着るとウマ娘はいつも以上の力を出すことができるのか。走りを阻害しそうな服装でもタイムが縮むのか。いやはや、不思議なことだよ」

くつくつ笑いながら自分の袖を見せて、くるくると腕を回して見せる。

傍から見ると、なんでこんな無駄の多い服で走ってるんだろうかと思ってしまうぐらい、勝負服は走りに向いていない見た目をしている。

しかし、ウマ娘は勝負服を着ることでさらなる力を発揮する。

何故かはわからない。だが、速くなることは事実だ。だからこそ、GIレースではGⅡ以下と違ってタイムが早くなるのだから。

ところで気になっていたんだけど。

タキオンはレース前に薬を飲んだりしない。まあしてはいけないわけだけど。

色々データを取りたいなら有効だからといって飲んだりしそうだと思っただが。

「トレーナー君。確かに私の言動でそう思うのも仕方がないかもしれない。だけどねえ、それは失礼だよ」

かなり真面目な顔で言われてしまい、素直に謝る。

確かに失礼すぎた。ドーピングしそうだって言ってるようなものだ。

「私はドーピングは嫌いだよ。あれほど白けるものはない。自らの力によってスピードの極致へと走り抜くことが素晴らしいのさ。わかるだろう?」

体一つで魅せる走りを披露したタキオン。

その素晴らしきは、彼女自身が体現している。

うん、と頷くとふふんと笑った。

「あくまでも薬の目的は永続的な身体能力の向上さ。わかりにくいかもしれないが、自転車の補助輪のようなものだよ。無いほうが速く走れるが、あればバランスは良くなる。そういうものさ」

ドーピングにならない程度の効果で、脚を強くする……ということなのだろう。

今までの研究の話しぶりからそう思う。

ま、タキオンのスピードに対する探究がレースに支障を与えないのであれば、トレーナーたる俺から言うことは特にならない。

「まあ、待っていたまえ。君がどう思っているかはわからないが、きつと期待通りの結果を見せられるだろうからね」

ニヤリと笑うタキオンは、自信満々にそう話すのだった。

『美しい青空が広がる中山レース場、メインレース。ホープフルステークスです』

ゴール板前でウマ娘たちを見ながらレース開始を待つ。

全員ゲート前に立っていて、それぞれが準備を行っている。

『本日のホープフルステークスは例年と同じく期待の新星が集まっていますね』

『5枠5番のミナモトライコウ、芦毛の美しいウマ娘が1番人気です』

ミナモトライコウ。

タイキシャトル同様、アメリカ生まれの芦毛がキレイなウマ娘。

力強い踏みこみでグンと加速する走りは素晴らしい。

『4枠4番にはアマゾントリップ。3番人気ですが素晴らしいウマ娘ですよ』

『朝日杯で勝利したメジロベイリーに勝っていますからね。実力は証明されています』

アマゾントリップ。

ハイレベルなメイクデビューで勝利し、その後も勝利を重ねている実力者だ。

フジキセキのトレーナーが、フジキセキでなし得なかったダービーでの勝利を期待し

ているウマ娘でもある。

『2番人気のアグネスタキオン、2枠2番です』

『メイクデビューではレベルの違う凄まじい速さを見せました。今日のレースも期待で

きますよ!』

そしてアグネスタキオン。この3人が今回のレースでの主役と思われる。タキオンはメイクデビューでの圧倒的な勝利が記憶に新しい。

後で確認したが、上り3Fが33.8というとんでもないスピード。その上2着と3バ身半差だ。

残念ながらマンハッタンカフェは調子が戻らずホープフルステークスには不参加だ。ゆっくり不調を直してがんばりますと言っていたから、今は休養しているはず。

タキオンは残念がっていたが、やる気は中々好調のようだ。今日はまた強い走りが見れるだろう。

グツと手を握ってゲートを見つめていると、全てのウマ娘がゲートイン完了した。

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました。まもなくスタートです!』

——ガタンッ

『スタートしました! 各ウマ娘綺麗なスタートです!』

ゲートが開いてスタートした!

タキオンはスタートで前に入る気がないのか、スタートダッシュをせずに緩く走って後ろに下がる。

アマゾントリップは前方からのレースにしたいのか前に出ていき、ミナモトライコウ

は少し下がって外から前に付けていく。

タキオンは先行でのレースがいいと言っていたが、序盤は無理しない方針のようだ。メイクデビューでは不利を受けていたが、今回は問題なく走れている。

タキオンの内隣に1人いるため、走りやすいところを進めているはず。

『先頭を走るのは12番ホシノムード！ 続いて1番マインフリー！ その後先頭集団です！』

『注目ウマ娘は一団となっていますね』

コーナーに入ってポジション取りが終わり、隊列が決まった。

タキオンは変わらず中団7番手で様子を見ている。

ミナモトライコウとアマゾントリップは隣り合って互いににらみをきかせながら併走。

末脚のスピードには全員自信ありだ。いつ仕掛けるのか、それをけん制しているのだろう。

頑張ってくれよ、タキオン……！



(随分と楽に走らせてくれるじゃないか)

タキオンはミナモトライコウ、アマゾントリップの後ろにつけながらニヤリと笑う。強いウマ娘の後方で、その走りを見ながらノーマークで走れる。こんなにも自分とつて都合のいいレースなんてあるのだろうか。

内側の後ろに2人走っているウマ娘はいるが、外はがら空き。後ろに誰もいない。何かの罫かと思うぐらいには、あまりにも走りやすかった。

向こう正面で走りながら、前2人の走りや脚、そしてフォームなどを観察する。

自分の研究データと照らし合わせ、新たなデータが得られたよ、と1つ頷く。

(トレーナー君に言われたから出てみたが、中々どうして。いいデータがとれそうだ)

タキオンは研究にデータが必要だと言うが、ロマン思考が強い。

数字も大事だが、時には経験や感情といった不確定要素もまた大事なものだと言われ、彼女は思っている。

だからこそ、レースデータ自体はレース後に見えるから自分が走る理由はないのに、ホープフルステークスに参加したのだ。

言ってしまうば。

レース勘、というのも走る上では大事なものだろうと。なんとなくそう思ったから参加した。それだけなのだ。

向こう正面が終わり、第3コーナーに入っていく。

ここに来てアマゾントリップの外につけていたミナモトライコウが少しずつ動き、前に出始めた。

ミナモトライコウの動きをちらりと見るが、アマゾントリップは動かない。

こちらは最後の末脚で一気に動く算段のようだ。脚を溜めることに専念している。

(ふうん? なるほどねえ……そういうことか)

タキオンは前の動きを見て一つ頷く。

ミナモトライコウの動きは、距離適性によるものだろうと考えたのだ。

スピードは速く、力強い踏みこみで一気に加速できる。ただ、今回のレースでは距離が少し長い。

つまり、本質的にはマイラーなのではないか。きっと中距離でも走れるのだろうか、あまり長い距離には向いていないのだろうか。

タキオンは今の動きとメイクデビューからのデータでそう予測した。

(ここで注意すべきは、彼女だろうね)

脚を溜めているアマゾントリップに視線を向ける。

彼女はすっかり脚を溜めて、来る仕掛け時。その瞬間を今か今かと待っているようだ。

この後半で脚を溜められるということは、最後まで自分の力を発揮できるということ。

つまり、彼女は現時点で中距離をしっかりと走り切れる能力があるということだ。

(まあ、私も同じわけだが)

タキオンは内心そう思いながら、チラと自分の進路を確認する。

自分の中距離以上に向いている。そして、この脚は長い時間かなりのスピードで走ることができる。

ならば、今までの経験とデータから導き出される結論は、こうだ。

『第4コーナーに入りました！ アグネスタキオンが前に出ていきます！ 外から先頭に進出！』

ミナモトライコウが進出したルートを通り、先頭へと駆け出していく！

アマゾントリップの横を通り過ぎる時、互いに目線だけ向けあう。

先に行かせてもらうよ。後から抜かすさ。視線で語り合い、タキオンは最終直線の前までに1、2番手へと上がるべくスピードを上げていく。

外から進出してきたタキオンを見てグツと顔が強張ったのはミナモトライコウ。

アマゾントリップも警戒していたが、それと同等にタキオンを警戒していた。何故なら、この中で一番速い末脚を持っているからだ。

自分は最終直線でぶつちぎる。そう思って進出しているが、スタミナが足りない。

しかしタキオンはメイクデビューで2,000mを走り、そこで凄まじい速さを見せている。

スタミナも、速さも。どちらも足りないのだ。ミナモトライコウは。

「く、ぐー」

「ふっ、ふっ」

「はっ、はっ……」

第4コーナーを回りながら、3人は残りのスタミナを考えて仕掛けどころを考える。

ミナモトライコウはもう無理だ。最終直線でなけなしのスタミナと根性でとにかく走る。

アマゾントリップは溜めた脚を解放したい。しかし前にはタキオン。彼女のスパートを見てから追従して抜かすつもりだ。

そしてタキオン。彼女は自分の脚と相談した。そして仕掛けどころは誰が見ても分かりやすく、そして極めて模範的だった。

『さあコーナーを回って最後の直線！ 中山の直線は短いぞ！ 後ろの娘たちは間に合

うか!』

最終直線に入り、ミナモトライコウが必死の形相でひた走る。

その横を、タキオンはスマートに走り去っていった。

『最初に飛び出したのはミナモトライコウ……いや、アグネスタキオン! アグネスタキオンが一気に抜け出した! アグネスタキオン! 凄まじい速さ!』

歓声を浴びながら、タキオンは自分が今、無事に出せる最高速で走っていく。

ミナモトライコウは目を見開いて追いかけるが、追い抜けるのは他のウマ娘だけ。

アマゾントリップもタキオンを見て追い始めたが、全く差を詰められない。何故、どうして!? と必死に走りながら遠ざかるその背中を睨みつける。

その他のウマ娘たちは、スタミナ切れで垂れ始めたミナモトライコウすら抜かせず、無理ー! と叫び始めていた。

誰がどう見ても、このレースの勝者は間違いなかった。

『アグネスタキオン! これは楽勝だ! アマゾントリップ追いかけるが差が縮まらない! ミナモトライコウを抜かすが追いつかない! アグネスタキオン先頭!』

タキオンは自分が今出しているスピードに満足していた。

後ろからの足音を聞いても、誰かが近づいてくる音は聞こえない。

今までのデータ通り、中々いい実験結果じゃないか。そう思っていた。

ゴール板まで残り100m。

ふと、トレーナーの姿が見えた。

——タキオー——！ タキオンが一番速いんだア——！

彼の声を聞いて、思わずふつと笑いそうになる。

自分の追い求めるスピードのために研究と実験を繰り返しているんだ。当然の結果

だよ。

そう思っていたタキオンだが。

「おや……？」

ほんの少しだけ。

今出せると思っていたスピードよりも速く走れている。

それに気づいたのは、彼女が1着で走り抜いた後だった。

Story 12 : 正月

「次のレースは弥生賞に出るけど構わないだろうか？」

年末年始にもかかわらずトレーナー室で実験をしていたタキオンを思わず2度見する。

ホープフルステークスで1着を取り、そこからずっと何かを考えていたわけだが……。

どういう気持ちの変化なのかはわからないが、レースに出ると言ってくれたのは嬉しい報告だ。

早速と思つて資料を探しに立ち上がろうとすると、タキオンに声をかけられて止められる。

「別に今すぐ動かなくてもいいよ。私としては関係ないが、今日は正月だ。少しぐらい休んでおくといい」

一体誰のせいで正月からトレーナー室を開けているのか。

朝からしこたまメッセージアプリにスタンプ爆撃をされ、何かと思つて連絡したら実験したいと。

結局押し切られて渋々ここに来たわけだ。俺の正月が……。

「別に用事があるなら行つてくればいいじゃないか。私はここで研究しているから」
タキオンを見張つておこなきやいけないからここから出られないんじゃないか。
自宅から持つてきたみかんを剥きながらそう話す。

とりあえず毎年恒例の駅伝でも見るか。ウマ娘のレースもいいが、人間の走りというのもまた違ったドラマがあるからな。

テレビをつけてソファに腰かけると、何やら不満そうにタキオンが見てくる。

「なんだいなんだいモルモットくうん。私が何か危ないことをするとでもいうのかい？
心外だなあ。私が誰かに危害を加えるようなことをしたことがあるのかな。ないだろう？ 君は私のトレーナーだよ。それなら私のことをきちんと信じるのがトレーナーとしての矜持つてやつじゃないのかい」

とくとくとして語られるが、そうだねと適当にあしらつてみかんを食べる。

お、始まった！ 俺の出身校が活躍してくれると嬉しいな。

結構強かつたと思う。在学中応援に行つたことないけど。

「ふうん？ ずいぶんと適当に対応してくるじゃないか。君が先に失礼なことを言つてきたんだぞ？ こういう時はまず誠意つてものを見せるべきじゃないのかな。わかるだろう？ 誠意だよ、誠意。さあ見せてくれたまえよ」

うわっ、めんどくさっ。

思わずタキオンを見て口に出てしまった。

それを聞いた彼女はむむむと下唇を突き上げてさらに不機嫌になってしまった。

「めんどくさいとはなんだめんどくさいとは！ 大体君が余計なことを言わなければどうにもならなかったじゃないか。いいかい？ 私はね、気分を害しているんだよ。他にも自分のトレーナーのせいだね。どうしてくれるんだい、モルモット君。これはありとあらゆる実験を君に課さない限りフラストレーションは消えることは無いだろうね」

私、不機嫌ですと顔に書いてあるかのような表情で、試験管をぶらぶらと揺らしながらにじり寄ってくる。

最近遠慮がなくなってきたくない？

「それは君もだと思っただけだね。さ、飲んでくれたまえ。一息にね。飲むんだ」

ぐいぐいと口元に試験管を押し付けられるので、渋々受け取って一気に飲む。

空になったものを返して口直しにみかんを食べていると、あつとタキオンから声が漏れた。

「あー、うん。いや、どうだろうな……」

何やら顎に手を当てて唸り出した。

薬の配合に失敗したやつ渡されたのだろうか。たまに間違えて渡されることがあるから。

「薬は大丈夫さ。ただ、君の持っているそれが問題でね」
持っているそれ？

手元に視線を向けると、俺が持っているのはみかんだ。

みかんが問題なのか？

「そうなんだ。グレープフルーツが有名なんだが、柑橘類に含まれるフラノクマリン類が」

あ、専門的な話はわからないのでわかりやすく教えて欲しいです、はい。

「むう……つまり、君の食べているみかんが今飲んだ薬の効果に影響があるかもしれないってことさ。もちろん、種類にもよるけどね」

確かに、グレープフルーツと薬と一緒に飲むなってよく聞くからな。

「薬の種類にもよるけどね。で、だ。そのみかん、種類は何かな」

普通のみかんだぞ。

実家から送られてきたやつだ。

「うーん！ それじゃあわからないね！ 効果が出たら考えよう」

尻尻を下げて困ったように唸るタキオン。

「こちらもどうしようもない。とりあえず、この持つてるみかんはタキオンにあげよう。」

「おや、くれるのは嬉しいが、私はあいにく両手が塞がっているんだ。食べさせてくれるかい？」

「いや、それは面倒だからいいです。」

「えー!?!」

にべもなく断られて驚くタキオンだった。



薬の効果で足が蛍光色に光っていたが、みかんの効果かすぐに収まった。

やや不機嫌になったタキオンを連れて、近くの神社にお参りへ。

「ふうん、(ここ)が例の……」

興味深そうにタキオンが辺りを見回す。

正月でトレセン学園が近いからか、見知ったトレーナーやウマ娘の姿が多い。

「トレーナーさん見てください！ 大吉を超えた超吉ですよ〜！」

「ワタシもデス！ Extreme Happy！」

「私も……トレーナーさんからもらったお守りのおかげです」

「ぶつとばす」

「だめだよお！ 大凶だけどはやまらないでえ！」

「ぐふふ……ウマ娘ちゃんदैいっばいでしゅ……うへへえ」

やいのやいのと盛り上がっているようだ。

俺たちも一旦お参りに行こう。

「お参りか。小さい時以来だね」

タキオンと一緒に列に並ぶと、そんなことをぼつりと呟いた。

あまり行かなかったのか？

「私の親は放任主義でね。行きたいと言わなければ連れていくことはなかったよ。ああ、もちろん親子関係に問題があるわけではないさ。自由になんでもやらせてくれる家というだけだよ」

彼女の話を聞いて、なるほどと思った。

タキオンが好き勝手に制限を無視して実験をしたりわがままを言ったりしているのは、親の方針で生まれたものらしい。

まあ、それにしたってちよつとハジケているとは思うけど。

「欲しいと言えば実験用の器具も買ってくれたし、トレセン学園に行きたいと言えば応援してくれたよ。間違つたことをしなければ何も言わない人たちなんだ」

そう話すタキオンの横顔は穏やかなものだった。

人をモルモツト扱いして投薬実験を繰り返すようなウマ娘だが、いい家庭で育っているみたいだ。

でも実験器具が欲しいって娘が言つたら少し考えるものじゃないか？

「ああ、何に使うんだと言われたよ。懇切丁寧に説明したら納得してくれたが、今思うとあれは説得されただけかもしれないね」

やっぱり色々思うところはあつたようだ。

自分の娘が研究して薬を作つて、それで足を速くしたいと言つていたら納得はできないだろうな。

タキオン自身はドーピングがすごく嫌いだからやらないけど、傍から見るとドーピングに見えるだろうから。

「外からの評価は仕方のないことだよ。しかしだね、それは私の最終目標に至るまでの障害には成り得ない。壁ですらないのだから」

ふん、と息を吐いて流し目で俺を見てくる。

「どうやら何を言われようが研究を続けるということらしい。

それはもう知ってるし、先を見るまで手伝うよ。そう言うのと、くつくつと笑う。

「ふうん……君は失礼なことをよく言ってくるが、私をよく補佐してくれている」

「モルモット君改め、助手ということにしようじゃないか」

機嫌がよさそうに笑うタキオン。

彼女の中で俺の存在が1歩格上げされたようだ。

「私たちの番のようだよ。ほら、お金を入れて鳴らしたまえ」

賽銭箱に5円玉を2枚投入。紐を掴んで揺らし、鈴を鳴らす。

カランカランと音が鳴り、タキオンと一緒に礼と拍手をして願いを想う。

タキオンがケガすることなく走れますように……。

「……………」

目を開けてタキオンを見ると、熱心に祈っていた。

科学実験を好んではいるが、かなりのロマン思考だ。こういったものに関心はあるら

しい。

「…………うん、いいだろう。さ、行こうかトレーナー君。気になる物もあるからね、少し

回つてみようじゃないか」

少し楽し気に尻尾を揺らすタキオンと共に、境内を散策するのだった。

Intermission: 想い

そう言えばクラシック級に上がる時にも神社に行つたんだね。

懐かしいね。あの時はまだ君に何も言つてはいなかつたのに、随分と従順に付き合つてくれていたものだよ。

あの頃からじゃないかな、君をあまりモルモット扱いしなくなつたのは。

え？ 今もしているって？

それはモルモットとしてじゃないよ。助手としてお願いしているんだ。わかるかい、この違いが。

実験に付き合つてもらっているが、強制することはなくなつただろう？

今も昔も、君がやるというからやつてもらっているんだよ。

飲みたくないと言われたらわかつたよって大人しくひっこめているじゃないか。

他の人に飲ませると言つたら飲むしかないというのはね、違ふと思うんだよ、トレーナー君。

嫌味とかでやっているわけじゃないのはわかつていると思うんだが。

君が飲まないのなら他の人で試すしかないだろう？

自分では一度試しているんだからね。

うーうーうーん！

私のせいではあるが、信用されていないね！

いやはやなんとも……ああ、トレーナー君大丈夫だよ。

君が私の言うことを信じてくれてるのはわかっているさ。

しかしこういう性分だからね、とにかく研究の成果を見たくて仕方がないんだよ。わかつてくれるだろう？

例えばほら、ここに紅茶に入れるための砂糖がある。

そしてこの紅茶に入れると、砂糖は溶けるだろう？

だが限界がある。溶解度を超える量を入れても溶けないからね。

……あー、うん。そんな顔をしなくてくれたまえよ。

今はもう朝に紅茶と砂糖の比率を1:1にして飲むことはしていないから。

本当だとも。後でデジタル君に聞いてみるといい。

耳が痛くなるほど怒られたからね。流石にもうやっていないよ。

君が作ったスイーツを朝ごはん代わりに食べてはいるが。

仕方ないだろう？

君が作ってくれるスイーツは量が多いんだ。

他の娘にもと言われているけどね。基本的に私たちはアスリートだよ？

糖質の塊を頻繁には受け取れないんだ。それでも食べようとするのはスペシャルウィーク君かオグリキャップ君ぐらいのものだよ。

私の先輩ではあるが、あの2人の食への欲求は実に興味深いと思うね。

あれだけお腹がふくれているのにすぐ元に戻るというのもまた不思議なところだ。

ほら、人はたくさん食べてもあんなにお腹は膨れないだろう？

以前フードファイターと呼ばれる人を調べてみたが、理解できる範疇のお腹だったよ。

胃の大きさかい？ それはごもつともな指摘だね。

けどどね、トレーナー君。胃の大きさというのは、たくさん食べることと関係はあまりないそうだよ。

これは医師が内視鏡検査を繰り返した知見なんだ。

つまり、少ししか食べれなくなったことを「胃が小さくなった」と表現しているにすぎないんだ。

機能の低下、ということだね。

それに、多く食べて何度も胃に負担がかかってしまうと、しなびた風船のように内臓がのびてしまう。

そうすると機能が低下するはずなんだが……いやはやなんとも、2人はよく食べるんだよ。

だから調べたくなくなってしまっただよ。追い求める速さとは別にね。おっと、かなり話が脱線してしまっただね。

要するに、私はトレーナー君をトレーナーだと思っているんだよ。

わかるかい？ そうじゃなければずっと担当なんかしてもらわないだろう。

……。

おい、トレーナー君。何か言ってくれたまえよ。何って。

恥ずかしいじゃないか、改めて話すのは。

むっ、なんだいトレーナーくん？ その人を小バカにした顔は。

私はこちらからわかるのが嫌いなんだ。知っているだろう？

やれやれ、また気分を害されてしまったよ。

これはまたモルモット君に戻ってもらって実験をしていくことで溜飲を下げるしかないんじゃないだろうか。

というわけで、ここに新しく作った薬がだね。

なあ、トレーナー君。話を聞いているかい？

おいおい！ 聞いていないってどういうことなんだ！

このトレーナー室には私と君以外いないだろう！

どうしたら聞いていないでいられるんだ！

まったく……トレーナー君は都合が悪くなるとすぐ耳が遠くなる。

やれやれ、年は取りたくないものだね。そうは思わないかい？

私も同じだって？

なんのことだい？ 私はウマ娘だよ。

耳が遠いことは無いだろう。

都合が悪いとはぐらかすって？

そんなことしないよ。基本的に聞かれたら答えているじゃないか。

教室で煙を出した時もきちんと説明しただろう？

反射で動いたとき脚はどのように動かすのかを実験するためだったと。

……ああ、うん。

クラシック級の時か。

そうだね。確かにあのときは君に何も説明していなかったよ。

する必要はないと思っていたからね。

いや、しないほうがいいと思っていたと言うべきか。

君の想いとか覚悟とか、そういうものを私は理解できていなかったからね。そうだよ。

結局君は私に寄り添うために努力していたけど、私はそれを利用して。それがあのクラシックの結果だったからね。

もちろん悔いはないよ。

本当のことさ。

なら、少しだけ話そうじゃないか。

私がクラシック級でレースに出た時のことをね。

Story 13 : 弥生賞

弥生賞。

皐月賞に挑戦するウマ娘が出走するステップレースの中でも、着順で優先出走権を手に入れる事ができるトライアルレース。

タキオンからこのレースへの参加をお願いされて、今現在中山レース場の控室にいる。

今日の弥生賞、出走するウマ娘はタキオンを含めてたったの8人。

ジュニア級の2走を受けて、この世代でシンボリルドルフに次ぐ無敗の三冠ウマ娘が誕生すると評されているため、弥生賞を回避する陣営が続出したからだ。

それを悪いとは言わないが、なんとなくもやもやしてしまう。

きつと俺の経験が少ないからなんだろう。勝てないと思っても挑戦すればいいのにと思ってしまうから。

あとは先輩の影響もある。だって先輩は勝てる勝てないで出走を決めないし。

そうじゃなければアグネスデジタルはダート走りまくった後に芝のマイルチャンピオンシップになんか出さない。勝ってたけど。

タキオンは出走者が少ないことには何も思っていないらしい。

何やら別に調べたいことがあるとかないとか。

気にしているのは、出走している一人のウマ娘。

「カフェと走ることになるとはね。体調はもういいのかい？」

「はい……体調は、良くなりました……」

そう話すカフェだが、体つきは以前見た時よりかなりやせ細っている。

調子は良くなったのだろうか、肉体が万全ではないみたいだ。

それでもレースに出たい、走りたいという気持ちでここにいるのだろうか、ウマ娘の走りに対する思いの強さを感じざるを得ない。

「ふうん……あまり無理はしないことだ。そうだ、君にいいものがある！　一滴でこほん一杯分のカロリーを摂取できる薬をだね」

「結構です……」

にべもなく断られてえー!? と驚いているタキオン。

そりゃあ、レース前に謎の飲み物を渡されて飲むアスリートはいない。

下手したらドーピングでアウトだし。

「仕方がない。次の機会を待つとしようじゃないか」

「次もありません……では、私はこれで……」

そうやって控室から出ていった。

カフェが閉めたドアを見て、タキオンが神妙な顔で腕を組む。

「あそこまで体が細くなっているなら、万全の状態で走るべきだと思うけどね」

少しだけ眉尻を下げ、首を振ってそう話す。

どうやら心配しているみたいだ。

2人は仲がいいからな……うん、仲いいよな？

「しかし、レースに出る以上はしっかりと走り走らせてもらおうよ。負ける気はないからね」

いつも通りに怪しげな笑みを浮かべてくつくつ笑い出す。

弥生賞、またタキオンが力を見せつけるレースになるんだろうか……？



「カフェ」

「タキオンさん……」

ゲートに入る前、脚の調子を確認しているカフェにタキオンは近づいていった。

なんだろうと思っていると、タキオンはふうんと息を吐いてカフェの体を見る。

「多くは言わないよ。君の走り、参考にさせてもらおうとしよう」

「……………」

カフェは何も語らず、じつとタキオンを見る。

そして目線をあらぬところに逸らすと、ぼーつと遠くを見ているようだった。

「なあカフェ。君は何を見ているんだい？ 君の脳は何を知覚している？」

「別に…………お友だちが、ゲートに入ったので…………見ていただけ」

そう言ってチラツとタキオンを見ると、そのまま自分もゲートへと向かっていった。

「いやはや、本当に興味深いね、君は」

楽しそうにそう呟くと、タキオンもゲートへと向かっていった。

『空を厚い雲が覆っています中山レース場。不良バ場の中、レースが始まります』

『先ほどまで振っていた雨は上がっていますが、バ場が悪いですからね。どういったレースになるでしょうか』

ゲート内外で、皆が皆ターフの状態を確認していた。

バ場は雨の影響で不良。あまりスピードを出せない状況のため、どのようにスタート

していくかを考えている。

全てのウマ娘がゲートインし、スツと空気が変わる。

スタートの構えを取り、全員がその瞬間を待つ。

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました』

——ガタンッ

『スタートしました！ 全員好スタートです！』

スタートは誰も失敗することなく走り出した。

タキオンは1枠1番。この不良バ場で最も走りにくい内側でのスタートとなった。

さてどうするかと思っていると、外側から凄い勢いで前に出てくるウマ娘が1人。

『5番のスキンノースが一気に前に出ました！ 先頭を取るようですよ！』

スタートで加速して、ハナを取りに行く逃げウマ娘。

これはいいと思ったタキオンはいつも通りゆるゆる後ろに下がっていく。

隣の2番3番のウマ娘が前に行く中、その後ろを取って外側のまだ走りやすいところへポジションを変えるつもりなのだ。

『その後ろは2番キタノフシチヨウ！ 3番ポイントウラブユー！ 1番アグネスタキオンです！ 後方に4番ミセスアクター、7番マンハッタンカフェ、6番ツイスターズ並んで8番ダイニメビウスですよ！』

スタートで少し縦長にはなったものの、不良バ場のおかげでペースは遅い。

タキオンは後ろに下がって距離を取ると、コーナー手前で外に出ていきポジションを取りに行く。

後ろから上がってきていたミセスアクターと目配せをして、ぶつからないように併走しながら上がっていく。

タキオンは先行の形で進もうと前に進み、キタノフシチョウの隣を陣取った。

対してミセスアクターはタキオンの後ろ。マークするようだ。

ポジション争いが落ち着き、コーナーを回っていく。

ここからは小競り合いとペースメーカーのスキンノースの走りを警戒していく場面となる。

『隊列決まりました、先頭は変わらずスキンノース。ボートウラブユーが2番手、その後ろでアグネスタキオンとキタノフシチョウが並んでいます』

タキオンは走りながら、少しだけマンハッタンカフェを気にしていた。きつと差してくるならカフェだろうと思っっているからだ。

誰もがタキオンを警戒している。しかし、それをねじ伏せるだけの速さがあると自負しているし、実際にやってきている。

だが、カフェは調子が悪いままここまできているため、実力がまだわからないのだ。

それ故、トレーナーもタキオンも彼女を警戒している。

とはいえ、現在も万全ではない状態で走っている。

一緒に戦う相手だが、このレースでの敵かというところとも言い切れない。

警戒よりも心配が勝っているのは、つまりそういうことだった。

『1, 000m通過時点でタイムは61.7! どうでしょうこの展開』

『スキンノースは少し掛かっているかもしれないね。後ろのウマ娘たちはあまり前に出ないようになっているようです』

スキンノースが先頭で、そのすぐ後ろにいるのはボーントゥラブユー。

そこから何バ身か離れた位置にタキオンはいる。

つまり、前2人のペースを無視してペースメイクしているのだ。

後方のウマ娘たちのペースメイカーは、実質タキオンだった。

ボーントゥラブユーは後ろを見て、あれ!?! と驚いていた。

足音が聞こえないと思っただけだが、こんなに離れていると思っていなかったのだ。

つまり、不良バ場なのにペースが速いということ。これだと最終直線までにバテてしまう可能性が出てきた。

しかしここに来てペースを緩めても中途半端になってしまう。

彼女は覚悟を決めてスキンノースに食らいつくことを決めた。

『第3コーナー入りしました！ 順位はほぼ変わらず、2番手のポイントウラブユーからアグネスタキオンまではかなり差があります』

コーナーに入ったところで、タキオンは少しだけペースを速める。

中山レース場の代名詞、『中山の直線は短い』というデータをもとに、先行抜け出しを狙うためだ。

少しだけ動く理由は、必死に逃げているスキンノースがそろそろ限界だろうからだ。

こんな不良バ場でドンドン前に出てしまえば、スタミナ自慢のステイヤーでないと必ずガス欠を起こす。

自然に落ちてくるならば、抜かすために力を使う必要はなく。

ただ走ればいい。そんな理由だった。

案の定ゆつくりとだが前2人のペースは落ちていくのを見て、タキオンは不敵に笑った。

計算は正しかった！ それを見たタキオンに活力が湧いてくる。2バ身ーバ身とポイントウラブユーとの距離を詰めていく。

スキンノースはもうヘロヘロでむりいーと言っているが、ポイントウラブユーは歯を食いしばって必死に粘っている。

第4コーナーに入ったところで、タキオンはポイントウラブユーに追いつき、外から

抜かし始めた。

必死に抜かされまいと根性で併走する2人とガス欠でスピードダウンし始めたスキンノースを先頭集団として、最終直線へと入る。

『最終直線に入った！ 中山の直線は短いぞ！ 後ろの娘たちは間に合うか！』

必死に走っている隣のポイントトゥラプユーを尻目に、タキオンはギアを上げていく。

ターフの状態が悪く、かなり滑るがそれは問題ない。

体を前に倒し、力強く踏みしめてスピードを上げていく。

『アグネスタキオン！ 抜け出して先頭に立った！ やはりこのウマ娘だ！』

観客たちも大きな歓声を上げてタキオンの走りに見入っていた。

明らかに他のウマ娘とは違うそのスピード。

この不良バ場でも関係なく、グングン伸びて距離を離していくのだ。

タキオンは遠ざかっていく足音を聞きながら、今回も満足のいく展開だったと笑みを浮かべる。

しかし、タキオンが今回調べたかったのは走り方や脚への負担や、そういつたことではない。

チラッとゴール板手前にいるトレーナーを見る。

——タキオオ——！ 凄いぞ——！

子供みたいな言い方で、身を乗り出して笑顔で声援をくれるトレーナー。

その声と姿を確認すると、何故か。やはり。

少しだけスピードが速くなる。

(ふうん、なるほどね)

タキオンは新たな可能性に胸を躍らせながら、当然のように1着でゴールインするの
であった。

Story 14 : 体の強さ

弥生賞での勝利により、皐月賞への出走権を獲得した。

嬉しさのあまりタキオンにクラシック三冠を目指そう！ と強く宣言してしまったぐらいだ。

タキオンの意見を聞かずにそう言ってしまったため、すぐにごめんと謝ったけれど。

「謝る必要はないよ。出ようじゃないか、皐月賞」

思いのほか、タキオンが乗り気だった。

また嬉しくなってしまうて何でもすると言ったせいで、1日3本薬を飲まされることになったのは置いておく。

常に脚が光り輝くのは日常生活でかなり不便だったなあ。

トレーナー寮に住んでいてよかった。先輩みたいに外に住んでいたら間違いない腕が後ろで縛られていたことだろう。

弥生賞は3月前半。皐月賞までは1ヶ月ある。

と、思っていたのだが。タキオンの実験に付き合ったりトレーニングについて相談したりしていたらもう残り2週間だ。

先輩から近くなったら無理に負荷のかかるトレーニングはさせないで、ケガしない程度にするといひと言われている。

GI勝ちまくってもケガさせないで走らせている先輩の言葉を信じてタキオンにやつてもらっているトレーニングがこれだ。

「トレーナー君！ これはきちんと思ひがあるのだろうね！」

意味の分からない体勢で倒れまいと必死に耐えているタキオン。

「次はどれですか？ まだまだいけますよ〜！」

変な体勢ではあるが安定して全く倒れる様子のないマチカネフクキタル。

「こ、こんなご褒美がトレーニングだなんてえ！ う、うへへ……」

両手を頬に当てててぶるぶる震えているアグネスデジタル。

非常にカオスな状況で行われているこのトレーニングは、ツイスターゲームだ。

先輩からトレーニングの相談をしてみたならこれとメンバー2人を貸し出された。

無理せず体幹を鍛えられて楽しくできるぞとオススメされたのでやつてもらったわけだが。

「デジタル君！ 次はどれだ！」

「はっ!? え、えつとおく……」

アグネスデジタルは目を泳がせながらルーレットを回す。

タキオンから聞いてはいたが、随分と個性的な娘だ。

ちよこつと話を聞いてみたのだが、ウマ娘ちゃんが好きなんです！　と言われた。

君もじゃんと思っただのはさておき。要はアイドルが好きみたいな、そういうやつらしい。

それにしたってこう……ファンすぎやしないかと思うけど。

さつきタキオンとやった時は体が触れた瞬間に「げにとうとし」って言いながらべちやりと倒れ伏してたし。

触れ合いすぎるのは解釈違いなんだとか。意味がわからん。

「くっ……！」

「おや、大丈夫ですか？」

限界が来たのか、タキオンがぺちよつとマットに倒れ込み潰れた。

マチカネフクキタルは余裕そうに首だけ動かして声をかけている。

まだまだ実力差を感じるところだ。

マチカネフクキタルは切れ味抜群の末脚を武器にトウインクル・シリーズの中・長距離レースを荒らしまわっている。

ドリームトロフィー・リーグへ参戦すると聞いていたが、ここまで隔絶した差があるとは。

スピードだけならタキオンが勝てると思っていたが……なんともいえない結果だ。

「よっこいしょ！　ふう〜、久々にやると楽しいものですね！　最近はあまりやつていなかったですから」

疲労した様子もなくストレッチを始めた。

基礎がとんでもないぐらい鍛え上げられているなあ……。

もしかして、先輩のチームってこれが標準なのだろうか。

「そうですよ？　ケガをしないように、徹底して基礎を鍛えますからね〜」

「あたしも最初はできなかったけど、今では触れることなく維持できますとも！　イエ

スウマ娘！　ノータツチ！」

どうやらこれが標準のようだ。

トレセン学園の新設チームにして最強チームの一角と言われるのも頷ける。

個性的というか、ハジケている部分もまた最強だけだ。

「ふむ……なるほどね。君たちの脚はこんなふぎけたトレーニングから作られたのか」

タキオンは疲労から回復したようで、ゆっくり起き上がってツイスターゲームのマッ

トを覗む。

まあ、確かにふぎけているようにしか見えなけれども。

「そうですよ〜！　見た目は確かに変ですが、効果は抜群ですからね！　マットを置く

だけで、そこがパワースポットになるのです！」

「ふうん？ 興味深い。このマット1枚でパワースポットとはね」

「ふっふっふっ！ そういうものなんですよ！ チームのみなさんと一緒にやったことの全てがパワーなのです！」

「ひよわ〜〜!!! チームの絆でえてえ！ てえてえよ〜〜!!!」

自信満々に話すフクキタルを見て、デジタルが叫んでいる。

推しが幸せで今日も尊いと言いながら生まれたての小鹿のように脚をぶるぶる震わせているが、この娘は本当に大丈夫なのだろうか。

とてもG1レース勝ってるウマ娘に見えないレベルの痴態を見ている気がするんだけど。

「絆か。数値で表せないものだろうが、レースにおいてよく言われる事象だね」

「そうだ！ タキオンさんを占みましょう！ 絆を深められる人がいつどこで会うかわかりますよ！」

「ふうん。占いね……いいだろう。やってみてくれたまえ」

わかりました！ と元氣よく言いながら、フクキタルは手を合わせながらふんにやかはんにやかと祈り始める。

そして謎の呪文を唱え終わると、どこからともなく取り出した鉛筆をころころと転が

す。

「ほほう！ 幾人か既にあり、です！」

「つまり、もうすでに何人かいるということかい？」

「その通りです！ タキオンさんをしっかりと見てくれる方は、案外近くにいますよ」

ふうん、と顎に手を当てながら興味深そうに話を聞いている。

ロマン思考の気があるタキオンのことだから、こういった突拍子のない話でも受け入れられるんだろう。

ただ、これが研究に組み込まれるととんでもない薬を開発したりするからちよつと問題があるにはあるが。

「そうですね。話すべきことはきちんと話したほうがいいとも出ています。仲の良い人には色々お話したほうがいいみたいです」

「なるほど。フクキタル君の占いは面白いものだね。参考になったよ」

「占いはちよつとだけ背中を押してくれるものですからね。あとはタキオンさん次第ですよ！」

マチカネ相談室というものをやっているのと同じことにはある。

やり取りを聞いていると、なるほどなるほど、相談員として非常に優秀かもしれない

な。

「はああああ……！ フクキタル先輩の占いしゅごい……タキオンさんの笑顔も尊い……」

……フクキタルにはこちらのウマ娘もどうにかしてほしいと思うわけだが。
同じチームだ、なんとかかしてくれ。そう思いながら2人の話を聞いているのだった。



「皐月賞についてなんだが」

研究レポートを書きながらタキオンが話しかけてきた。

レースの情報を集める手を止めて、話を聞く。

「正直言おう。勝つことはできる」

だろうね。頷いてそう答えた。

まだ2年目の新人トレーナーの俺でもそう思うぐらいには、タキオンの実力は他のウマ娘と隔絶している。

速すぎるんだ、タキオンが。良バ場不良バ場関係なく凄まじいスピードで走るその姿は、既に三冠が見えていると言わんばかりの走りだから。

無敗の三冠ウマ娘か!?　なんて記事が出るくらいだ。皐月賞に勝つてもいないのに。俺も勝てると思じている、今まで通りの作戦でいけると思っている。

いつてしまえば、横綱相撲のようなものだ。

強く勝つ。それが彼女の走りなわけだから。

「ただ……そうだね。何といえればいいんだろうか」

珍しく歯切れが悪い様子で、ペンをレポート用紙にトントン叩きながらチラツとこつちを見る。

不安でもあるのだろうか。精神的な面は大丈夫だと思っていたんだけど。

「いや、レースへの不安はないよ」

じゃあどうしたんだ？

そう言うのと、頬杖をつけてこちらに向き直る。

「少しばかり脚に疲れが残っていてね。流石にあの不良バ場は少し堪えたらしい」

そう言われて、思わずイスを吹き飛ばしながら立ち上がってタキオンに近づく。

すぐにしゃがんで脚を確認すると、少しだけ慌てたように顔の前で手を振った。

「トレーナー君、そんなに慌てなくても大丈夫さ。別にケガがどうというわけではない

からね」

本当だろうか。とても心配だ。

念のため見せてほしいとお願いして、脚に触れる。

正直学んでいるとはいえ触診に関しては素人だ。詳しく分かるわけじゃないが、おかしければ流石にわかる……と思いたい。

真剣にタキオンの脚をむにむにと触っていると、咳払いされる。

思わず顔を上げると、何ともいえない表情でタキオンが俺を見下ろしていた。

「私が担当とはいえ、そんなに脚を触るといふのはいささかやりすぎじゃないかな。ハラスメントに近いと思うよ」

そう言われて、すまないと謝り手を離す。

それでも心配で脚を見ていたら、ぺしつと頭を叩かれた。

「まったく……君も夢中になると周りが見えなくなるようだね」

ため息を吐かれてしまった。

ごめんて。謝りながら脚について頭の中で整理する。

正直ケガはしていないと思うし、大きな問題はない。

念のためレース前に1度病院やらマッサージ店やらに行つて万全の状態にしよう。

タキオンにそう告げて、イスをなおして早速調べ始める。

先輩にも連絡して疲労回復について教えてもらおう。あそこのリーダーはそういうことには極めて最適な人員だろうからな。

「……ままならないものだね」

自分の脚を見てそう呟いていたのを、俺は気づくことができなかつた。

Story 15 : 皐月賞

中山レース場。

ここでクラシック三冠の第1レース、皐月賞が開催される。

タキオンはこのレースで1番人気だ。2番人気はホープフルステークスでも戦ったアマゾントリップ。

おおよそこの2強対決というような見方をされていて、3番人気のホクオウボーダーはタキオンら2人から人気が離れている。

そんな2強の1人、タキオンは控室でイスに座りながら脚をふらふらと遊ばせていた。

彼女に脚の不調を言われてから色々な手段で回復に努めた。

マッサージは自分でできる範囲で行ったし、先輩からのアドバイスで銭湯なんかにも連れて行った。

鍼灸にも行ってみてブスブス針を刺してもらったりもした。かなり嫌だったのか耳を絞って睨まれたけど。

そんなこんなで今日。

タキオン曰く、相当改善されていると言ってはいるが、やはり心配だ。

勝ってほしいという気持ちはあるが、それ以上にケガせず帰ってきてほしい。

ケガをしたら、俺とタキオンが目指す果てなんて見ることができなくなってしまうのだから。

「やれやれ。そんなに不安そうな顔で見ないでくれたまえ」

眉尻を下げて笑いながら俺にそう話してくる。

そうは言っても……。

「まあ、確かに君が懸念していることはわかるよ。でもね、トレーナー君。私の体のことは、私が一番よく知っている」

腕を組みながら自信があると頷く。

タキオンの薬は自分自身に効くように作っている。

ならば、自分の体のことをよく理解している証明になるだろう。

「なに、君はいつも通り待っていていればいい。私たちの研究の成果を、ゴール前でね」
少しだけ優しい気な表情、優しい気な口調でそう話し、タキオンは控室を出ていった。



(天候は晴れ。芝は良。走りやすい状況だね)

タキオンはターフを軽く踏みながら、レース場の状況を確かめた。

これで3度目の中山レース場だ。やる気も好調。いつもの通り走ることができだろ。

自分に降りかかってくる声援を受けつつ、少しだけ騒がしいと思いながら体を温めていく。

「タキオン」

「うん？ おや、君は……」

声をかけられて振り返ったところにいたのはアマゾントリップ。

現状2強という状況で思うところがあつたのだろう。少しだけ笑い、目の奥にメラメラと燃える闘志を宿しながらタキオンを見つめる。

「この前負けちまったからな。今日は勝たせてもらおう」

「ふうん？ つまりこれは、宣戦布告ということかい？」

「そういうこと。お互い全力を尽くそうぜ」

そう言つてヒラヒラ手を振りながらアマゾントリップは一足先にゲートへと向かう。

そんな彼女の背を見ながら、タキオンはぼつりと呟いた。
「全力を尽くす、か」

声に少しだけ寂しさが滲んだが、誰も気づかなかった。

『最も「はやい」ウマ娘が勝つという皐月賞！ 成長を見せつけるのは誰だ！』

実況が盛り上げる中、出走しているウマ娘たちは集中していた。

一生に一度しか出ることのできない舞台だ。悔いなく全力を出す。それだけを考えている。

『3番人気から紹介しましょう。7枠14番ホクオウボーダー』

『アーリントンカップではかなりの好走でした。彼女の差しに期待です』

『2番人気、1枠1番アマゾントリップ』

『非常に強い走りを見せるウマ娘です。前走の共同通信杯での走り、素晴らしいものでした』

『1番人気はこのウマ娘を置いて他にいないでしょう！ 4枠7番アグネスタキオンです』

『3戦3勝、無敗で勝ち上がってきています。クラシック級のウマ娘の中ではトップの

強さですね』

ウマ娘の解説がなされ、その間に全員ゲートに入る。

歓声も止み、緊張の瞬間。

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました。まもなくスタートです!』

——ガタンッ

『スタートしました! 各ウマ娘一斉に好スタート!』

ゲートが開き、ウマ娘たちが走り出す。

フルゲート18人が一斉にポジション争いを始めていく。

誰をマークするのか、どの位置につけるのか。それぞれが自分の思い描くレースのためを考えていく。

そんな中、1人のウマ娘がほんの少しだがハナに出る。

『4番シエアハピネスが先頭に立ったか! その後を各ウマ娘が追いかけていきます!』

逃げを見せたシエアハピネス。しかし逃げウマ娘で有名なツインターボ、サイレンススズカなどとは違い、その差はほんのわずか。

ただ少しだけ前にいるというだけだ。

コーナーを見据えて徐々に隊列ができあがるも、かなり横並びの団子状態。

ぎゆうぎゆうに詰まった状態で、第1コーナーに差し掛かる。

先頭は変わらずシエアハピネス。そのすぐ後ろに2人、3人と差はなく進んでいく。タキオンは5番手で走っていた。左右には誰もくっついておらず位置的にも悪くない。

これなら最終直線から抜け出していくいつもの走りができるだろうし、ブロックされることもないだろう。

もう1人の2強、アマゾントリップは後方の位置取り。といっても中団で脚を溜めて待ち構えているだけだ。

ホクオウボーダーも後方待機。自分の末脚を信じて最後の1発にかけようと身を潜めている。

『第2コーナー入りまして先頭は変わらずシエアハピネス！ 差がなく18番のバンクエツト！ 少し上がってきました！ 後ろにはアグネスタキオン！ 今回は先行で走るようですよ！』

第2コーナーを回り、向こう正面へ。

なるべく芝の状態がいいところを走りたいと思ったタキオンは、ほんの少しだけ外へとズレる。

チラッと後ろを見ると、意図を察した背後のウマ娘たちが少しだけ内にズレる。これ

で危険はなくなつた。

他のウマ娘たちもタキオンに習つて最内は走らず横に広がっていく。順位はあまり変わらないが、全員が足を残してコーナーへ入ろう。そんな気持ちで走っていく。

バンクエツトはペースを乱れたいとシエアハピネスに競りかけ、それにのつてしまったシエアハピネスは1人だけグツと加速してしまった。

コーナー前で挑発に気づきペースを落としたが、スタミナ消費が激しい。かなり辛い状態になつた。

してやつたりとバンクエツトは思ったが、実際のところ全体のペースはあまり乱れていないので大成功ではなかつた。

『1, 000mは59.9! ほぼ1分ペースです』

平均ペースで半周を過ぎ、第3コーナーへ。

シエアハピネスは先ほどの挑発で既にひいひい言い始め、後ろの集団にズルズル落ちてくる。

タキオンはそれを見ながら、少しずつ外から進出を始めた。

中山の直線は短い。これは身をもつて2度体験したことだ。

そしてそれは自分に対してかなり有利であるということも。

だって、この中で1番速いのはアグネスタキオンなのだから。

『第3コーナー回りまして第4コーナーへ！ シェアハピネスがすこしずつ落ちてきた！ アグネスタキオン上がってきている！ 後方からはアマゾントリップ、ホクオウボーダー共にきているぞ！』

先行していた前の集団ではタキオンが、後方ではアマゾントリップとホクオウボーダーは同時に上がってきていた。

最後のコーナーを回り、最終直線へと入る。

ここからが、皐月賞の勝負だ。

『さあ、ここでアマゾントリップ、アグネスタキオンの一騎打ちになるんでしようか！ 直線コースに向かってまいりました！』

最初に先頭へと抜け出したのは先行していたタキオン。

今までと同じ、先行抜け出し。ギアを上げて一気に加速していく。

それと同時に後方からアマゾントリップが食らいつくかのように外から急襲。それに連なつてホクオウボーダーも上がってきていた。

『直線コースに向かっている！ さあアグネスタキオンわずかに先頭か！ アマゾントリップ食い下がる！ アマゾントリップ食い下がる！』

あと一バ身！ そう思いながら走るが、その一バ身差が詰まらない。

歯を食いしばって走るが、少しずつ離されていく。そして内から上がってきたホクオウ

ウボーダーにも抜かされ、3番手へ。

『最後の坂にかかってアグネスタキオン先頭！ アグネスタキオン先頭！ さあ、そしてアマゾントリップ！ そしてホクオウボーダーもきている！ そしてホクオウボーダーもきている！』

ホクオウボーダーも、この一瞬で抜き去る！ そう思っただけで思いきりターフを踏みしめる。

しかし距離が詰まらない。縮まらない。どうして!?! 目を見開き、下がる顔を必死に上げながら食らいつくも、タキオンには追いつけない。

そのまま埋まらない1バ身のまま、タキオンはゴール板へと駆けていく。

『しかしアグネスタキオン！ アグネスタキオン、大丈夫です！』

順位は変わることなく。

タキオンは先頭でゴール板を駆け抜けた。

『中山2, 000mまずは道を繋ぎました！ アグネスタキオンまず1冠！』

誰もがその脚に、速さに魅了されていた。そして確信していた。

既に無敗の三冠が達成される。今後もGIを次々と勝利していく。

それがあたりまえかのように話す実況。次のレースも勝つだろうと思っただろうと思うトウインクル・シリーズのファンたち。そしてトレーナー。

誰もが信じていた。
そんな中。

「はあ……はあ……」

「ふう……」

「……」

アグネスタキオンだけが。

何も信じてはいなかったのだ。

それを知ることになるのは、まだ先の話――。

Story 16 : 出走可否

皐月賞を勝利し、無敗の三冠ウマ娘として期待がかかっているタキオン。

俺もあのレースで勝ったことは嬉しかったが、なんというか……不安を感じている。

理由は簡単で、タキオンが皐月賞以来雰囲気が変わったから。

今まではレース後に研究の成果を鑑みて改良したと葉を渡してくるのに、今はそんなこともなく。

「はっ……はっ……」

トレーニングに力を入れていた。それも、オーバーワークギリギリまで体を追い込むように。

今も練習場のターフを全力で駆け抜けてタイムを計測している。

以前なら真面目に走るようになってくれた！ と喜んでいただろうが、急に研究からトレーニングにシフトしたせいで困惑を隠せない。

それになんだか違和感も感じる。何が違うのかはわからないが。

「ふう……なるほど、こんなものか」

お疲れ様。違和感を振り払って声をかける。

走り終わったタキオンにタオルとドリンクを渡し、ベンチの近くに水の入ったバケツを用意。

クールダウンと合わせてアイシングもしてもらうためだ。

「いつも通り献身的だね、トレーナー君」

タキオンは水分補給をしながらゆっくり歩きながら呼吸を整える。

一緒に歩いて体の様子を確認していると、ふうんと1つ声漏れた。

「何か言いたそうだね？ 皐月賞が終わってからずっとだ。なのに、君は聞いてくることはなかった」

そう言われてドキツとしてしまう。

今までタキオンは重要なことについて俺の問いにはぐらかして答えてくれなかった。

だから、今回も答ええないだろうと思つて何も言わなかったんだ。

タキオンのことをわかっていると、そう考えていたが……これじゃあトレーナーとしての責務を果たせていない。

しかし、ううん。口をもごもごとさせていると、隣からため息が聞こえてきた。

「トレーナー君。言いたいことがあるならはつきりと言えればいいじゃないか。別に何を聞かれても私は気にしないし、答えられるものにはきちんと言答するさ」

呆れたように俺を見つめてきたので、よしと決意して聞いてみることにした。

急にトレイニングをたくさんし始めたけど、何があつたんだ？

「ふうん。予想通りだ。聞いてくると思ったよ」

タキオンはドリンクを飲んで唇を湿らせる。

「君は驚いているかもしれないが、これも研究の結果だよ。皐月賞でのレースで、元々考えていたプランAに影がかかり始めてね」

時々タキオンはプランA、プランBという単語を口に出す。

研究はそのプランのために行っているらしいが……内容については何も分かっていない。

「ああ、プランについては気にしなくていいよ。単純にレースに出るために必要なことだからトレイニングを行っているのさ。特に脚を鍛えるためにね」

そう言つて自分の脚を見る。

弥生賞で不良バ場を走ったおかげでダメージがあつたと話していたが、皐月賞を走り終えた今は問題ないとタキオンは話してくれた。

レースに出るため……つまりは日本ダービー。

俺がそう言うのと、うーんと唸る。

「私にクラシック三冠を期待してくれているのはわかるよ。だけどね、出走については私に決めさせてほしいんだ」

今までにない強い口調でそう言われた。

思わずタキオンを見ると、とても真剣な表情。

……どうしてレースに出走するかどうか、自分で決めたいんだ？

「それについて教えるのは、まだだ。と、言っておこうか」

真面目な顔から一転、怪しげな笑みでそう答えた。

結局答えてくれないじゃないかとため息を吐いて額に手を当てると、あっはっは！

と笑われてしまう。

「まあいずれ話すきー。なに、順調なら出走はするとも。約束してもいい」

君を困らせたいわけではないからね。そう言つて笑い、タキオンはドリンクを飲んだ。

その後もぼつぼつと話を聞き、練習場をぐるりと1周。

タキオンはベンチに腰掛け、バケツに脚を突っ込んでアイシングをする。

「ふう……いつもアイシングで水を持つてきてくれるのはありがたいが、少し大変じゃないかい。水場まで少し距離があるだろう」

大事なことだから。そう話すときくつくつ笑う。

「ククク。本当に献身的だね。しかし毎回こうして運んでもらうのも効率が悪い。運動後のクールダウンとアイシングを同時にできないものだろうか。アイシングもクール

ダウンに入るからいささか重複しているのはこの際無視しよう」

腕を組んで考え出したので、俺も一緒に考える。

冷やす……冷やす……保冷剤を括り付けて歩くのは？

「それだと温度が低すぎる。冷やす以上に効果が出てしまう可能性が高いね。凍傷になっちゃったらそれこそケガに繋がっちゃおうよ」

ダメかー。

じゃあプールでトレーニングはどうだろう。

今やっているバケツの全身バージョンって感じで。

「プールサイドでトレーニングでもするのかい？ もしそうなら本末転倒な気はするが……まあそうだね。効果は期待できるだろう。しかし今考えている運動後のクールダウンの回答としては合致しないな。それにもしトレーニング後にプールへ向かうとなれば余計な体力を消耗してしまうよ」

そうか……。

我ながらいい感じの回答だと思っていたが、問題点を指摘されてぐぬぬとなっちゃった。

うんうん唸って考えていると、タキオンが楽しそうに笑い始めた。

「あつはつは！ 君の提案は面白いね。内容としては平凡であると言わざるを得ない

が、発想力は素晴らしいよ。あたりまえのことを見直すというのは、誰もができる事じゃない」

「販されているのか褒められているのかよくわからない発言をされた。

眉をひそめていると、褒めているんだよとまた笑われた。

「ほら、また新しく考えたまえ。君のことだ、また面白いものを言ってくるに違いない」
期待されてるのかなんのか！

うーん……ああ、プールがダメなら海ならどうだ！

砂浜でトレーニングできるし海で歩きながらクールダウンもできるぞ！

「なるほど、海か。確かに回答としてはいい。実際の効果を確認できれば……」

ぶつぶつ言いながら自分の世界に入ってしまった。

結局正解なのかわからないまま様子を窺っていると、近づいてくるウマ娘の姿が。

誰だろうかと顔を上げると、ぼうっとタキオンを見つめているカフェがそこにいた。

「よし、いいだろう。トレーナー君、明日は海に……おや？ カフェじゃないか」

「こんにちは……」

「どうかしたかい？ トレーニング中ずっと熱い視線を浴びせていたが……告白であれば屋上にも行くこうじゃないか！ いいシチュエーションだろう？」

告白!?

「違います……!」

「てれなくてもいいじゃないか」

「はあ……ただ、タキオンさんの走り方が……いつもと少しだけ違ったから……」

カフェの話聞いて、ああ、と納得した。

ずつと違和感があった。タキオンのトレーニングを見て感じていたものは、走り方の違いだったんだ。

思わず顔を見ると、一瞬だけ瞳が揺れていた。

タキオン……?」

「……なるほどね。それで観察していたってわけかい」

「……はい」

見えたのは一瞬だけで、いつものように怪しげな笑みでカフェと話している。

どうやら走り方を本当に変えたようだ。

「でも、よく考えたら私には関係のないことですね……」

「いやいや、関係ないとは限らないだろう?」

何やら含みを持たせた言い方だ。カフェを見てニヤリと笑っている。

カフェは冷めた目で見ているけど。

「私は君に未来の一部を賭けているのさ!」

「未来……?」

「私は『お友だち』を含めて、君のことを買っているんだよ? 元々ははぐれ者の似た者同士だと思っていたんだけどね」

くつくつ笑いながら話すタキオンに、俺もカフェも首を傾げる。

未来ってなんだ?

「カフェ、君には私が持ち得なかった要素を持っているように思えてね。だから期待しているのさ」

「……よく、わかりません。けど……勝手に、まきこまないでください……」
困った様子で俺を見てくる。

頷いてみせると、一礼して去っていった。

気になる事ばかり話していたからタキオンを見てどういふことかと尋ねようとしたら、薄く笑ってこちらを見ていた。

……答えてくれないってことか。

「ククク、わかつているじゃないか! まあ、時がきたら話そう。それまで待ちたまえ
!」

楽しそうに脚を揺らしてちゃぶちやぶと水で遊ぶタキオンを見て、どうしたものかなあと頭を抱えるのだった。

Story17：日本ダービー

日本ダービー。

毎年行われるGIレースでも特別なレースだ。

全てのウマ娘、そしてトレーナーたちが憧れ、勝利を目指すといわれているダービー。まあ、例外はあるわけだけど。

「流石は日本ダービーだね。歓声だけで建物が揺れているように感じるよ」
その例外がこちら。

最高速度の果てを見るという目標のためにレースを走る。それがタキオンだ。

ダービーがどうかさそういった感情はないらしく、いつも通りに走るよというだけだ。

しかし、走るかどうかは考えておくみたいな話をしていたが、結果出走することになった。

一体何が引つかかっていたのかわからず仕舞いだが、とりあえずレースに出てくれるなら嬉しい。

なんだかんだ言って、タキオンの走りを見たいわけだから。

「どうしたんだい、そんな小動物を見守るような目をして。いつもの狂った目はどこにいったのやら」

とんでもない言いようだ!?

「自覚がないのかい? 結構危ない目をしている時があるよ、トレーナー君」

出走前にとんでもない新事実を告げられ、愕然としてしまう。

他のウマ娘に避けられる時があるのはそういうことか……。

「それは君の足がよく光っているからだと思うけどね」

誰のせいだろうね。

「さあそろそろ出走時間だ。ではね」

露骨に話題をそらしてスタスタと控室から出ていこうとするタキオンを引き留める。

本当に大丈夫なのか。そう話す。

「大丈夫とは?」

皐月賞の前に脚の疲労がという話があった。

なんとというか……トレーニングの頻度といい脚の疲労蓄積といい、どうもタキオンはあまり体が丈夫でない気がするのだ。

だからこそ皐月賞の後からアイシングのために水を入れたバケツを用意したり、マッサージや鍼灸など色々なケアの仕方を調べていたわけ。

そう話すと、タキオンはいつもの怪しげな笑みを引つ込めた。

……瞳が一瞬、揺れたような。

「……ククク、心配してくれるのはありがたいけどね、トレーナー君」

すぐにいつもの笑みを浮かべ、頬に手を当てる。

袖が長すぎて白衣がぺちよつとなっているけど。

「君が考えるべきは、私が走り、そして帰ってくるのを見る。それ以外に何かあるかい？」

まあ、確かに走り出したら俺は何もできないけど……ね。

「なら見守っているといい。何、私が走ると言っただ。十全に走ってくるとしようじゃないか」

じゃあ行ってくるよ。そう言っただキオンは控室から出た。

……一抹の不安はあるが、タキオンが走ると言っただ。

信じよう。そう思っただ、俺はレースを見るために外へ出るのだった。



『すべてのウマ娘が目指す頂点、日本ダービー！ 歴史に蹄跡を残すのは誰だ！』
実況がダービー出走前にレース場を盛り上げている中、タキオンは静かに佇んでいた。

体は既に温まっている。体調も良好。これ以上動く負担になる。

無駄に動かず、ゲートインを待つ。

「タキオン」

「うん？ おや、トリップ君」

アマゾントリップがタキオンに話しかける。

その体は皐月賞からさらに磨きがかかっており、体全体から力強さを感じるほどだ。

「今日は勝つからな」

「いつも強気だね、君は」

「当然だろ。勝つためにここまで来たんだから！」

「そういうこと」

アマゾントリップの後ろから出てきたのはホクオウボーダー。

彼女もかなり仕上げられてきており、鍛え上げられた脚はこのレースの主役が誰なのかを
教えてくれる。

「今回はアナタに勝つ」

「おいおいオレはお前にも勝つぜ。皐月賞ンときは負けちまったしな」

「言つてなさい。じゃ、お互い全力で走りましょう」

「おう！ じゃあな、タキオン」

2人は宣戦布告して去っていく。

それをタキオンは羨ましそうな、寂しそうな目で見つめ、無言でゲートへと向かっていった。

全てのウマ娘がゲートに入り、スツと体を沈める。

同時に歓声も収まり、スタートを待った。

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました』

——ガタンッ

『スタートしました！ 8番ダイニメビウス出遅れたか！ 他は好スタートです！』

もつとも運がいいウマ娘が勝つという日本ダービー。

そのレースが始まった。

出遅れたウマ娘が1人いたものの、全員スタートは順調。

タキオンは左右を確認して走るコースを考える。

人気があるウマ娘は、今回外側が多い。

1番人気は言わずもがなタキオン、彼女は8枠16番。

2番人気のアマゾントリップは18番、3番人気ミナモトライコウが17番。

ホクオウボーダーはやや内側だがそれでも5枠9番だ。波乱の枠番だと事前には言われていた。

立ち上がりは静かに、争いは少なかった。

先行したいウマ娘たちは流れるように前へ、後方で脚を溜めたいウマ娘たちは後方へ。

これは今回の東京レース場が重バ場での開催だったためだ。

こんな序盤で争っている場合ではない。そういうことである。

『ハナを切ったのは2番パッショーネ、外から14番ティエムノース！ グングン前に出しています！』

『一気に上がってきましたね。これは他の逃げウマ娘は苦しいでしょう』

外からティエムノースがグングン前に出ていく。自分が先頭に出るのだという気合は誰よりも凄まじい。

パッショーネは逃げウマ娘だ。逃げとは先頭を走るということ。

前に他のウマ娘がいたのなら、もう自分の走りはできないのだ。

逃げウマ娘たちが攻防を繰り返している間に、外にいた人気上位のウマ娘たちは穏やかにポジションを決めていく。

タキオンはいつも通り先行。集団の前か横か、どうするかと様子を見ている。

アマゾントリップは差しで行くために少し後ろへ、ミナモトライコウも後方へ。

ホクオウボーダーも後方から開始するのかもしれない、なんと先行している集団に近づいていた。

後ろにいた2人はそれを見てギョツとする。走り方が変わった！ そう思ったからだ。

実際は流れで前に行ってしまっただけで先行するつもりはないことが後々わかるのだが。

第1コーナーまでの400mは、逃げウマ娘以外はゆるやかな争いでポジションをそれぞれ確保。

コーナーに入ってハナを走るのはもちろん大外から全力で逃げたテイエムノース。重バ場なのになりに飛ばしているようだ。

『先頭はテイエムノース！ 2、3バ身離れて3番キタサマチャネル！ その後ろ2番パッション！ 1バ身離れて先行集団先頭の16番アグネスタキオンです！』

タキオンは4番手。先行している集団の先頭にいた。

マークされはするがブロックされにくい場所であり、タキオンの走りとは合致するポジション。

少し早めに前に出たのが功を奏したのだ。

コーナーを回りながらタキオンは考える。

最終直線は525m。残り400m手前から上り坂が100m。その後300mの平坦なコース。

どこでスパートをかければいいのか、どこから後ろが仕掛けてくるか。

自分の脚と相談しながら、丁寧に戻っていく。ぽかプチダツシユなんてふざけたトレーニングの成果が発揮されていて、脚に負担がかからずコーナーを走れている。

被検体Aのチームは本当に不思議だ。内心ほくそ笑む。

第2コーナーを終えて向こう正面へ入った。

隊列はあまり変わらないが、先頭で飛び抜けているティエムノース。

第1コーナー途中から下り坂になっているとはいえ、ハイペースで走っているのは誰が見てもわかることだ。

『先頭は大逃げをしているティエムノース！ 1, 000m通過タイムは58.4！
かなりのハイペースです！』

あのペースで走っているのは最終直線でのスタミナは持たないな。

誰もがそう思って、落ち着いたレースをする。

ペースメイクをしているのは、実質2番手のキタサマチャネルと3番手のパツシヨ
ネだった。

先頭で大逃げをするウマ娘がいる時は、ペースメイカーは2番手のウマ娘。レースを
知る関係者の中ではあたりまえのことだった。

下り坂も終わり、1度ゆるやかな上り坂になる。そしてすぐに下り坂へ。

ペースを一定に保つことがやや難しいコースではあるが、日本ダービーに出走するウ
マ娘だ。

誰も大きな失態を犯すことなく走り、第3コーナーに差し掛かる。

(ふうん?)

タキオンは後方からの圧に気づいた。

テイテムノース以外はかなり落ち着いて走っていた。

スタミナにまだ余裕があるため、ここで少しずつ進出しようという機運が高まってい
る。

チラと少し後ろを確認。内から6番のカラフルダンスが前に行きたがっていた。

少し外に出ると軽く頷いて前が出る。タキオンと並走する形でコーナーを回ってい

く。

第3コーナー途中でティエムノースがかなり苦し気になってきた。

2, 400mだというのに飛ばしすぎた。シニア級2, 000m並のペース。クラシック級ウマ娘がやれるペースではなかったのだ。

しかし根性で走り、大ケヤキを越えて第4コーナーへ。2番手のキタサマチャネルは脚を溜めたいのかペースを落とすし、パツシヨーンの隣にまで下がっていった。

『大ケヤキを通って第4コーナーへ！ 一体誰が抜け出すのか！』

一足先にティエムノースが最終直線に入ろうとした。

しかし、既にコーナー終わりからペースを上げてきた後ろのウマ娘たちに追いつかれてしまう。

足音を聞いてくつと顔が引きつるが、それでもなお負けたくない！ と上がってしまいそうな顎を必死に下げた。

そんな中、最終直線でひゆうツツと抜け出すウマ娘がいた。

『アグネスタキオン！ ここで抜け出した！ やはりこのウマ娘か！』
タキオンだ。

第4コーナーに入るところで息を入れ、わずかにスタミナを回復。

いつも通りに抜け出して、先頭で加速していく。

先ほどまで併走していたカラフルダンスはタキオンを見てぐつと歯を噛みしめる。必死になってダービー出走までこぎつけたが、目の前で自分との差を見せられているのだから。

しかし、まだ勝ち筋はある！ このまま抜け出して走り切るんだ！

タキオンを追走していくように加速し、バ群から抜け出してハナを取りに行つた。

『先頭はアグネスタキオン！ 後ろからはカラフルダンスが追いかけてきている！ 坂を上る！』

抜け出した2人は坂を駆けあがる。

タキオンもカラフルダンスも、容赦ない坂のキツさに息が上がる。

しかし、息を入れている分タキオンは余裕があつた。

なんとか駆け上がり、そのまま最後のスパートへ入ろうとした、その時。

後ろから猛烈な勢いで追いついてくるウマ娘たちがいた。

そしてそれはもう後ろまで来ている！

『コースの中央を一気に駆け上がってきた！ アマゾントリップ！ ミナモトライコウ！ ホクオウボーダー！』

重バ場でもなんのそのと言わんばかりに凄まじい末脚で追いついてきた。

ここで差す！ 凄まじい気迫とパワーで一気にタキオンたちまで駆けていく。

残り300m。

この最後の300mが勝負だ。

『ミナモトライコウ！ ライコウは伸びない！ ライコウ伸びない！ アマゾントリップ！ ホクオウボーダー！ インコースにはアグネスタキオンとカラフルダンスも伸びてきている！』

グングンと伸びていくアマゾントリップ。距離適性なのか、ミナモトライコウは必死に走るが追いつくことができない。

インコースを走るカラフルダンスも最後の力を振り絞って走るが、限界だ。今の速度を維持するだけで精いっぱいだった。

タキオンは何かを堪えているような顔で走っている。弥生賞などで見せたスピードが出せていない。踏み込みもあまり強くないように見える。

アマゾントリップはタキオンを見た。どうだ！ ここから勝負だ！ 前を向いて、さらに力強く踏みこんだ。

『アグネスタキオン先頭！ しかしアマゾントリップ伸びてくる！ 躲した!!? 躲したか?! 先頭はアマゾントリップ！ アマゾンだ！ アマゾントリップだアー!!!』

最後の最後、アマゾントリップはタキオンを躲した。

それを差し返す距離もなく。

アマゾントリップが先頭でゴールイン。タキオンは半バ身差、ホクオウボーダーはタキオンと一バ身差でのゴールとなった。

「おおお……うおおおあああああー……ッ!!!」

頭を激しく上下に振りながら、歓喜の声を上げるアマゾントリップ。

彼女に惜しめない拍手と歓声が浴びせられ、最高の笑顔を見せて観客席に走っていく。

勝者である彼女に祝福の声をかけようと、ホクオウボーダーやミナモトライコウたちが歩いて寄っていく中。

「……………」

タキオンはひどく落胆していて。

今にも泣き出してしまいそうな目で自分の脚を見つめるのであった。

Story 18 : 見合

日本ダービーはアマゾントリップの執念に負けて2着。

最後の直線で伸びなかったためか、距離適性が疑問視される結果となった。

トレーニングを見てみると3,000mも走れると思っていたから、伸びなかったのが不思議で仕方がない。

ただ、それ以上に不思議なことがある。

「はっ……はっ……」

タキオンがダービー前以上にトレーニングに時間を使っているということだ。

以前は「レースで速く走りたいからだよ」なんて言っていたが、今回はなんとというか……鬼気迫るものがある。

それに、時々何とも言えない陰のある表情をすることも。

菊花賞に向けてなにかあるのかと聞いてみると。

「クラシックレースの最後か。トレーナー君がそう思うのはもつともだが、これまで以上に出走は期待しないように！」

なんて言われてしまった。

タキオンは本当に何を考えているのだろうか。いつも通り聞いても何も教えてはくれないし。

なんとも言えない空気間のまま過ごしていると、シンボリルドルフが会見を開くという話が舞い込んできた。

何の会見か知らなかったので、トレーニング前にタキオンと共にトレーナー室でテレビを見る。

『今現在注目されているウマ娘たちを集めて行うエキシビジョンレース「月桂杯」。こちらの開催が決まりました』

「ふうん？ 月桂杯ねえ」

タキオンは鞆からスツと手紙を取り出した。

差し出されたので受け取ると、そこには「月桂杯招待状」と書いてある。

……いやいや！ 知らなかったんだけど！

「言ってなかったからね。君は菊花賞への出走を期待していたわけだし」

それにトレーナー君にも話がいつていると思っていたよと言われてしまった。

確かに、なんで俺は知らなかったんだろうか。

タキオンのことで頭がいっぱいだったせいで聞き逃したか……？

後日、シンボリルドルフがタキオンに言っておいてほしいと話していたことが発覚す

るわけだが、今は知らないことである。

『ライブやセレモニーも予定されており、その規模で注目が集まっています。どういったレースになるのでしょうか?』

記者からの質問に、うんと一つ頷いて話始める。

『「月桂杯」は、「月桂樹」から名前を拝借しました。花言葉は勝利、栄光、榮譽……全てのウマ娘たちに抱いてほしい大志です』

「会長らしい言葉だね。勝者だけが許されるものだ」

話を聞きながら、タキオンは腕を組んで頷く。

真剣な表情をしているのは何故だろう。

『エキシビションレースとは銘打っていますが、模擬レースのようなものではありません』

『GIレースに引けを取らないような。各世代の代表となるウマ娘を集めた、最高峰のレースを目指しています』

タキオンの招待状を拝借して読ませてもらう。

そこには、各世代。ジュニア、クラシック、シニア。トウインクル・シリーズの各世代からウマ娘を招待しているみたいだ。

タキオンはクラシック級の代表として呼ばれている。光栄なことだけど、タキオンが

俺に言わなかったということは乗り気ではないということ。

強いウマ娘しか呼ばれないだろうから、データを取れると思うが……。

『ありがとうございます。続けて聞かせてください。今回「月桂杯」を開催する理由について、お伺いできますか?』

『大枠としては、GIレベルと同じレースを夏に開催することで、ウマ娘界のさらなる活性化を狙っております』

生徒会長らしい、ウマ娘のことを考えたレースということだろう。

常々もつとよりよい環境にできないものかと考えているからな。

『それから、ウマ娘側の意見になりますか』

少し困ったような表情で、きゅつと拳を握る。

『自分に自信が持てない、うまく力を出せなかったなど、多種多様な想いがあります。ここで、少々強引ではありますが、このレースを通じて己の力を存分に発揮したレースを経験してほしい』

『それが彼女たちの、ウマ娘界の未来につながると。私は確信しています』

穏やかに笑ってそう話すのを最後に、レースに招待しているメンバーの紹介が始まった。

そうそうたるメンバーだなと思っていると、タキオンがくつくつと笑いだす。

『ウマ娘界の未来』か。面白いことを考えるものだね、会長は」

眩しいものを見たかのように、すうっと目を細めて笑うタキオン。

俺の視線に気づくと、いつもの怪しげな笑みを浮かべた。

「しかしまあ、確かに期待できるメンバーだよ。これはいいデータがとれそうだね」
タキオンも出よう。データも取れるし、レベルの高いメンバーとレースできる。

そう話すと、そうだね、と素っ気なく答えられた。

なんだか嫌そうな表情だ。

「言っただろう？ 出走については期待しないでほしいと。あれは菊花賞だけの話ではないよ」

どうやら出走する気はあまりない様子だ。

じゃあ仕方ないか、と諦めると、何故だかささらに機嫌が悪くなった。

「なんだよ、君はすぐにそうやって諦めるじゃないか。もう少し考えてもいいじゃないのかい。君の担当が出走しないと云っているんだよ？」

自分でレースに出るのを渋っているのに！

人にいわれるのと自分でいうのでは違うのかもしれない。

ウマ娘はすごい身体能力を持っているけど普通の学生だから、多感なところも受け止めないとして先輩に言われている。

俺ではわからない「ナニか」で気持ち揺れているんだろうな。

タキオンが自由に色々できるようにしていたけど、少しぐらい強引にいかなきやダメな時もあるのかも。

——俺が出てほしいって本気でお願ひしたら、タキオンは出てくれるのか？

「うーん、その期待に応えられるかは今の段階だとわからないな」

真剣に聞いてみると、少し困った表情でそう答えられた。

じゃあ一晩考えてみてくれ。ダメそうなら菊花賞を目標にしておこう。

そう言うと、わかったよ、と頷いた。

よし、とりあえず月桂杯のメンバーを調べてみるとするか！

膝をバシッと叩いて立ち上がり、仕事机へと向かうのだった。

「……………いい加減選択しなくてはいけないね」



翌朝。

ノックもせずタキオンがトレーナー室に入ってきた。

「やあやあトレーナー君！ 君に話があるんだ！」

朝からハイテンションだなあ。

何かいい薬でもできたのだろうか。

「違うよ。昨日の話を覚えていないのかい？ 出ようじゃないか『月桂杯』に」

タキオンはそう宣言してきた。

……うーん、そうかそうか。なるほど。

「なんだいその適当な反応は。君にとつては朗報だろうか？」

確かに月桂杯に参加というのは朗報だよ。

でもそうだなあ。

タキオンがそれを言いに来たのが悲報というかなんというか。

そう話すと、むっと不機嫌そうな表情を浮かべる。

「どういうことかな。一晩考えてほしいというからこうやって答えを出してあげたんだぞ。君は喜びこそすれ悲しむことなんてないだろうに」

むすつとしているタキオンに苦笑いして、とりあえずソファに座るよう促す。

不承不承で座るタキオンに紅茶をいれる。彼女に言われて買ったお高いやつだ。

「いい香りだね。しかしなんでまたこんなことをしているんだい？ 授業が始まってし

まうと思うが」

サボっていい。

茶葉にお湯を注ぎ蒸らしていると、驚いた様子でこちらを見てくる。

「ずいぶんと珍しいことを言うじゃないか。私としては好都合だけどね」
頬に手を当ててこちらを見ている彼女の前に紅茶を置く。

自分のカップも持っていき隣に座って、1口。うん、美味しい。

「ふう……それで、どうしたんだい？」

単刀直入に話す。

——月桂杯は不参加でいい。

タキオンはぼかんと口を開けて俺を見た。

「……なんでさ。君にとって、レースに出るといっのはいいことだろう」

俺にとつては嬉しいことだ。

でもタキオンは違うだろ。

そう言うのと、むつとした表情を見せる。

「私がレースに出たくないといっ言つたんだ？ 速く走るために私は研究をしているんだぞ」

それじゃあ聞くぞ。

レースに出ると言ったのに、なんでそんな泣きそうな顔をするんだ。

「……………」

タキオンは自分の顔をぺたりと触り、黙り込んで俯く。

臆月賞に出た後からずっと気になっていた。何をしても沈んだ顔を見せる。

俺が薬を飲んでデータメモしている時も、トレーニングをしている時も、レースの話をしている時も。

だから、きつと何かあるんだ。

レースに出たい出たくないじゃなく。

レースに出られないと思うナニかが。

「……………そんなの、君に関係ないだろう」

関係あるだろ。

俺はタキオンのトレーナーだ。

「君はモルモットだ。そういう契約のはずだよ」

そうだ。

でも君のトレーナーでもある。

「まったく。強情なやつだよ、君は」

タキオンは頭を振り、ため息を吐いて立ち上がる。

「こんな非生産的な話をするのであれば、私は行くよ。やらねばならないことが山ほどあるんだ」

そう言つて出ていこうとする彼女の腕を掴む。

「……やめたまえ。ウマ娘とヒトの力の差を知っているだろう」
タキオンは振り返ることなく俺に忠告してくる。

耳は絞られていて、怒っているというのがよくわかる。

しかし、手は離さない。

「この腕を振り払えば、ケガするのは君だ。ほら、放してくれ」

嫌だ。

「……放したまえ」

ダメだ。

「放せ！」

体がぶつ壊れても放すか！

「……っ！ いいかげんに……！」

タキオンが振り向いたとき、俺は立ち上がつて彼女の目を見る。

俺の目を見た彼女は一瞬ハツとして、すぐに俯いた。

「……」

むつつりと黙り込んでしまうタキオンに、俺はぼつぼつと話をする。ずつと心配していたんだ、俺は。

急にトレーニングを始めて、しかも表情は暗いし。

走り方も変えて、それを何も言っていない。

ダービーが終わってから、もつと激しくなった。自分を使い潰すみたい走りこみ始め。

昨日だってお前、走ってただろ。寮を抜け出して。

そう言うと、チラツと俺を見る。

「……見ていたのか」

寮長のフジキセキから連絡があつたからな。

しかも、抜け出して全力で走って、急に立ち止まって。

暗い表情をしていたと思つたら次の日にレースに出ると言うんだ。おかしいだろう。

「これなら勝てると思つただけかもしれないじゃないか」

じゃあなんで泣きそうなんだ。

タキオンはまた俯いて黙り込んでしまう。

これではまた堂々巡りだ。

……脚、悪いのか？

そう聞くと、ピクつと体を揺らし、耳がペタリと倒れた。

今までの研究や言動、昨晚の様子から見て、そうとしか考えられない。

普通に走ったりしてゐるから、ケガではない、はず。

教えてほしい。タキオン。

彼女の肩を掴んで見つめると、彼女も顔を上げて俺の目を見た。

「……………」

数秒見つめ合うと、瞳を揺らしたタキオンはまた俯いてしまう。

「せっかく覚悟を決めたばかりなのに、カッコ悪いじゃないか」

そう呟き、顔を上げた。

「どうして君はそこまでしてくれるんだ？ モルモットみたいに扱って、レースにも出ないウマ娘を担当しているというのに」

——君の走りが好きだから。一緒に果てを見たいから。

「……………なんだそれ」

タキオンは泣きそうな顔で笑いながら、俺の顔を見るのだった。

S t o r y 1 9 : A o r B

「私の脚は、いつ走れなくなってもおかしくない状態なんだ」

タキオンからそう告げられた時、ガツンと頭を殴られたような衝撃が襲ってきた。

俺が思っている以上に。あまりにも大きな問題で。

思わず口を開いたままタキオンを見つめてしまう。

「この脚は天性のスピードを持つ。代償といつてはなんだが、同時に脆さも兼ね備えているわけだね」

タキオンの脚を見る。

そんな状態で今まで……。

「いやはや、いささかショッキングな事実だろう？ トレーナー君に伝えてしまうと研究に支障がでるかと思ってるね、言わないでおいたんだが……」

それにしても、ひどい顔だよ。

タキオンは穏やかに、切なそうな顔で俺を見つめてくる。

「……なあ、トレーナー君。私がウマ娘の肉体に夢を見ていることを知っているだろう？」

呆然としながら、こくんと頷く。

「見た目はヒトとほぼ同じ。しかし、筋力は数倍にもなる。なら、どれほどのスピードで駆けることができるのか」

「こんなロマンがあるだろうか！ 幼いころからずっとそう思っていたよ。いや、今も思っているが」

自分の脚を撫で、耳を動かし尻尾をゆらりと揺らす。

「私には走る才能があった。なら、自分の脚で果てに到達したい。そう考えるのが自然だろう」

しかしね。

薬の入った試験管をつまみ上げ、ちやぶちやぶ揺らして眺める。

「……私の脚は、そこに行きつくまでの頑強さを持ち合わせていなかったんだ」

それこそ、GIレースで全力を尽くせないぐらいにはね。

タキオンの話を聞いて、臆月賞からのレースを思い出す。

臆月賞ではいつも以上にいい走りだと思っていたが、最後の方で何故かあまり伸びなかった。

日本ダービーでも伸びることなく、アマゾントリップに差されてしまった。

どちらもなんというか、タキオンらしくないとは思っていたんだ。もつと速く走れ

るはずなんだから。

「エンジンばかりが立派でね。機体はひどくオンボロなんだ。無理はできなかつたし、細心の注意が必要だったということさ」

タキオンがレースやトレーニングに消極的だったこと。

いつも脚ばかり研究していたこと。

全ては彼女の脚が理由だった。

「それでね。私はプランを2つ用意して研究を始めたのさ」

指を2本立ててこちらに見せる。

「まずプランA。これは私の脚で限界に挑戦するために、脚の補強をするというものさ。

まあ、いつもやっていたことだよ」

実験で作った薬などは、全ては脚の脆さを補強するためのもの。

だから毎回脚が光っていたわけだ。

「プランBは、他のウマ娘に限界へ到達させるもの。つまりは私の脚を諦めるということだ」

そう言つて目をそらし、腕を組んで薄く笑う。

「この2つを並行して行つていてね。その最中に君と出会つたということさ」

初めて出会つた時のことを思い出す。

あの時は選抜レースへの不参加で説教を受けていて、そこから逃げていたんだっけ。
……脚の補強、あまり進展していなかったんだらうか。

「君は私に期待していただろう？ 薬を3本も一気飲みしてまで、トレーナーになりた
いと言っていたんだから」

懐かしむように目を閉じ、くつくつと笑う。

「積極的にレースへ出られるように、君は様々な献身を私にしてくれた。しかし、現実
は非情だよ」

「皐月賞で走ったとき。私は大舞台では耐えられないと感じたんだ」

皐月賞以降、明らかにトレーニング量が増え、そのデータを取ることが多くなった。

薬での実験はほとんどなく、常にオーバーワークギリギリで走っていたことを覚えて
いる。

それに、強い口調で出走については自分に決めさせてほしいと言われていたし。

……あの時点から、もう。

「うん。プランAの進みがあまりよくなってね。私のピーク時に間に合うと思えなかつ
た」

「だからプランBに舵を切った。そのはずだったんだけどね」

君に今、止められてしまったよ。

机の上にある月桂杯の招待状を見て、薄く笑った。
つまり、タキオンは……。

1度走るのを諦めようとした。そういうことだ。

ああ、なんでこんな……。

何も言えず、両手を目に当てる。

ボロボロ涙が零れ落ち、溢れたものがぼたぼた脚を濡らす。

「ああ、まったく。そんなに泣くことはないじゃないか」

タキオンが俺の手をどかして目にハンカチを押し付けてくる。

されるがままに涙を拭かれるが、後から後から流れてきてしまう。

自分の担当ウマ娘がずっと脚のことを気にしてがんばってきたのに、俺はただ走れつて言うばかりで……。

——情けなくて、悔しくて。

「……君は、いつだって。私を気にかけてくれているんだね」
優しく背中を撫でられながら、俺は泣きじやくるしかなかった。



目の前で泣くトレーナー君を見て、私は何とも言えない気持ちになる。

脚のことを告げただけで、こんなにも泣いてしまつて。

わかつてはいたが、ここまでショックを受けるとはね。

私は臆月賞で気づいていたし、ダービーで確信した。

GIレースという、最もウマ娘が速く走れるであろう環境で、脚が耐えられないということに。

だからこそ、ダービー後はプランBに移行して、データを取りに行くために月桂杯の参加も決めたというのに。

このトレーナー君は、私がプランBに舵を切ったことに気づいてしまった。

まったく誰に影響を受けてこんなに観察するようになったんだか。

しかし、思った以上に私に入れ込んでいたようだ。

目元に当てている私のハンカチは、今日はもう使えないだろうというぐらいに濡れてしまっている。

拳も強く握りすぎて、手が真っ赤だ。背中を擦っているが、泣き止む様子もない。

なんというか、不思議な気分だ。

両親にもここまで気にかけてもらえたことはない。放任主義だったからね。

ここまで私のことを見てくれたのは、君が初めてかもしれないよ。トレーナー君。

「トレーナー君、少しは落ち着いたかい？」

私が声をかけると、トレーナー君は袖でぐしぐし目を拭いて顔を上げた。

眉尻は下がって目元は真つ赤。口角も下がってへにやへにやだ。

ひどい顔をしているというのに、何とも言えない温かさを感じてしまう。

「……なあ、トレーナー君。私はプランBに移行するつもりさ。いいね」

トレーナー君は絶対にダメだ！ と強い口調で主張する。

何故だろう。わかっているのに、ついそう口に出してしまう。

否定されるなんて、そんなの当たり前だというのにな。

「プランAの可能性は限りなく低いんだ。なら、可能性が高い方を優先すべきだろう？」

可能性はゼロじゃないだろう。

キツと睨むように私を見つめて、ぎゅつと腕を掴まれる。

俺はタキオンを信じる。責任も俺が取る。だからやろう。

——いっしょに限界の先を見たいんだ。

トレーナー君はそう言って、頼む……と頭を下げてきた。

「……………」

私の中にある衝動が抑えきれない。

今、トレーナー君によって掘り起こされてしまった。

非合理的だ。危険だってある。

でも、賭けたくなってしまう。

やっかいなことをしてくれたものだよ、まったく。

「なあ、トレーナー君。私はね、奇妙なものに惹かれる質なんだ」

顔を上げて、不思議そうに私を見てくる。

その目は疑問を浮かべているが……先ほどまではそう。

狂った目をしていったんだ。

「最初からずっと。変なトレーナーだよ、君は」

ぼんぼんと掴まれている腕を叩くと、手を放してくれた。

そして困ったような表情をする。

「しかしまあ、可能性があるというのも問題だね。こうやって賭けたくなくなってしまおうのだから」

机の上に置いてある月桂杯の招待状を取り、ぽいっとゴミ箱へ投げ込む。

「君が言い出したんだ。今まで以上に協力してくれるんだらうね？」

そう言うのと、トレーナー君はぱあっと明るい表情を見せて、何でもする！ と宣言し

てくれた。

……トレーナー君は本当に何でもしてくれるからね。

まあ、美味しい弁当を期待しようじゃないか。

「ギリギリまで粘ってみるとしよう。ロマンを追い求めてきたんだ、もう少しぐらい頑張ってみてもいいはずさ」

トレーナー君は笑顔で、いっしょに頑張ろう！　と言ってくれる。

まったく……困ったトレーナーだ。

はしゃいで嬉しがるのを見て、不思議と口元が緩んでしまうのだった。

「因みに時間が無いから研究に全ての時間を注ぐよ。トレーニングはなしだ」

トレーナー君はがつくり肩を落とした。

ククク……面白いヒトだなあ、トレーナー君は。

Story 20 : 夏合宿 A

夏合宿の時期がやってきた。

GIレースが少ないこの7、8月。ここで一気に実力を伸ばすウマ娘は数多くいる。

有名なのはビワハヤヒデとマチカネフクキタルだろうか。

皐月賞でナリタタイシン、日本ダービーでウイニングチケットに惜敗していた彼女は夏にオーバーワークギリギリのトレーニングを行っていた。

その結果が芝3、000mのレコードと、菊花賞史上最速の上り3Fタイムだ。

マチカネフクキタルはそれまでの成績が悪く、直前のダービーに至っては7着。

だがしかし、何がどうなったのかはわからないのだが、突然覚醒してその後重賞を3戦3勝。

しかもあのサイレンススズカを差して勝利、バ群の中央からぶち抜いて勝利、菊花賞で1人だけ突き抜けて勝利など、とんでもない活躍だった。

今までトレーニングはそこそこだった俺たちにとって、またとない機会……と思っただけなのに。

「トレーナー君、まだつかないのかい？」 流石にデータを確認するだけでは飽きてきた

よ」

助手席で携帯電話を弄りながら不満を漏らすタキオン。

俺たちは送迎バスには乗らず、俺の車で合宿所へと向かっていた。

タキオンとの話し合いの末、夏合宿の全ての時間を研究にあてることとなった。

トレーニングは必要最低限、もちろん月桂杯なんて出ない。

脚の補強に全てをかけて挑戦することにしたのだ。

プランAのタイムリミットは夏合宿が終わるまで。目標は菊花賞を走りきること。

俺たちの夏を全てタキオンの脚にそそぐわけだ。

ただし、そうなると研究の器具が必要になる。

バスの荷物置きに実験器具をアレコレ詰めるのはタキオンが嫌だった。

あんな雑に置かれたら壊れてしまうよと駄々をこねたので、仕方なく俺の車を出して

いるわけ。

後部座席には所狭しと鞆やら何やらが満載だ。どれだけ持っていくつもりなのか。

「やれやれ、合宿所までの道がこんなに混むとはね。今から私だけでもいいから走って

いきたい気分だよ」

ニヤニヤしながらこちらを見てくる。

俺が渋滞でややイラついているのを知って煽ってきているのだろう。

腹が立ったのでタキオンの頭に手を乗せてわしやわしやとかき回した。

「うわっ！ もし私の指が滑ってデータを消したらどう責任を取るつもりなんだ！」
手を跳ねのけられて怒られる。

ウマ娘の力で叩かれたせいで天井にバゴンと手をぶつけてしまった。

あまりの痛さにひいひい言いながら足に手を挟んで我慢する。

「まったくなんだい君は。確かに私はちよつとばかり横から口に出したかもしれないよ？ でもね、限度というものがあるだろう限度というものが」

怒ってますと言いたげに眉をひそめているが、こちらはそれどころではない。

丁度痛い当たりかたをして本当に痛いんだ！

折れてないだろうなコレ……。

「トレーナー君聞いているかい……なんだ、まだ痛がつているのか」

どれどれと手を掴まれてじろじろ観察される。

ふうんと声を漏らしながら触られるが、やや痺れているためこそばゆい。

「まあ、特に折れたりしているわけでもないよ。指は敏感なところだからね、丁度良く衝撃がきただけさ。ナノサイズのものまで感じる事ができるようだからね、指というものは」

楽しそうに俺の指先をむにむにつまんで弄り始める。

どうやら俺の左手が暇つぶしのおもちやになってしまったようだ。生命線がどうこうと話しながら手をつままれるのであった。



やっと合宿所に到着したが、ここで問題が1つ。

必要最低限だが、スタミナや筋力を落とさないようにトレーニングをしなければならぬ。

しかし脚に負担はかけたくない。海で泳ぐことも考えたが、俺が水上バイクを運転できないからタキオンの安全管理が不可能だ。

他のチームとコンタクトを取っていっしょにできればいいんだが……なにせタキオンは外部の評判が悪い。

トレーナー間では俺が説明しているから大丈夫だとわかっているんだが、ウマ娘たちは実験の被害者たちだ。モチベーションにかかわるために、1人を除いて断られてしまっている。

というわけで、唯一許可してくれたチームと合同トレーニングとなった。

まあいつもお世話になってる先輩だ、うん。

脚へのダメージが少ないトレーニングをしてくれるそうなので、願ったり叶ったりだ。

「それで、これがそのトレーニングというわけだ」

若干呆れた様子のタキオンが、じろりと俺を睨みつける。

いや、俺だってこんなトレーニングをやるとは思っていなかったよ。

「うっし！ 気合いいれて行くぜ！ 突っ込んでこいフク！」

「いきますよ〜！ 開運ダ〜〜ツシユ！」

声をかけられたマチカネフクキタルがものすごい勢いで海へと走っていった。

そして海にひかれていっているゴザの上を全力で走っていく。

そう、これは水上ゴザ走り……！

「うへへえ……すごい走りでしゅ……」

「ふうん。確かに脚へのダメージは少なそうだね」

腕を組んで観察するタキオンの隣で、デジタルがゆふでゆふと変な笑い方でビクビク体を揺らしていた。

たまにレース後のライブにこういう人いるけどウマ娘がそうなってるのは見た時な

いな。

面白い娘だなあと思っている、おりやあああ〜!!! と叫びながらマチカネフクキ

タルが戻ってきた。

「ふう〜! 夏はやつぱりこれですね〜!」

「次はワタシがいきマス!」

海へ落ちることなく涼しい顔で戻ってきた。それと交代してタイキシヤトルが走っていく。

ううん、なんという力強さ。水上のゴザが踏み込むたびに水中へガクンと沈むぞ。

「なるほど……あのパワーで走っても下が水であれば、脚には強い衝撃はこないか。そして脚の筋肉には効果的だし、フォームやストライドも工夫しないと……」

タキオンがぶつぶつ言いながら研究を始めてしまった。

最初はアレだったが、興味深いものとして認定されたようだ。

「結構前からやってるやつでさ。ケガ明けのテイオーとマックイーンたちもやってたんだ。黄金世代も走ってたしな」

トレーニンングの様子を眺めていると、先輩が声をかけてきた。

トウカイテイオーとメジロマックイーン。それぞれ大きなケガをして復活した2人。

彼女たちがやっていたならば、きっとタキオンにもプラスになるはず!

「どれ、私も行ってみるとしよう。ふっ！」

順番が来てタキオンが駆け出していく。

先ほどまで海に落ちないようにするための計算をしていたはずだから、うまくいけるはずだ。

「おっと……！ くっ！」

と思っただけ少し走ったところで海に落ちてしまった。

あれ？ と思っていると、先輩が声を出して笑いだす。

「ははは！ 普通はあんなもんだ。フォームやストライドは大事っていうのはあつてるけど、それが水上でできるかどうかは体幹にかかっている。トレーニングあんまりしてないんだろ？ まだまだバランスが悪いつてことだ」

確かに、タキオンのトレーニングは常に『走る』というのが前提だった気がする。

筋力トレーニングはそこまでしなかったし、結局坂路とか走りこみとかばかりだ。

データを取るためにそういうのが多かったということなんだけど。今思うとね。

「……………！ ………………！」

何やら隣にいるデジタルがビクビクしているが、これは大丈夫なんだろうか。

「ああ、大丈夫大丈夫。多分タキオンが悔しそうに戻ってきてるのを見て尊み大明神になつてただけだから」

て」

タキオンも面白そうにデジタルの走りを観察する。

あの小さな体から想像できない程の力強さと切れ味抜群の末脚。

思わずええ……と声漏れてしまうぐらい衝撃的だ。いやあ、見ていて楽しいな。

「ふうー！ 落ち着きました」

「いい走りだったわ、デジタル」

「ええ！ 力強かったです！ 私も負けていられませんね！ 行つてきます！」

「フクキタル、次は私よ」

「いいじゃないですか。この前併走にいつぱい付き合っただんですから」

「はあ……はあ……！ ライバル同士の熱い絆……ッ!? と、尊みが弾けッ……」

何故か走り終えて時間が経つてから息切れしてよろめいている。

なんともまあ個性的なウマ娘だなあ。

「誰もがG1レースの勝者たちだ。いいデータがとれそうだね……トレーナー君、しばらくお世話になろうじゃないか」

ゴザを走っていくサイレンススズカを見ながら、タキオンは妖しく笑うのだった。

後に1度もゴザを完走できずにむくれるタキオンの姿が散見されたとかされないとか。

Story 21: 夏合宿 B

今日も今日とて研究三昧だ。

タキオンは午後には室内で研究、次の日の午前に研究成果を確認という日々を送っている。

俺は毎回薬を飲まされて砂浜や近くの山を走らされていて、周りからは同情的なまなざしを毎度受け止める日々だ。

走るのはキツイし脚は発光しっぱなし。肉体的にも精神的にも疲弊している。

しかし、これを使い越えた先にタキオンの走りがあると思えば、不思議と頑張れるのだ。

俺も少しはちゃんとしたトレーナーになれているのかなと内心想ったりしちやつていたり。

まあ先輩にはまだまだ負けるが。

あの絆の強さ、ウマ娘を信じる心は素晴らしいものがある。

ちよっと発想がおかしな部分はあるけど、レースでの作戦立案でプラスに働くからなあ。

そんなこんなで8月だ。夏合宿が始まってから1月が経つ。

先輩と合同トレーニングをしながら研究を進めているものの、あまり進展がない。タキオン的にはかなり順調だと話しているが、あと1歩。何か足りないと話していた。

今は2人で何が足りないのかを考えながら研究とトレーニングを続けている。ううん、どうしたらいいんだろうか。

「むつかしい顔をしていますね。大丈夫ですか？」

ずっと俺の顔を覗き込んできたのは先輩のチームメンバー、マチカネフクキタル。そういえば彼女は相談室をやっていると聞いたことがある。

自分だけではわからないし、少し相談してみることにした。

とりあえずぼんやりとタキオンが速く走るためのあと1歩が足りなくて悩んでいると話す。

フクキタルはふむふむと頷くと、どこからともなく木の棒を何本か取り出して差し出してきた。

「1本引いてください！」

なんだこれと疑問に思ったが、言われた通り棒を1つ引く。

引いたものの先端には『耳』と書いてある。え、耳？

「なるほど、耳ですね。ならば話は簡単です！ タキオンさくん！」

フクキタルが突然タキオンに声をかける。

ゴザの上から落ちて全身を濡らしていたタキオンが不満そうにこちらへ歩いてくる。

「なんだいマチカネフクキタル君」

「前に合った時から、トレーナーさんとお話しましたか？」

「ああ、したさ。それはもう色々だね」

タキオンが意味深に笑みを浮かべて俺を見る。

ほほう！ とフクキタルは目を光らせてニコニコ笑う。

「では隠し事はないのですね！」

「隠し事かい？」

「はい！ 前にもお話したじゃないですか。話すべきことはきちんと話したほうが吉で

すよ〜って」

そういうえばそうだね、と腕を組んで頷く。

そしてふむ、と俯いて何やら考え出した。

どうやらまだ言っていないことがあるらしいな。

「何を悩んでいるかはわかりませんが、1人では解決できないのであれば助けてもら

うのが吉です！ 私たちはそうやって頑張ってきましたから！」

「助けてもらおうね……ならフクキタル君のデータが取りたいんだ。これをひとつ飲んでもらってもいいかい？」

「うぎつ！ さ、さすがにそれはちよつと……」

よくわからないものを飲み食いすると怒られちゃいますし。そういつて困った表情で頬をかいた。

「それはそれとしてですよ！ 悩んでいると気持ちが悪く落ち込んで、きちんと走れませんからね！ 私は運命の人と一緒に走れるなら大丈夫と思っっていますので、いつでも大吉です！」

「ふうん？ 運命の人ね」

「はい！ トレーナーさんを信じて走れば、なんだつてできるんですよ！」
嬉しそうにニコニコ笑いながら体を揺らすフクキタル。

羨ましいほどの信頼関係だ。強いわけだよ、先輩のチーム。

でも運命の人ってどういうことですか、先輩。

「信じる、ね」

タキオンは顎に手を当てて少し考えるそぶりを見せる。

と、少しだけ体がぶるりと震えていた。さつき海水に落ちていたから少し寒いんだろ
う。

近くに置いていたタオルで頭を拭いて肩にかける。

「おや、助かるよ。でも先に何か言ってくれてもいいんじゃないかい？ 急に頭を揺らされては今考えていた内容があちらこちらに走って行ってしまおうよ」

悪いな、と謝ると、適當すぎたのかむくれてしまった。

尻尾でビシビシと虫を落とすかのごとく腕をしばかれる。そこそこ痛い。

「ふふくん。タキオンさんもトレーナーさんも、たくさん話をしましょうね！ そうすれば、きつと見えてくるはずですよ！」

にぱつと笑ってチームの方へと去っていった。

なんとというか、ちよつと一緒にいるだけで雰囲気明るくなるなあ。

幸運を分け与えてもらえるというかなんというか。

「……………」

俺が感心している間、タキオンは何かを考えながら自分の脚を見ていた。

そして次の日。

「トレーナー君！ 速く来たまええ！」

早朝に開口一番そう言われて叩き起こされた。

ウマ娘パワーでぐいぐい引つ張つてくるものだからベッドから吹っ飛び壁に何度もぶつかるなどして一時騒然。

各所に謝罪した上でタキオンと共に砂浜へと来たわけだ。

興奮しているがどうしたんだろうか。

「今までの研究が正しければ、そして新たに疑問としてでた本体があれならば」

ぶつぶつと何かを呟きながら、ゆっくりとウォームアップして体を温める。

そして十分に準備運動ができると、俺にストップウォッチを渡してきた。

「今から砂浜を走るよ。菊花賞をイメージして3,000mといきたいところだが、砂浜では負荷が違う。1,500mのダッシュとするよ」

何を思ったかはわからないが、高強度となる砂浜ダッシュを行うらしい。

かなり心配ではあるが、タキオンがやると言っただ。信じよう。

わかった。そう言うと、いつもとは違う、少しだけ満足そうな笑みを見せて歩いていく。

おおよそ1,500mほどの距離をとって、タキオンに合図をする。

ストップウォッチのスイッチを押したと同時に、タキオンは走り出した。

砂浜とは思えないスピードでこちらへと向かってくる。流星はウマ娘だ。

でも、これは……速すぎやしないか。大丈夫か。

半分を過ぎたところで、流星に辛いのか表情が苦しそうだ。

しかし、タキオンは走りを止めることなく同じスピードで走ってくる。

——がんばれ！　がんばれ、タキオンッ！

思わず声が出る。別に模擬レースでも、併走でもなんでもない。たった1人で走っているだけなのに。

でも、だって。自分の担当ウマ娘が頑張っているならば。

応援するのがトレーナーだろう！

がんばれ！　もう少しだ！

ストップウオッチを強く握りしめて声をかけていくと、タキオンは少しだけ笑みを浮かべてさらにスピードアップする。

最後の200m。タキオンは急にグッと顔をしかめた。脚が痛むのか、苦しいだけか。

タキオンッ!!!

思わず声を上げて近寄ろうとするが、彼女はそんな苦しそうな表情で大きく首を横に振る。

「う、あああーっ！」

大きく声を張り上げて。

必死に腕と足を動かして。

最初から最後まで、一切スピードを落とさずに1,500mを走り切ったのだった。



「つまり、走れるということだよ」

海の浅いところをゆつくり歩いて脚をアイシングしながら、タキオンは話してくれた。

「確かに私の脚は脆い。それは事実だ。しかしだね、トレーナー君。脆いながらも、きつちりと鍛え上げられていたわけだよ」

先輩が教えてくれるトレーニングは、基本的に走りを速くするというよりケガをしにくい体を作るということが最優先になっている。

ぱかプチを腰につけて走るのも正しい姿勢をとってケガ防止にするためのものだし、ゴザ走りも負担をかけずに体幹を鍛えるものだ。

とにかく体を丈夫にしていくトレーニングをやっていく。そうすれば、後は自分の好きなように走れるから。先輩はそう言っていた。

そして、1年ちよつと継続してやってきたタキオンにもその効果は出ていたらしい。

「トレーナー君と月桂杯の話をした後、改めて確認してみたら驚いてしまったよ。思った以上に体が丈夫になっていったんだ」

無茶をしなければ大丈夫だろう水準になっているよ。

足元の海水をちやぶちやぶ鳴らしながら歩いていく。

「でも、自分の脚の脆さはよく知っていた。だから過信はせずに細かく検査していたんだ」

「走っても問題ないと結果は出た。しかしあと一歩、何かが足りない。そう君に話していたね」

その足りない何か。それが昨日わかったよ。

タキオンは俺を見て、穏やかに笑った。

「昨日マチカネフクキタル君に『信じて走る』と聞いてようやくわかったのさ」

「感情だよ」

感情？

首を傾げると、うん、と頷く。

「実はね。ホープフルステークスの時、トレーナー君に応援された最終直線。想定よりも速く走れたんだ。そして弥生賞でも。その時気づいたよ、この体は感情によって出力が変わるのだと」

単純なものだね。そう言って胸に手を当てる。

「応援されるとよりよい結果がでることは知っていたよ。そんな論文も出ているからね。自分もそれに該当するとは思っていなかったが」

「ともあれ、感情や気持ちで出力が変わる。それが問題だったわけだ」

少しだけ困ったように眉尻を下げ、ぺたつと耳を伏せる。

「つまりね、トレーナー君。怖かったんだ、私は」

脚が壊れてしまうことが。

そう言って立ち止まり、自分の脚を眺めた。

ザザーンと波が当たり、そして引いていく。

「AプランBプランと2つのプランを作っておきながら、やはり自分の脚で実現したかったんだよ。でも、Gレースという大きな舞台で走ったとき、勝手にブレーキがかかったんだ。これ以上やると脚が、なんて思ってしまったんだろうね」

海水を蹴るようにして再び歩き出す。

ぱしゃぱしゃと跳ね、濡れていない砂に沁み込んでいく。

「日本ダービーは決定的だった。無理だと悟ったよ。耐えられないと、本気で思った」

「しかし、理論上は大丈夫なんだ。問題なのは、ダメだと思ってしまう私の心なわけだからね」

「研究までして最高速度のその先を目指しているのに、怖くてスピードを出せないなんて。カッコ悪いことこの上ないよ」

やれやれと首を振って俯く。

しかし、その顔は沈んではない。

「ただ、解決方法はあった。恐怖によつて走りにマイナスの影響が出るわけだが、応援されるとプラスの影響が出る。これについては自分の体でわかつていた」

「なら話は早い。ダメだというときに感情をマイナスからプラスに変えればいいんだ」
タキオンは手を下から上にかけて説明してくれる。

確かに言いたいことはわかるが……。

「それで色々考えてみたし、トレーニングでも実践してみた。結局効果は薄かったが」
「そんなところで昨日、マチカネフクキタルから言われたわけだよ」

『信じる』とね」

そう言つて俺を見てきた。

ひどく穏やかな表情で、それでいて視線がぶつかると少しだけ目が泳いでいる。

「私がやると言ったら、君はわかったと必ず言うだろう。心配なのに、結局私のことを信用してやらせてくれる」

「そこに賭けてみたのさ。君が私を信じてくれること、それが私にとってプラスの効果

を及ぼすことにね」

君の応援がきつかけで感情の作用を知ったわけだし。

タキオンはそう話しながら海からあがって俺に近寄る。

「結果は成功だ。ダービーと同じで走り切れないと思つたが……現金なものだよ。君の声が聞こえたら、行かなくてはと思えた。そうしたら、走ることができた」

困つたね、まったく。

そう言つてくすりと笑い、尻尾を揺らした。

「ウマ娘とヒトの絆とはよく聞く話ではあるが、まさか私にも適用されるとは思わなかつたよ」

「誇りたまえ、トレーナー君。君は私のトレーナーさ」

モルモットでもあるけどね。

嬉しそうに笑うタキオンの頭をくしゃつと撫で、これからが始まりだなと話す。

そうだね、と答える彼女と一緒に、ぽつぽつ話をしながら砂浜を散歩するのだつた。

Story 22 : 扱

実りある夏合宿を終えて、本格的に菊花賞へ向けて動き始めた9月。

脚は問題ないものの、元々の脆さがあるから3,000mを走り切るまで、つまり実際にレースが終わるまでは今まで通りのスタンスをとることになった。

いけるからといって無理していい体じゃないからな。俺も心配だったから、体を丈夫にするトレーニングを続けてしっかりと力をつけることに賛成だ。

今日はどのトレーニングをしようかと、前日までのメニューと並べて考えていたらトレーナー室の扉が開いた。

ノックされていないからタキオンが入ってきたのはわかるんだが……何故か困った顔をしている。

「やあトレーナー君。少し気になることがあるんだ」

机に鞆を置いて、ごそごそと何かを取り出す。

中から出てきたのは……お菓子？

「さっきクラスメイトからもらってね。がんばろう、無理しないで、とね」

どういふことかな、と手に持つお菓子を眺める。

言われていることは事情を知っていればわかるんだが、脚については公表していません。

タキオンが誰かに相談したとか？

「私にそんな友人がいるとでも？」

自信をもって答える事じゃないよ！

タキオンはつまらなそうにお菓子を机に置いて、頬杖をつきながら考えこむ。

一体何が原因なんだろうかと思っていたら、扉がノックされた。

声をかけると扉が開き、ウマ娘が入ってくる。

「失礼、します……」

「おや？ カフェじゃないか。どうしたんだい？」

入ってきたのはカフェだ。

いつも通りの不思議な雰囲気だが、表情は少しだけ心配そうにしている。

カフェもそんな感じなのか。

「タキオンさん……体は大丈夫なんですか……」

「ああ、問題ないよ。心配してくれるのはありがたいんだが、何故知られているのかが疑問だ。カフェはどこから知り得たんだ？ 私が不調だとか、そんな情報を」

どこにも言った覚えはないと思うけど、とタキオンは話すが、カフェは不思議そう

に首を傾げた。

そして俺の方を見てくる。

……え、俺え？

「ふうん？ どういうことだいトレーナー君。外部にぼろぼろと情報を漏らすようなヒトじゃないと思っていたんだけどねえ……？」

いや、誰にも言っていないって！

タキオンがじとつとした目で詰め寄ってくるから慌てて否定すると、まあ知っているけどねと威圧感を霧散させた。

「しかしそうなると誰だ？ 盗み聞きでもされたかな」

「いえ……トレーナーさんが、大泣きしているのを見て……」

えっ。タキオンが俺を見る。

思わず顔をそらしてしまった。

「職員室で、他のトレーナーのみなさんに慰められました……」

「なるほどね……君い、ここ以外でもそんなだったのかい」

いやあ、その……情けない限りだけだよ。

タキオンからの脚の告白を受けて、流星に受け止めきれずに数日はポロ泣きしていた。

職員室やらトイレやら、不意に涙が出るぐらいには心がやられていたんだ。がんばるって決めたのに。

しかしそこを見られていたのか……でも、タキオンの脚については何も言っただけだ。

「言っただけで済んだ……その後色々な人に、体や脚をよくする方法を聞いていたので……」

「……ああ、そうか。その話を聞いた他のウマ娘たちが噂を広めたんだね。それが尾ひれがついて、私の体が弱いとか、脚が悪いとか。そんな話になっていると」

「はい……実験も、弱い体を治すためと……」

なんだろう。

正解なんだけどそこに行きつくまでの流れがおかしくてなんとも言えない。

いや正解なんだよ。薬のことも俺の泣いてたことも。でもさあ、ほら。

もつとこう、あるじゃん！

「いやはや、困ったね。確かに真実ではあるが、別に誰かから気をつかわれるためにやっているわけじゃない。本当の目的は別にあつて、体を丈夫にするのはその過程でしかないんだが」

「大丈夫なら、いいです……菊花賞、私も出ますので……」

それでは、とカフェは話して去っていった。

衝撃的な話だったな。俺が泣かれてるのをウマ娘に見られてたというのもかなりの衝撃なんだけど。

うーん……まあ、タキオンにとってはマイナスにはならなそうなことだし、別にいいか。

「よくないよ。これから何度も話しかけられて、研究にあてる時間が無くなっていくかもしれないだろう？ 勝手に気づかってくれるのはいい。だけどね、ジャマだけはされたくない」

遺憾の意を表明して腕を組むタキオン。

彼女らしいといえづらいんだが、交友関係がそこそこ絶望的な娘だ。

学生なんだし、一応学生らしい生活も送ってほしくはあるので、不満だろうが甘んじてこの状況を受け止めてもらおうとしよう。

「えー!?! 君は誰の味方なんだ! 私困っているんだから助けてくれたまえよ!」

ぶーすか怒っているタキオンに受け入れたまえよと言って、トレーニングメニユーの再確認に取り掛かる。

むくれた彼女に薬入りの試験管をぐいぐい押し付けてくるのを止めていると、カフェが戻ってきた。

「言い忘れた、ことがあります……タキオンさんのインタビュー、明日です」
え、はやくないか？

まだ9月だぞ。菊花賞は10月下旬なのに。

「多くの記者の方が、取材をしたいと押しかけている……そう、聞いています……」
「なるほどね。ダービー後から我々は記者からの取材をすべて断ってきた。そして月桂杯不参加。説明責任を、ということなんだろう」

「たづなさん、困っていました……少しだけ手伝ってあげてください……」

あの敏腕秘書のたづなさんが困っていたということは結構なことだ。
気は乗らないが仕方がない。タキオンもやれやれ面倒だと首を振る。

どうしたものかなと2人で相談しながら次の日の取材について考えるのだった。



当日、取材陣のいる教室まで行くと、扉の前で待機していたたづなさんから説明を受けた。

名目としては菊花賞の有力ウマ娘への合同インタビュということ。

答えづらければ菊花賞前のインタビュで答えると回答していいですということ。つまり、困ったら後回しにしていいたい。タキオンも楽でいいねと頷いていた。そして取材開始。

最初の方は写真を撮られながら日本ダービーの惜敗や菊花賞についての意気込み、夏合宿の手ごたえなどを答えていく。

タキオンが適当に答えたものは俺が横から補足する。流石に「合宿中のトレーニングはどういったものですか」の質問に「研究していたよ」は誰もが困ってしまうだろうか。

順調に質問を消化していったところで、今回一番質問が飛んできた。

「シンボリルドルフさんが開催を宣言した月桂杯についてお聞きします。何故参加されなかったのでしょうか？」

きたな。俺もタキオンもそう思った。

結局のところ、今回一番聞きたいのはこれなわけだ。

まあ確かにダービー後は面会謝絶みたいな感じで何もうけていなかったからなあ。タキオンをチラッと見ると、言いたまえと頷かれる。

——脚の疲労を鑑みて不参加を表明しました。我々としても非常に残念だと思いま

す。

月並みだがそう答える。間違っているわけではないし。

脚の疲労——脆すぎて耐えられるか心配だしそれどころではない状況——を鑑みて不参加。

我々としても——有力なウマ娘たちのデータを取ることができなくて——非常に残念。

そういうことだ。

「他にも様々なウマ娘たちが参加を表明していました。クラシックを代表するウマ娘としての責任を問う声も聞こえています。どうお考えですか？」

「ふうん？ 責任かい？」

タキオンがあざ笑うかのように笑みを浮かべて、質問してきた記者を見る。

あ、まずい。思わずたづなさんを見ると、たづなさんも困った顔をして笑っていた。

「では君に1つ聞こうじゃないか。責任を問う声、これはどこの誰から聞いたことなんだい？」

「守秘義務があるのでお答えできません」

「ふうん？ 秘密にしなければならぬ、公開もできない人物、あるいはコミユニティからの発言だと考えていいんだね？ それならば答えは簡単さ」

すつと記者を指さし、好戦的な笑みを浮かべてこう発言した。

「きちんとしたデータもないのに適当な質問してこないことだよ。君の記者としての責任を問う声ということだね。アツハツハ！」

とんでもない煽りをして笑うタキオン。

いやあ、流石にやりすぎじゃないか……記者の人も顔が赤くなっているよ。

「……次の質問です」

あ、すごい我慢してる！ たづなさんと一緒にホツと息を吐く。

1枚上手だぞ、あの記者の方。

「アグネスタキオンさんは脚に問題があると聞いていますが本当ですか？ それのために実験をしてドーピングをしているとの話も聞きますが、いかがでしょうか」

「いかがなものもないだろう。私がレースに出てドーピングをしたという結果があるというのかい？ ならそれを提示してくれたまえ、ほら」

先ほどまでの嘲笑を消し、怒りの表情を見せて記者を見た。

タキオンはドーピングが嫌いだ。薬を使用して体の補強をしているから、非常に神経質に気になっている。

故に失礼な発言をされて怒っているわけだが……記者のほうは怒らせるために質問をしたようだ。ニヤリと笑っているし。

これが記者のテクニク……！ 思わず感心してしまう。

「結果は出ていませんが、デビュー前から薬の研究と実験をされています。疑われる行為をされているのは問題だと思いますし、レース関係者からもそういった行為について懸念されています。これからも続けていくおつもりですか？」

「もちろん続けるとも。その研究によってレースでさらに速く走れるわけだからね」

記者はかかった！ と笑みを浮かべ、体を前のめりにしてさらに質問してくる。

「疑われる行為でも続けていくおつもりのようなですね。トウインクル・シリーズで走るウマ娘としてそういった行為は他人の迷惑になります。何か起きた時にどう責任をとるおつもりですか？」

うーん、凄い圧だ。

かなり悪意のある言い方をしているが、実際のところ外部から見たタキオンはそういう評価をされかねないということでもある。

間違ったことを言われているわけじゃないんだが……俺はタキオンの味方だからなあ、あまり気分がいいものではない。

ただ、さつきから何故俺が楽観的に感心したり凄いなあなんて思っているかという
と。

「おいおいすごい論理の展開をしてくるじゃないか。本当に記者かい？ 言葉や文字で

伝える仕事をしているとは思えないよ」

口でタキオンに勝てる相手なんか、そうそういないからだ。

「そもそも君、最初で言ったじゃないか。ドーピングをした結果があるのかと。それで結果がないのであれば不正はしてないだろう？ 疑わしい行為という前に、そもそもレース前に検査を受けているんだよ。つまり君はトウインクル・シリーズにおけるそういった体制が不十分だから疑ってかかっていると、そういうことだね？ URAやトレセン学園はそういった検査が十分できていないと」

「そういうわけではありません。あなたの行っている実験が疑わしい行為だと……」

「ふうん？ 私はトレナーにこういった研究を行っていると説明しているし、トレナーも学園に確認をとってくれている。これのなにが疑わしいんだ？」

タキオンからの口撃に記者は閉口してしまふ。

実際研究自体はこういうものをやっていると学園は理解しているし、俺も新しい何かをするときは逐一確認している。

つまり、実際のところ何も問題はないのだ。外部評価以外は。

「それにレース関係者から懸念？ 他人の迷惑？ じゃあ聞くが、そもそも私のそういった研究や実験がレース中問題になったという証拠はあるのかい？ 臯月賞やダービーで走ったウマ娘からは一緒に頑張ろうと言ってもらえているし、実際全力を尽くし

て走っている。もし君がそういった証拠をまともに提示できないのであれば、レースで走るウマ娘たちに対しての侮辱でしかないわけだ。ほら、提示してくれたまえ、君のいう関係者とやらの懸念をね」

「……守秘義務があるのでお答えできません」

「いいかい？ 私は先ほどから全て自分の言葉で真実を話している。しかし君は守秘義務がどうだと言って何一つ答えられない。どちらが他人の迷惑なんだい？ 君が所属しているところも大迷惑だろうね。どう責任を取るつもりなんだい？ うん？」

記者が顔を真っ赤にしてぶるぶると震えている！！

ゲームセットだタキオン！ 思わず口に手を当てて止めてしまおう。

——タキオンからかなり失礼なお話の仕方の説明してしまったかもしれないませんが、発言していることは事実で、とにかく全てにおいて許可を得て認めてもらって研究を行っています。関係者の皆様には詳細を知らずに疑問に思う方も多くいらつしやると思います。ドーピングなどといった禁止行為のためではなく、ひとえにタキオンの体質改善のため、レースで走る前提条件を確保するために薬を開発しているんです。ご理解いただけますと幸いです、はい。

一気に話してタキオンの勢いを止め、丁寧に低姿勢で正しくやってますと取材陣に宣言した。隣でむーむー言いながら尻尾で腰をひっぱたいてくるが、ここは我慢だ。

顔が真っ赤の記者の方にはタキオンが失礼しましたとやや苦笑いして頭を下げると、ふん！ と強く息を吐く。

「失礼で不愉快だ。へらへら笑って、トレーナーも覚悟が足りないんじゃないのか」
いやあ、すみませんと頭を下げていたら、急に空気が凍った。

なんだと思つてたづなさんを見たら、口に手を当てて目を見開いている。

隣を見ると、タキオンがとんでもなく冷たい目と表情で記者を見下しているじゃないか！

「君は何もかもわかっていないんだね」

「トレーナー君は私の実験のために人生をささげてくれているんだよ。ほぼ初対面で薬を3本も一気に飲んで、一緒に頑張ろうとね」

「私と、ウマ娘と本気で関わっていないような君に。トレーナー君の覚悟を口にする資格はない」

気分を害した。そう言つてタキオンは教室から出て行つてしまった。
なんともいえない後味を残して、合同インタビューは終了したのであった。

後日『実験三昧!? トレーナーをモルモットにするアグネスタキオン』という低評価

記事と、『2人の絆！ トレーナーの献身とアグネスタキオン』という高評価記事が発表。

SNSではインタビューで俺がタキオンの口をおさえているときの『もごもごタキオン』が大人気となり、またもやタキオンの扱いが変わっていくのだった。

本人はどうしてだい？ と困惑していたけどね。

Story 23 : 菊花賞

温かい目でタキオンが見守られるようになってから時間が経ち、気づけば菊花賞当日となった。

パドックで出走メンバーから一緒に頑張ろうと声をかけられ、居心地が悪そうにしながら控室に戻ってきたところだ。

「まったく、手のひらを返しすぎじゃないか？ 私が実験で教室を燃やしかけたことを忘れていいのか？」

衝撃的な事件について話しながら、ふうと息を吐いて眉尻を下げる。

耳や尻尾もやれやれと力なく揺らして、なんともタキオンらしくない意気消沈した様子だ。

前回の取材が報道された結果、タキオンの評価がほぼほぼ逆転した。

以前は気味の悪い実験を繰り返しては薬を飲ませようとするマッドサイエンティストだったのに対し、今では虚弱体質を治して自分の力で走ろうとする努力家のような扱いだ。

タキオンとしては評価はどうでもいいと思っていたのだが、周りが応援ムードになっ

ていて少し辟易している。

元々コミュニケーションが得意じゃない娘だし、あんまり話しかけられても疲れるんだらう。

「このレースで今後走れるかどうかはつきり決まるんだ。走り終わったらもう大丈夫だと宣言するよ」

そもそも現時点で大丈夫なんだからね。

タキオンは走る前から疲れてしまうよと白衣の袖をぶらぶらしているが、タキオンの口から大丈夫だと聞くだけでなんとも言えない気持ちになる。

俺が感慨深く頷いていると、ふふつとタキオンは笑みを浮かべた。

「それじゃあ行つてくるよ。私が走つてくるのをゴール前で待ちたまえ。いつも通りね」

今までにはない自信を見せながら、レースへと赴くのであった。



『本日は小雨が降っておりますがバ場は良。京都レース場、メインレース。菊花賞が始まります』

ファンファーレが鳴り響き、観客たちはその音色を聞きながらウマ娘たちのゲートインを待つ。

今日の主役は一体誰なのか。英雄になるのは誰か。

ファンたちの夢を背負って、それぞれのゲートへと向かっていく。

タキオンはターフを何度か踏みしめて状態を確認する。

小雨が降ってはいるが、バ場は重くはない。内側もそこまで荒れ放題ではないから、逃げもしやすい状態だろう。

ひとしきり確認を終えてからゲートに入る。

今日は自分の脚を確かめるためのレース。だからといって手は抜かないが。

真剣な面持ちでゲートインを完了し、他のウマ娘たちもゲートインを終えた。

クラシック最終戦が今始まる。

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました』

——ガタンッ

『スタートしました！ 10番マインダイハードいいスタートを切りました！ 他ウマ娘もそろってのスタートとなります！』

10番のウマ娘がスタートダッシュを成功させ、そのままぐんぐん前に出ていく。人気薄ではあるが、ペースを作ってしっかりと逃げるタイプのウマ娘だ。

ツインターボやメジロパーマー、サイレンススズカが台頭して大逃げが注目されているが、ペースメイクしてくる逃げウマ娘の方が厄介だと走るウマ娘たちは思う。

末脚で勝てるはずなのに逃げ切られるほうが、よっぽどくるのだから。

『16番アグネスタキオン！ 先行の位置を取るようす！ 9番タニミズプライズ、6番メークミデイの後ろにつけていきます！』

『本日は4番人気です。どのような走りを見せてくれるのでしょうか』

タキオンは4番人気。脚についての情報が拡散され、長距離は難しいだろうと人気は落ちていく。

4、5番手の位置につけながら、ペースを体内時計とすり合わせて走っている。

『1番人気アマゾントリップは中団、2番人気ホクオウボーダーは最後方です』

『どちらも得意な位置に付けていますね。好レースが期待できますよ』

アマゾントリップは得意の差しの構えだ。しかしいつもより少しだけ前につけていく。

ホクオウボーダーも追込を狙い、後ろで脚を溜めるように走る。

『3番人気のソラマーシャルはアグネスタキオンの横につけています』

『札幌記念で1着。神戸新聞杯ではミナモトライコウに勝利していますからね。かなり期待されているウマ娘ですよ』

ソラマーシャルはこれが初のG1レースだ。

新馬戦からオープン戦、重賞と着実に勝利を重ねている。

しかしこの大舞台、さすがにいつも通りに走れるかは不安だった。

だからこそ、不安要素があつたとしても安定した走りをするタキオンの隣を陣取つただの。

各ウマ娘たちの思惑が飛び交う中、コーナーを回って流れるようにスタンド前へ。

1度目の直線だ。観客からの大歓声を浴びながら駆け抜けていく。

「アマトリー！ 今日勝つちまえよー！」

「ホクオウボーダー！ 今日こそはぶつちぎれー！」

「マンハツタンカフェー！ がんばれー！」

「負けんなよソラマーシャルア！」

「アグネスタキオン！ 無事に帰ってきてー！」

応援の声を聞きながら直線走り、まずは1,000m。

『1,000mの通過タイムは63.0！ スローペースですねえ』

『マインダイハード、うまくペースを作っていますよ。これは前残りになるかもしれないま

せん』

かなりうまくペースを作っているようで、マインダイハードは手ごたえを感じながらコーナーへと入っていく。

遅いペースのため、バ群がきゅつと詰まっている。しかし、誰もが初の長距離レース。これが正しいのかどうか、感覚的にまだまだわかっていない。

(少し遅いね)

タキオンはそう思った。

自分の走っている脚の感覚から、かなりのスローペースなのが見える。

もつと前に行きたがっているし、まだまだスタミナに余裕があるからだ。

しかしこれはタキオンにとってはチャンスでもある。

スローなのであれば前にいる自分たちは有利だ。脚も溜めておけるし、楽に走ることができる。

特に動く必要はない。タキオンは後続の動きをチラッと確認しつつ走っていく。

隣で走るソラマーシャルもそれに倣って走っていく。なんとなく遅いと思いつつながら。

そんな中、後方で走っているマンハッタンカフェはこのペースの遅さに気づいていた。

あきらかに遅い……そう思った彼女は、少しずつ少しずつペースを上げて内側から前

へと進出していく。

スローペースの中レースは進み、残り半分を切ったところで中団以降があわただしくなる。

向こう正面に入り、上り坂が見え始めたからだ。

クラシック級に入ってから初めての長距離で、高低差4mの坂。これをスタートから合わせて2度走る。

ゆっくり上ってゆっくり下りるとというのが基本とされ、というかそうしなければスタミナが持たないし体が耐えられない。

一部のウマ娘を除いてだが。

『スタート地点を通過して、2周目の坂の頂上に向かいます！　ここからが勝負所です！』

『ここから誰が抜け出すか、誰が仕掛けるのかが見所ですね』

メインダイハードが上り坂に入り、スローペースで勝ち取ったスタミナを以って駆け上がる。

後続のタニミズプライズもメインダイハードをマークしつつ坂へ。

その後の集団もそろって坂を駆けあがっていく。

(脚が想定以上に軽い。これは成長したというよりも……)

「……………」
タキオンと彼女の隣で併走しているソラマーシャルは、完璧にペースメイクされていることにほぞを嘯む。

上り坂に差し掛かった時点で、最終直線までは仕掛けるという選択肢がない。ここで動いてしまえば、最終直線で使う脚はなくなってしまうのだから。かといって動かないのもまずい。

これだとメインダイハードが逃げ切る可能性もある。

少し前の、セイウンスカイがレコードタイムを出して逃げ切った菊花賞。あそこまではいかないが、それを彷彿とさせるペースメイクだ。

「……………」
カフェはほんの少し、ほんの少しだけ前に進む。

10番手から9番手、そして今では7番手にまで詰めていた。スパートとはいえない、けれども着実に前に進んでいく。

最内からロスなくレースを運ぶカフェは、自信をもって走り続ける。

「ふう——」
前後であわただしく、しかし動きがないままレースが進む中、タキオンは息を吐く。このレースであまり無理はしたくない。かといって負けるつもりもない。

自分の脚、他のウマ娘たちの脚、そして残りの距離と京都レース場のコースについて少しだけ考える。

そして、ほんの少しだけががんばってみることにした。

「ふっ」

第3コーナーから始まる下り坂。

タキオンはそこでペースを上げたのだ！

『アグネスタキオン仕掛けた！ 下り坂でペースを上げたぞ！』

『ここで加速する算段なのでしょう。しかし脚は持つのでしょうか』

——直滑降と呼ばれる技術。

それは下り坂でスパートをかけて駆け下りるものだ。

有名なのはやはりライスシャワー。天皇賞春で見せた決意の直滑降はすさまじく、一

歩間違えれば大ケガにも繋がる。

それをしてでも勝ちたいという覚悟と強い意志が必要な、言わば心の技術。

それを真似たタキオンは、素直に怖いと思った。

脚に爆弾をくつつけながら坂を駆け下りているのだ。爆発しないように走っても、少し脚を滑らせたなら即起爆する。

なんでこんな無茶をしなければならぬんだらうねと汗をにじませながら、その恐怖

に耐えながら。

加速をつけて一気に先頭へと走っていく。

その覚悟を見た後続の有力ウマ娘たちも負けるわけにはいかないと、最後の直線にかけるべく残り数十mの下り坂からスパートをし始めた。

『アマゾントリップが差を詰めて来るぞ！ ホクオウボーダーは内をすくう作戦に入るのか！』

アマゾントリップも少しずつ前に出る。

ホクオウボーダーは第4コーナー途中から一気に内へと斬りこんでいき、バ群から抜け出す作戦でいくようだ。

以前マチカネフクキタルが見せた、バ群を切り裂く豪脚。アレに似たスローペースだからこそ選択できる作戦だろう。

『第4コーナーのカーブに入ってきた！ 最後の直線！ 後ろのウマ娘たちは間に合うのか!?!』

『先頭は依然としてマインダイハードが逃げる逃げる！ タニミズプライズ2番手！ 後方からアグネスタキオンが突っ込んできている！』

マインダイハードが溜めに溜めていた末脚で必死に逃げる。

スローペースを作り出したこともあってかなりの好スピード。後ろとの差があまり

縮まらない。

そこで当然のように抜け出していくのがアグネスタキオン。

有力ウマ娘たちも、直線に入って一気に駆け抜けていく。

『アグネスタキオン猛追！ 後方からようやくソラマーシャル！ 外からアマゾントリップ！ 顔を振りながら差を詰めてきた！』

タキオンと共に走っていたソラマーシャルが追い付こうと一気に末脚を爆発させる。

脚をきっちり溜めていたかきもあり、凄まじい勢いで差が詰まる。

アマゾントリップも外から追い込んでいくが、前も脚を使っていない。少しずつ差は詰まるがまだまだ後方だ。

『マインダイハード逃げ切ってしまうぞ！ 外からソラマーシャルっ！ 中央からマンハッタンカフェ！ 真ん中を割ったマンハッタンカフェ！』

「来たか……！」

「勝ちます……！」

タキオンがマインダイハードとの差をあと一バ身ほどに詰めていると、内で息を潜めていたカフェが中央から突っこんできた。

残り200mもない中、タキオンとカフェはぐんぐん前に出ていきマインダイハードとついに並ぶ。

残り100m。マインダイハードはもうこれ以上伸びない。後はタキオンとカフェの戦いだった。

タキオンは初めて負けたくない。そんな気持ちを抱いた。そして思いきりターフを踏みこんだ瞬間。

「……………」

襲い掛かってくるのは恐怖だ。

坂で感情を押し込めて必死に走っていたが、ついに限界だった。

スタミナもギリギリ、脚の消耗だつてすさまじい。これ以上無理したら……そんな思いで頭がいっぱいになる。

その一瞬の際にカフェは前に出る。黒いコートの勝負服をはためかせ、半バ身前に出た。

もうこれ以上は。タキオンはぐつと歯を噛みしめる。なんとか走り切るんだ！ そうすれば、きつと……！

負の感情に耐えながら脚を出そうとした瞬間、声が聞こえてきた。

——タキオオ——ンツ！ がんばれエ——！！

トレーナーの声だった。

その声を聞いた途端に、脚がすうつと軽くなる。

やれやれ、まったく。遅いよ、トレーナー君。

タキオンは内心苦笑しながら最後の100mを、スピードを落とすことなく走り切ったのだった。

『マンハッタンカフェ！ 左手を突き上げました！ なんとマンハッタンカフェです！』

カフェがG1レースの勝利を喜び、笑みを浮かべて手をつき出す中、タキオンもまた笑みを浮かべていた。

「アツハツハツハ！」

訂正。高笑いしていた。

どうした急にとカフェも驚いてタキオンを見た。

ついにおかしくなってしまうかと思っていたら、嬉しそうに自分の脚を眺めている。

「どうかしましたか……？ 脚が、なにか……？」

「うん？ ああ、カフェか」

気づかなかったよと顎に手を当て、楽しそうに話す。

カフェを見て、そして自分の脚をまた眺めた。

「なにもなかったよ。だから嬉しいんだ」

タキオンは上機嫌のまま、いつもは見せない穏やかな笑みでそう答えた。

I n t e r m i s s i o n : 契 約

菊花賞で走り終わった時は嬉しかったよ。

本当にね。思わず笑いだしてしまったからカフェに心配されたぐらいさ。

でもね、トレーナー君。

今までダメかもしれないと思っていたことが、当たり前のようにできるようになる。それがどれだけ素晴らしいことかわかるだろう？

今では天皇賞春を目標にできるぐらいになっているけど、それまではガラスどころじゃない。細い木の枝みたいなものさ。

それを巨木に変えてしまったんだからね。

なんというか……あのチームのトレーナーはヘンだと思うよ。

新人のときにあのトレーニングを考え出したんだからね。その恩恵にあずかっている身で言うことではないのだろうか。

先輩をヘンって言うなって？

いやいやトレーナー君、よく考えたまえ。

初担当のウマ娘でジュニア級からシニア級までG I レースでほぼ全勝だよ？

チーム結成後は全距離でGI勝利に加えてURAFファイナルズもほぼ独占。

それをサブトレーナーすら経験していない新人がなし得たんだ。どんな思考をして
いるのか見てみたいところだよ。

それに彼が考えたトレーニング。

見た目は奇天烈なものばかりだが、その全てがケガしにくいような体を作るための
ものだ。

脚にばかり負担がかからないように体幹を鍛える。

それから体幹で走るといふ走法を身につける。

そうすれば、劇的に脚への負担が少なくなるということさ。

何を学べばこんな素晴らしいトレーニングを思いつくのか聞いてみたいぐらいだよ。

見た目は奇天烈だけどね！

技術的なものはどんだん外に出してくれているからとても助かっているよ。

他のウマ娘たちのケガも少なくなるだろう。

銅像ができるんじゃないか？ ウマ娘の発展に尽くしたとってね。

ああでも、トレーニングの見た目が悪いし別の方法で体幹は鍛えられるからね。

トレーニング自体のマネするウマ娘やトレーナーは少ないだろう。

さて、少ししやべりすぎたかな。

トレーナー君、紅茶をもう一杯いれてくれたまえ。飲みすぎだのなんだのという言葉は知らないからね。

うんうん、それでいいんだ。

そういえば君に聞きたいことがあったんだ。

シニア級のことなんだが……ああ、今ではなくてね。

クラシック級から上がったばかりの時だよ。

正直にいうと、何事もなくシニア級に上がったことが予想外でね。

だってそうだろう？

誰だって出ると思うじゃないか、有マ記念に。

実際、人気投票では上位だったんだろう？

菊花賞でレースに出ても大丈夫だとわかったのだから、挑戦するだろうと思っていた

んだが。

なにせ2ヶ月後だ。しっかりと調整だってできたはずだからね。

で？ どうなんだい？

有マ記念に出なかつたことについて、君は中々話したがらなかつたじゃないか。

今だってそうさ。苦虫を噛み潰したような顔をして。

ふうん？ 言いたくないって？

今こうやって振り返っているのは、今度の取材のためだと君が言ったんじゃないか。

それなら君には説明する義務があるはずだよ。権利ではなく、義務さ。

ほら、観念してさっさと言いたまえ。

それとも何か、やましいことでもあるのかい？

……なんだ、それ。

心配だったからって。

つまりあれかい？ 君は私のことを信用してなかったってことかい？

走れるといったのに、大丈夫だと説明したのに。

え？

しきりに脚をさすってたから心配したって？

えー!?

あれで心配していたっていいのかい!?

なんだそれ!

はあぁー……トレーナー君。

あれは寒かったのと、走れるようになって感慨深くて、つい触っていたただけだよ。

だから、別に脚の調子がよくないとか、まだ理論的に問題があるとか、そんなことは全くないよ。

あつ、だから君は湯治に連れていったりしたのか!

急に温泉に行くうだなんていうものだから、どうしたのかと思つていたんだ。しかも学園を休んで泊もするし。

点と点が結ばれた気分だよ。

なるほどね。トレーニングをやるうとして止められたのもそういうことか。ずっと疑問に思つていたんだ。

大阪杯に出るまで、なんでこんなに気をつかわれているんだらうつて。

やはり脚のことは言わないほうが良かったかなと思つたぐらいさ。

えー、カフェにまで言われていたのかい?

気をつかいすぎだつて。

そりやあそうだよ、だつて私が問題ないと言つているんだからね。

過保護にしすぎて走らせないなんて、私以外のウマ娘だつたら最悪の場合契約解消だよ。

ああ、待つてくれたまえ。私以外と言つただらう?

なにも泣くことはないじゃないか。

こらこら袖で目をこすつてはいけないよ。ほら、落ち着いて。

大丈夫だよ、私が君以外のトレーナーと一緒になるわけがない。断言する。

なんでもっと泣くんだい君は！

落ち着いたかい？

まったく、君は泣き出すともものすごい引きずるんだから困ったものだよ。

ダービー後も泣き散らかしてみんなに心配されたんだろう？

泣いてばかりいるなあ、君は。

……あー、うん。

そんなこともあつたね。

でもそれは思い出さなくてもいいだろう？

あの時は私にも君にも落ち度があつたし、君の同期のトレーナーだつて嫌味じゃなく君のことを心配していたわけだ。

まあ言つていいことと悪いことがあるだろうから、ちよつと失礼だつたかもしれないけど。

確かに君にとっては衝撃だつたかもしれないけどね、うん。

私としてはなんでそうなつたんだらうと思つていたし、今もそう思っているよ。

君はなんというかこう、まっすぐすぎるくらいがあるからね。ついでなんでも正面から受け取ろうとしてしまうんだろうが。

え？ 私も焦っていたって？

……そんなことなかったと思うけどね。

だってそうじゃないか。そんなことする理由はないだろう？

今の環境がベストだって思っていたし、今でもそうなんだから。

だから焦る必要なんてなかったよ。ただ、実験しにくくなるから少しだけ困るなあとは思っていたけど。

カフエから聞いたって？

デジタル君からも？

おいおいトレーナーくうん、君は誰の言葉を信じるといふんだい？ うん？

君は、私の、トレーナーだ！

私を信じればいい。そうだろう！

うんうん、そうだよ。

感情が動かされることなんてなかったさ。

契約を見直すなんて話になってもね。

Story 24 : 心配

菊花賞で2着と健闘し、長距離レースでもしつかりと走ることができると証明したタキオン。

上機嫌でレースを終えた次の週。

同室のアグネスデジタルが天皇賞秋に出走するというところで、2人で見に行くことに。

テイエムオペラオーの天下と言われている今のシニア級。メイショウドトウが宝塚記念で勝利したものの、その威光は未だ健在。

それを覆すために新しい風を期待していたトウインクル・シリーズファンたちは、クラシック級で活躍していたミナモトライコウの参戦に沸き立った。

しかし彼女は参加できなかった。理由は簡単で、実績がまだ少なかったから。ファンたちは非常に残念がり、そのやりきれない感情をアグネスデジタルに向けてしまった。

デジタルは芝の実績があまりなく、クラシック級のマイルチャンピオンシップで勝利したというぐらい。

嬉しそうにしながら顎に手を当てて、ニヤリと妖しく笑っていた。

後にデジタルからタキオンさんに迫られすぎて顔がいいのはダメでしゅ止めてくださいとよくわからない要請がくるのを俺はまだ知らない。

そんなこんなで大満足のレースが行われてから時間が過ぎ、もう11月だ。

次の出走レースはどうするかという話になったわけだが。

俺はかなり慎重になっていた。出走もトレーニングもだ。

理由はタキオンにある。

「ふふん、ふふん、ふふふふふん」

機嫌よく鼻歌を歌いながら、海外から届いた小包を開けている。

そして、ふとした時に自分の脚を見て軽く擦った。

このタキオンの脚をさすっているのが非常に気になってるのだ。

今までこんなふうの上機嫌なこともなかったが、それ以上に脚を何度も見たり触ったりするのが本当に気になる。

かといって、ちよつと聞いてみたらこうだ。

「なにもないよ。だから触っているのさ」

わからない……!!

また思わせぶりに話しているだけなのかそうでないのか、本当にわからない。

今まですつと脚のことを秘密にしていたり、薬の素材について教えてくれなかったりと、なんだかんだ彼女から得られる情報というのは少ない。

もし走れるけどまだ脚に不安がとなると……。

それが気になって、ここのとこ凄く寝不足だ。

かといって対処法というか、解決法がわからない。聞いても、なにもない、なんでもないというだけだし。

あまりにも悩みすぎてタキオンから心配されるほどだ。まあ、薬の実験に影響が出るから健康でいてくれというぐらいだけだ。

そして悩みに悩んだ結果。

タキオンを連れ出すことにしたのだ。

「どこへ行くんだい？ 急に休みなんかとって」

不思議そうに車に乗るタキオンに、温泉だよと伝えて発進させる。

「温泉？ ああ、だから着替えを持ってきてだなんていつてきたんだね」

しかも私服というから、不思議だったよ。

納得がいったらしく、うんと頷く。

「しかしどうして急に。確かに長距離レースの後にはしばらく休んだほうがいいだろうけど。いいのかい？」

いいんだよ、と首を傾げるタキオンに伝える。

今回のことについて先輩に相談したところ、おすすめの温泉をいくつか紹介してもらった。

異様に詳しくあったのが不思議だったがそれはおいておく。

とりあえず泊ぐらいしてゆっくり休んでもらおうということだ。

「ふうん？ まあ、温泉による回復効果について調べていたこともある。やる意味は薄くなってしまったが、少し実験してみようじゃないか」

湯につかるまえにいくつか飲んでもらおうかなと携帯を取り出して薬のチェックをし始める。

……温泉に入る前からかなり疲れそうなものだが、これもタキオンのためだ。甘んじて受けることとしよう。

これで脚に不安がなくなると信じる！



が、ダメ……！

「足湯というのもいいものだね。熱いけど」

温泉地にある足湯を堪能しながら、タキオンは自分の脚を擦っている。

ううん、まあ今は足湯だからな。脚だけだから擦っているんだ。そういうことにしよう。

「知っているかい？ 脚は第2の心臓といってね、全身の血液を送り出すために……」

タキオンの話を聞きながら、次に行く予定の温泉について考える。

おすすめされた温泉は膝痛なんかに効くらしい。これならいけるだろう。

「いやあ熱いなあ、温泉は。待たせたようだね」

少し顔を赤らめたタキオンが出てきた。

浴衣であまり見えないが、しっかり温まったようではかほかしている。

よし、かなりいい感じだな。

と、思っていたのだが。

「ふうん。やはり興味を持てるような番組はやっていないな。いや、地方のレースなら」

脚を擦りながらテレビのチャンネルを変えてる……ッ！
くつ、さすがに今日だけではダメか。

しかし明日と明後日、最悪3日後の朝湯もある。

湯治にしてはかなり短い期間だが、先輩もお墨付きの回復コース。信じてやりきるぞ

！

そして3日後の車内。トレセン学園に帰っている最中。

「高いな……しかしこの茶葉は、うーん」

紅茶を注文しようと携帯を弄りながら、脚を軽く擦っていた。

……ダメじゃないか！

どうすればいいんだ……思わず肩を落として学園内を歩く。

湯治はダメ、マッサージもどうかと言ったら触られたくないとダメ。

俺からうてる手はもう少ない。

今はトレーニングも控えめにして、筋力が落ちない程度で調整してごまかしている。

年末の有マ記念にも出走権があるにはあるが、俺がGOサインを出せないで出走登

録をしていない。

タキオンは出走についてあまり気にしていない様子だが、このままではよくないよなあ。

ため息を吐いて、手元のトレーニングメニューを確認する。

「あの……」

後ろから声をかけられ、思わずビクツとなってしまう。

慌てて振り向くと、いつものようにぼやんとした雰囲気のカフェが立っていた。

カフェが俺に話しかけてくるのは珍しいことじゃないが、なんとなく心配そうな表情だ。

「大丈夫ですか……？ またタキオンさんが、なにかしましたか……」

いや、そういうわけじゃないんだけど。そう言つて頭をかく。

どうやらしよげているのを見て気にしてくれたようだ。

そうですか……と頷いたカフェは、少しだけ考えるそぶりを見せる。

「……有マ記念、出ないんですか」

出走レースについて聞かれてしまった。

カフェは菊花賞での勝利が評価され、有マ記念への出走権を得ている。

今は年末に向けてトレーニングをしているところだが、タキオンが出走登録していな

いことを気にしているようだ。

うん、ちよつと……と齒切れ悪く話すと、また心配そうな顔をされてしまった。

タキオンの虚弱体質については周知の事実だ。いやまあ事実かというところ少し誇張しすぎなところはあるが。

ともあれこんな風に言うとは心配されてしまうのはあたりまえだ。

大丈夫、俺がなんとなく心配で気になつて。そう正直に話すと、わかりましたと頷いて去つていった。

他のウマ娘にまで心配されるなんてなあ。反省しよう。

気を引き締めて、どう対処するかを考えるのだった。

Story 25 : 契約

「お前、契約見直した方がいいんじゃないか？」

トレーナー室へ話にきた同期から突然そう切り出された。

いきなりな話題過ぎて、え……？　と思わず口を開けて呆ける。

「アグネスタキオン、相当お前に負担かけてるだろ。最近どんどんやつれていってるぞ」

心配そうな表情で腕を組み、ふうと息を吐く。

確かに最近では遅くまで色々調べて寝不足だし、体重も減っている。

でもそれはタキオンを無事に走らせるためにがんばっていることだし、それが負担だと思っただけではない。

先輩から、ウマ娘に寄り添うことが大事だって教えてもらっているから。

「ああ、うん。あの先輩はすげーけど。色々な意味で」

思わずといった感じで遠くを眺め始めた。

「話を戻すけどさ。トレーナーとウマ娘の関係は千差万別だろ？　俺もサブトレーナー

としてウマ娘と関わってるけど、それぞれ対応だったり寄り添いかたは全然違う」

「でも、お前とアグネスタキオンはなんというか……研究者と実験動物みたいだろ」

まさにその通りだ。

「それが悪いとはいわない……いや、すまん。嘘ついた、悪いわ」

うーんと呻いて悩みながら、真面目な顔で俺を見た。

「正直言うと、健全な状態じゃないと思う。お前たちはそれが正解なのかもしれないけど、どうしても他のウマ娘たちへの影響がな」

かなり痛いところをつかれた。

タキオンの実験は薬以外にもいろいろあって、教室でボヤ騒ぎから驚いたときの筋肉の動きが見たいとヘビのおもちやを仕込むなど、多岐にわたる。

俺は止めはしているが、如何せん事情が事情だ。脚のことを知っているから、中々強く止めることができないでいるのだ。

「俺はお前とアグネスタキオンのことが嫌いなわけじゃない。むしろ尊敬してるよ。先輩みたいに1年目から担当を捕まえて活躍してるんだからな」

だからこそ、だ。

同期は指でトントンと自分の腕を叩く。

「他のウマ娘たちに悪影響を与えるようなことを止めれないなら、お前はトレーナーとして失格だ。ウマ娘は担当だけじゃないんだからな」

「もしきちんと見ることでできないってんなら、もっといいトレーナーと再契約になっ

ちまう。理事長は寛大だけど、他はそういうわけにはいかない」

……。

「……少し言い過ぎたかもしれない。ただ、それだけお前のが心配なんだ。俺たち同期の中で、一番がんばってんだからな」

だから、しっかりしてくれよな。

差し入れの缶コーヒーを机の上に置いて、同期は去っていった。

イスの背もたれに体重を預けて、しばらく放心していた。

確かに放任しすぎていたのかもしれない。元々研究のこと以外はそこまで手がかけられなかったからな。

いや、嘘ついた。毎日弁当を作るのは相当手間だ。あと薬を飲むのもすごい手間だ。

めんどくさい！

それに、今の今まで忘れていたが、トウインクル・シリーズであまりいい成績を出せなかったりトレーナーが扱えなかったりすると、変わるかもしれないだよな。

チームならそんなことにはならないが、俺とタキオンは専属契約だ。結果が悪ければ

……。

うーん……再契約かあ……。

「なにが再契約だつて？」

声が聞こえてきて、思わず体を跳ねさせて入り口を見る。

タキオンが神妙な顔つきでトレーナー室の扉を閉めていた。

「何やら放心していたじゃないか。さつき君の同期と言っていたトレーナーと2、3つ話したが……なにを言われたんだい？」

しかもこんなものを置いていって。

タキオンは机の上にある缶コーヒートを睨みつけている。

話すべきか、話さぬべきか……。

「なんだ、私には言えないことでも話していたのかい？ うん？ 言っておくけどね、トレーナー君」

ウマ娘の耳は良く聞こえるよ。

不機嫌そうに腕を組んで唇を尖らせているタキオンを見て、言うしかないなあとため息を吐いた。

全部説明すると、ふうんと顎に手を当てて少し考えむそぶりをさせる。

「なるほどね。確かに教室で煙を出したり、ヘビのおもちやを机の中に入れたりしていたよ。今はやっていないが」

今もやっていたらそれこそ大問題だ。

「しかし、そうか……専属システムというのは色々と制約があるんだね」

外部評価というものはいっだって厄介だ。

タキオンは身にしみてわかつているだろうから、うんうんと納得するように頷く。

「今は問題のある行動は起こしていないはずだよ。学園の教師たちから何も言われていないからね」

確かに最近は授業に来ていないという話は聞かない。

脚の強度が一段落して落ち着いたから授業には出ているんだろう。

真面目に受けているかはわからないが。

「なに、再契約なんて気にしないことだ。君だってそんなつもりはないんだろう？」

そう言つて鞆を置き、白衣に着替え始める。

俺は担当から外れるつもりはないし、外れたくはない。

タキオンの評価を上げるためには、やっぱりもつとしっかり走れるようにしないと

なあ。

脚は大丈夫なんだろうか。でも大丈夫って言ってるしなあ。

「……………」

頭を抱えてうんうん唸っている俺を、不安そうな目で見ていることには気づかなかつた。

キンイロリョティが引退レースとして出走した香港ヴァーズ。瞬間移動したかのような末脚で差しきり、日本のウマ娘として初めての国外開催の国際G I勝利に沸き立った。

そんなハッピームードに包まれているトレセン学園にて。

「あの……」

また心配そうな表情をしたカフェに話しかけられた。

最近よく話すなあ、カフェと。

「タキオンさんのこと、なんですけど……」

どうやら今度は俺じゃなくタキオンのことらしい。

またなにかしてしまったのだろうか。カフェには遠慮なく薬を差し出すらしいからな。

「いえ……なにかされたわけではないので……」

そういうわけでもないらしい。

「最近、真面目に授業を受けていて……前は授業中も、別の本を読んでいたの……」

「ちよつと、タキオンさんらしくないな、と……」

顎に手を当て、少し考えるような仕草でそう話す。

真面目に授業を受けておかしいと思われるのは相当失礼なものだが、タキオンに関しては確かに変だ。

「それに、いつもあれこれ作ったんだと話をされるんですが……」

それもない、と？

「はい………なんというか………普通を演じている、感じですよ」

普通を演じるね………。

まあ、うん。なんとなく原因はわかる気がする。

ちよつとタキオンと話してみるよ。そう言うと、カフェはわかりましたと頷いた。



タキオンがトレーナー室にやってきたところで、ちよつと話かと声をかける。

何故かビクツツと体と尻尾が跳ね、耳がこちらにギョーン！ と向く。

え、なんだどうした。

「ふうん？ どうしたんだいトレーナー君。最近は大人しくしているんだけどなにか

あつたかい？」

流れるようにイスに座つてぺらぺらと自分からなにもしていないと話し始めた。

ううん、本当になにもしていないらしい。どうしたものかと唸つたら、せわしく尻尾が揺れる。

この前の話でタキオンが少し思うことがあつたから、真面目に見えるようにしようと思つてくれた……んだと思つている。

余計な時間をかけさせたなあと反省している。とりあえず謝ろう。

悪かつたなと頭を下げたら、ガタツと物音が。タキオンがまたビクツとしたらしい。

「なんのことだい？ 別にトレーナー君からなにかされた覚えもないし他の誰かからもされていけないけどね」

いや、この前の話でさ。

そう言うと、ペタンと耳が倒れてしまった。

え、本当にどうしたんだろう。

何やら眉尻も下がっているし、なんとも言えない表情だ。

……とりあえず話を続けてみる。

なんか不安にさせるようなことを話してたからさ。そう言うと、うんうん頷かれる。

「そうだね。まあ確かにトレーナー同士であればいろいろな話もするだろう。少し失礼

だったとしてもね」

それは本当にそう。

まあ同期のおかげでいろいろ考えを改めたわけだが。

それでこの前の話でき。そう言ったらまたピンと尻尾が立つ。

別に外部評価なんて気にしなくていいよ。そう話すと、倒れていた耳が立ち、尻尾がゆらりと揺れる。

「どういうことだい？」

タキオンは最初評判すこぶる悪かったし、俺は泣き散らかしたり弱音吐いたり。結構散々だと思うんだ。

でも、それをみんなが見ている、今はタキオンを評価してくれる人多いだろう？

「それは、そうだね。クラスメイトも話しかけてくるようになったよ」

だから気にしなくていいんだよ。今はちよつと大げさに脚の弱さを克服したとか、担当のために泣きながらがんばったとか言われてるんが。

正しく評価してくれているわけだし、今まで通りでいいと思うわけだ。

「あまり評価が悪いとよくないんだらう？ ほら、契約がどうか」

あれは確かにそうだけど。

タキオンは既にG I 2勝してるからなあ。余程のことがない限り再契約なんてない

と思うぞ。

というか同期のあいつは強めに言ってくれていただけだし。気をつけるよって意味で。

「……………」

タキオンの耳がへによんと垂れてしまった。

なんか今日のタキオンは変だな。

まあ、そういうことだから。

それより脚は本当に大丈夫なのか？

けっこう気にしてるみたいだから。

「それより…………？ それよりってなんだ、私がどれだけ気にしていたことか」

頬を膨らませ、耳を絞って睨まれた。

えっ、何故。

「ああまったく！ 気分が悪い！ トレーナー君にありとあらゆる実験を行って発散させてもらうことにするよ！」

何故かぶんすかタキオンになってしまった彼女によって、全身が発光するはめになるのだった。

何で怒ってるんだ…………!?

Story 26 : 2度目の正月

正月がやってきた。

タキオンと出会ってから2度目のお正月だ。

アグネスデジタルが香港から帰国してきて「タキオンさんの機嫌が悪いんですけどなにしましたですか!？」と詰め寄られたのが記憶に新しい。

因みに香港カップで1着。地方ダートGIから中央芝GI、そして海外芝GIで連勝ってどういうことなんだ……？

どんな育て方をしたらこんなおかしな走りをするウマ娘になるんだろう。

先輩ってやっぱりすごいなあ。

話が脱線したが、そう。正月だ。

去年はトレーナー室を開けて実験やらなにやらしていたが、今年は静かな時間が過ぎていた。

タキオンが研究を休むと言い出したんだ！

隕石でも降ってくるのかと言ってまた機嫌が直滑降となったのはさておき。

前回の一件以来、いろいろな活動が少しだけ消極的になったというかなんというか。

別に気にしなくてもいいとは言っているものの、ほんの少しだけ反省してくれているようだった。

カフェに聞いたら授業中の態度は元に戻って研究用の本を読んでもらうらしいけど。まあ、タキオンらしくていいだろう。

脚のことは大丈夫だと何度も言われたので、流石にもう信用したよ、うん。

有マ記念は登録期間を過ぎていたので観戦に切り替え、カフェの勝利を2人で見届けた。

紆余曲折いろいろあったが、充実した1年間だったといえるだろう。

そしてシニア級に突入した初日の元日なわけだが。

「トレーナー君。そろそろ昼食を食べないかい？ 朝が少なかつたからお腹がすいてしまったよ」

何故かタキオンが俺の部屋にいる。

こたつに入って携帯をいじりながら、俺に食事の注文をする始末だ。

朝起きて、新年がんばるぞと思いつつも通りに朝食を用意していたところ、チャイムが鳴り、扉を開けたらタキオンがいたのだ。

何事かと思ったが、弁当をもらいに来たというものだからたまげてしまった。

ないけど……と言ったら思っていたよりも不機嫌になって怒られることに。

「君は私の世話をするのが仕事じゃないか！ 毎日弁当をもらっていているんだから、今日も作ってくれないと困るよ。特に最近は手抜きが多いからね」

悩んだりまったりという期間、冷凍食品を使うことが多かったからそれが不満らしい。

いや、全部手作りって物凄い手間なんだぞ！

俺の想いは全く伝わらず、弁当がないならいま作っておくれと言われて部屋に侵入してきた。

それで用意していた自分の朝食をタキオンに食われ、量が少ないだの栄養が足りないだのと文句を垂れながら食べられたわけだ。

やや半ギレのまま俺も朝食を食べたわけだが、タキオンはそのままこたつに入って居座り今に至る。

そして先ほどのセリフだ。許せん。

しばらくして準備ができたので、こたつに昼食を運ぶ。

「おや、ようやく作ってくれたんだね。では食べるでしょう……うん？ トレーナー君、それは何かな」

余った年越しそばで温かい豚とろろそばを作ったわけだが、俺の前にだけ木箱がある。

ふたを開けると、中にはおせちが入っていた。そこそこいいやつだ。

「へえ、おせちじゃないか。そういったものはあまり口にしないが、見た目が色鮮やかだね」

いただきますといっておせちに箸を伸ばしたところで、俺はおせちの箱をひよいとどかず。

きよとんとしてゐるタキオンをよそに俺はおせちを食べ始める。うん、おいしい。

「どういうことだいトレーナー君」

いや、これ俺の分しかないから。

そう言うと、耳と尻尾をピン！ と伸ばした。

「えー!? なんでだトレーナー君！ それになんで避けるんだ!?」

ほら、急にご飯たかりにきて注文つけてくるからさ。

腹立つじゃん。

「むっ、なんだそれ。そもそも君が私のご飯を用意してくれるって約束をしたんじゃないか。作ってくれていないのが悪いだろう」

だから作ったじゃないか、豚とろろそば。

おせちの箱を置いてそばを一口食べる。うん、本格的にだしを作ったからかなりおいしい。

タキオンのせいで料理スキルが上がったから、その恩恵だな。

「むむむ……」

すつとおせちに箸がいくが、届く前にひよいつとどかす。

「……………」

タキオンがじつとり睨んでくるが無視していると、急に立ち上がった。

なんだろうと思つたら、そばの器を持ってきて俺の隣に入ってくる。こたつ机はそこそこ大きいから狭くはないが……。

「……なら邪魔できないだろう。ではいただくとするよ」

ふふんと得意げにしておせちをつまもうとするタキオンだが、箱を持ってそのまま反対の場所に座る。

「ええー!?!」

本気で驚いて、耳がぺちよんと垂れてしまった。

少し意地悪しすぎたか。

食べていいよと机に置くと、最初からそうしてくれればいいんだよと言つて俺の隣にまた移動してきた。

いや、別にこつちこなくても食べれると思うんだけど。

「また君が持つていくかもしれないだろう。今日の君は信用できない」

ぷんすかタキオンになってしまったようだ。

まったく君は子供なのかいと不満を言いつつもおせちとそばを堪能し、食後には満足そうに尻尾を揺らしているのであった。



今年も去年同様神社にやってきた。

やはり元日、けっこうな人の多さだ。

「いやはや、毎年のことだがよくこんなに集まるな。行事というものは何故こんなにも集客力があるんだろうね」

人混みがあまり得意ではないためか、タキオンは眉尻を下げている。

コートの下にある尻尾も力なく揺れていた。

うーん、まあでも正月に願掛けって言うのは1年を始めるための目標を決めるのにいい機会だからなあ。

「それはそうだろうけどね。こんな寒い中ご苦労なことだよ」

私たちもだが。

そう言いながら、ぐるりと境内を見回す。

今年もここで願掛けしたりするウマ娘たちが非常に多い。

やはりパワースポットとして有名だからなのだろうか。

言い出したのはマチカネフクキタルらしいが。

「目標か……うん、そうだね。君はどんなローテーションを組む気なんだい？」

そういえばタキオンには言っていないかった。

有マ記念も出走せずにしつかりと脚を休めたことだし、プランAも成功した……はず。

ならば、彼女の適性をフルに活かせる中距離GIに加えてグランプリ制覇を狙う強気のローテーションでいきたい。

タキオンが目指す限界を超える助けになってくれるはずだ。

「クッククック、強気だね。大阪杯、宝塚記念、天皇賞秋、そして有マ記念……」

欲張りだね、君は。

タキオンは笑いながらレースを確認する。

「まあいいだろう！ 今言った全てのレースで活躍すると約束しようじゃないか」
ニヤリとほほえみ、やる気に満ちた目で俺を見た。

去年のことを考えると、本当に変わったなあと思う。

前は出れるかわからないとばかり言われたし、走るかどうかもわからないといわれたものだ。

「我ながら変わったものだね。いや、変えられたというのが正しいかな？」

穏やかに笑いながら、顎に手を当てて俺の顔をじいっと見る。

「まあ、悪くない気分さ。限界を超えるために走れるわけだからね」

満足そうに頷くタキオン。

これからの活躍に期待できそうだ。

お参りのために列に並ぶ。

賽銭箱にお金を入れ、タキオンが無事に走ることができるようになるように強く強くお願いしておく。

この神社の神様でもウマ娘の三女神でもいい。とにかく無事に走れるようにお願いします、はい。

お祈りも終わって賽銭箱の前から離れる。

俺も体調管理に気をつけようと再度決意していると、タキオンが隣でクツクツ笑う。

「熱心にお祈りしたものだね。効果はないはずなんだが」

でも、意外と効くことがあるからなあ。

そう言うと、ふうんと頷く。

「前まではそんなことはないと思っていたが……感情の力というのは中々あなどれない。祈りが現実には作用することもあるだろう」

科学的な知見を好むが考え方がロマン派なタキオンらしく、数値で表せないものにも理解がある。

ひとしきり頷いて考えこむ仕事をすると、ピシッと俺を指さした。

「トレーナー君、少しいいかな」

そう言つてスタスタと歩いていく。

タキオンについていった先に合ったのは、ここ数年でかなり有名になったお守りだ。

確か、神むすびだったかな。

「サイレンススズカ君がこのお守りをつけて、ケガ無く走り切ったという話はよく耳にする。ほとんど効果はないだろうが……」

実際にお守りを手に取つて見ながらうーんと唸っているタキオン。

黄色に赤と青が入ったカラフルな神むすび。勝負服にもそのカラーが入っているし、丁度いいかもしれない。

お金を渡してタキオンが持っているお守りを購入する。

「……決断が早いね。私にとっては都合がいいけど」

少し驚きながら、買った神むすびを眺める。

そして、ふっとほほえんだ。

「感情というのはおもしろいものだね。少しだけ高揚しているよ」

普通の少女らしく笑うタキオンを見て、本当に変わったなあと思うのだった。

Story 27 : 大阪杯

時は巡って大阪杯。

正月にタキオンと約束したレースの1つだ。

菊花賞から長期間休んでの大阪杯出走のため、レース勘や闘志が欠けるのではないかと予想されて3番人気だ。

外部評価はこんなものだが、正直言ってタキオンの状態はすこぶるいい。

トレーニンングもバツチリだし、精神的にもかなり前向きだ。

バレンタインデーに作らされたチョコレート菓子もたらしく食べてたし、毎日弁当も用意している。体重減もないだろう。

とうか絶対増えてると思うんだけど、体重は絶対に計測させてくれないからなあ。

「どうしたんだいトレーナー君。そんな遠くを見つめて」

物思いにふけていたらタキオンに話しかけられた。

相変わらず袖が余りまくっている白衣だなあとなんとなしに見つめてしまう。

「なにか変なものでも食べたのかい？ 妙に視線を感じるね」

気にしないでくれと手を振る。

タキオンが不思議そうにしているの、それよりと話題を変えた。タキオンも今日はいつも以上に張り切っているように見える。

耳は普段よりせわしなく動いているし、尻尾もふるりと左右へ揺れていた。時折くるくると腕を動かして袖を振り回したりする始末。

なんというか、とても珍しい。

「それは多分、デジタル君が原因だろう」

デジタルといえば、同室のアグネスデジタルだろう。

この前フェブラリーステークスで勝利し、G I 5勝かつ重賞5連勝、G I 4連勝というところでもない活躍をしていた。

地方ダート、中央芝、海外芝、そして中央ダート。

“真の勇者は戦場を選ばない”とは言っていたものの、これほどとは……。

どのレースでも楽しそうに走っているし、『ケガなく楽しくぶつちぎる』という先輩の指導理論を体現している。

いや、あそこのチームは全員そうなんだけど。

フクキタル、デジタル以外のシニア級ウマ娘は今現在主戦場が海外だから、タキオンが争うことはまあないだろう。

しかもフクキタルはドリームトロフィー・リーグに行くって宣言してるし、デジタル

は今後海外にも積極的に挑戦するって話だ。

チームリーダーはドリームトロフィー・リーグで毎年ぶちかましているし。時々やる気なくて凡走したりしてるけど。

ともあれ、勝っているウマ娘からいい影響を受けてやる気があるならそれは嬉しいことだ。

今日の活躍に期待できる。

「シニア級の初戦、叩きも使わずにG1レース。今研究している感情についての成果を見る絶好の機会だ。ククク……ではいつてくるよ」

楽しそうにクツクツ笑いながら、タキオンはターフへと足を運ぶのだった。



久々に踏みしめるターフの感触。

それに笑みを浮かべながら、タキオンは歓声を浴びる。

自分への応援か、はたまた別のウマ娘への応援か。あるいは罵倒なのか。

それぞれの想いが混ざり合って、この阪神レース場は凄まじい熱気を作り出していた。

タキオンは体をゆっくり温めつつ、出走しているウマ娘たちを見る。

シニア級に入り、今まで走ってきたことのないウマ娘たちが多く出走している大阪杯。

体の仕上がりがしつかりしているし、経験が違うのか落ち着いている。

そんな中、異様な存在感を出してタキオンに近づいてくるウマ娘が一人。

「オイ」

「うん？　おや、シャカール君じゃないか」

スポーティな勝負服を見にまとった二冠ウマ娘。エアシャカール。

タキオン同様長期休養明けでG1レースに挑んでいるウマ娘でもある。

目つきが悪く言葉遣いもキツめなので勘違いされやすいが結構なお人よしだ。

今もタキオンのことを少しでも心配そうに見ている。

「全然レース出てねエのに、まともに走れんだろうな？」

「おやおや？　心配してくれるのかい？」

「ああ!?!　ケンカうつてんのか!?!」

急にキレ出したエアシャカールに、周囲のウマ娘たちはビクリと肩を震わせ尻尾を跳

ねさせた。

しかしタキオンは慣れているのか全く驚きもせずクツクツと笑っている。

「ククク……なに、大丈夫さ。研究の成果は出ているからね。走っても問題ない」

「……そうかよ」

話を聞くと、興味がなくなったのか頭をかいてゲートへと歩いていく。

「走れねエやつと競う意味はねエ。てめエがまともに走れんのか、レースで見せろ」

少しだけ振り向いて吐き捨てるようにそう話し、去っていった。

なにアレ、こわ……と引いているウマ娘が多い中、タキオンはふうと息を吐いて笑みを浮かべる。

「やれやれ、相変わらず愉快だな」

素直じゃない彼女の発言に、苦笑してゲートへ向かうのだった。

タキオンは今回大外枠。8枠15番だ。

先行を得意とするウマ娘が外枠というと不利に思えるが、阪神レース場はスタート直後に上り坂がある。

直線も1コーナーまでに325mあるため、スタートからのペースは速くならず、ポ

ジションも取りに行きやすい。

枠番を気にせず走ることが出来るだろうとタキオンは思っていた。

全てのウマ娘がゲートインし、一瞬の静寂。

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました』

——ガタンッ

『スタートしました！ 揃ったスタートになりました大阪杯！』

シニア級のG Iレースらしく、出遅れはない綺麗なスタートとなった。

経験を積んでもスタートがへたなウマ娘もいるにはいるが、ここでは割愛する。

タキオンは内側の動きをチラッと確認して、自分の動きを調整する。

隣の14番、シャイニーパスが一気に上がっていったため、その後ろにつけて走っていく。

天候は曇りてバ場は良。多少強気に前に出ても問題にならないだろう。

『ハナをとつたのは8番タカマツヒビキ！ その後ろを2番シマガワダンディ！ 14番シャイニーパスも上がってきました！ その後ろから15番アグネスタキオンです！ そして内に1番エアシャカール！』

逃げをうって走り出したのはタカマツヒビキ。そこに合わせて2人のウマ娘たちが走りこんでいく。

タキオンは逃げるわけでもないため、悠々とシャイニーパスの後ろを陣取り、好位に進んでいくことになった。

そしてその隣、内で走っているのが1枠1番。最内枠のエアシャカールだ。

「チツ」

「ふうん」

お互いにチラツと顔を見て、舌打ちに一呼吸。

どちらも気にしているが、実力を認め合っているため併走状態は都合が良かった。

そのまま隊列を崩さず、第1コーナーへと入っていく。

『第1コーナー入りまして振り返っていきましよう。先頭は変わらずタカマツヒビキ。その後ろシマガワダンディ、シャイニーパスと続きましてエアシャカール、アグネスタキオンが追走』

『前方はやや縦長でしょうか。ペースは速くないと思いますが』

先行の位置で併走して走るウマ娘はタキオンとシャカール以外にはいない。

これはシャカールに致命的な癖が存在しているからだ。

それは右側へのヨレ癖。内側にいるのに内ラチを擦るようなレベルでヨレて走ってしまう矯正できない癖。

だからこそシャカールは内側で走っているわけだが……そんなことは他のウマ娘た

ちは知らない。

タキオンは前から聞いていたので気にせず隣を走っているが、周りからはひどく警戒されている。

それが原因で、前のほうでは集団ができていないのだった。

そのまま第2コーナーも周り、向こう正面へ。

『向こう正面に入りました。先頭は変わらずといったところ』

『第1、第2コーナーが短いですからね。第3コーナーに差し掛かってようやく1,000mになるコースです』

『第3コーナーから第4コーナーが長く、また向こう正面から第3コーナーまでも長いので、中々息を入れにくいコースですね』

先頭を走るタカマツヒビキは、自分の体感でペースを確認する。

きつと1,000m通過で約1分。少しだけ速いかもしれない……そう思っているが、向こう正面にいる時点でもう遅い。

自分の後方にいるだろうアグネスタキオンやエアシャカールなどのGIウマ娘や、1番人気のサンユニコーンは瞬発力が凄まじい。

最後に上り坂があるため瞬発力勝負になりにくいとはいえ、息を入れるタイミングが難しいコースだ。

逃げウマ娘のタカマツヒビキでは、コーナーの中で息をいれたら後ろに追いつかれてしまっだろう。

そうなるともう勝てない。なら、苦しくてもそのまま行くしかない。

前方で苦し気になっているタカマツヒビキを見て、シマガワダンディとシャイニーパスは作戦通りだと不敵な笑みを浮かべる。

ややハイペースにして逃げを潰しておくことで、阪神2, 000mで有利な先行をさらに有利にさせる。

そのためにプレツシャーをかけてペースを上げるように仕向けていたのだ。

これでいける！ 2人はそう思いながら、第3コーナーへと入っていく。

長いコーナーを回りながら、タキオンは自分の頭の中で研究の成果を思い浮かべる。

トレーナー君に飲ませた薬がこうで、自分の走りとペース、フォームがこうだから……。

頭の中で完成された計算式をもとに示された息を入れるタイミング。以前であれば、脚を壊さないために入っていた脚の休憩。

ここだというタイミングでペースを緩め、順位を下げることなくスタミナを回復させる。

以前から脚を気にし続けてきたタキオンだからこそできる息の入れ方だ。

Ullma 2。タキオンが研究し、今なお答えが出ないもの。ウマ娘が出すことのできる最高速度を表す数式。

これを解いていくことで今出せる最高速度を導き出し、そしてどこで息をいれたらその速度が出せるかがわかるというのだ。

トレーナーからすればテンションが上がってアドレナリンが出ているんじゃないのという話だが。

隣でその技術を間近で見たシャカールは、計算通りだと計算式を修正せずにはいた。

シャカールはこのレースでは自分は2着だろうと考えている。

これは前年の宝塚記念から長期休養をして大阪杯に出走しているから、そのブランクを含めた計算だ。

そしてそれと同じようにタキオンも3着だと計算していた。1着は1番人気のサンユニコーン。だてに1番人気ではないということだ。

どこでスパートをかけるか、どこで抜け出すか。全てはロジカルに結果を導き出している。

シャカールは自分の計算に沿って走り、タキオンが抜け出すだろう第4コーナー終わりに外へ持ち出し、そこからスパートだ。そう計算していた。

『長いコーナーを抜け、第4コーナーが終わり直線へ入る！ 一体誰が抜け出すのか！』

タカマツヒビキが第4コーナー終わりに差し掛かったところで、タキオンはするつと体を外に持ち出す。

そしてペースを一気に上げていくと、そのまま2番手3番手のシマガワダンディとシャイニーパスを抜かした。

あまりにもスマートでスムーズな抜け出し。コーナーの遠心力も利用した走り、ブロックの間も無かった。

シャカールは思った通りに抜け出したタキオンを追いかけるように外へと向かい、そのまま最終直線へと入った。

『最終直線！ 先頭はタカマツヒビキ！ しかし外からアグネスタキオンが一気に上がってきた！ タカマツヒビキ苦しいか！』

直線に入り、光のような速さで一気に加速したタキオンはそのまま外から追い上げる。

一息も二息も入れたその末脚は流石の一言。とんでもない速さでタカマツヒビキに迫り、歓声も爆発している。

そして同じように外へ持ち出したエアシャカールも一気に加速する。

そのまま抜け出すかと思いきや、後ろから凄まじい足音と共に急襲してきたウマ娘がいた。

『後方からサンユニコーン一気に上がってきた！ 驚異的な末脚！ そのままエアシャカールを抜かした！ エアシャカール粘る！ 並んでいる！』

前走を叩いて仕上げに仕上げているサンユニコーンがとんでもないスピードで追いついてくる。

完全に差しきる！ 何せゴール前にあるのは上り坂。この切れ味鋭い差し脚を止めることはできないだろう。

誰もがそう思っていた。

このウマ娘と、このトレーナー以外は。

——タキオーンツッ！ 突っ込んでこオーンい!!!

トレーナーの叫びを聞いたタキオンは、ククク……と妖しく笑う。

そして、グツとターフを踏みしめると、ギョーン！ と音がしたかのような速さですらに加速した！

『サンユニコーン追い上げる！ しかしアグネスタキオン！ アグネスタキオンだ！ なんとというスピード！ サンユニコーン差が詰まらない！』

サンユニコーンは目を見開き、なんで……!? と小さく呻く。

トウインクル・シリーズに出走してから今までで一番速い末脚。それをこのレースで叩きこんでいた。

にも拘わらず、自分の前で走っているタキオンには追いつけず、距離が縮まることは決してない。

平地で全力を尽くしても、自慢のパワーで坂を駆けあがっても、決してこの差が覆ることはなかった。

『アグネスタキオン先頭！ アグネスタキオン先頭！ 超光速の走りで今ゴールイン！
やはり強かったアグネスタキオン！ 他の追隨を許さない完勝です！』
2着のサンユニコーンと2バ身差をつけた圧勝。

息を整えながら自分の脚を見るタキオン。

その表情はとても嬉しそうで、ただの少女のような笑みだった。

「……オイ、てめエ」

「うん？」

そんなタキオンに、納得がいかないような表情でシャカールが話しかけた。

「オレの計算では、てめエが勝つことはあり得なかった。どれだけ上方修正したとしてもだ。」

「ふうん？ 随分と下に見られたものだね。私が勝ったわけだが」

「言ってる……何があつた？ てめエのその走り、データにはねエ」

腕を組み、フンと息を吐くシャカールにタキオンはクツクツ笑う。

「ククク……まあ、そうだね」

タキオンはゴール前で嬉しそうにこちらへと手を振るトレーナーの姿を見た。そして、自分の脚についているお守りを見る。

「勝ちたいと思った。それだけだよ」

ハア？ と眉を顰めるシヤカールを見て、クツクツと笑うのであった。

Story 28 : ファン感謝祭

大阪杯で実力を見せつけたタキオン。

さあ次は宝塚記念だということで、学園の行事が挟まった。毎年恒例春のファン感謝祭だ。

この日だけは一般の人たちがトレセン学園内に入ることができる。

ウマ娘バンドの演奏や紅白対抗リレー、メジロ家サイン会やらなにやらイベントが目白押しだ。メジロだけに。

どこかで爆笑する声が聞こえる中、タキオンはいつも通りトレーナー室に……いなかっただ。

「ふうん。思いのほかすごい人の多さじゃないか」

野外ステージ近くに設置された小さなステージがいくつか。

そこで様々なウマ娘たちが撮影会を行っていた。

学園祭の中では目玉イベント。ファンが推しているウマ娘と直接交流できる貴重な時間だ。

俺たちトレーナーはウマ娘と接するのが普通だから感覚がマヒしているかもしれないな

いが、彼女たちは国民的スターだ。

飛び入り参加してびすびす！ と一枚だけ写真を撮らせて去っていった謎の美少女ウマ娘も多くのファンをもつ。

アイドルとの握手会みたいなものだ。アイドルと違うのは、不埒な輩がいた場合物理的にとんでもない目に遭うことだが。パワーが違うんだよパワーが。

しかし、こういったものに参加するようになったんだなあとかキオンを見てしみじみとした気持ちになる。

「なんだいトレーナー君、生暖かい目で見て」

成長したなあと思って。

そう話すと、不思議そうに首を傾げた。

「私はなにかを変えたつもりはないけどね。今回の撮影会だってそうさ。思春期の女子は声援や応援での心意的変動がパフォーマンスの向上に繋がるんだ。それにウマ娘も当てはまると思っているから、研究のために参加しただけだよ」

いつも通りだろうと得意げに話すタキオンだが、その尻尾はちよこちよこ揺れているし、口角も少し上がっている。

こういったものに対して感情を素直に見せているのが成長したってことじゃないのかなと思うが、前にそれを指摘したら違うとかなりぶつくさ言われたので口を閉じるこ

とにした。

しばらくして前のウマ娘の時間が終わり、タキオンの番になった。

勝負服を身にまとったタキオンがステージに立つと、キャー！ と黄色い声が上が
る。

クラシック級での活躍と大阪杯の走りを見て多くのファンを獲得したようで、人数が
非常に多い。

特に女性ファンがものすごく多い。何故だかわからないが女性人気が高いのだ。今
いるファンも多くが女性で、男性ファンは2割ぐらいだろうか。

「では、アグネスタキオンさんの撮影会を開始します！ 整理券番号1番の方から順番
にどうぞ！」

撮影会と銘打っているが、実際は交流会だ。

少し話をして、ファンのカメラか携帯を預かって2ショット写真を撮る。アイドルの
握手会に近いかもしれない。握手会行ったことないけど。

「アグネスタキオンさん！ 大阪杯すごかったです！ 応援してます！」

「ああ、ありがとう！」

「本物だあ……！ すごい！ かつこいい勝負服！」

「それは光栄だね！」

「アレやつてもらっていいですか!! お手手くるくるするやつ?」

「くるくる? トレーナー君……ああ、なるほどね。これでいいかな」

ファンたちの声掛けや要望に応えながら撮影会は進んでいく。

別のステージで行われている撮影会をチラッと見ると、何故かトレーナーも一緒に写真を撮られていた。

……先輩じゃないか! タイキシヤトルと一緒に撮影会に参加していたようだ。

というか一緒に写真撮ってるのデジタルだ! 相変わらずのウマ娘オタクだなあ。

「トレーナー君、よそ見しないでくれよ」

視線を戻すとタキオンがこちらに袖を突き出していた。いや、手か。

話を聞いていなかったの何が必要とされているか今一わからない。

「おいおい聞いてなかったのかい? 君はなんのために私の隣にいるんだ。ほら、はやくペンを渡してくれないかい」

サインだったらしい。

袖の中にペンをズボッと突っ込むと、尻尾がピン! と跳ね上がった。

「なんだ、びつくりするじゃないか!」

いや、ペンって言ったじゃん。

「急に袖の中に手を入れてくるなんておかしいだろう! 手の上に乗せてくれればいい

じゃないか！」

ええ……書けないだろ、その袖だと。

「確かにそうかもしれない。しかしだねえトレーナー君、普通に考えてだよ？ 手渡しするってなつて、服の中に手を入れるのはおかしいと思わないかい？ うん？」

怒ってますという表情で俺に詰め寄ってくるタキオン。

スイツチ入ってしまったなど思っていたら、何故かものすごい勢いでシャッター音が鳴る。

2人でファンの方を向くと、みんな写真を撮っていた。サインを求めていたファンも同様だ。

え、何これは。

「なんだこれ。どういうことだい？」

「大丈夫です！ サインとかとりあえずいいですから！ 続けてください！ ほんとに！」

今のやり取りのどこに需要があったのだろうか。

2人で首を傾げながら、撮影会を続けていくのであった。



撮影会が終わった後、先輩に挨拶をしたら何故かタキオンがタイキシャトルに別の会場へと連行された。

気づけば先輩のチームのトークショーに飛び入り参加することになるといふ謎の事態に。一体何が起きているんだ……。

「ちよつとだけ尺稼いでくれないか。主役のウマ娘が行方不明だからさ、見つけてくるから頼むぜ」

「よろしくお願いしマスー！」

そう言つてどこかへ行つてしまった。

先輩のチームの主役といえ、まあチームリーダーだろう。

さつき撮影会にいた気がするんだが、逃げてしまったからな。追込が得意なのに逃げているとはこれいかに。

現実逃避していたが、トークショーは既に始まっている。

先輩のチームはそういうものだど慣れているのか、ファンたちはタキオンと俺がいても動じない。記者とかもいるけど全然困つてないな。

というかうんうんと頷いている。ファンも関係者も教育されすぎでは？

「それではアグネスタキオンさん！ よろしくお願ひします！」

司会を務めるのはトレセン学園のスタッフではなく、フクキタルだ。

何故チームのトークショーなのにチームメンバーが司会をやっているんだろうか。

「今日はみなさんをまとめる役が吉とでいたので、スーパラーッキーガールことマチカネフクキタルが司会ですよ〜！」

いいぞー！ フウー！ ラッキーカムカム！

謎の声援を受けて得意げにしているフクキタルは、手元のカンペを見ながらトークショーを進行し始める。

「まずはそうですね。今日の感謝祭、何に参加されていますか？」

「撮影会だよ。先ほどまで参加していたね」

「おおく！ 撮影会ですか！ 感謝祭の目玉イベントですね！ 目玉じゃないイベントなんてありませんけど」

行きたかった。撮影会なんて出るんだな。そんな感想が聞こえてくる。

ファンの方々から歓迎されているようだ。先輩のチームは大らかなファンが多いなあ。

「どうでした？ 楽しかったですか？ タキオンさんってこういうのにあまり参加しな

いいイメージがありますけど」

「随分ストリートな物言いをするものだね！ 悪くはなかったよ。いや、愉快だったと言えるだろう」

クツクツと満足そうに笑うタキオン。

研究のためと言っつていはいたが、なんだかんだ楽しかったようだ。

誰しも好意的な言葉をかけてもらえると、嬉しいものだからな。

「そうですね〜！ ファンの方々との交流は幸せを分かち合えるすばらしい時間ですからね！」

わかる……とフクキタルのファンらしき方々が神妙に頷いている。

かなり前から追いかけているのだろう。中にはここまでよく成長して……と感動しているファンもいた。

「あ、あの！ 素晴らしいですか！」

「おや？」

「うん？」

興奮した様子で手を上げたのは、雑誌の記者だ。胸章をつけている。

そして腕には……あれ、タキオンに買ってあげたものと似たお守りだ。

「あの、フクキタルさん！ ドリームトロフィー・リーグへの参戦、おめでとうございま

すー！」

「おおー！ ありがとうございますー！ みなさんの応援のおかげですー！」

「私、フクキタルさんのファンで！ 是非占いを見てみたくて！」

フクキタルの占いは、学園では相当有名だ。全部自己流だと言っていたけど。

マチカネ相談室というお悩み相談の窓口ができるほどだし、アドバイザーも極めて有用。

最近どこかのウマ娘雑誌で占いコーナーをやっていた気もする。コアな人気があるんだらうな。

「なるほど！ ではこの後時間があつたらやつてみましょう！」

「ありがとうございます！ あ、あと、その。アグネスタキオンさんにも少しだけ質問が」

「おや、随分うまく切り出してきたじゃないか。ククク……いいだろう！ 何を聞きたいんだい」

たどたどしい部分はあるが、流れるように取材へと切り替えた。

フクキタルは「げぼっ！ 私の司会がく!?」と叫んでいる。げぼってなんだ。

「先日の大阪杯、お見事でした。それで、次はどんなレースを目標にしているのかな、と」
「ふうん。トレーナー君、言ってもいいのかい？」

別にいいんじゃないかな。

ついでに勝利宣言もしておけばいい。

「アツハツハ！ 強気だね！」

「では宣言しよう！ 私は中距離のG Iレースをメインに出走するつもりさ。もちろん、グランプリにもね。それらの全てで結果を出すよ」

自信満々にそう話すタキオンに、おお！ と期待の声上がる。

「では、次は宝塚記念ですか!？」

「そういうことだね。もちろん、人気投票で出走権を得られたらということではあるが」

「ふっふっふっ！ 大丈夫ですよ、タキオンさん！ 絶対に出られます！」

グツと両手でサムズアップするフクキタル。

絶対、とは。

「ファンの方々にしっかり宣言したじゃないですか。なら、みなさんが叶えてくれます

！ タキオンさんの願いを！」

「そんな簡単にいくものかい？」

「いくものです！ 私がそうでしたからね」

ニコニコ笑いながら体を揺らすフクキタルに、またファンの方々が腕組み頷きおじさんになっている。

俺たちも投票するぞ！　がんばってくれ！　楽しみにしてる！　そんな声が聞こえてきた。

「……ククク、おもしろいものだね。声援を聞くだけで、高揚しているよ」

みんなからの応援を聞いて嬉しそうに笑うタキオン。

次のレースも絶対に勝つ。この場の熱気と情熱を感じて、そう決意するのであった。

ちなみに先輩たちが戻ってきたのはそれから20分後だった。

リーダーはシュノーケルつけて鯛を持っていたんだけどどこまで行ってたんだ……

？

Story 29 : 宝塚記念

調子がいい状態で迎えた本日、宝塚記念。

人気投票で上位にランクインし、タキオンは無事出走権を手に入れた。

パドックでのお披露目を終えて地下バ道を歩いていくタキオン。

その背中をポンと叩くウマ娘が。

「久しいわね」

「おや、君か」

大人びた笑みを見せるのはホクオウボーダー。

今日の1番人気であり、皐月賞、日本ダービーで先頭争いをしてきた同期のライバルウマ娘だ。

一時は短距離路線にも進んだが、この中距離に戻ってきた。安田記念でクビ差の2着でしつかり実力を見せ、この宝塚記念へと挑んでいる。

アマゾントリップやマンハッタンカフェなど、同期の有力ウマ娘が軒並み回避している中。

その実力と前走から1番人気を獲得していた。タキオンは大阪杯1着であるものの、

その後出走もなく情報も少ないために2番人気だ。

3番人気は今ここにはいないエアシヤカール。天皇賞春では力を発揮しきれなかったが、得意の中距離ということで人気を集めている。

「ワタシが1番人気みたい」

「そのようだね。だが人気と実力は比例しない。そうだろう?」

「ええ、そうね。このレース以外は、だけれど」

好戦的に笑いながら、タキオンと共に歩いていく。

ギラギラと勝利まで走ろうと燃える瞳を見て、タキオンは自分に火がついたのを感じた。

存外素直だな。最近気づいたことだが、私は感情的みたいだ。内心そう思い、クツクツと笑う。

「ねえ、アナタその笑い方どうにかならない? せっかくキレイな顔しているんだから、もつたいないわよ」

「ふうん。そんなに気になるかい?」

「気になるわよ。髪もボサツとしてるし、尻尾もなんだか……ゴールドシチーさんまでとはいわないから、少しは気にしてもいいんじゃないかしら」

「髪やらなにやらに時間を取られるぐらいなら研究をしたほうがよっぽど有意義だと思

うけどね」

尻尾をぶるんと揺らし、タキオンはそう言い放つ。

いつも変わらないわねとホクオウボーダーも呆れ顔だ。

「トレーナーには何も言われないの？ ああでも、男のトレーナーよね、アナタ」

「トレーナー君にはいつも言われているよ。髪をとかせ、尻尾も手入れしろ、白衣を洗えとね。弁当箱も早く出せと言っていたかな」

「……ママかしら？」

困った子ね、と頭を振られながら歩いていき、ターフへと降り立った。

歓声を浴びると、先ほどまでのゆるやかな雰囲気から一変。2人ともかなり真剣な表情になる。

「じゃ、先に行くわ」

フツと笑みを浮かべ、ファンに手を振りつつウオームアップで軽く走りだす。

タキオンはホクオウボーダーの後姿を見ながら、愉快だねと思っていた。

これから競う相手と会話を楽しみ、レースでは全力を尽くす。

成程どうして、昂るものがあるじゃないか。

「こういうったものとは無縁だと思っていたが……トレーナー君のせいだろうね」

感情という新しい研究を得て、いざ出走だ。



『暖かな日差しがターフを照らしております阪神レース場。メインレース、宝塚記念です』

歓声が聞こえる中、ウマ娘たちは各々準備を整える。

足首を念入りにストレッチする。ゲートを嫌がり係員に押し込まれる。何も考えずにボーっと空を見る。

タキオンはそのどれにも当てはまらず、全てのウマ娘たちを観察していた。

あのトモの張りはターフを踏みこんだ時にこれだけの速さを出せるだろう。

体のバランスがとれているから、出力はこのぐらい出るだろう。

ならばそれらを自分の能力と照らし合わせると、最高速度が上がるのだろうか。

そんなことを考えていると、自分のゲートインの時間になる。

ゲートに入り、意識を切り替える。

スタートダッシュの構えを取り、体を沈めた。

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました』

——ガタンッ

『スタートしました！ キレイなスタートを切りました宝塚記念！ 1番スワンナイトが飛び出したか！』

大きな出遅れもなくスタートし、レースが始まる。

宝塚記念は例年最初のペースが速くなる。それは直線が長く下り坂になっているからだ。

その割に後半は末脚勝負ではなく長くいい脚が使えるウマ娘が有利なのだから、タフなレースとなるのは誰もが知るところ。

このレース場を大得意としている芦毛の美少女ウマ娘がいて、そのウマ娘はロングスパートが売りだった。

つまり、ここで脚を使いすぎてしまうのも問題だということだ。

しかしいいポジションをとらないとスタミナに不安が残る。そのため、置いていかれないようにしつつしっかり自分のポジションへと収まるのがポイントだ。

スワンナイトはそういう意味では、自分の走りやすい先頭の内側を走っているのだから成功しているのだろう。

他のウマ娘たちは、彼女をペースメーカーとして隊列を作る流れになった。

徐々に外枠のウマ娘たちが内へと寄っていき、それぞれの脚質に合ったポジションへと収まっていく。

タキオンは4枠4番。するつと抜け出してスワンナイトの後方を位置取る。

ホクオウボーダーもそれを見て、内側での待機を選択。4、5番手の位置からのレースを選択した。

今まで追込で戦ってきた彼女では考えられないポジション取りに、隣にいるエアシャカールはチツと舌打ちする。

『先頭は1番スワンナイト！ その後ろを4番アグネスタキオンが追いかけます！ 続いて13番トーカードット！ その後方で3番ホクオウボーダーと5番エアシャカールです！』

順位がほぼ変わらないまま大歓声の中走り抜けて第1コーナーへ。

ここから平坦な道のりが続くため、全員がペースをしつかりと意識する。

仕掛けどころを間違えると、最後の上り坂で一気にペースを落としてしまうからだ。

コーナーを回りながらレースプランを考え、第2コーナーを抜ける。

向こう正面からまた下り坂となる。そして、そこが1,000mの通過地点だ。

『1,000m通過時点でタイムは60.0ジャスト！ おおよそ平均ペースでしうか！』

『良バ場ですがそこまで速くないですね。これは前残りがありそうですよ』
下り坂を迎えて、ほんの少しだけペースが速まる。

しかし先頭で走るスワンナイトはあまりスピードを上げず、ゆっくりじっくり脚を溜めながら走っていた。

そして、そんな走りを見過ごすようなウマ娘たちではなく。

『第3コーナー前！ アグネスタキオンがスワンナイトとの差を詰めている！ 後ろからはエアシャカール、ホクオウボーダーも前に出てきているぞ！』

タキオンはペースが変わらないことにハロンで気づき、下り坂の勢いを使ってそのままペースを上げた。

脚の耐久性に怯えてペースを上げないウマ娘はもういないのだ。

それに反応してホクオウボーダーが少し動き、それを許さないエアシャカールが動き出す。

一気に差を詰められたスワンナイトは、足音を聞いてひい！ と小さく悲鳴を上げる。

彼女はまだクラシック級なのだ。オープン戦で連勝したおかげで宝塚記念に投票され、シニア級の有力ウマ娘の多くが不参加となったことで出走権を得た。

ただただ単純な話だった。経験が少なすぎた、これに尽きる。

ペースメイクが極端すぎたせいですぐに気づかれ、詰められてしまった。

しかし、スワンナイトもまたGイレースに出走できる実力者だ。早仕掛けで一気に出でてきたエアシャカール、トーカイドットに抜かされてなるものかと必死に逃げていく。

その差はもうクビ差かハナ差か、半バ身差ではあるが。

『スワンナイト追いつかれた！　しかし先頭はまだ譲っていないぞ！　第4コーナーに入った！　先頭は、アグネスタキオンか！　アグネスタキオン抜けてきたか！』

そんな戦いの中、内からスツと抜け出てきたのはアグネスタキオンだ。

出走前に観察したデータと自分のデータを検証し、今の競り合いの中で息をいれ、そして前に出た。

そのまま直線へと入ろうとする白衣の背中を見て、エアシャカール、トーカイドットはくつと悔し気な表情を見せる。

この競り合いでタキオンより先に前に出る作戦だったのだ。

抜け出して自由にさせるとそのまますっ飛んでいってしまうから。

しかしその作戦は既にご破算。最後の直線での末脚勝負にせざるを得なくなった。

『最終直線に入った！　仁川の舞台にはここから坂がある！　さあここから坂になるぞ！』

歓声を浴びながら下り坂を一気に駆け下り、グングン加速していくタキオン。

後ろからスワンナイト、エアシャカールらが追いかける。

そして外から突っこんできているのはホクオウボーダーだ。

『アグネスタキオン先頭！ 粘っているスワンナイト！ エアシャカール追いつけるか！』
そして外からホクオウボーダーだ！』

下り坂の加速。その恩恵を受けているのは皆同じだ。

タキオンは凄まじいスピードで駆けていき、それに合わせるようにホクオウボーダーがどんどん前に詰めていく。

エアシャカールたちがホクオウボーダーに並ばれたところで、タキオンは最後の200m。上り坂に差し掛かった。

ここでペースが落ちて差されるウマ娘は数知れず。

ぐつとターフを踏みこんだところで、声が聞こえてきた。

——タキオオオオ——
——行けエ——
!!!!!!

「相変わらずだね……！」

思わず笑みを浮かべると、今まで以上のパワーでターフを蹴り上げて坂を上つていく。

ホクオウボーダーも上り坂へと差し掛かって後ろから迫る。しかし距離が詰められ

ない。

速すぎる……！ 歯を食いしばって駆けていくが、どれだけ走ってもタキオンとの差は詰まらず、開いていくのは後ろだけ。

『アグネスタキオン先頭！ アグネスタキオン先頭！ ホクオウボーダー伸びているが追いつけない！ 独走状態のままゴールイン！ やはり強い！ これでGI4勝目です！』

そのままゴール板を一気に駆け抜け、歓声を浴びながら息を整える。

チラツと観客席に目を向けると、レースを見た興奮で誰もが顔を赤くして、満面の笑みでタキオンを見ていた。

「……ふっふっ」

思わず、といった感じで笑い出し、袖で口元を隠す。

「……なあんだ。可愛く笑えるじゃない」

楽しそうに笑うタキオンを見て、ホクオウボーダーは眉尻を下げて笑うのだった。

Story 30 : 夏合宿C

G I 4 勝目を挙げてシニア級1年目の前期を終えて夏合宿へと入った。

かなりいい調子のまま合宿になるのでとても有意義な時間になるだろう。

「トレーナー君、まだつかないのかい？ 変わり映えしない景色を眺めるのも飽きてきたよ」

この移動時間さえなければな！

去年同様、相変わらず俺の車で合宿所まで向かっている。

理由は一緒だ。研究道具をバスに乗せたくないから。

俺はドライブがてら車を走らせるのは嫌いじゃないから、疲れはするが構わない。

問題は隣でタキオンがぶーたれてくることだ。

運転するヒトならわかると思うが、助手席で不満をぶつくさ言われることは相当なストレスなわけで。

「去年も思っていたことだが、ラボを移すというのは面倒だな。トレーナー君、今から帰らないかい？ いつもの場所で研究しても結果に変わりはないと思うんだが」

ぐでつと背もたれに身を預けながら、途中で買った蜂蜜ドリンクを片手にけだるそう

に話してくる。

言いたい放題いってからに……。

「それにこの蜂蜜ドリリンク、濃いめでよかったよ。ふつうで頼んでもらったが甘さが足りない。次はもつといい甘味がほしいところだね」

車を走らせてすぐに喉が渴いたと言うから、トウカイテイオーおすすめとよく聞く蜂蜜ドリリンク。通称はちみーを買ってみたのだ。

タキオンにどうするか聞いたら買ってきてほしいというから、店員さんが初心者に勧めているやわめふつう多めを頼んで渡してやったというのに。

というか文句を言っているのにもう既に半分以上飲み干している。思いのほか気に入ってるじゃないか。

しかもニヤつと笑いながら言ってきた。

流石に腹が立ったので頭に手を置き、髪やら耳やら思いきりぐしゃぐしゃにかき回す。

「あー!? 何をするんだ! 耳と前髪は触らないでくれと前から言っているだろう!」
やかましいわ!

ひとしきり頭を揺らしまくったおかげで髪の毛はぐしゃぐしゃだ。

慌ててサンバイザーを下ろし、鏡を見ながら髪を整えだす。その姿を見て、ほんの少

しだけ溜飲が下がる。

「トレーナーくん？ やつてくれるじゃあないか」

櫛で髪をとかして整え終わると、サンバイザーをバン！ と音を立てて戻して俺を睨んでくる。

なんだ、やるか？ 言っておくが、俺はタキオンよりも弱いぞ。

「アツハツハ！ 当然だがあまりにも自虐がすぎるね。おっと、適当にはぐらかさうとしてもそうはいかないよ」

今日は鋭かった。

いつもなら適当に話題をずらせばそっちに意識がいくのに。

「私がやめろと言っていたところに触れるなんていい度胸じゃないか。合宿所についたら覚悟することだね。久々に君をモルモットにしてあげるよ」

いつでもモルモットにされてるだろ。

見ろ、今運転している俺の足を！

「緑色に光っているね」

おかげでトンネルの中だと内外から光が出ていて逆に走りにくいわ！

なんでパーキングエリアで飲ませてきたんだ本当に。

「運転のような小さい運動の時に筋肉がどう動くのかを確かめたくてね。まあ、もう

データを取り終えたから光ってもらわなくてもいいんだが。私も眩しいと思っているよ」

ひどく理不尽なことを言われたので、また頭をぐしゃぐしゃにしてやった。

「えー!? なんでこんなことするんだい!？」

ひどく不満そうに怒るタキオンなのであった。



さて、夏合宿へと参加するわけだが。

宝塚記念を走った後だからトレーニング自体は軽いものにする予定だ。

出走後から数日全休で、温泉やらマッサージやらで疲労をとったものの、念のためということで。

脚が脚だからな。万全を期していかなければ。

「それで? 軽いトレーニングというのがこれかい?」

そういつてタキオンが指さした先は海。

「とお〜〜！」

「ふおおおお〜〜〜！ いいですよお！ 燦燦と輝く太陽とウマ娘ちゃん！ ひよええええ〜！」

そこでビヨンビヨン跳びあがるフクキタルと、海の中で興奮しまくっているデジタルがいた。

他のメンバーは海外にいて帰国していないらしい。チームリーダーは何故かシュノーケルと浮き輪をつけているが、あれはなんだろうか。

「そもそもあれはトレーニングなのか、遊びなのか。まあ、あのトレーナーはそういうたものを好むからね。トレーニングなのだろうが」

今日の前で行われているのは、スラックラインと呼ばれるヒモを使ったトレーニングだ。

海外ではクライミングでの綱渡りのようなパフォーマンスなどに使用されていると聞いたが、それを海の上でやっている。

先輩のチームのリーダーがぶつとい丸太を海に突き刺して、そこを軸にヒモを縛っているんだが……うん、相変わらず規格外だ。

スラックラインはビヨンビヨンと伸縮するヒモ。フクキタルはそれを利用してトラップのように跳ね飛んでいるということだ。

流石のバランス感覚で、5cmぐらいはつかないはずのラインの上でジャンプしてそこに平然と降り立つ。着地してもよろめきすらしらない。

「フクキタルー、そろそろタキオンと交代だ」

「わかりました！ ではお見せしましょう！ マチカネテイクオフ！」

ビヨンと跳びあがり、一回転してキレイに頭から着水した。

なんだろう、大道芸を見せられている気分だ。

「まあ、いつてくるよ」

いつも通り先輩のトレーニングに首を傾げながら向かう。

フクキタルの補助を受けて丸太に乗り、ラインの上を歩いていく。

「ふうん、なるほどね……い」

体とラインが左右に揺れているが、バランスを保っている。

そのまま揺れを抑えながらゆっくり進んでいき、反対側の丸太までたどり着いた。

見ているだけでも難しそうだが、実際やるとやはり難しいようだ。顎に手を当てて考

え込む仕草を見させている。

「スラックラインは体幹を鍛えるのに効果的なんだ。これはいつものことだろ？」

先輩がそう話しかけてくる。

まあ、いつも先輩のトレーニングは体幹、体のバランスを重視しているからいつも通

りだ。

「それと同時に、ヒモが伸縮するから脚を地面に踏み込んで押し込むように進まなきゃならないんだ。これが結構効果的なんだよ。柔らかい場所できつちり地面を踏む脚の出し方が覚えられるからな」

ヒモは硬くないから膝にダメージもいかなしいな。先輩はそう言いながら、再び歩き出したタキオンを見る。

先輩らしいなあ。体の各所にダメージを与えないようにしつつ、しっかりと走りに繋がるトレーニングを考えて実践していく。

トレセン学園で真似をするトレーナーが多いわけだよ、うん。奇抜すぎるものは真似されないけど。ぱかプチダッシュとかね。

「大丈夫そうなら紐の上でジャンプしてみてもいいぞー。落ちる時は真つすぐ落ちろー」

タキオンがそれを聞いて真ん中に立ち、軽くぴよんと跳ねる。

すると着地した瞬間ラインが右に左に大暴れだ。慌てて両手を伸ばしてバランスをとっている。

「ああ、そうだ。ジャンプといってもフクキタルみたいなのはトレーニングというより遊びの面が強いからな。あれパフォーマンスだから」

え？ と先輩を見る。

「体幹をしっかりと鍛え上げればアレだけできるっていう証明なんだ。だけど、別に跳びあがって飛び込む意味はないし、ジャンプするぐらいならラインの上を駆け抜けた方がよっぽど効果的だと思うぞ」

タキオンも聞こえていたらしい。

じゃあなんでそんなことしているんだい？ じろつとフクキタルを見ている。

「楽しいじゃないですか！ 前向きな気持ちでトレーニングに挑むのが吉ですからね！」

「ま、そういうことだ。モチベーションとトレーニング、その相乗効果が一番だからな」

ニツコリ笑う2人を見て、やつぱり先輩とそのチームって変わっているんだなあと思うのであった。

Story 31: 夏合宿D

夏合宿も後半。残り1ヶ月を切った。

今日も今日とてトレレーニングに勤しむ俺たち。

「トレレーニングかい？　これが？」

竹ウマに乗りながら不満を垂れるタキオン。

海の中でえっちらおっちらとゆっくり歩行している。

学校まで竹馬を使って海を渡る人たちがいるという話を聞いたことがある。やってるのはそれだ。

想像以上に難しいらしく、何度もバランスを崩しては海に落っこちており機嫌が悪い。

砂との接地面に重りをつけているし水の抵抗もあって、思うように歩けないみたいだ。

「結構難しいですからね。慣れると楽しいですよ」

笑顔でぎぶぎぶと歩いてくるのはフクキタルだ。

バランスを崩す様子もなく、普通に歩くような速さで近づいてきた。

「走る時と同じで、正しいフォームが大事なんです。もちろん足を前に出す時も姿勢を意識します！」

「そうですよ！」

「そう言いながらひよいひよいと歩いていく。」

……フクキタル、タキオンの2倍ぐらい多く重りをつけていた気がするんだけど。デジタルも同じ量だ。それでシャカシャカ歩き回っているし。

チームリーダーに至っては4倍の重りをつけて、先輩の乗る水上バイクを走って追いかけている。意味が分からない。

「ふうん。走る時のフォームと同じような前傾姿勢。足の前方、蹄鉄がある部分を使った歩行。確かに地上を走ると同じだ。同じ側を動かす以外はね」

竹ウマは性質上、右脚を前に出すときは右手が前に出る。

緊張している時のような動かし方だ。武士みたい。

「まったく、毎度毎度おかしなトレーニングを思いつくものだね！」

ぶつくさ言いつつ一歩一歩前へと進む。

実際のところかなり上達していて、今では転ばずに歩くことは容易だ。スピードは遅いけど。

ここまでするのに1時間はかかっている。ようやくまともにトレーニングができて

いるといった状態だ。

コツを掴んで竹ウマ歩行トレーニングをしているタキオンを見ると、後ろから声をかけられた。

誰だろうと振り向くと、同期のトレーナーだ。

「よう。調子はど、う……ああ、うん。なるほどな」

水上バイクで走る先輩とそれを追いかける芦毛のウマ娘。

そして少し離れたところでわっせわっせと竹ウマで歩くフクキタルやタキオン、デジタル。

異様な光景を見て、何かを察したようだ。

「この前は悪かったな」

急に謝られた。

なんのことだと聞き返すと、バツが悪そうに頭をかく。

「ほら、タキオンとのことだよ。結構強めに言い過ぎちまったし、本来他のトレーナーとウマ娘にいろいろ言うのもすごい失礼だった」

他の同期にもやりすぎだつて怒られちまった。

そう言つて頭を下げられる。

言われた時は驚いたしどうしようかとは思つたけども。

特に問題も起きなかったし俺は気にしていない。むしろタキオンとこのことを見直すいい機会だった。

感謝こそすれ、恨んだり怒ったりしてはいないんだ。

「そう言ってくれると助かるよ。いやあ、俺の担当にもしこたま怒られてさ。タキオンがかわいそうだった」

かわいそう？

タキオンに対して全く使われなさそうな言葉だったから思わず首を傾げてしまう。

「いやなに。俺がお前に話をした後からさあ。タキオンの生活態度が急変したって担当から聞いてな。しかもちよつとそわそわしてるっつーじゃん。やつちまった！ と思った！」

新人なのになかったような口きいてよお！

同期と2人でゲラゲラ笑う。

「担当からそういわれてもう顔面蒼白だったわ。それで思わず事情を話したらすつげー怒られたってわけ。最近がんばってるのにつてさ」

失礼したわ、本当に。そう言って眉尻を下げた。

結果として俺たちにとつてプラスに働いたから別にいいんじゃないだろうか、うん。

「そうらしいな。よく聞かぜ？ タキオンがカワイク笑うようになったってな」

かわいそうと同じぐらい聞かない言葉だ。カワイイなんて。

いや、可愛らしいところはあるんだけど。他の人がそういうのは全く聞かなかった。悩みが解消されて余裕ができているってことなのかな、と思う。

「うっし、話は終わりだ！ 担当の調子を見に行くとするよ」

今度飲みに行くぞ、なんて言いながら去っていく。

タキオンもかなり変わったんだなあと思うのであった。



日々のトレーニングを続けていたある日。

ウマ娘たちの雰囲気がいつもと違った。

なんというか、浮ついているじゃないけど、楽し気というかなんというか。

何かあるんだろうか。近くで話をしているウマ娘たちに聞いてみる。

「おはようございます！ あ、タキオンさんのトレーナーさんだ！」

「今日は光ってないんですねえ、脚」

いつも光っているわけじゃないよとツッコむと、くすくす笑われる。それはさておき。何かあるのと聞いてみる。

「え？ 何もありませんよ」

あれ？

じゃあなんでこんな雰囲気なんだろう。

こういつた浮つきには厳しいエアグルーヴも、周りの様子を見ているだけで特に何も言っていないし。

「あ、そういうことですか！ 今日近くで夏祭りがあるんですよ！」
「毎年トレセン学園の合宿に合わせてやってくれるんです」

だからか！ 去年も来ていたが知らなかった。

あの時はタキオンの脚で必死だったからなあ。

「トレーナーさんもタキオンさんと一緒に行ってみたらいいですよ！ 花火も見れて楽しいですから！」

「トレーナーさんのほうが花火になったりして」

薬飲まされてばっかりだからな！

2人とひとしきり笑って別れる。

そうか、夏祭りかー。最近トレーニングと研究尽くしだからな。ちよつと気分転換さ

せてみようか。

というわけで夏祭りへ足を運んでみた。

「ふうん。こういつた催しをやっていたんだね。知らなかったよ」

顎に手を当てて人が多いな、なんて呟いている。

相変わらず人混みが苦手なようだ。

ところでタキオン。

「なんだい、トレーナー君」

浴衣持ってきてたの？

「ああ、これかい？ 近くの呉服店が合宿所にサンプルとしてくれたみたいだね。何故か他の娘たちと一緒に着替えさせられたんだよ」

動きにくいっつたらないよ、と肩を落として困った様子だ。

似合っているよと声をかけると、ふうん？ と俺の顔を見る。

「こういつた衣装が好みなのかい？ 確かに僅かながら高揚しているようだね。どれ、少しばかりデータを」

ニヤリと笑いながら近寄ってくるので、頭にチョップを叩きこんで先に歩く。

「トレーナー君！いきなりなんなんだ君は、急に頭を叩いて。それに見たまえ、この靴を。下駄なんだぞ？もし転んでしまったらどうするつもりなんだ」

ぶつくさ文句を言いながら歩いてくるタキオン。

大人をからかうんじゃないよと言って、こちらに追いつくのを待つ。

「からかっているつもりはないよ。ただ事実を述べているだけで……うん、やっぱり歩きにくいな。慣れない靴を履くものじゃないな」

困った様子でカツカツと足踏みして気にしている。

鼻緒が擦れてでケガをしたりする可能性もあるが大丈夫なのだろうか。

「ああ、それは大丈夫さ。靴ずれ用のクリームを塗っているからね。ウマ娘用のものだし、問題ないだろう」

なら大丈夫か。

しかし歩きにくいとなると困るな。

屋台を練り歩く予定だったが、一旦戻ろうか。

「いや、なんとかなるだろう。トレーナー君、手を貸したまえ」

手を差し出すと、手首を掴まれた。

そして俺を支えに何歩か歩き、満足気に頷く。

「これなら問題ない。ほら、トレーナー君。案内したまえ」

腕を揺らして催促されたので、このわがまま放題のお姫様をエスコートすることになった。

タキオンはこういった催しにあまり参加していなかったようで、ぶつくさ言いつつも楽しんでる。

「にんじん飴ね。トレーナー君、買ってくれたまえ」

「ん、なるほど。これはいい糖分補給だ。中のにんじんも美味だよ。少し食べるかい？」
「これが金魚すくいか。こんな薄いものですくい上げるんだね」

「……トレーナー君、もう一回やるよ」

「ふうん、どうだい？ やったことはなかったが、計算してしまえば取れるものさ。ほら、もう一匹……えー!」

「ふむ、射的か。銃で景品を打ち落とす。少しばかり野蛮だね。それが味なんだろうが」
「なあトレーナー君。あれ固定されていないか？ 明らかに動かないんだが。そうとしか説明がつかないよ」

「……君の先輩は細工でもしたのか？ あんな簡単に落とすなんて。いや、あそこのリーダーをアシストしたからか」

いくつか屋台を回っていき、タキオンと俺の手が塞がったところで一休みだ。

近くにあるベンチに座って買い集めた食糧を頬張る。

「なんだ、普通の焼きそばだね」

プラスチックのパックに入った焼きそばを一口食べて首を傾げている。

屋台の料理はそんなものだ。お店をやっている人じゃなくても料理を売ったりしているから。

「ふうん。だが、それを知っていて買ったんだらう？」

そうだよと言うと、少し考えこむ仕草をしてまた一口食べる。

「面白いものだね。おいしいわけじゃない、けれども雰囲気でつい買ってしまふ。夏祭りという熱気に浮かされているわけだ」

そしてそれを楽しんでいるということか。そういうことだよ。

ラムネのビー玉を押し込み、プシュツと軽い音と共に泡が出た。一口飲んで炭酸とシンプルな甘さを楽しむ。

たこ焼きとラムネはあんまり合わないなあ、なんて思いながら。

「感情というものはプラスにもマイナスにもなる。学園祭も夏祭りも、どうやらプラスに働くらしい」

楽しそうに話して、タキオンもラムネを口にする。

2人でゆっくり食べて、夏の熱さと祭りの熱気を感じていると周りの雰囲気少し変わる。

ひゆるるくと音が聞こえ、空を見上げると花火が上がっていた。

みんなが空を見てわあ！ と声を上げたり、写真を撮ったりしている。花火が上がっただけで、空気がさらに楽し気なものに変わっていく。

「……綺麗な光だね」

チラ、とタキオンの横顔を見る。穏やかに笑みを浮かべて、瞳に花火を映していた。そうだな、と一言呟いて俺も花火を見る。

様々な色に輝きながら咲き誇る花火を眺めて、ゆったりとした時間を過ごすのだった。

Story 32 : 秋に向けて

夏合宿も終えて、秋のGIシーズンへと入った。

9月から年末にかけて出走予定のレースは、天皇賞秋と有馬記念。

コンディションを整えながら10月後半に備えるという日々だ。

合宿中に体幹をみっちり鍛えたこともあってか、とにかく走りに自信が見えるようになった。

コーナーでするすつと負担なく加速できるようになったし、精神的にも安定しているからか元々広かった視野がさらに広がっているように見える。

他のウマ娘との模擬レースでそんな感じなので、トレセン学園内では天皇賞秋での優勝候補筆頭として見られているらしい。

「はっ……はっ……」

そんなタキオンは現在スタミナをつけるべく走り込みをしている。

そして俺も一緒に走っている。併走できないからペースはもつともつと遅いが。あと既にぜひぜひ息切れしながらだ。

何故一緒になって走っているかという点、いつものごとくデータをとるためだ。

どんなデータなのかというと。

「ほら、トレーナー君！ がんばりたまえ！ 一気にくるんだ！」

タキオンの声を聞いて、顔を上げて必死に走る。

ヘロヘロのままタキオンを追い抜き、少し走ってからべちよつと倒れた。ウッドチップが顔に刺さって痛い。

「以前よりもスタミナはついたようだね」

ニヤリと笑みを浮かべながら俺のふとももやふくらはぎをチエックする。

相変わらずタキオンの薬の効果で蛍光色に輝いているし、肉眼で筋肉の収縮がわかるというのもなんだか気持ち悪いところだ。

「ふむ……成人男性でも声援の効果はあるんだな。ウマ娘とヒトはやはり同じような……」

ぶつぶつ言いながらメモを取り、またぺたぺたと脚を触る。

この実験というかデータ収集は、以前から研究している感情による能力向上についてのものだ。

疲弊しているところに声援を送ると能力の向上が見込める。それはウマ娘もヒトも同じかという検証なんだとか。

相変わらず何がどうなのかは理解していないが、満足そうにしているからまあいいか

と思っっている。

「よし。トレーナー君、立ちたまえ。運動してすぐに腰を下ろすと筋ポンプ作用が働かず静脈に血液が」

はいはいと適当に返事をしながら、差し出された手を握って立ち上がる。

相変わらず専門知識で正論をぶつけてくるんだから面倒くさい娘だ。

「君の体のことを気にして言ってやったのになんだその反応は。いいかいトレーナー君、そもそもだね」

「あの……」

詰め寄ってくるタキオンの頭を押し込んで追及を阻止していると、誰かに声をかけられた。

2人でそちらを見ると、困った様子のカフェがいた。

「おや、カフェじゃないか。どうしたんだい？」

「走るのに、邪魔です……どいてください」

あ、と声が漏れる。

ウツドチップのトレーニングコースのど真ん中でデータをとったりしていたからな。

しかも騒いでいるし。ごめんと声をかけてそそくさとコースの外側に行こうとする、何故かタキオンがムツとした。

「なんだ、トレーナー君。カフェには素直に謝るじゃないか。私にもきっちり謝罪したらどうなんだい。うん？」

ぷんすかタキオンになつてしまった。

ぐいぐい詰め寄ってくるタキオンにどうどうと両手を突き出しながら後退する。

「私は牛かなにかなのかいトレーナー君。大体君はいつもカフェに甘いと思うんだが。自分の担当じゃないウマ娘に優しくして担当はぞんざいに扱うというのはトレーナーとしていささか問題だよ」

「……………」

俺の腹にぶすぶすと人差し指を突き刺しながら不満をつらつら述べられる。

悪い悪いと謝っていたら、謝罪が雑だとさらにヒートアップした。

カフェもじつとりと俺たちを見てくるし。いやはやどうしたものか。

「……………？ トレーナーさん、コーヒー飲むんですか……………？」

ふと俺たちの後ろを見てカフェが首を傾げた。

コースの外にひとまとめにして置いてある荷物の中に缶コーヒーが置いてあるのを見つけたんだろう。

タキオンはそれを見てさらに苦々しい表情で俺を睨んでくる。

「そうさー！ このモルモット君はコーヒーを飲むんだよ。しかも今日買ったのはブラッ

クサー！ 何を考えているんだい君は」

コーヒーというか苦いもの全般を苦手としているタキオンは、俺がたまにコーヒーを
買うと物凄い文句を言ってくる。

今日もトレーニング前にひと悶着あつてからスタートしたのだが、またぶり返してし
まった。

「そのメーカー……おいしい、です……」

カフェがうんと頷くので、俺もそうだねと返す。

するとぶんすかタキオンがさらにむつつりしてしまった。

「なあ、トレーナーくうん？ 私のトレーナーなら、私が苦手なものを見せないでほしい

んだけどねえ？ コーヒーなんて飲めたものじゃあないよ」

「……タキオンさんは、大人の味がわからないだけです」

「ふうん？ あれが大人の味だというのかい？ それなら紅茶の方が香りもいいし高貴
な味がするだろう」

「タキオンさんのアレは紅茶じゃない、です……ただの砂糖……」

ふうん？ なんですか……。

何故か紅茶党とコーヒー党のバトルが始まりそうになつている。

遠目に見えるカフェのトレーナー……まあ先輩が心配そうにこつちを見ていた。い

や、すみません本当に。

色々と言ひ合いをした後に、併走というか模擬レースというか、そういうことになった。カフェはあんまり乗り気じゃないけど。

勝つたり負けたりいい勝負をしていたので、良質なトレーニングになってよかったよかった。

今後も時々やつてもらおうことにしよう。

「さてトレーナー君。この薬を飲みたまえ。ほら、飲みたまえよ」

なおタキオンのフラストレーションはまだ溜まっていたのでデータ採取のためにまた走らされるのだった。



天皇賞秋が近づいてきたある日、タキオンと俺はトレーナー室でレースの相談をして
いた。

「中山レース場。距離は2,000m。当日の天気予報は晴れの確率が高く、良バ場にな

る、か」

パソコンでまとめた情報をプリントアウトした資料を片手に、タキオンは試験管を振って薬を作っていた。

現段階では走りやすいバ場になるだろうという想定だ。これでレースプランを構築していいと思っている。

今回東京レース場が改修工事を行っているため、中山レース場での開催だ。

「出走メンバーは……おや、シャカール君も出るんだね」

枠番は決定していないが、出走登録者のリストが公開されていたのでそれを見る。

タキオンとも交流が深いエアシャカールは前回の宝塚記念の5着が響いたのか7番人気だ。

トレーニングしている姿や普段の生活を見る限り調子はよさそうだから、上位入着はしつかりしてくると思うが。

「ふうん、なるほど。彼女が注目の若手というわけかい？」

トントンと指さすのは今年のダービーで2着だったシンボリクリスエス。前走の神戸新聞杯もかなりの余裕を持たせての1着だったことから期待されて4番人気だ。

「そしてシニア級だよこの2人か」

シニア級でテイエムオペラオー、メイショウドトウとしのぎを削っているミヨウオウ

トプロは中山レース場があまり得意じゃないため、3番人気。

2番人気はシーティエム。彼女は前年に桜花賞と秋華賞を勝っているティアラ二冠だ。タキオンたちクラシック路線のウマ娘とは別に活躍したウマ娘でもある。

「私は1番人気なんだね。まあ、成績だけ見るとそんなものかな」

タキオンは勿論1番人気だ。

大阪杯に宝塚記念と中距離GIを2勝している上、勝ち方も先行抜け出しで上がり3Fは最速。

そりゃあ1番人気になるだろうというものだ。

「枠番が問題だね。囲まれても抜け出せるだろうが、あまり囲まれても困る。真ん中ぐらいがほしいところだね」

作戦自体は先行抜け出しで変わらない。問題は枠番だ。

内側はあんまり嬉しくないよな、なんて話をしながら枠番発表を待つという話で終わった。

結果。

『1枠2番、アグネスタキオン！』

なんでだよ！

梓番発表の生放送を見ながら頭を抱えることになるのであった。

Story 33 : 天皇賞秋

天皇賞秋。

レース場改修の関係から、今年は中山レース場にて行われることとなった。

クラシック級、シニア級共に有望なウマ娘たちがそろっており、中山レース場は大いにぎわっていた。

控室でパドックでのお披露目まで待っているタキオンは、穏やかな時間を過ごしている。

俺は直前まで芝の状態などを確認していて、隣に座る彼女はそれを見ながらレース展開を考えているようだ。

「天候晴れ、芝は良。しかし連続開催中で荒れ気味、と」

最内はそれまで走っていたレースの関係で荒れていることが非常に多い。

そのため、ほんの少し外を走りたいと思うところだが、キツくマークされるのは目に見えている。そう簡単に外には出られないだろう。

ならそれでいいと考えて、内側からレースを進めるといふ算段なのだ。それしか道がないともいう。

「やるだけやってみよう。なに、最終直線になれば自然と道が開くとも少しつついてみようじゃないか。」

そう言いながら、不敵に笑うのだった。



地下バ道をしてこてこと歩いていく。

今日も調子がよく、脚も精神も万全の態勢だね、とタキオンは思う。機嫌よく歩いていると、後ろから強い視線をいくつも感じる。

1番人気でG I 2連勝。警戒されているわけだとくつくつ笑うと、さらに警戒が増したのか圧が強まった。

「やれやれ、やはり私は注目されていないほうが気楽だよ」
以前みたいにね。

トレーナーに会う前の環境を懐かしんでいると、地下バ道を抜けターフへと降り立つ。

歓声、熱気、芝の香り。全てを全身に受けながら。自分の中の熱を感じながら歩いていく。

『今年は中山レース場にて行われることとなりました、秋のGIレース天皇賞。芝2、000mです』

『条件は皐月賞と同じですね。しかし、春とは芝の状態が違います。9月の開催から時間が経っていますので、少しタフなレースになるかもしれません』

普段中山レース場はスプリンターズステークスで一旦お休みになるが、今回は東京レース場が使えない分中山レース場を使っている。

そのため、元々芝を張り替えたばかりの9月開催からそのまま使用している。新調したばかりの芝は走りやすく速いタイムが出やすいが、今は10月後半だ。

手入れされてはいるが芝は荒れており、タフさが求められることになるだろう。タキオンはパワーではなくスピードに特化していることを自覚している。

加速力ではなく、飛び抜けた最高速度を維持して一気に走り抜けるタイプだ。芝の状況はやや不利、枠番も不利。

だがまあ、なんとかなるだろう。楽観的に考えながら、体のウォームアップをする。トレーナー君の適当さが移ったかな、と苦笑するのだった。

『さあ始まります中山レース場、芝2, 000m。天皇賞秋です』

ファンファーレが鳴り、実況解説が準備をし始めた。

各ウマ娘も続々とゲートインしていき、出走の時間が近づいていく。

タキオンはぐるりと見回す。

エアシヤカールが横目で見ていた。チツと舌打ちをしてゲートへ入る。

シンボリクリスエスも見ている。少し緊張しているようで、グツと胸の前で手を握った。

ミヨウオウトプロは流石の貫禄だ。とても落ち着いている。

シーティエムもよし！ と拳を作り、ゲートイン。気合は十分のようだ。

誰もが勝ちたいと思っているんだね。

そんな当たり前なことを考えながら、タキオンはゲートインした。

(私は勝ちたい、とは思っている。だがそれよりも)

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました』

——ガタンッ

『スタートしました！ 出遅れもなく揃ったスタートです』

『跳び出したのは12番ユーレイドール！ 10番シーティエムと4番ブルーアラミタ

マもハナを主張しているようです！』

ゲートが開き、出遅れなく始まったレース。

まずは逃げウマ娘たちのハナの取り合いだ。思いきり主張をしたのはユーレイドール。2番人気であるシーティエムと横並びになり、抜きつ抜かれつのデッドヒート。

ユーレイドールはハナを取らないと勝負にならない。それぐらいタキオンやシーティエムたちと実力差があると思っっている。

だからこそ、つつかれてスタミナを消費させられてでも先頭に立つために必死に走っているのだ。

彼女の勝負は第1コーナーまで。そこまでに先頭を取れなければレース終了。そんな意気込みで走っていた。

その戦いを横目に見てスツと下がったのはブルーアラミタマ。

スタミナがなくなると思ったのが1つ。

もう1つは背後にタキオンがいるからだ。ここで自分が前に出てしまうと、タキオンがかなりいいポジションに収まる。

それは避けたい。先行でも走れる彼女は、マークを優先することにしたのだった。

しかし、コーナー前でさらに別の展開を迎えることになった。

『第1コーナーに入りました、先頭を取ったのはユーレイドールです！ その1バ身後

ろにはブルーアラミタマ！ その後ろ13番ヒガシノイナズマ！ そして2番アグネスタキオンとシーティエムが並んでいます！』

シーティエムがユレイドルへプレッシャーをかけるのをやめて後ろへ下がる。

そこに合わせてブルーアラミタマが前に出たのだ。タキオンのマークを後方に任せ、自分が前に出ることを選択。

しかしその後ろで待機していたヒガシノイナズマがブルーアラミタマを追いかけってしまった。彼女も抜け出しておきたかったのだ。

結果、前目につけていたタキオンは4番手で先行している集団の先頭に。

シーティエムがその外側について併走するという形になった。

(予想外だな。いい方向に、だが)

タキオンは僥倖にめぐりあったな、と思いながらコーナーを回っていく。

外にいるシーティエムからの圧はやや強いが、その程度なら問題はなかった。

誰もが想定していない、1番人気と2番人気がフリーの状態が形成されてしまったのだ。

『第2コーナーを抜けて向こう正面へ！ 1, 000m通過は59.3！』

『中々比較しにくいですが、平均ペースよりやや速め程度でしょう。この後すぐに勝負どころが来ますよ』

速すぎず、遅すぎず。

そんなペースで走っていくユーレイドールだが、後ろとの差はほとんどない。

隊列はかなりぎゅつとした状態で進んでいる。そしてこのレース場は、残り1,000mほどから激しい攻防が始まるのだ。

第3コーナーに差し掛かるところで、後方でのつき合いが始まった。

外に出るためのプレッシャーであったり、前に行かせてスタミナを切らせるための挑発であったり。

問題は先行している人気のウマ娘たちへの影響が薄いことだろうか。

コーナーを回りながら、先頭を走るユーレイドールは早仕掛けをした。

直線は短い、ならばここから攻める！

少しずつ後方との差を付け始めたのだ。

『ユーレイドール少しづつ前に出る！ブルーアラミタマはペースを上げない！ヒガシノイナズマも下がっている！』

ユーレイドール以外は脚を溜めるべくペースを変えずに走り、バ群へと埋もれていく。

タキオンやシーティエムたち集団はペースが上がっており、第4コーナーに入ったところでブルーアラミタマたちへ完全に追いついた。

バ群と合流した2人はそれぞれタキオンたちを確認して、ブロックできるようにと考えていた。しかし、そんなことは彼女たちも分かっている。

(中山レース場。逃げウマ娘。隣、前方2人。ふうん)

タキオンは計算式を作り、解き、そして最適なルートを導き出す。

一度だけ大きく息を吸い、そして吐く。

そして一瞬、ひゅつと息を吸う。

「——ふっ」

ブルーアラミタマたちが警戒している中、1人分開いていたスペースに流れるような走りで滑り込み、そのまま抜け出す。

「なっ!?!」

「やばっ!」

美しいフォームで加速しながらコーナーを回っていき、ぐんぐん詰めていく。

ユーレイドールは後ろから近づいてくる足音を聞いて心臓が張り裂けそうになる。

先行抜け出しで近づいてくるウマ娘! ああ、娘だ!

『第4コーナーでアグネスタキオンが抜け出した! ユーレイドールへ差を詰めながら最終直線へ入っていく!』

観客たちが大音量で声を上げるホームストレッチ。

コーナーを回り終えたウマ娘たちは、最後の勝負だと一気に駆け抜ける。

『最初に抜け出したのはユーレイドール！　しかしすぐ後ろにアグネスタキオン！　いや、もう抜けた！　抜け出した！　先頭はアグネスタキオンだ！』

加速したまま直線に入ったタキオンは、遠心力に身を任せて走りやすい場所に体を持って行った。

そして誰にも邪魔されない直線コースに出て、ユーレイドールを歯牙にもかけずに一気に駆け抜ける！

『内からシンボリクリスエス！　シンボリクリスエス上がってきた！　ミヨウオウトプロとエアシヤカールも後方から伸びてきている！　シーティエムも粘る粘る！』

有力ウマ娘たちがコーナーを抜けたところで一気に上がっていく。

特にシンボリクリスエスは頭一つ抜け出すと、そこから半バ身、一バ身とぐんぐんスピードが速くなる。

その時、大きな声がターフに響く。

——タキオオ——！　突っ込めエ——！

ふつと嬉しそうに笑うタキオン。誰よりも速い、最速の脚をもつウマ娘。

シンボリクリスエスがぐんぐん伸びる。

しかし、タキオンはさらにもう一段階、風を切って加速した！

『アグネスタキオン！　なんという速さだ！　シンボリクリスエスが伸びているが差は開いていく！』

シンボリクリスエスはグツと齒を食いしばる。

今出せる全力。全てを使っているというのに、目の前で走る白衣のウマ娘はそれ以上に速かった。

最高速度が、最大値が違う。それでも顔を下げず、必死に追いかける。

『アグネスタキオンまだ伸びる！　すごい末脚です！　そのまま突き放してゴールイン！　光のような速さですアグネスタキオン！』

一気にゴール板を駆け抜け、大歓声の中タキオンは息を整える。

そして自分が1着なのを確認すると、トレーナーを見てニヤリと怪しく笑い、機嫌がよさそうにウイナーズサークルへと歩いていった。

そんなタキオンを見て、相変わらずだな。でもよくやった！　トレーナーも満面の笑みでウイナーズサークルへと走っていく。

光のような速さ、トレーナーとの絆。

すごいな。いいな。共に走った彼女たちは、眩しそうにタキオンの姿を見つめるのであった。

Story 34 : クリスマス

天皇賞秋を終え、年末最後の大一番。有馬記念までの休息となった。

今年に入って負けなしのG I 3連勝。雑誌の特集などでは『テイエムオペラオーに次ぐ年間無敗か!?』なんて書かれている。

タキオンは取材とか受けないしレース後の勝利者インタビューも受けずに帰ってしまふからあんまり情報ないけど。

今読んでいる雑誌も、レースから見たタキオンの印象やら強さやらを書き記したもので、彼女自身の心情や展望はない。

まあ、ウマ娘の出せる最高速度のその先、果てをを目指しているなんて言ったら危険だとかレースに失礼だとか言われかねないからな。

タキオンは言動で批判されやすい。前のインタビューも大変だったなあ。

ふう、と息を吐いていると、目の前からふうんと声が聞こえてくる。

「なあ、トレーナー君。情報収集はいいことだと思うが、今は昼食の最中だよ。早く食べたまえ。んむ」

タキオンがオムライスを食べながら注意してきた。

今は昼時で、俺たちを含めて多くのウマ娘たちがカフェテリアで昼ご飯を食べているところだ。

遠くで先輩やフクキタルたちがわいわい楽しそうに食事しているのも見える。

雑誌を置いて一口コーヒーを飲み、ホットサンドを口へと運ぶ。

アツアツのパンの中に入ったチーズの塩気とトマトの酸味がうまい。今度ホットサンドメーカーでも買おうかと思うぐらいだ。

咀嚼して飲み込む。もう一口とコーヒーを掴むと、対面のタキオンがものすごく不満そうな顔をしている。

「きみい、当てつけかい？ まったく、私の前でコーヒーを飲むのはやめてくれといつも言っているのに」

ぶつぶつ文句を言うタキオンを無視して一口。

うん、コーヒーだ。満足してカップを置き、不機嫌なタキオンを対面にまたホットサンドを食べる。

「……………」

同席していたカフェがコーヒーを飲みながら、俺とタキオンを見てげんなりしていた。

手元には弁当が置いてある。俺が今日の朝に作ったものだ。

なんでこんな状況になっているのかというと、タキオンが弁当の具にケチをつけてきたからだ。

「今日は魚の気分じゃないな。煮物も違うね。玉子はいいだろう」

わざわざトレーナー室で弁当を開いてそんなことを言うものだから、腹が立ったので弁当を強奪。

髪の毛をぐしやぐしやにかき回してからカフェテリアまで引きずってきた。

そしてちようどそこにいたカフェに食べてといつて弁当を渡したというわけだ。

毎日早起きして弁当を作つては朝昼夕と渡しているのにこのマッドウマ娘ときたら！

憤慨しながらホットサンドにかぶりつく。

「まったく心が狭いんじゃないかい、トレーナー君。ちよつと弁当のことを口にしたらけだろう。確かに腹が立つような言いかたをしたかもしれない。だけどね、別に食べたくないといったわけではないじゃないか」

「タキオンさん……またお弁当で怒らせたんですか……」

弁当のことでタキオンをしこたま説教するというのはよくあることで、月に1度は頭をぐしやぐしやにしている。

わざわざ作った人の目の前であーだこーだと言つてくるわけだからな。そりゃあ怒

るわ。

「だって今日は魚の気分じゃなかったんだよ。カフェだってあるだろう？ 今日紅茶が飲みたいという日が」

「いえ、ないです……」

「例えが悪かったね。肉が食べたい、魚が食べたい。そんな日があるじゃないか。弁当の内容がその日の気分には合致しなかったという話なんだよ」

タキオンなんでもいいって言っただろ。

「なんでもいいけど気分的にはそうじゃなかったんだ」

「……こどもみたい、ですね」

ついにカフェからも言われてしまった。子供みたいだと。

えー!? と驚いているが、そりゃあそうだろうと言いたくなる。

子供がいるお母さんたちのすごさというか、がんばりがよくわかる毎日だ。尊敬するわ、本当に。

「……いつも喜んで食べてるのに……今日は駄目、だったんですか」
カフェが不思議そうに首を傾げながら弁当をつつく。

あれ、そうなのか？

「別にそんなことはないよ。自由時間がきたから喜んでるだけさ」

「……おかず交換」

「おっと、カフェ？　　そういえば新しいものを作ってみてね、飲むと一瞬で疲労が回復するドリンクなんだが」

何かを言おうとしたカフェにペットボトルを突き出しながらまくし立てている。

おかずが何かあつたのだろうか。

「素直に言えばいいのに……」

「困るねえカフェ。そういうのは私が時を見てするものじゃないか。ほら、これをあげるから飲みたまえ」

「いりません……」

押し付けられているドリンクを押し返しながら弁当を食べ進めるカフェ。

なにがなんだか……首を傾げながらホットサンドを口にするのだった。



数日後。今日はクリスマスだ。

トレセン学園、というかカフェテリアではクリスマスパーティーが開かれている。

タイキシヤトルやシーキングザパールのようなパーティー好きや、ティエムオペラオーのような目立つのが好きなウマ娘たちがこぞって楽しんでいた。

俺はすぐ後に控えた有マ記念に向けて情報収集だ。

自分の部屋でこたつに入りながらパソコンを使って天気やらなにやらを確認していると、チャイムが鳴る。

もう夜になるが……玄関に行つて扉を開けると、タキオンが寒そうにして立っていた。

「メリークリスマス、トレナー君。かなり寒いから部屋に入れてほしいんだが」

ふるふる震えているタキオンを慌てて室内に入れる。

雪が降つてない分まだマシかもしれないが、今日はかなり寒い。

体調を崩さないか心配だが……何しに来たのだろう。

とりあえずこたつで温まっているタキオンにお茶を出す。

「おや、助かるよ。ふうー、ふうー」

両手で湯呑を持ち、手を温めながらお茶を飲む。

ほっと息を吐いたところで、どうしたのかと聞いてみた。

「今日はクリスマスだろう？ だからプレゼントでもと思ってね」

ニヤリと笑うタキオンが鞆から何かを取り出す前に。

あ、いらぬのでお引き取りをと言つてこたつから引つ張り出す。

「えー!? こんな寒い中外に放りだすなんて正気かい!? 鬼! 悪魔! モルモット
!」

慌ててこたつにしがみつきの、そのままずるとこたつの中に引つ込んでいく。

くつ、ウマ娘のパワーには勝てん!

観念して手を放し、俺もこたつに入ると不満そうに鞆から何かを取り出した。

「まったく、ひどいじゃないか。プレゼントをと思つてわざわざ来てやったのに」
はい、と箱を渡された。きちんと包装されている。

開けるよと声をかけて包装を取り、中身を取り出す。

これは……アロマキャンドル?

「香りというのも効果的だと聞いてね。髪に使うトリートメントも作ったことだし、こ
ういったものもどうかたと試作したわけだ。丁度いいからプレゼントにしてみたん
だ
よ」

なるほどなーと頷く。

とりあえずつけてみようか。キッチンからガストーチバーナーを持つてくる。

「おいおいおいトレーナー君? それはいささか強力すぎやしないかい?」

タバコ吸わないからライターみたいなものがないのだ。

とりあえず遠目からちよつと火を拭かす。

ボシュつと火が噴出し、アロマキャンドルのひもに火がついた。

「時々豪快というかなんというか、やりすぎな時があるねえ君は」

タキオンに小言を言われつつ、アロマキャンドルを堪能する。

「火のゆらぎはリラックス効果があるというのにはよく聞くからね。君にとつてはいい匂いがするはずさ。私生活を調べたからね」

何やらものすごい気になることを言われたが、とりあえず匂いを嗅いでみる。

ふむ、これは中々……何の匂いだこれ？

臭いとかではないけど、嗅ぎなれた匂いというか……。

「心当たりがあるかい？　なに、君が毎日使っているものの匂いだよ」

はて。思わず首を傾げてしまう。

毎日使うもの……？

「ククク……察しが悪いね。まあ、日常的に使うものだ。鼻が慣れてしまうか」

これだよ、と鞆から取り出されたものは何かのボトルだ。

中身はどろつとしていて……いやこれシャンプーだな!?

「アツハツハ！　そうだよ、君が使っているシャンプーさ！　あとは洗濯で使う柔軟剤

の香りも入れたかな」

どうりで嗅ぎなれてるわけだ。

いつも使っているシャンプーと柔軟剤などなど、俺が日常的に使っているものの香りがするキャンドルのようだ。

「こうやってきちんと楽しむのもまたいいだろう?」

満足気に言われるが、なんというか、肩透かしというか。

「なんだよー、いいものだろう。せつかく君にとっていいものをも思っただけでもテストして完成させたのに」

最初はすごかったんだぞと、実験当初の話をされた。

どうやら刺激臭がする異物になってしまったようで、大変だったらしい。

理科教室でこっそり作っていたから謎の異臭騒ぎになったんだとか。そういえばこの前変なおいがするとか何とかでトレセン学園の医者が集まっていたな。

タキオンの仕事だったのか……明日理事長に謝ろう。

ともあれ、俺のために作ってくれたのは事実。

ありがとう、うれしいよとお礼を言う。

「律儀だな、君も。しかしそうだね。前にカフェにも言われたが、言葉に出してみるとするか」

そう言って改まってこちらを見直す。

「トレーナー君、いつも感謝しているよ」

そう言って、すぐに顔をそらしてしまった。

どうしたんだ、と声をかけると、目を泳がせる。

ほのかに、顔が赤い。

「待ってくれ。これは想像以上に恥ずかしいぞ」

あまり見せることのないレアな一面だ。

なんとというか、普通の少女らしくて新鮮な気持ちになる。

おれも感謝しているよと言いつ返すと、うう、と呻いて顔を手で覆った。

「やめてくれよー、トレーナー君。なんだか改まると恥ずかしいじゃないか」

珍しく本気で照れるタキオンを見て、また距離が近づいたなと感じるのであった。

Story 35 : 有マ記念

有マ記念。

年末の風物詩であり、ファン投票によって出走が決まる最後のグランプリレース。独特な緊張感と高揚感に包まれる中山レース場に俺たちはいた。

「いい雰囲気だ。そうは思わないかい、カフェ」

「……集中したいので、少し静かにしてもらえませんか」

地下バ道を歩いていく中、タキオンはカフェに話しかけていた。

前日のインタビューでは、名指しで『ライバル』だと発言して世間をにぎわせている通り、タキオンはカフェに注目している。

なにせ、前年の有マ記念、そして今年は天皇賞春にも勝利。凱旋門賞にも挑戦していたのだ。

「うん、調子はいつも通り良さそうじゃないか。君は私のライバルなんだ、全力で頼むよ」

そう言って手を差し出す。袖が余り過ぎて見えないけど。

カフェはそんなタキオンを見て、少し考えこむそぶりを見せる。

「……私は、踏み台になるつもりはないです」

「……ふうん」

「あなたを超える。そして、あの子に追いつく……負けません」

燃えるような闘志を瞳に宿して、カフエはタキオンの手を握った。

先に行きますすといつて地下バ道から出ていくと、その背を見ていたタキオンは満足そうに頷く。

「うん、うん。やるべきことはやった……うん、滾ってきたぞー」

タキオンの頬は少し赤く、体が軽く震えている。武者震いだろう。

爛々と目を輝かせて、こちらにぐりんと視線を向けた。

「有意性のある干渉効果は全て揃えた！ 勝ちたいと思う相手も、感情も、全てね！」

「果てを見る時がきたようだ、トレーナー君！ これで越えられなければ、がっかりだよ……！」

自信満々に、やる気に満ちた表情で俺に宣言する。

行つてこい！ 俺がそう告げると、タキオンは力強く頷いてニツと笑った。

「今日は目を離すなよ、トレーナー君！」

そう言つて、タキオンは空気が震えるような光へと走つていったのだった。



『さあ今年もやってまいりました。年末中山の風物詩、有馬記念。人気投票で上位にいるウマ娘しか出走できない、真正銘誰もが認めるウマ娘たちのレースです』

大歓声と熱気の中、タキオンは体を動かして温めながら出走者を見た。

人気トップのウマ娘たち、それは実力もトップクラスということ。

1番人気はタキオン自身ではあるものの、それ以下の人気であるウマ娘が弱いなんてことは決してない。

一方的に仲良く話しかけられ、うつつとうしがっているのはエアシャカール。話しかけているのは2番人気のファインモーションだ。

クラシック級ではあるものの、ファインモーションはここまで無敗。秋華賞とエリザベス女王杯を勝利している。

新進気鋭のウマ娘ということで、人気が高まっているのだろう。

3番人気はシンボリクリスエス。彼女と話しているのが6番人気のミヨウオウトプ口だ。

天皇賞秋でも戦った2人。粗削りの強さ、熟練の強さ。

それぞれが持つ強者の雰囲気がいじみ出ている。

「タキオン」

「おや……トリップ君」

観察していたタキオンに話しかけてきたのはアマゾントリップ。彼女は今回5番人氣だ。

人氣が低いのはひとえにタキオンとカフェエがいるから。

今最も勢いのあるアグネスタキオン、長距離で絶大な強さを誇るマンハッタンカフェエ。

この両名がいるせいで、本来3番人氣にはいそうなところを5番人氣としている。

「レースで会うのは久しぶりだな」

「そうだね。菊花賞以来だ」

「あん時は勝てなかったが、今回は勝たせてもらうかな」

オメーのライバルはカフェエだけじゃあねーんだぜ。

そう言つてアマゾントリップは去っていく。

「……ククク、面白いじゃないか！」

タキオンは気持ちの高ぶりを感じ、思わず笑みをこぼすのだった。

ファンファーレが鳴り、ついに出走目前となった。

次々にウマ娘たちがゲートに入っていく。

タキオンは4枠6番。カフェは7枠11番。少し離れている。

『年末最後の大一番、有マ記念です！ あなたの夢、私の夢は叶うのか！』

実況が期待をあまりながら、準備が整っていく。

ダービーとは違う、ウマ娘たちが獲りたいと願うグランプリ。

今、出走の時。

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました』

——ガタンッ

『スタートしました！ 出遅れのない綺麗なスタートです！』

誰も出遅れないスタート。

ハナを切って先陣に立つのは、誰もが知る逃げウマ娘だ。

『前に出たのはやはりこのウマ娘！ 9番タップダンスシチー！ 続いて14番ファイ

ンモーシヨンです！』

大逃げウマ娘として名高いタップダンスシチーが一気に前へと出ていく。

フラインモーションが前目につけようと前に出たが、タップダンスシチーを見て無理せず後ろへと下がる。

『13番ミヨウオウトプロ、2番オモテウラ、そして6番アグネスタキオンが先行する集団を引つ張つていきます。その後ろには5番シーティエム、10番アマゾントリップと続きます。そのまま連なつて11番マンハッタンカフェ、4番エアシャカール、3番ヒシミラクルです』

最初のスタートはあまり無理せずに進み、それぞれが自分たちのポジションを獲得した。

前後で離れすぎることもなく、タップダンスシチーも逃げはするが後ろにピツタリとフラインモーションがついている状態。そのすぐ後ろにタキオンたちと言った状態だ。

『今回タップダンスシチーはあまり前に出ませんでしたね』

『距離が長いですからね。無理せず進んでいるのでしよう』

1度目のホームストレッチに入り、観客たちからの声援を浴びていく。

ここでの声を聞いて思わず掛かってしまうこともあるぐらい熱気が凄いのだ。

そして、ここで少し仕掛けに行つたウマ娘がいる。

『おっと、ここでフラインモーションがタップダンスシチーを抜かしました！』

『大逃げを止めるためでしょうか。コーナー前に仕掛けましたね』

2番手にいたファインモーションがそのまま前に出て、タップダンスシチーを抜かしていった。

逃げウマ娘に対してはかなり有効な手段だが、先行を得意とするファインモーション。スタミナが持つのかどうかというところだ。

コーナーに入り、ファインモーションが完全に先頭を取る。

タップダンスシチーはそれを見て一瞬掛かりそうになるが、頭を振って落ち着こうとしていた。

どうせ脚を溜めようと落ちてくる。そこで抜き返す。彼女はペースを上げず、自分の走りに徹することにしたのだ。

『コーナーに入りまして、先頭はファインモーション。そのすぐ後方にタップダンスシチーという形です!』

『意外な展開ですね。しかし、タップダンスシチー落ち着いています。向こう正面に入ってから、彼女の走りが見えるんじゃないでしょうか』

タキオンやミヨウアウトプロたち先行しているウマ娘は、少しずつ前方との距離が開いていくのを感じていた。

ファインモーションがペースを上げ、タップダンスシチーがそれに合わせてゆつくりと加速している。

序盤にスタミナを溜めて、後から大逃げする。そんな作戦なのだろう。

しかし、落ち着こうとしてはいるものの、逃げウマ娘だ。向こう正面に行く前からペースが上がっている。

掛かったな。タキオンたちはそう思った。

『向こう正面に入りまして、先頭は変わらずファインモーション！　ここまで平均ペースでしょうか』

『そうですね。速すぎるわけではないですが、スローペースでもないです。どのウマ娘にも丁度いいペースですね』

コーナーで先頭をとったファインモーションは、ここからどうしようかと考えていた。

今まで走ってきたレースは全て中距離。最長が2, 200m。明らかに長いのだ、この有マ記念は。

ペースが遅いと思って少し進んだが、結果として逃げのような形になっている。

しかし、チャンスだとファインモーションは思った。ペース的には全く辛くないため、このまま逃げてしまおう。

後ろからの足音を聞きながら、ペースを変えずにどんどん走っていく。

それを見たタップダンスシチーは、やるじゃあないかと笑みをこぼす。

スタミナが持つならば、このペースだと逃げ先行が明らかに有利。このまま行けば、逃げ切りすら見えてくる。

大逃げで経験を積んできた彼女はそう考え、ファインモーションに食らいついていく。

先行している集団は、コーナーに入る前からどうしたものかと考えていた。

先に仕掛けた方が確実に負ける。これは明らかだ。スタミナが余っているのだから、なるべくスパートを遅らせて一気に爆発させたいわけだ。

どこから仕掛けるか、誰から行くのか。足音をわざと大きくたてたり、少しだけ前に出してみたり、左右へ体を動かしたり。

互いにけん制し合っていると、タキオンはニヤリと笑っていた。

彼女だけは、仕掛けどころが最初から決まっているのだ。

『第3コーナー回りました、先頭がタップダンスシチーに変わりました！ ファインモーションが2番手です！』

コーナーでファインモーションが捕まり、タップダンスシチーが追い抜いた。

やはり先行を得意とするため、足を溜めたいとコーナー前でスピードを落としたりしたのだ。

大逃げ爆逃げでひた走るタップダンスシチーは好機と見て追い抜き、気持ちよくゾー

ンに入る。

この逃げこそが自分の走りなのだ、と、見ているみんなに強く示していた。

そろそろだと待機し続けていた3番手以下、タキオンたち集団がゆつくりと前に詰めていく中。

タキオンはここだ！ と目を輝かせた。

彼女の脳内に巡る数式。それらが瞬時に解き明かされ、心が一気に燃え上がる。

一呼吸。

タキオンが息を吸い、吐く。次の瞬間、集団から抜け出し、ファインモーションに並んだ。

『第4コーナー入ってタツプダンスシチー逃げていく！ ファインモーションに並んできたのはアグネスタキオン！ ここにきてやはり飛び出てきた！ 一瞬で抜かし、タツプダンスシチーへと追いつがる！』

遠心力で振られながらも、美しい弧線を描いて加速していくタキオン。

それを見た後方集団は、誰もが一気に仕掛け出した。

ここで行かなければ、もう間に合わない！ 誰もがそう思い、脚の回転数を上げていく。

ファインモーションは思った。

これは脚を溜めるとか、そういうことを言っている場合じゃないと。今ここで前に進まなければ、決してたどり着くことはできないだろうと。

事前に知ってはいた、聞いてはいた。ただ、これほどまでに速いなんて……！

ほんのちよっぴりだけ休めた脚に力を入れて、最後の直線に全てをかけに行く。

コーナー前でフライングモーションを追い抜いたタップダンスシチーは気持ちよく走っていた。

しかし、最後のコーナーに差し掛かると後方から凄まじいプレッシャーを感じ、思わず振り向く。

見えたのは、光かと思ってしまうほどの速度で走ってくるアグネスタキオンの姿が！ 来ると思っていたが速すぎる！ 逃げて粘るにもあと300m以上あるのだ。歯を食いしばって、残りのスタミナを振り絞る。

『最終コーナー回って最後の直線！ 中山の直線は短いぞ！ 後ろの娘たちは間に合うか！』

『先頭はタップダンスシチー！ 後続との差は2バ身！ しかし外からアグネスタキオンが突っ込んできているぞ！』

全然距離を稼げない！ タップダンスシチーは歯噛みする。

後方からくるいくつもの足音は加速度的に近づいてきた。

そして既にそれは自分のすぐそばまで来ている！

苦しくなつて一瞬俯いてしまふが、負けたくないと顔を無理やり上げる。

するとどうだ。視界の左端から光が飛んでいった。

——アグネスタキオンだ。

『タップダンスシチーを抜いてアグネスタキオン先頭！ ファインモーションは苦しい

！ 後方からシンボリクリスエスも追いつがる！ ミヨウオウトプロとマンハッタン

カフェも一気にながらってきた！ アマゾントリップも抜け出しています！』

誰もが最後の直線に全てをかけた。全員が1着を目指し、ゴールへと駆け抜けていく。

最後の上り坂、ここで差す！ 逆転する！ 勝つ！ 目を見開き、歯を食いしばり、苦

しくても前を向いてひた走る。

そして、ここで抜け出して上がってきたのは、やはりタキオンのライバルたち。

『ここで詰めてきたのはマンハッタンカフェ！ アマゾントリップも凄まじい末脚！

1バ身差まで詰めてきました！』

「追いつく……！」

「待てエ！ タキオンッ！」

タキオンは2人の熱気、そして足音。自分に向けられる勝利への応援。

それらを全身で感じていた。そしてこう思った。
舞台は整った。あとは引き金を引くだけだ。

頼んだよ、トレーナー君！

——タキオオーン！ 超えろオーーー！ いけエーーー！

声を聞き、ターフを踏みしめる。

——ひどく楽しそうな笑みを浮かべてしまったよと、後にタキオンは語った。

『残り200！ マンハッタンカフェ差すか！ アマゾントリップ追いつけるか……っ、あ、アグネスタキオン突き放す！ なんとというスピード！ 詰まっていた差が
どンドン離れていくっ！』

上り坂を一気に駆け上がっていくタキオンとそれを追う2人。

後方の2人はスピードが遅くなっていくわけではない。後続との差は開くばかりだ。

しかし、タキオンとの差が開いていく。加速しているのだ。この上り坂で！

そして坂を上り終え、最後の100m。

タキオンは光になった。

『のこりひゃっ、アグ、ネスタキオン！ 速い！ 速すぎる！ そのままゴールイン！』
『一瞬です！ 瞬きをする間にゴールしてしまいましたアグネスタキオン！ 超光速の
プリンセスが見事走り抜きました！』

走り終えたアグネスタキオンはゆっくりと立ち止まり、トレーナーの方に振り返った。

トレーナーは泣きながら、タキオン！ タキオン！ と何度も声を上げる。

「……………ふふっ」

タキオンはそんなトレーナーの姿を見て、笑う。

そして両手を広げ、観客席を見た。

「これが研究の成果だ！」

本当に嬉しそうに、タキオンは高らかに口にしたのだった。

I n t e r m i s s i o n : 応援

いやはや大分語りつくしたんじゃないかい？

大阪杯、宝塚記念、秋の天皇賞に有マ記念。

G I 4 連勝だ。シニア級は大成功と言ってもいい。

特に有マ記念では理論上理想的な上振れに近い結果を出すことができた。これ以上ないほどにいい結果だったよ。

特にあの1年間は研究自体も有意義なものだったし、結果がわかりやすく出ていたのもモチベーションに繋がっていたね。

論文で見たんだが、知っているかいトレーナー君。

1つ前のレースで入着もできないウマ娘に「前回より低い順位はとらないようにしよう」と声をかけていくと、前回より低い順位を取りにくくなるんだ。

しかし「前回よりも高い順位を目指そう」と声をかけると、低い順位もとるが高い順位になりやすい傾向にある。

つまり、マイナスを抑制する応援とプラスを促進する応援があるわけさ。どうだい、興味深いだろう？

私の脚は速い。それこそ自動車にジェットエンジンがついているようなものさ。以前は自転車についていたが。

その自負があるし、実際レースでもそうだった。だから君にはプラスを促進する応援をしてもらうために色々誘導していたのさ。

以前よりほんの少し真面目に授業を受けてみたり、トレーニングを多めにしたりね。

思い出してみたまえ、実際私を鼓舞する時はそういった応援をしていたらどう？

えー!? 違うってどういうことだい!

私はプラスになっていると考えていたぞ!

私らしくないから心配していたって?

おいおい冗談だろう。冗談だといってくれ。私が聞いていた応援についてかなり考え直さなければならぬからね。

いつもの態度が悪いってなんだそれ!

弁当にケチをつけたり薬をちらつかせたりするからだって?

いいじゃないか別に。私と君の仲だろう?

それに契約の時にモルモットでもいいって言ったのだからね。責任は君にあると思うんだけどね。

それにシニア級になってから薬を飲ませる頻度は減っただろう。

そんなことない？ いやいや、確実に減ったはずだ。

以前は1日3本飲むときもあつたが、今や3日に1本だよ！ 数字が逆転するぐらいには飲ませていない！

昨日は2本飲んだって？ 昨日のレポートが見当たらなくてね、すまないがその意見はわからないな。

あー！ なんで君は毎回頭をぐしゃぐしゃにするんだ！

耳と前髪だけは触るな言って言ってるだろう！

まったく！ 髪を整えるのだからって時間がかるんだぞ！

こんな無駄なことに時間を使うのはナンセンスだよ！

ほら、責任をもって髪を整えたまえ。

それが嫌なら今日はパーティにでもしようじゃないか。

君の大好きな発光するジュースを3本ほど用意しよう。茶請けは錠剤さ。ラムネじゃあないぞ？ うん？

そうそう、それでいいんだ。

さて、話がかかりズレてしまった。

応援の話だったね。

結局私が求めていたのは、プラスの効果さ。

下限を上げる応援ではなく、上限をさらに上げる応援というわけだね。

実際これは効果が出ていた。それは君もレースを通じて見ていたと思う。

いやはや感情の力というものは侮れないね。

何度も言うようだがシニア級の研究はとても有意義だった。

自分の能力を数値化して計算してきたが、感情の効果は計算式に当てはめてもとにかくブレが生じる。

大阪杯の後、シヤカール君と協力してなんとか計算式を出してみようと色々やってみたんだけどね。値の変動がありすぎてまともな数値で示せないということだけわかったよ。

だってそうだろう。応援してくれる人物によつて効果が違うんだからね。不特定なことがあまりにも多すぎるのさ。

うん？ 人によつて効果が変わることが気になるのかい。

なに、単純な話だよ。

自分が知らない人物から応援されるより、同じように努力している知らないウマ娘から応援された方が。

知らないウマ娘より、知っているヒトのほうが。それより知っているウマ娘の方が。

信頼しているヒトのほうが、より感情へ与える力が大きいということさ。

特に私はかなり素直な性質らしくてね、それが顕著に出るわけだ。
わかりにくいかい？

不特定多数のファンよりも君に応援されたほうがよっぽど力が出る。そういうこと
さ。

これは私だけじゃなく、どのウマ娘でも同じだと思うよ。

シャカール君はロジカルなタイプだから効果は薄いらしいけどね。

なんだ、急に。顔を赤くして。

ふうん？ 私の発言で照れてしまったということかい。
なるほど。

改めて考えると確かに恥ずかしいな！

赤面ものだよ本当に。君の顔を見ないようにするから、私の顔も見ないでくれよ。

ふう。落ち着いたね。

こういう時だとハーブティはいいものだ。気持ちも落ち着けてくれる。

ところでトレーナー君、もう話すことはないんじゃないかな。

元々インタビューのために振り返りを先にしておくというテーマで語っていたわけ

だが。

もう語りつくしたんじゃないかい。もう唇を湿らせるのにも飽きてきたし、おなかも紅茶でいっぱいだよ。

え？ 1つ忘れているものがあるって？

えー、なんとなくわかっているけど、ついこの前の話じゃないか。

確かにトウインクル・シリーズでの話だけだね。もうその話は何度もしてきたじゃないか。雑誌に新聞にテレビに！ おかげで研究の時間がなくなってしまうぐらいだよ。

はあ、まあいいだろう。3年間を振り返ると言ったからね。

それに、レースで勝つために最も苦勞したというか。本当に死闘だったから、とてもよく覚えているよ。

第3回URAFファイナルズ。いやはや、丁度いい時期にデビューしたものだよ。

Story 36 : URAファイナルズ開催！

URAFファイナルズ。

トウインクル・シリーズとドリームトロファイ・リーグのウマ娘たちが戦い、距離別で最強の座を競う3年に1度の祭典。

開催が発表され、有力なウマ娘たちへ推薦状が送られてきている。もちろん、タキオンのところにも。

「ふうん、URAFファイナルズか」

推薦状を手にとって遊びながらタキオンは独り言つ。

有マ記念で勝利し、年間無敗。GI4連勝、計6勝という成績を残した。そんな彼女に推薦状がくるのは当たり前のことだと思う。

「なあ、トレーナー君」

ソファの背もたれに体を預け、ニタリと笑いながら俺の顔を見る。

「どうしたい?」

ひらひらと推薦状を振って見せてきた。

なんの挑発をされているんだ、俺は?

出たくないのかと聞くと、何故か不機嫌そうに唇を尖らせる。

「なんだよー、君は出なくてもいいって言うのかい？ 出なくていいなら私は出ないよ」
急にやる気がなくなってしまうようだ。

「どういことなんだ……」

出てくれるなら出てほしいよと話すと、急に元気になってニヤニヤし始めた。

情緒が不安定すぎる！

「ふうん、まあ及第点だ。私にとつても、化け物ぞろいのドリームトロフィー・リーグ出走者を観察できる機会だ。逃す手はないね」

機嫌がよさそうに推薦状にサインして出走希望を告げてくる。

書き終えた推薦状をもらい、俺のサインと判子を押す。

ふむ、まあ予想通り中距離部門への出走だな。

「私の適正距離はおそらく1, 800mから2, 500m程度だろう。スタミナや脚のことを考えると、長距離には不安が残る。2, 500mは長距離だけどね」

俺も同じような印象を持っている。

ウマ娘はシニア級になると、自分の適正距離が明確に見えてくるのだ。

タキオンのスタミナとスピードのデータを見ると、明らかに適正は中距離。とてもわかりやすい。

長距離は走れるけど、そこそこ。そんな感じだ。マイルも同じく。短距離は適性が無い。

最初から適性はある程度わかる。だからこそミホノブルボンはすごいって言われるわけだし。

ただタキオンの場合、菊花賞まで常に脚をセーブしていたからな。シニア級での走りで確認しなければいけなかったわけだ。

「URAFファイナルズは距離、レース場、出走ウマ娘。その全てがランダムだ。私は根幹距離が得意だが、選べるわけじゃない」

根幹距離というのは、400mの倍数のレースだ。要は2,000、2,400の2つ。

タキオンはこれらの距離だとペースメイクがかなりうまい。いつも以上にスタミナが残るから、スパートを早めても問題ないのだ。

しかし今回は、2,000mだから出る。2,200mだから回避するといったように選ぶことができない。

それは誰もが同条件なわけだから、甘んじて受けるしかないが。

「まあ、私にとっては些事だよ。重要なのは中距離であることだからね」

タキオンは中距離が単純に強い。これは適正距離だからというより、中距離での走り

が巧いのだ。技術が優れているともいう。

直線だろうがコーナーだろうがとにかく自分の走りたように走れて、自分のレースプランを全員に押し付けることでスタミナを管理する。

そして計算されたタイミングで抜け出し、最後は鋭い末脚で突っ込んでいく。

王道のレースができる理由は、このレースの巧さなのだ。

「ううん、今から楽しみだ！ どんなデータが取れるんだろうね！」

わくわくしてきたと耳や尻尾を動かして楽しそうにするタキオン。

このまま良い精神状態を保ちたいところだ。



やる気に満ちている状態で1月後半を迎えた。

既にレース場、距離、出走メンバ―が決まっている。あとは枠番だけだ。

それぞれのメンバ―の特徴を考えながら作戦を練り、タキオンのレースプランとすり合わせていく。

今日は実際に走って確かめるため、練習場で調整だ。

距離はレース本番と同じく阪神2，000。大阪杯と同じ条件とする。

よーい、ドン！

「ふっー！」

タキオンが走り出し、本番の情景をイメージしながらタイムを確認する。

スタートはいつも通りいける。枠番は決まっていなくてもある程度隊列は想像できるので、タキオンは自分のポジションをどこにとるかを考えてそこに収まるように走っていた。

うん、逃げウマ娘はこの人数だからこのぐらいだろう。あとは第3コーナー前で動くようなウマ娘がいるかどうか。

メモを取りながら走りを見てみると、後ろから誰かが歩いてきて隣に立つ。

視線だけ向けると、来ていたのはアマゾントリップだった。

「やってんねえ」

やってるよ。短く返しながら、最終直線に入ってきたタキオンを見た。

今回の想定は第4コーナーまで後ろがあまり動かずに進むパターンのようなのだ。すつと外に1人分体を出し、一気に加速する。

——タキオン！ 全身全霊だ！

残り200mとなったところで上り坂をイメージ。

力強く踏みこみ、さらに加速してゴール板を駆け抜けた。

タイムは……うん！ 練習場というところで平坦であることを考えても相当なタイムだ！

実力を出し切ればレコードも見えてくるだろう。

「ふう……おや、トリップ君」

「よー」

タキオンが息を整えながら戻ってきたところでアマゾントリップに気が付いた。

人懐っこく笑って手を上げる。レースに勝ってヘッドバンするウマ娘とは思えないなあ。

「これ、先生がタキオンに渡してくれてよ」

「ふうん？ ああ、これか」

アマゾントリップが差し出したのは紙の束だ。

タキオンは知っているものようだが……なんだそれ？

「タキオンが授業受けてなかったのは知ってる？ 今はちげーけど。その受けてねーところレポートで出せばお咎めなしって話なんだわ」

「かなり面倒だったけどね」

「おめーが最初から受けときゃよかった話だろーよ」

「必要ないと思っっていたのさ。君も知っていることをもう一度聞かされるのは苦痛じゃないかい？」

それはそうだとアマゾントリップは力強く頷く。

ほら見たことかとタキオンも得意げだ。

教育者としては耳の痛い話ではある。それだけ大事なことなんだけど、学生である彼女たちにとつては面倒なことなんだろうな。

それはさておき。

今もレポート出してるのかと聞くと、そうだよと返された。

「もつとも、これが最後の提出だけどね」

「先生も終わった……つってやりきった顔してたぜ」

問題児の問題が解決して、感動もひとしおだろう。

今後問題を起こしていくと思うけど。

「あ、それとこれだ。梓番、決まったぜ」

「おや、そういえば今日発表だったね。私もトレーナー君も忘れていたよ」

「アンタら忘れちゃいけないーもンじゃねーのか、これは」

あまりにも正論すぎる。

俺もタキオンもそっぽを向くと、似たもン同士だなと言われてプリントを渡された。

なにになに……タキオンは、4枠7番か。内じやないが外でもないな。

「オレは7枠13番だ」

「ふうん、外枠だね。脚質には合っているかもしれないが」

「まあな。ホクオウも8枠18番で大外枠だぜ」

「彼女も追込だし丁度いいかもね。それでも大外枠なのは面倒だと思うが」

今まで何度も争っていたウマ娘たちが勢ぞろいしていた。

アマゾントリップ、ホクオウボーダー。シーティエムやミヨウオウトプロもいる。

唯一ミナモトライコウはマイルにいったらしい。なんでも一緒に戦えなかつた先輩

であるアグネスデジタルと決着をつけたいんだとか。

それを聞いたデジタルが気絶していたとタキオンから聞いた。

「シーティエム君は1枠1番。トプロ君は5枠10番か。思ったよりばらけたね」

「そうだな。まあ、ポジション争いで変にぶつからなくていいだろ」

「それもそうだね……いや、私は多分トプロ君とやり合うことになると思うが」

「そりゃあご愁傷様なことって」

ケラケラ笑うアマゾントリップに対し、タキオンもくつくつ笑う。

静かに話してはいるが、お互いに燃えるような闘志を瞳に宿している。

これは大変なレースになりそうだなと、わくわくしながら2人を見るのだった。

Story 37 : URAファイナルズ予選

URAファイナルズ予選。

タキオンが走るのは阪神2, 000m。大阪杯と同条件。

去年の大阪杯制覇者が走るということは、その距離、コースの勝ち方を知っていると
いうことだ。

しかも年間無敗だったため、当然のように一番人気をかつさらっている。

マークはかなりきつくなるだろう。それこそ以前のティエムオペラオーの有マ記念、
悪意なく無意識にマークが集中してしまうほどに。

ただ、それを加味してもタキオンが勝つ。そう思っている。

それほどのウマ娘だからな、彼女は。

「どうしたんだいトレーナー君。そんな自信満々に頷いて」

勝負服を身にまとい、今日走るメンバーを再確認しているタキオン。

競う相手を明確にインプットすることで、自身のやる気というか闘争心をかき立てて
いるらしい。

感情の力がパフォーマンス向上に繋がると証明したからこそその行動だ。

傍から見ると少し怖いが。カフェは「実験対象のリストでも見てるんですか」と言っていたぐらいだし。

やはりマッドサイエンティストか……。

「よし、気分の高揚を確認できた。次はパドックだ、行ってくるよ」

楽し気に頷き、タキオンは脚早に控室から出ていった。

調子は絶好調、気合も十分。

今日も超光速の走りで魅せてくれるだろう。



『本日最後のレースとなります、URAFファイナルズ予選。阪神レース場、芝2,000mです』

予選に選ばれた18人のウマ娘たち。

GIレースではないものの、3年に1度その距離で最も強いウマ娘を決めるレース。

自分こそが最強最速のウマ娘であると証明するために気合が入っており、誰もが自信

満々の表情だ。

『URAファイナルズは有力なウマ娘たちが多く集まりますからね。好走が期待できるでしょう』

『注目のウマ娘たちを見ていきましょう。まずは1枠1番、シーティエムです』

『先行策からしつかり勝ち切れるウマ娘ですね。今日は5番人気です』

シーティエムはしつかり体を動かしてウォームアップする。

タキオンが王道の先行策で走るためあまり目立っていないが、彼女は先行も逃げもでき器用なウマ娘だ。

桜花賞、秋華賞を勝った2冠ウマ娘で、その力は本物。今日こそはタキオンに勝つと闘志を燃やす。

『4枠7番アグネスタキオン。今日の主役は間違いなくこのウマ娘でしょう、1番人気です』

『GI6勝、加えて前年は無敗で4連勝。その全てがGIレースです。今の世代で最も勢いのあるウマ娘でしょうね』

タキオンは方々からの視線を浴びながら、楽し気にぐるりと周囲を見回す。

誰もが今日もやってくれるだろう。そんな気持ちでタキオンを見つめている。

『5枠10番、ミョウオウトプロ。本日は4番人気です』

『テイエムオペラオーやメイシヨウドトウたちと戦い続けた経験豊富なウマ娘です。U R Aファイナルズを最後にドリームトロフィー・リーグへ移行すると発表がありましたね』

今のトウインクル・シリーズをけん引してきたウマ娘、ミヨウオウトプロ。

ウマ娘を応援してきたファンたちは、彼女の功績やその走りに感動した者も多い。

引退ではないが、シリーズ最後の花舞台。力強い走りを期待されている。

『7枠13番、アマゾントリップ。2番人気です』

『彼女は爆発力があります。今回は距離も短めですからね、かなり好走が期待されますよ』

アマゾントリップは興奮しているのか、時折頭をぶんぶん上下する。

いつものヘドバンを見て、ファンたちは大盛り上がりだ。ライバルであるタキオンを倒す！ そんな闘志が全身からにじみ出していた。

『8枠18番。大外枠、ホクオウボーダー。3番人気です』

『彼女も素晴らしいウマ娘ですよ。とにかくあの突き抜ける末脚！ 私のイチオシです』

ホクオウボーダーは緊張している他のウマ娘に話しかけ、穏やかな空気を出していた。

タキオンやアマゾントリップにも声をかけ、今日は勝つと宣言している。

爽やかで面倒見はいいが、勝負には真剣。彼女の良いところは、今日も変わらず見ることができていた。

時間になり、全員ゲートへ向かう。

ファンファーレが鳴る中、スタート後のシミュレーション、芝の感覚。それらを確認しながら、ゲートインしていく。

全員がゲートインし、静かにスタートの瞬間を待った。

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました』

——ガタンッ

『スタートしました！ 全員揃ったスタート！』

誰も出遅れずにそのままスタートとなった。

まずは先頭争い。誰が前に出るのかというところで、ハナを切ったのは意外なウマ娘だ。

『1番シートイエム前に出ました！ 今回は逃げるようですよ！』

内枠の有利を最大限に使い、一気に前へと出ていく。

阪神2, 000mは直線が長いのでポジション争いは激しくはないが、シートイエムはそんなもの知ったことかと言わんばかりにグングン前に出ていく。

タキオンと競った場合勝てないと判断した上での作戦なのだろう。先行の位置を取るタキオンの隣に合わせているミヨウオウトプロはいい走りだと感心していた。

『シーティエム飛ばしていきます！ その後ろには7番アグネスタキオン、隣に10番ミヨウオウトプロです。13番アマゾントリップ、18番ホクオウボーダーは後方からのレースとなります』

タキオンとミヨウオウトプロは先行。シーティエムが抜け出していったのを見たタキオンは、前に出ながら内側をとったのだ。

抜け出しやすい位置を確保したタキオンをマークするため、ミヨウオウトプロはタキオンの横につく。

アマゾントリップとホクオウボーダーはじっくり脚を溜めていくために後方待機。末脚の爆発力で勝負する形だ。

『第1コーナーに入りました、シーティエム先頭。後方との差は4バ身程でしょうか』『大きく離しての逃げではありません。うまくペースコントロールできるでしょうか』
阪神レース場はやや特殊なコーナーのつくりをしている。

内回りで走る2,000mは、第1、第2コーナーが短く、第3コーナーから第4コーナーまでが長い。

コーナーから最終直線に入ると、休む余裕もなくゴールしてしまう。

そのため、仕掛けどころが難しく、一瞬の差し脚よりも長くいい脚を使うことを求められるのだ。

シーティエムはそれを加味してペースコントロールをするために先頭に出た。

逃げ専門のウマ娘ではないが、先行策をよく知るウマ娘だ。自分が嫌な逃げをすればいい、そう思っている。

『第2コーナー回りました。1,000mは60.4! スロー寄りのミドルでしょうか』

『自分の脚を溜めながら長いコーナーを回るためのペース配分でしょうね。うまい走りです』

シーティエムは自分の走りがうまくはまっていることを感じていた。

かなりゆっくり走れているから余裕もあるし、足音から後方と差があることも感じ取れている。

これならいける! そう思っていたが、簡単にいかないのがレースなのだ。

『向こう正面で後方から動き出しましたアマゾントリップ! ホクオウボーダーも前に出ました!』

『早仕掛けでしょうか! しかし速すぎる気もしますが大丈夫なんでしょうか』

後方にいたはずのアマゾントリップとホクオウボーダーが突然前に出ていった。

第3コーナー手前で後方から近づいてくる足音を聞き、シーティエム思わず振り返る。

外から差し追込のはずの2人が、先行しているタキオンたちのところまで追い上げてきていた！

スローな展開を感じたアマゾントリップとホクオウボーダーは、それならばと前に出て先行の位置に収まるように動いたのだ。

マークしているタキオンの前に入ること、レースを有利にするという思惑もある。

2人はコーナー前にすつとタキオン、ミヨウオウトプロの前に入り、シーティエムを追いかけていく形となった。

『第3コーナー入りまして、先頭は変わらず！　しかし後方3バ身差でアマゾントリップ、ホクオウボーダー！　その後ろにアグネスタキオン！　ミヨウオウトプロです！』
『スローペースを見破って前につけましたね！　アグネスタキオンはかなり苦しくなりました』

面倒だな、とタキオンは思いながらコーナーを回っていく。

駆け引きの技術や賢さは多くのレースに出ていたミヨウオウトプロには勝てない。パワーや根性は前2人には劣る。

タキオンが有利なのは、スピードとスタミナだろう。自分の強みを再度確認する。

この逆境をどうするか、そんなことを考えながらタキオンはコーナーを回る。瞬発力が武器のアマゾントリップとホクオウボーダーは、限界まで脚を溜めるから動かない。

ミヨウオウトプロは先に動くだろうが、そこを追従しては仕掛けが遅くなりすぎる。詰み。そんな単語が脳裏をよぎるが、タキオンは苦笑して否定する。

(この程度の苦境、何度も経験してきたさ)

しかし状況は苦しい。既にコーナーを半分回っており、時間がない。

ここでプレッシャーをかけたとしても、この3人は決して掛からないだろう。

なら、別の角度から考えるしかない。

タキオンは後方を確認した。

あともう少しで直線ということもあり、スパートをかけようと後ろのウマ娘たちは前のめりな体勢になっている。

ただし、やはりタキオン含めた前方5人の力は突出しているのだろう。内側からはいけないと考え、後方集団は外から抜かそうと膨らむ様子を見せていた。

(分の悪い賭けだ。いつものことだね)

ニヤリと笑ったタキオンは、瞬時に計算式を考え出す。

加速、減速、芝、上り坂。その全ての解を叩き出し、一瞬息を入れる。

そして、するつと減速して後方に下がった。

「なにッ」

隣で走っていたミヨウオウトプロは驚いた。

すわ故障かと。タキオンの脚について知っていたからこそ、思わず見てしまう。

だが、その表情を見た彼女は、故障でもなんでもない。そう気づいた。

第4コーナー前に下がったタキオンは、後方で外に出ようとするウマ娘たちの流れを自ら作り出し、ミヨウオウトプロの後ろから臨機応変に対応して外へと抜け出した。

あまりに美しいコーナー巧者の動き。そのまま外へ出る流れを作り出たまま、一気に加速する！

『第4コーナー回りまして、アグネスタキオンが外から追い上げた！ いつの間にか外に出ているぞ！ ミヨウオウトプロがそれに続いて追い上げていく！』

「いつの間になぞ？」

「やんじゃねーかッ！」

ホクオウボーダーは驚愕し、アマゾントリップはそれこそだと獯猛に笑う。

タキオンは彼女たちを見て楽しげに笑い、グングンスピードを上げていった。

『最終直線に入った！ 先頭はシーティエムだが、アグネスタキオンが追い上げている！ 既に1バ身差まで来ているぞ！』

『ミヨウオウトプロも追従していく！ さらにここでアマゾントリップ前に出た！ ホクオウボーダーも追走！』

シーティエムは困惑した。振り向いたときの状況を考えたら、最初に出てくるのはミヨウオウトプロかアマゾントリップ。

しかし、風を切って追いかけてきているのは間違いなくその2人ではない。足音でわかるのだ。

必死に逃げる彼女の横を何かが通り、思わず瞬きする。

そして目を開けた時前にいたのは、白衣をはためかせた光だった。

『アグネスタキオン抜け出した！ シーティエムを抜いて先頭はアグネスタキオン！

ミヨウオウトプロも追いかけて、2番手！ 後方からアマゾントリップ！ ホクオウボーダー！』

先頭に躍り出たタキオンだが、目の前には最後の壁。上り坂だ。

目視で確認したアマゾントリップとホクオウボーダーは、ここだとばかりに本気のラストスパートをかけた。

タキオンが坂で減速したところを狙い撃ちするつもりなのだ。

ミヨウオウトプロは後方の力強い足音を聞きながら、負けていられないと体勢を低くしてさらに加速する。

タキオンは坂の前、口元を緩めながら待っていた。最も自分に力をくれる、最後の条件を。

——タキオン！ 魅せてやれーッ！
待っていたよ！

体が熱くなり、高揚するのを自覚する。

目を見開き、ぐつと脚に力を入れて、一気に坂を駆けあがった！

『アグネスタキオン脚色は衰えない！ 上り坂でも凄まじいスピードだ！ ミヨウオウトプロ苦しい！ アマゾントリップが差を詰めるがアグネスタキオンに届かない！ ホクオウボーダーも追いつけないか！』

走っても走っても、タキオンの背は遠ざかっていく。

誰もが齒噛みした。タキオンに勝てないことに。

そして、その走りに魅せられていることに。

『アグネスタキオン先頭！ 次元の違う走りですアグネスタキオン！ そのまま突き放してゴールイン！ 流星の強さですアグネスタキオン！ 超光速の走りを見せつけました！』

一気に駆け抜け、ゆっくりスピードを落としながら掲示板を見る。

自分の番号が1番上に点灯しているのを確認すると、うんうんと満足げに頷いた。

「はあ……速すぎよ、タキオン」

「くっそー！ また負けたアー！」

ホクオウボーダーとアマゾントリップが悔し気にタキオンに話しかける。

タキオンはそんな2人を見て、ニヤリと笑った。

「君たちのおかげで速く走れたよ。ライバルという存在はやはり必要なものだね！」

「……ふふっ」

「いひひ、おめーオレらのことライバルだっと思ってくれてンだなア」

「おや、君たちは違うのかい？」

タキオンが 不思議そうに首を傾げると、アマゾントリップが大笑いし、ホクオウ

ボーダーも口を手を当てて笑った。

「ふふふ、ええそうね。ライバルだと思っっているわ」

「たりめーだろ！ 次は勝つかんな！ 覚悟しとけ！」

楽しそうに笑う2人に肩を叩かれ、不思議そうにするタキオンなのであった。

Story 38 : 準決勝の前に

予選で強い勝ち方をすることができて非常に嬉しい。

先輩とは違って奇抜な作戦を考えられないから、俺はとにかく事前に情報を調べ上げてタキオンに伝えることしかできない。

かなりピンチだったがうまく立て直して勝ってくれたのでホッとしている。

いい調子のまま次のレースに臨みたいなと思いつながら、タキオンを温泉へと連れ出した。

理由は単純で、疲労抜きだ。割と無茶な走りをした上、月1でかなりレベルの高いレースを行うわけで。

決勝まで行くと3戦だ。ここでトレーニングするぐらいなら、多少衰えてでもしつかり疲れを取った方が万全ということで湯治に来たというわけだ。

「足湯はいいね。体が熱くなりすぎることもない。知っているかいトレーナー君。足湯は全身の血流がよくなる上、内臓機能にも効果があるんだ」

去年聞いた気がするな、なんて思いながらタキオンとゆつくり足湯に浸かる。

テールもある足湯だから、パソコンを開いて次のレースについて情報を集めながら

の休みだ。

タキオンの疲労抜きをしている間、俺はすっかり働かないと。どうせこの後は旅館でゆっくりするんだし。

「相変わらず真面目だね。おかげでいつも助かっているわけだが」
ずいっと隣に座ってきて、パソコンを覗き込んでくる。

コースと距離だけ判明しているから、芝の様子とか坂とかそのあたりを確認するぐらいで、まだ本格的にやっているわけではない。

次のレースは東京2, 400m。日本ダービー、ジャパンカップと同じ条件だ。

525mの直線で、どこで仕掛けるのか、天候の予想は、バ場は。発表されている情報を集めながら、メモを取る。

「ふうん、東京レース場か。ダービーのリベンジとなるわけだね」

タキオンは楽しそうに情報を見て、自分の携帯を取り出しデータを見る。

彼女は彼女で自分の体のデータをくまなくとっている。

そこから距離やレース場などの情報とすり合わせて作戦を考えるのが、俺たちのレースプランだ。

尤もタキオンが優秀なレースプランナーだから、俺が考えることは少ないけど。

「2, 400mか。一応根幹距離ではあるからね、得意な距離だよ」

自分のデータを参照しながらそう話し、にんじんジュースを一口飲む。

「準決勝のレースに関して言うと、重要なのは出走者。これだけだろうね」

タキオンの意見には同意だ。

今集めた情報を鑑みるに、良バ場になることが予想されているし、天候もレース前後2日間が晴れだ。

となると、問題はやはり枠順と出走者だ。

「出走して来る逃げウマ娘がどのタイプかだね。サイレンススズカ君のような大逃げでハイペースに走るタイプなのか、先日のシーティエム君のようにスローでコントロールしながら走るタイプなのか」

タキオンは先行で走るウマ娘だ。逃げウマ娘の走りによって、その走りの内容が大きく変化するわけで。

トレーナー間では一般的に、大きく逃げるタイプの場合はペースメイクするのは2番手以降、先行集団のトップを走るウマ娘と言われている。

スローペースの場合は逃げウマ娘を起点に考えてもいいが、ハイペースの場合はタキオンやミヨウオウトプロのような先行ウマ娘が重要となるわけだ。

前走ではスロー寄りのミドルペースだったため、シーティエムのペースに合わせた走りだった。

それを利用してタキオンを封じに来たのがアマゾントリップやホクオウボーダーの仕掛けというわけだ。

ペースを合わせるのか、作る側になるのか。出走者によって変わるために、最も気になるところではある。

「仕掛け時やポジショニングはそう問題じゃないだろう。とにかく脚をギリギリまで溜めることが求められるわけだからね」

直線が長く、上り坂もあるために早仕掛けで勝つのは難しい。

そのため、ロスなく走りながらしっかりと脚を溜める。結局それが一番いいのだ。

「脚は好調。体のバランスも整っている。研究の成果も出ている。私が走る条件としてはかなりいいと思っっているよ」

ニヤリと笑い、データをを見せてくる。

携帯の画面には身体データと2,000mを走った時のタイムなどが記録されていた。

それらを確認すると、現状1年前から今まで記録が右肩上がりだ。

特に上がり3Fのスピードが著しく伸びている。

瞬発力を鍛えるトレーニングはあまりしていないはずだけどなあ。

「この調子を落とさずにいきたいところだね。精神的に安定した状態というのは勝負ご

とにおいて勝敗に直結する部分がある」

最近のタキオンはとにかく穏やかだ。

有マ記念で一度目指していた研究の成果が存分に発揮できたからか、かなり余裕がある。

薬を作つて渡してくるのは変わりないが、難癖付けて無理やり飲ませてくることはなくなつた。

カフエからも大人しくなつたと聞くからな。

そう話すともものすごい不機嫌になつたけども。

「さて、出走者が出るのを待とうじゃないか。そろそろ旅館に行くんだろう？ お互い

脚がふやけてしまう前に行こうじゃないか」

タキオンに急かされてパソコンを閉じ、足湯から出る。

次のレースはどんな展開になるんだろうか。タキオンの温められた脚を見て、そういうのだつた。



温泉とマッサージでしつかりと疲労を抜き、万全の状態で調整し始めた今日この頃。ついに出走者の発表となった。

「さて、誰と走ることになるんだらうね」

薬を調査しながら、くつくつ笑う。

つけているテレビでは理事長が生放送をしている。

これからタキオンの走るレースでの出走者、枠番が発表されるのだ。

『東京11レース！ 2, 400mだ！』

背後にあるスクリーンに1枠1番と表示され、ウマ娘の名前がランダムに消えては点き、消えては点きと繰り返されていく。

しばらくして理事長が扇子をビツと突き出すと、名前が表示された。

『1枠1番！ エアシャカール！』

「へえ、シャカール君か」

幾度となく対戦したエアシャカール。

タキオン以上にロジカルな思想を持っていて、計算が全てという理系のウマ娘。

差し追込のウマ娘だったと思うが、1枠1番は若干不利そうだ。

『続いて1枠2番！』

先ほど同様に名前が点滅し、誰が出走になるんだと待ち構える。

1 枠、2 枠、3 枠と決まったところで、4 枠 7 番。

『4 枠 7 番！ アグネスタキオン！』

「おや？ また 7 番か」

タキオンは予選同様 7 番での出走だ。

真ん中の枠番であれば前にも後ろにもポジションしやすいため問題ないだろう。

『続いて 4 枠 8 番！』

名前が点滅、そして表示される。

『4 枠 8 番！ ファインモーシオン！』

隣の枠はファインモーシオンだ。

有マ記念で戦った新進気鋭のウマ娘。

シニア級になったばかりのはずだが、参戦して勝ち上がってきたようだ。

その後も順調に進んでいき、7 枠へと差し掛かる。

『7 枠 14 番！ シンボリクリスエス！』

外枠にはシンボリクリスエス。

彼女も天皇賞からずっと戦い続けているウマ娘。

実力はシンボリ家らしく突出しており、タキオンがいなければ天皇賞も有マ記念も余

裕で勝っていただろう走りを見せていた。

秋の3冠をクラシック級から狙いに行くぐらいだ。ずば抜けた能力を持っている。そして最後の枠、8枠。

最も外枠である18番。

『8枠18番！ タップダンスシチー！』

「おっと？」

タキオンも俺も、思わず釘付けになる。

遠くからうわあー！ と悲鳴も聞こえてきた。

大外枠に大逃げのウマ娘。

これは波乱の予感がするぞ。思わず頭を抱えてしまうのであった。

Story 39 : URAファイナルズ準決勝

URAファイナルズ準決勝。

激しい戦いを制したウマ娘たちしかいない、精鋭だけが残っているレース。

東京2，400mという日本ダービーを彷彿とさせる条件。

なんとなく浮足立つ雰囲気がある東京レース場にはびこっている。

それが悪いことだとは言わない。

注目されている理由だし、何よりそれだけの熱気がレースにあるという証拠だ。

雰囲気の影響されてそわそわと尻尾を揺らすタキオンを見て思う。

「なんだいトレーナー君。こつちをじろじろ見て」

俺の視線に気が付いたのか不思議そうに俺を見る。

準決勝だなどと思ってと答えると、そりやあそうだろうと腕を組んだ。

「予選を勝てば次は準決勝さ、当然だろう。そしてここを勝てば決勝だよ」

最高の機会じゃないかとタキオンは嬉しそうにしている。

とはいえ、トウインクル・シリーズ以上に実力者しかいないレースだ。

走りながらデータを取りに行く余裕はあまりないみたいだが。

「なに、一緒に走ることで見えてくるものもあるさ」

経験だけはデータじゃ獲得できないからね、と。

理系的な考え方ではない、タキオンらしい回答を聞いてそうだな、と笑う。

今日も好調らしい。是非、いつも以上に魅力的な走りを見せてほしいところだ。



『URAファイナルズ準決勝。東京レース場で行われる最後のレースとなります』

『距離は2,400m、左回りです。日本ダービーやジャパンカップと同じ条件ですね』

日本でも注目度の高いGIレースと同条件ということもあり、観客たちの熱気は予想よりも凄まじい。

熱気にあてられて、出走しているウマ娘の中には掛かっていると思うぐらいに動いている娘までいる。

『注目のウマ娘たちを紹介しましょう。まずは1枠1番、5番人気エアシャカール』

『クラシック2冠のウマ娘です。シニア級では勝ち星が少ないですが、常に入着してい

るウマ娘です。今日も好走が期待できるでしょう』

エアシャカールは体をストレッツチしながらギロリと周囲を睨む。

見た目に反してかなり理知的なウマ娘だ、現状を確認して自らの計算式に間違いがないかを確認している。

緻密な計算に裏打ちされた走りは、常に好走している成績からも感じ取れるものだ。

『4枠7番アグネスタキオン。本日の1番人気です』

『やはり彼女が決勝に上がる最有力ウマ娘でしょうね。スピード、技術、共にトウインクル・シリーズでは最高峰ですから』

タキオンは当然のように1番人気だ。

成績やレース内容を鑑みれば当然ともいえる。

足首をストレッツチしながら他のウマ娘を観察して、レースプランの修整を行っていた。

『4枠8番ファインモーシオンです』

『彼女は3番人気ですね。抜け出してからグングン伸びる走りに期待です。私のイチオシですよ！』

穏やかに笑いながら観客たちに手を振っているのはファインモーシオン。

アイルランド名家のウマ娘であり、その走りも非常に強い王道の走り。

先行抜け出しから伸びていく走りは圧巻。今日もその走りが見たいと観客たちは期待している。

『7枠14番シンボリクリスエス。2番人気です』

『かなりきついトレーニングで仕上げてきたと聞きます。その実力を遺憾なく発揮してほしいですね』

有マ記念からさらに仕上げてきたシンボリクリスエス。

予選では大楽勝での勝利だったらしく、2番人気につけている。

鋭い差し脚で一気に追い抜く切れ味が武器。勝利のために研ぎ続けた脚を今日も見せてくれるだろう。

『そして8枠18番、タップダンスシチー。4番人気です』

『大外枠に大逃げウマ娘ですよ！ 今日は大波乱になりそうですね』

調子よくアップしているのはタップダンスシチー。

ハイペースとかスローとか一切関係なく自分のペースで大逃げをかます姿はまさしく2代目サイレンススズカ。サイレンススズカ引退してないけど。

緩みないペースで走るため、瞬発力勝負のウマ娘は地力が無ければ勝負すらできないというハイスペックなウマ娘だ。

『このレースも非常に面白い展開になりそうですね』

『全員の好走に期待しましょう！』

タキオンたちウマ娘は各々が集中しながらゲートに入っていく。

流石に準決勝となると集中力が違い、目線を合わせる程度で声をかけるなどもない。

静かに、しかし燃え上がる闘志を身に宿しながら、全員の体勢が整った。

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました』

——ガタンッ

『スタートしました！ 出遅れのない綺麗なスタートです！』

誰もが集中していた効果が発揮され、全員綺麗なスタートとなった。

そして、全員の意識が向くのは、外——。

『やはり彼女を置いて他にいないでしょう！ 先頭で走っていくのは18番タップダンスシチー！』

「行かせていただきますよオ！」

タップダンスシチーが大外からグングン加速して先頭に立ち、内側へと斜行していく。

基本的にはスローペースから瞬発力勝負になりやすい東京芝2，400。

しかし、彼女がハナを主張した時点で、彼女が参加していた時点でそんな展開はあり得ない。

全てを燃やし尽くして逃げたアイネスフウジンのように、距離適性を突き破ったミホノブルボンのように。

自らの全てを使い切って、全力で逃げる。それがタツプダンスシチーだ。

観客たちはみんなそう思っている。

『タツプダンスシチーが先頭！ その3から4バ身後ろに7番アグネスタキオン！ その後ろ8番ファインモーション！ 後方集団に1番エアシャカールと14番シンボリクリスエス！』

タキオンはタツプダンスシチーが自分の前に来たところで追従、彼女の後方を位置取り2番手を確保した。

ファインモーションは有マ記念での失態を学び、今回はタキオンの後方につくことでスタミナを温存する作戦となった。

エアシャカールとシンボリクリスエスは後方待機だ。

タツプダンスシチーがいるとはいえ最終直線は525m。必ず瞬発力勝負になる。

そう考えての差しの位置でのレースだ。しかし対応しやすいように、後方集団の先頭、8から10番手の位置でけん制し合っている。

『隊列が定まってきたところでタップダンスシチーが第1コーナーを回ります。少ししてアグネスタキオンから先行の集団もコーナーに入りました』

阪神レース場とは違い、コーナーの距離はおおよそ均等。

ハイペースで逃げるタップダンスシチーを見ながら、タキオンは自分の出方を考える。

後方でスリップストリームを使いながら走るファインモーションをどうするか。

ファインモーションはタキオンの後方を走りながら、なんて走りやすく走りにくいのだろうか感じていた。

スリップストリームを利用してはいるためかなり走りやすく、スタミナが温存できている。

しかし、コーナーに入ると途端に苦しくなる。タキオンのフォームが完成されているのだ。少しでも自分のフォームに問題があると、きちんと風よけにならない。

技術力。ファインモーションはそれを痛感していた。

『さあタップダンスシチー逃げる逃げる！ 第2コーナー回らして、1,000m通過は61.1！ ペースとしては平均でしょうか！』

『少し遅いぐらいですよ！ 前半はしっかり脚を溜めるみたいですね！ これは大逃げが決まるかもしれませんよ！』

タップダンスシチーはハイペースにはせず最初のペースを少しだけ落としていた。実際のところは単純に自分のペースがそうだっただけであるが。後方を一度確認して、向こう正面に入ったところで少しずつペースを上げ始める。

タキオンはふうん、と息を吐く。

思った以上に遅い。2, 400mの経験がなくとも、タップダンスシチーの走りぶりからそれは感じられた。

そもそもタップダンスシチーは逃げているわけではない、というのがタキオンの見立てである。看破していたのだ。

自分のペースで走っていた結果、それが逃げになっている。そんなウマ娘だと思っていた。

つまり、今ののところ平均ペースなのではないか。

タキオンの考えはこれに尽きる。

そして後ろを振り向いた彼女が向こう正面に入ってから少しずつ遠ざかっていく。なんとというか、緩みのないペースではあるものの、自分の脚に余裕がありすぎる。

「——ふうん」

タキオンは向こう正面に入ったところで、ほんの少し息を入れた。

そして、ペースをグンと上げたのだ。

「えっ！」

ファインモーションは遠ざかっていくタキオンの背中を見て驚愕した。

確かに距離は離れているが、ここからペースを上げるほどじゃないと思っていたからだ。

しかし、ここで前に出るということはタキオンはスローペースだと感じているということ。

どうするか。一瞬迷い、ファインモーションはタキオンについていくことにした。

『タップダンスシチー距離を離して……いや、アグネスタキオンが距離を詰めています！
ファインモーションも少し上がっているでしょうか！ 後方集団は変わらずです！』

『判断が速いですね。タップダンスシチーは放っておくと捕まえきれなくなりますから。流石の切り替えだと思えます』

タップダンスシチーは第3コーナーに入りながら、チラツと後方を確認する。

離せているかな。そう思って見たわけだが。

「やるじゃないですか……！」

確かに距離は離せている。

タキオンとファインモーション以外は。

流石の走りだとタップダンスシチーは感心した。

判断の速さ、これはレースにとっても重要な要素だ。

いいウマ娘が育つてるじゃないですか！

そう思いながらも、走りを緩めずコーナーを回っていく。

タキオンはコーナーに差し掛かりながら、タップダンスシチーとの距離を目測する。

おおよそ3……いや、4バ身と仮定。そこから距離を詰めるためのスパート位置と、息を入れるタイミングを計算。

第3コーナーを回りながら脳内にて計算式を出し、解を求める。

第4コーナー前、タキオンはペースを緩めて一息入れた。

「ここが私が1着になる可能性だよー」

レース中2度も息を入れたことで、タキオンのスタミナはかなり残っていた。

勝率が最も上がる走り方。それがこの2度のスタミナ温存。

それを邪魔されないために、わざわざタップダンスシチーの後ろを追いかけて2番手を取ったのだ。

フライングモーションが後方において1度目の回復がややしづらいという問題もあったが、それもクリアして万全の状態。

あとは、最終直線での勝負を残すのみだ。

『さあ大櫓を越えて第4コーナーへ！　そして最終直線！　最初に抜け出してきたのはやはりこのウマ娘！　タップダンスシチー！』

大歓声を一身に浴びながら走りこんでくるのはタップダンスシチー。

タキオンと4バ身もの差をつけながら先頭を走っていく。

スタミナは十分。あとはそのまま走りこむだけ。そんな状態だ。

『後方からはアグネスタキオン！　ファインモーションです！　後方集団も最終直線に入りました！　さあこの長い直線だ！』

ファインモーションは脚の使いどころはどこだろうかと考える。

最終コーナーで加速しながら走っているものの、まだトップスピードではない。

やはり坂を上り切ったから？　それとも残り200m？

トレーニングしてきたものの、ファインモーションは経験が足りない。

迷いながらも、坂を上り切ったから行こう。そう結論付けた。

『タップダンスシチー坂に差し掛かる！　アグネスタキオンも遅れて坂を上る！　差は未だ4バ身！　後方からはエアシャカールとシンボリクリスエスが突っ込んでくる！』

後方待機していたエアシャカールとシンボリクリスエスが突っ込んでくる！

ここぞとばかりに加速して一気に距離を詰めてきた。

後方はかなりのスローだったため、脚が有り余っている。坂を含めてガンガン攻める

走法となったのだ。

坂を上り終えたタップダンスシチーは、残りは300mだ！ 行ける！

そう考えながら、残りのスタミナを振り絞って走っていく。

しかし、彼女には想定外の部分があった。

後ろにいたアグネスタキオン。彼女が自分以上にスタミナを余らせているということだ。

——タキオン！ 差せーッ！

タキオンは坂を上り終えてニイッと笑い、脚に力を入れる。

「もちろんだよ！」

そして溜めてきた脚を一気に解放した！

『タップダンスシチー先頭！ しかしアグネスタキオンがここで一気に加速した！ もう3バ身！ 2バ身！ グングン差を詰めていく！ ファインモーションも追いかけってくるがアグネスタキオンが速い！』

一瞬で差を詰めたタキオンは、そのままタップダンスシチーの横をすり抜けて先頭へ出た。

抜かされた方はギョツとする。あまりにも一瞬。瞬きをしたと思ったら既に抜かされていたのだから。

た。

「はあ……はあ……」

「ふう……素晴らしい走りだったよ。シニア級に上がった直後でこの走りなら、もっと強くなるだろうね」

タキオンは素直に称賛した。

しかし、敗者である彼女には慰めにしか聞こえない。

大きな悔しさを胸に、シンボリクリスエスはしっかりとタキオンに視線を向ける。

「どうすれば、速くなれますか」

シンボリクリスエスの質問に、タキオンはくつくつ笑って答えた。

「誰よりも強く願うことさ。勝ちたいとね」

その答えを聞いて、何かを考える仕草をして、力強く頷いた。

——その後、有マ記念で9バ身差をつけて圧勝することになるのは、また別の話。

Story 40：果て

並み居る強豪たちを押し分け、タキオンはURAFファイナルズ中距離部門の決勝へとたどり着いた。

新聞や雑誌では既に決勝の特集が組まれている。

情報収集のために買いあさってトレーナー室でタキオンと一緒に読みながら紅茶を楽しむ日々だ。

『最強マイラータイキシヤトル！ 短距離でも勝利するのか！』『異次元の逃亡者、マイル部門にて完勝！』既に注目度の高いウマ娘たちは大きく取り上げられているね」

タイキシヤトルはマイルでは未だ無敗。短距離でもマルゼンスキーやサクラバクシンオーたちに勝つことができる最強のマイラーでありスプリンターだ。

前回の第2回URAFファイナルズはマイルで出場して優勝しているから、今回は短距離部門に殴りこみをかけたようだ。

異次元の逃亡者はサイレンススズカだろう。アメリカを主戦場としていたはずだが、URAFファイナルズのために帰国していたのだ。

タイキシヤトルをマイルで負かせるのはきつと彼女だけだと言われるぐらいには飛

び抜けて強いウマ娘でもある。

そしてそれを差して優勝したのが、今俺が見ている雑誌のウマ娘。

「そっちは……ふうん。『笑門福来！ バ群を切り裂くステイヤー！』フクキタル君の走りは本当に興味深い」

長距離部門に出走中のマチカネフクキタル。

サイレンススズカを唯一差して勝てる存在と言われているが、本質的にはステイヤーとも言われている。

バ群に包まれようが最後方でブロックされようが、必ずトップスピードで抜け出してくる走りはあまりに衝撃的だ。

しかも自信満々にすり抜けてくるものだから恐ろしい。だが、見ていてとても気持ちいい走りでもあるけど。

「まあ、私たちが気にすべきはこっちなだね」

そう言つて新聞を1つ手に取つて、俺に見えるようにして記事を読む。

『皇帝vs帝王！ 王座はどちらの手に！』『スーパーカー、中距離でフルスロットル』会長にテイオー君、マルゼンスキー君。知ってはいたが、そうそうたる面子だね」

中距離部門にはシンボリドルフ、トウカイテイオー、マルゼンスキーと数多くの優駿たちがその名を連ねている。

ドリームトロフィー・リーグのメンバーが多く、いかに上位リーグがおかしいのかがよくわかるラインナップだった。

タキオンはそんなメンバーと競い合って勝たなければならない。難しい話だが、これほど燃える要素もないだろう。

『超光速のプリンセスの挑戦』『漆黒の幻影、夢を飲み込むか』私とカフエについて書いてある雑誌もあるよ」

手渡された雑誌を見ると、中距離部門と長距離部門の要チエックウマ娘として2人が書いてあった。

カフエは長距離での出走でタキオンと戦うことはないが、中距離部門出走のタキオンと並べて書かれているのを見ると、シニア級で期待されるウマ娘が誰なのかよくわかる。

というか、トウインクル・シリーズから出走しているウマ娘を選出しているんだな。

その他のウマ娘たちもシニア級のウマ娘たちだ。

「二つ名というやつだろう、この漆黒の幻影だとか、スーパーカーとか。なんだか不思議な感覚だね」

タキオンは自分の記事を見て首を傾げている。

超光速というのはまさしくタキオンという感じで、端的に表しているからとてもいい

と思う。

ただプリンセス要素はどこから飛んできたのだろうか。わがままお嬢様なところかな。

「トレーナーくん？ 誰がわがままだった？」

一瞬で不機嫌そうな表情になって俺に詰め寄ってくる。

おっと、失言だった。悪い悪い。

「全く悪いと思っていない言いかたじゃないかい？ なあ、トレーナー君。最近遠慮やデリカシーの欠如が見られると思うんだが。親しき仲にも礼儀ありというだろうか？ もう少し私に対して礼節というものをだね」

礼節を語るなら自分の助手にもっと敬意を払ってほしいものだが。

「む、君のことは尊敬しているさ。よくもまあ内容物不明の菓を遠慮なく飲むことができるものだよね」

そういうとこだぞ、遠慮がなくなってきた理由は。

流石に3年もこんなことやられていたら、タキオンの要望に応えこそすれ、反応は明らかにしよっぱくなるものだろう。

「なんだよ、君は私の助手なんだろう？ 私の言うことを聞くのは当然じゃないか」

はいはいと適当に返事をしてまた雑誌から情報を集める。

決勝は本当に難しい戦いになるはずだ。きっちり対策をしないと。詰め寄って文句を垂れるタキオンの頭をかきまわしながらそう考えるのだった。



決勝が近づいてきたある日。

リフレッシュのためタキオンをどこかに連れていこうと思い、希望を聞いてみた。

「少し待ってくれたまえ。準備をしよう」

実験道具を片付けて白衣を脱ぎ、外に出る準備を始めた。

あ、今から行くんだ。

「時間的に丁度いいだろうからね」

そう言われて窓の外を見る。

いやすっごい夜だけだね。

セーターやマフラーなどを着せて防寒させたタキオンと共に、夜道を散歩する。歩いていける目的地らしい。

「3月とは言え冷えるね。トレーナー君がこれを買ってきてくれなかったら凍り付いていただろう」

楽し気にマフラーをぼんぼん叩く。

実験中いつも手をすり合わせているものだから、防寒用のマフラーやらセーターやらを買ってきて使わせているのだ。

色々なことに無頓着すぎて本当に心配になる。

「雨や雪の中走ることもあるぐらいだ。問題ないだろうと思っていたんだよ」

こういうものがあつた方が快適だけだね。

尻尾を軽く揺らして、機嫌がよさそうだ。

しばらく歩いていくと、ここだよとベンチに案内される。

2人で座ると、タキオンが空を指さす。

見上げてみると、綺麗な満月に煌めく星々。

学園内でこんなに良く見える場所があつたのか……。

「カフェが時々星を見ながらコーヒーを飲んでいてね。ここは良く見えるんだと言っていたんだ」

そう言つてタキオンが鞆から取り出したのはホットのミルクティーを2本。いつも通りだなと苦笑しながらもらつて一口飲む。

少し肌寒い空気と温かい紅茶、まろやかなミルクと砂糖の甘みが合わさつてとても美味しい。

「お友達と一緒に夜道でコーヒーなんて興味深いなと思つていたんだ。しかし、こうやつて一息ついてゆっくり見上げると、頭がスツキリしないかい」

そう話して紅茶を飲むタキオンの横顔は大人びて見えた。

しばらく無言で星々を堪能していると、不意にきらめきが見えた。

「ふうん？ 流れ星かな」

タキオンがそう口にしたのと同時に、俺は両手を組んで願ひ事をする。

急に祈り出したのを見てタキオンは驚いたのか、べしつと尻尾が俺に当たつた。

「トレーナー君？ 何を……ああ、願ひ事か。眉睡な話だね」

オカルトすぎるよ、なんて言うタキオンの脚には、神社で買ったお守りがついてる。今でもずつとつけてくれてるみたいだ。

「ところでトレーナー君は何をお願ひしたんだい？ やっぱりに勝つてほしいとか、優勝とか。そんなことを願つたのかな？」

そうじゃないよ、と俺が言うとき意外そうに目を丸くしていた。

「珍しいな。君はいつも私に勝ってほしいと言うから、てつきりそれだと思ったよ」

まあ、近いと言えれば近いけどちよつと違うって感じだ。

そう話すと、不思議そうに首を傾げる。

「じゃあ、なんだい？ 言えないってわけじゃないだろう」

自分の予想が当たらず、若干不満そうにしているタキオン。

まあ、言ってもいいかと思つて、答える。

——いっしょに果てを見たい。

タキオンは想像していなかったのか、口を開けてほかんとしていた。

結局のところ、最初からずっと俺は同じ思いを抱いてタキオンのトレーナーをしてきたわけで。

彼女が目指す最高速度のその先。果てが見たい。後ろからでも横からでもなく、彼女の隣で見たいんだ。

確かにレースに勝ってほしいとかちやんとしてほしいとか、月並みに思うことは多々あるけれど。

いつだって俺は、果てを隣で見たいって思っている。

「なんだ、それ」

タキオンが一言呟くと、こらえきれなかったのか爆発するように笑いだした。

「アツハツハツハ！　なんだそれ！　なんだそれ！」

ひどく笑われているが、いつものことだから何も気にならない。
バカにされている雰囲気ではないし。

「はー……生きていて一番笑ったかもしれない。そうか、そうか」
楽しそうに目じりの涙を拭いて、楽しそうな笑顔で俺を見る。

「君はいつだって狂った目をしているね、本当に」

「いいだろう！　君は私の助手だ、共に果てを見る権利がある」

「目指そうじゃないか！　私と君で、その先を！」

力強く宣言したタキオン。

とても充実していて、嬉しそうな表情をしていたのだった。

Story 41 : URAファイナルズ決勝

『URAファイナルズ決勝戦が今年もやってまいりました。今年の舞台は中山レース場です』

最強のウマ娘を決めるURAファイナルズ。

決勝の舞台は中山レース場だ。中距離は2,000mで争われる。

中山レース場はタキオンが得意とするレース場。

4戦4勝しているし、GIを3勝したコースでもある。そして、その全てが2,000mだ。

タキオンとしては最高の条件で挑むことができるわけだが、対戦相手だつてそうそうたる面子。

厳しいレースになるだろうが、タキオンならやってくれる。そう信じている。

「やれやれ、そんな熱い視線を向けなくてくれたまえ」

困った様子で笑いながら俺を見る。

思わず見つめていたようだ。

「確かにこのレースは私の。いや、私たちの3年間の集大成だ。強いライバルに得意な

距離とレース場。条件は整った。トレーナー君が熱くなるのもわかる」

私もなんだか浮ついているよ。

尻尾を揺らし、耳をぴこぴこ動かしながらそう話す。

「まあ、君に言った通り見せようじゃないか。ウマ娘が出せる最高速度のその先を。私たちはそれができる位置にいるのだから」

やる気に満ちた表情で腰に手を当て胸を張る。

お互いに力強く頷いた。

さあ、勝負の時だ。



『第3回URAFファイナルズ決勝、中距離部門。最強のウマ娘は誰になるのでしょうか』

タキオンはトウインクル・シリーズでは味わえなかつた緊張と高揚を感じていた。

今まで競い合わなかつたウマ娘たち。それも既にレジエンドと言われているウマ娘たちとのレースなのだ。

そして続けてきた研究の成果をすべて出せる最高の機会。

胸が高鳴るのも仕方のないことだろう。

『えー、1人足りませんが、本日の注目ウマ娘を紹介していきましょう。まずは1枠2番、シンボリルドルフです』

『2番人気ですね。安定した走りと圧倒的な強さを同時に見せてくれる我らが皇帝です。かなり仕上げてきたようですね、調子がよさそうです』

皇帝シンボリルドルフ。

泰然としたその姿は、なるほど皇帝と言われるだけある。タキオンはレース場の彼女に、いつもとは違う印象を受けた。

普段は威厳のある生徒会室だが、ターフに立つ彼女はまさしくレースを極めたトップアスリート。絶対に勝つ。そんな闘志を感じる。

『3枠5番、トウカイテイオー。4番人気です』

『皇帝と帝王が勝負になります。前回のウインタードリームトロフィー・リーグではトウカイテイオーが勝利しましたからね、今回も勝利したいところでしよう』

自称無敵の帝王サマことトウカイテイオー。

エネルギーシユにステップを踏んで動き回る彼女は絶好調だ。

バネのような瞬発力と意志の強さで上り詰めたウマ娘。かなりの強敵だろう。

『4枠8番アグネスタキオン。今日は5番人気です』

『現シニア級では最強の一角と言えるでしょう。ドリームトロフィー・リーグのメンバーに対抗できる力を持っていますよ』

タキオンは5番人気だ。

あれだけの活躍をしてもこの順位というのは、いかに上位リーグの面々が強いかを物語っている。

しかし彼女も負けてはいない。沸々と湧き上がる闘志を胸に、じつくりとメンバーを観察していた。

『5枠9番マルゼンスキー。3番人気です』

『今回は中距離部門での出走です。いつも通りの力強い逃げに期待ですね』

スーパーカーことマルゼンスキー。

超ハイスペックな地力で走ったら逃げになってしまう天然の天才。

どの距離でも環境でも遺憾なく実力を発揮できるパワーはまさしく怪物だ。

最後の大外枠まで紹介しようとする、会場がざわつき、そして大きな歓声が上がった。

誰もが地下バ道のほうに振り向いたため、タキオンも振り向く。

そこにいたのは、常に世間を賑わせる、破天荒なウマ娘。

『ついにやってきました！ 彼女なくしてこのレースは語れません！ 8 枠 1 8 番！ 1 番人気！ —— ゴールドシップです！』

赤い勝負服に身を包んだ芦毛の美少女ウマ娘は、楽しそうに笑って飛び出してきた。

ファンファーレが鳴り響き、ついにゲートインの時間になる。

タキオンは気持ちを落ち着かせるために、ゆっくり体をほぐしつつゲートに近づいていく。

「最後のゲートをぶち破れ！ オラア！」

「おいやめろ！ ゴールドシップを止めるんだ！」

「触んじゃねー！ アタシに触れていいのはフライングスパゲッティ・モンスターかタスマニアデビルだけだあー！」

『ゴールドシップ暴れています！ いつも通りゲートに入りたくないようですね』

バタバタ暴れるゴールドシップを係員 3 人がかりで止めている。

ドリームトロフィー・リーグでは毎回のことで、係員を蹴ったりケガさせたりはしないため、パフォーマンスだと思われていた。

担当トレーナー曰く、準備運動みたいなものだとか。はた迷惑すぎる。

しばらくして満足したのか、疲労困憊の係員をよそに機嫌よくゲートインする。

これで全員だ。騒がしかったレース場が静まり、全員がスタートの体勢に入った。

『各ウマ娘、ゲートイン完了しました』

——ガタンッ

『スタートしました！ 18番ゴールドシップ以外は綺麗なスタート！ ゴールドシップは出遅れです！』

大外にいるゴールドシップ以外はスタートダッシュを決め、揃ったスタートになった。

明らかに遅れてスタートしたのに、観客たちは待つてましたとばかりに歓声を上げる。

シンボリルドルフは苦笑し、タキオンはしつけられているねえと感心した。

『先陣を切るのやはり9番マルゼンスキー！ 快調に飛ばしていきます！』

予定調和のごとく飛び出していくのはマルゼンスキー。

初速も加速も明らかに違う。それでいて無茶な走りではなく、自然体。

恵まれた体から為される強さというものを体現している。

『少し離れて5番トウカイテイオー、8番アグネスタキオン。その後ろに2番シンボリルドルフと続きます。ゴールドシップは最後方18番手です』

注目されているウマ娘たちは、おおよそ先頭から4、5番手にいる。

マルゼンスキーから離されたいためには、前にいなければならぬのだ。

よつぼど自信がない限り中山レース場においてマルゼンスキー相手に差し追込は明らかに分が悪い。

『ポジションが決まったでしょうが、第1コーナーに差し掛かります。先頭はマルゼンスキー。トウカイトイオーとアグネスタキオンが2、3番手で並んでいます。すぐ後ろでシンボリルドルフが追いかける形。そこから2バ身離れて後方集団ができています』
『マルゼンスキーが走るレースはとにかくペースが速くなりやすいです。緩みなく進みますし、いかにスタミナを切らさないかがポイントでしょう』

中山レース場特有の急坂を上りながらコーナーを回っていく。

この坂のせいで、中山レース場ではタフさが求められる。

そのためマクリが決まりやすいはずなのだが、マルゼンスキーがいるせいで先行じゃないと追いつけないだろうというレースになっているわけだ。

しかし、そのマルゼンスキーは落ち着いて坂を上っている。

タキオンは事前情報通りの走りに感心しながらも少し困った。

あまりハイペースだと後半に脚が残せない。それに後ろの皇帝が尋常じゃないプ

レッシャーをかけ続けていて、非常に走りにくいし。

後ろを気にしながら坂を上り終え、第2コーナーの下り坂に差し掛かる。

『立ち上がりから静かなレースとなりました。そして向こう正面へ。1, 000 m タイムは58.2。これはハイペースですね』

『皐月賞の平均が59秒台ですからね。やはり警戒しているのでしよう』

レース場の半分を走ったところで、ペースが速めだなと感じながら誰もが走っていた。

少し息をいれよう。タキオンはレースプランを考慮して、一瞬だけ脚色を緩める。

それに合わせて隣のトウカイテイオー、シンボリルドルフも息を入れたのを感じた。

上手い。そう思った瞬間だ。

——ドオン！

後方から爆発音が鳴り、誰もがその音に恐怖した。

Story 42 : 超光速のプリンセス

来たっ!!!

彼女を知る全てのウマ娘たちは展開の変化を感じた。

タキオンは情報通りの動きとその爆音に驚きながらも冷静に走っていく。

(これがあのチームのリーダー、ゴールドシップ君の走りかい！)

ドオン！ ドオン！ と凄まじい音を鳴らしながら、ゆっくりとその音が近づいてくる。

隣にいるトウカイトイオーは先程以上に真剣な表情になり、後ろのシンボリドルフからのプレッシャーはさらに強くなった。

残り1,000mから仕掛けるなんておかしいだろうと思うが、それで勝利しているのがゴールドシップだ。

マルゼンスキーは音を聞いてから加速、先ほどよりもペースが上がっている。

彼女は何度も戦ったからわかっているのだ、ゴールドシップに勝つための方策が。単純に近づく前にもっともっと離せばいい。マルゼンスキーの対策はそれだった。

『ゴールドシップがここで上がっていきます！ 黄金の不沈艦の走りはいつも通り！』

先頭のマルゼンスキーはさらに差を離していきます!』

『早仕掛けに対して早めのペースアップで応えましたね! しかしスタミナが持つのか心配です!』

マルゼンスキーと差が離れたまま第3コーナーへと入っていく。

流石にここから攻めていかないと追いつかない。タキオンは残りの距離と最大速度を出すためのスパートを計算。

解は出た。一瞬だけ脚を緩め、脚を溜める。

目を閉じ、開いた次の瞬間。タキオンは一気に抜け出した。

『第3コーナー入りましてアグネスタキオンが仕掛けました! 少しずつマルゼンスキーとの距離を縮めていきます!』

『それに合わせてトウカイテイオーも続いた! シンボリルドルフはまだ脚を溜めるのか前に出ません! ゴールドシップが中団を超えて上がってきています!』

タキオンが仕掛けたタイミングに一瞬で合わせたトウカイテイオー。

巧い。自分の後ろでスリップストリームを利用する彼女の技術と才能に感心する。

スパートをかけながらスタミナをきつちり残すように走るのは、流石上位リーグのウマ娘だ。

トウカイテイオーもタキオンの息の入れ方や判断の速さに驚いていた。

ヘンな実験ばかりしているヘンなウマ娘。そんな印象だったが、レースでの技術を見て、ヘンだけど才能あるウマ娘だと人物像を改める。

それでもボクのほうが強いもんね！ そう考えながら、タキオンの背後でじつくりと距離を詰めていく。

そんな2人を見ながら、シンボリルドルフは待っていた。

彼女が中距離部門に参加した理由は、前回長距離に出たこと。体への負担が少なく、全てのレースで力を出しやすいこと。

そして、2度も負けている相手と戦えることだ。

「待っていたよー！」

「アタシは待たねーぜー！」

ゴールドシップが自分の隣に来たところで、シンボリルドルフはペースを上げる。

しかし加速するまでの数秒、ゴールドシップは脚を休ませながらコーナーを回っていた。

そしてシンボリルドルフが進出を始めると同時に、隣で併走しながらグングン前にかつていった。

爆発音が鳴り響き、巨大なプレッシャーがウマ娘たちにかかる。

こと圧の大きさにかけては先ほどのシンボリルドルフ以上だ。タキオンは冷静さは

失わないものの、強烈な走りにくさを感じていた。

脚が重いとか、スタミナがなくなるとか、そんなプレッシャーではない。

ただただ単純に、大きなナニかが迫ってくる。そういうものだ。

『第4コーナー回りまして最終直線に入った！ 中山の直線は短いぞ！ 後ろの娘たちは間に合うか?!』

『先頭はマルゼンスキー！ 3バ身程離れてアグネスタキオン！ すぐ後ろのトウカイテイオー外に出た！ シンボリルドルフとゴールドシップも上がってきたぞ!』

少し距離を詰めたタキオンだが、直線に入った瞬間外に出たトウカイテイオーが跳びはねるようにタキオンを抜かして2番手に浮上。

瞬発力の高さと驚異的なバネ。一瞬にして加速し、タキオンを置いていく。

さらに後方から凄まじい速度で追いつけてきたシンボリルドルフと爆音を奏でてグングン迫るゴールドシップ。

一気に先頭争いに躍り出て、タキオンは5番手まで落ちた。

マルゼンスキーとの差は2バ身にまで詰めているものの、それ以上のスピードで4人は走っている。

そして、極めつけに聞こえてきたのは、こんな声だ。

「ゴールドシップーッ!!! 突っ込んでこオーーいッ!!!」

あれは、ゴールドシップのトレーナー！
その声か聞こえた瞬間、ゴールドシップがグツと体に力を入れ、爆発した――。



「いくぜええええーっ！！！」

『ゴールドシップ抜け出した！ マルゼンスキーに並ぶか！ 並んだ！ いや、追い抜いた！ トウカイテイオー伸びていくが追いつけない！ シンボリルドルフは抜かした！ 2番手に浮上！ 先頭はゴールドシップ！ アグネスタキオン苦しいか！』

目の前で一気に加速して遠ざかるゴールドシップ君を見て、私は思わず笑ってしまった。

ここからまだ伸びるのかい！ 私は、君たちに離されないようにするので精いっぱいなんだぞ！

残り200 m程度しかないというのに！

「だが、まだだ！」

私は諦めていない。だってそうだろう。

一度は走る事すらやめて、脚を壊してまで果てを目指そうと思っていたんだ。それがどうだ！ トレーナー君のせいで全力で走れるようになってしまった！ プランBからプランAに、軌道修正させられてしまったんだからね。

それなら、そうなってしまったのなら。

もう諦める事なんてできない。

私自身の脚で、可能性のその先を見る。それを達成するまで、何があろうともだ。今日の前にいる4人は最高速度の果てにほど近いのだろう。

特にゴールドシップ君。彼女は抜きこんでているよ。なんだあの強さは！

しかしだね、私はわがままなんだよ。

何年もかけて、ようやくその可能性に手が届くところまでやってこれたんだぞ。

教室でボヤ騒ぎも起こした、トレーナー君をモルモットにもした。

その全て、研究の成果がここにあるんだ。

なあ、トレーナー君。

君は見たいって言っただろう？

いっしょに果てを見たいって。

そして約束したはずさ、見る権利があると。

悪いがあれは嘘だ。

君は隣で見る義務がある。

それが私の助手としての運命だよ！

ゴール前にいるトレーナー君の顔を見る。顔は強張って、でも諦めていない。

……そして、いつも通り。狂った目をしているよ。

ククク……さあ、叫びたまえトレーナー君！

私たちの研究の全てを、ここで出してあげようじゃないか！

——タキオオオオオ——**!!!!** 行けえええええ——**!!!!**
心臓が跳ねる。気持ちが高揚する。

体が熱い。くらりとしてしまうほどに、力が湧いてくる！

今ならば、たどり着けるかもしれない。

可能性の、その先。

誰も証明しきれなかった仮想の現実、その果てへと——！

「さあ、可能性を導き出そう！」

思いきりターフを踏み抜き、体を前のめりに。

そして、全力でターフを蹴り飛ばした！

『ゴールドシップが坂を上る！ シンボリルドルフ追いつけるか?!? あ、アグネスタ

キオンだ！ アグネスタキオンが驚異的なスピードで追い上げてきた！ トウカイテイオー抜かした！ マルゼンスキー！ シンボリドルフに並んだぞ！」

私が前へと走っていくたびに、すれ違うウマ娘たちは驚愕の表情で私を見る。当然だろう！ 私は今、ウマ娘が出したことのない最高速度！

その先を見て走っているのだから！

坂を駆けあがっていく間にシンボリドルフ会長と並んだ。

驚きを隠しきれないようで、目を見開いて私を見る。

アツハツハ！ しつかりと見たまえ！

これが君が大好きな可能性というものだよ！

『アグネスタキオン抜けた！ ゴールドシップに追いつくか！ 追いついた！ 並んでいる！ 坂を上った！ あとは100m！ シンボリドルフ食らいつく！ 行けるか！ 行けるのか!?!』

ゴールドシップ君の隣までたどり着き、追い抜こうとすると抜き返される。

横目で彼女の顔を見ると、ギラギラした心底楽しそうな笑顔を浮かべていた。

彼女だけは、私が来たのを驚いてないみたいだね！

「行くぜ行くぜえーっ！」

「はあああああああーっ!!!」

私もゴールドシップ君も譲らない。

死力を尽くしたデッドヒートだ。

あとほんの少し、ほんの少ししかない。

レースが終わってしまおう。

ダメだダメだダメだ！

私はタキオン！ 超光速の粒子だ！

可能性の先を見るのは私なんだ！

私以外が最初に見る事だけは決して認めない！

たとえカフェでも、トレーナー君でも！

絶対に譲らない！ 絶対にだ！

ウマ娘の脚の可能性は！ 私の可能性は！

「目の前にあるのだから……!!!」

『ゴールドシップか!? アグネスタキオンか!? アグネスタキオン抜けたか! 抜けた

か! 抜けた! アグネスタキオン抜けたッ! 先頭はアグネスタキオンだ! まだ

伸びる! 伸びる! なんとという速さだ! アグネスタキオン! これが超光速のプ

リンセスだアーーーーッ!!!』

無我夢中で駆け抜け、脚の回転を緩めない。

見えた！ 見えたぞ！ 私の肉体で到達し得る限界速度の、その先が！

これが、可能性のツ

「ほいストツプ」

「うわあつ」

突然伸びてきたなにかに体をすくい上げられ、私の世界は急激に遅くなっていく。

何が起きたというんだ!?

「目に箸でも刺さったか？ 見えてつかー？ 芦毛のスーパー美少女、ゴルシちゃんだ

ぜー」

「あ、え、ゴールドシツプ君？」

ゆっくり景色が止まったと思ったら、ゴールドシツプ君が私を担ぎ上げていた。

つまり、どういう状況なんだい？

「やりすぎだ。リミッター吹っ飛ばして走ったらケガじゃあすまねーぞ。最後だけだつ

たからいいけどよ」

「なに？ リミッター？ そうか、肉体の限界を超えて走っていたのか！」

自分の体を壊す勢いで走ってしまったらしい。

しかし今の感覚なら、体をもっと鍛えれば再現性はある！

「ククク、ついに掴んだぞ！ さらに可能性が広がったじゃないか」

「前から思ってたけど、変わってるよなーお前」

「君にだけは言われたくない言葉だね」

アタシはまともだぜと言いながら、私を下ろしてくれた。

会長やマルゼンスキー君も、私のことを称えながらも心配してくれる。

なんだ、少しこそばゆい感覚だな。

「アグネスタキオン。よく称えられ、よく心配されるといい。君という存在がどう思われているか、たくさん感じるんだ」

会長はそう言ってマルゼンスキー君と共に去っていった。

「相変わらず凍ったマグロみてーにお堅いやつだな。じゃ、ゴルシちゃんもトレーナーの背中引っぱたいてくるからよ！」

じゃあなーと言って観客のいる所に突撃していった。

グワーツ！ という声と共に吹き飛んでいく誰か。

そして、その近くには。

「……ふふ、トレーナー君」

号泣しているトレーナー君がいた。

なんだ、よく泣くなあ君も。

「見たかい、トレーナー君」

これが研究の成果さ。
私が笑うと、へにやりと崩れた笑顔を見せてくれるのだった。

Story 43 : うまびよい伝説

ウイナーズサークルにたどり着き、そこで待っていたタキオンを見つけた。

思わずタキオン！ と叫びながら走っていくと、彼女はぽかんと口を開けて俺を見る。

「おいおいトレーナー君。顔がさつき見たよりもビシャビシャじゃないか。泣きすぎじゃあないかい」

そう言つて俺の顔を袖でグシグシ拭いてくる。

おい、これ勝負服……！

「まあいいじゃないか。洗えば変わらないよ」

そう言つてぐいぐい押し付けてくる。

慌てて離れて自分の袖で目を拭くと、タキオンが穏やかに笑っていた。

「見れたかい？」

ああ、見れた。

でも、すごく心配になった。

「そうか。でも、ケガはしていないよ」

体が壊れるんじゃないかと思った。

「大丈夫さ、ほら」

タキオンはお守りがついていて、脚を見せ、軽く振る。

「これがあるならケガすることなんてないだろう。実績があるものだからね」

オカルトだなぁと眉尻を下げると、すぐ近くにオカルトな存在がいるじゃないかと言われた。

ああ、カフェ……。

「何はともあれだ。私たちはついに辿り着いた……やった、やったんだぞ！ トレーナー君！」

興奮を我慢していたらしいタキオンが、俺の腕を掴んで喜び出す。

じたばた脚を動かしたり、ぴよんぴよん跳ねてみたり。

ただの少女のように嬉しそうなタキオンがそこにおいて、思わず俺もやったな！ と笑顔で跳びはねるのだった。



珍しくしつかりインタビューを答え終わって、ライブ会場。

俺はサイリウムを持ってライブの開始を待っていた。

「いやあ、今日はかなり負けたな。すごい悔しい」

そして隣には先輩だ。

タキオンがゴールドシップを負かし、長距離ではカフエがフクキタルを打ち破った。

負けたとか言っているが、短距離とマイルでタイキシヤトルとサイレンススズカが勝っている。

つまり、今回の勝利でURAFファイナルズ距離別全部門制覇しているというわけだ。

しかも先日海外にいたアグネスデジタルはドバイシーマクラシックでハナ差2着だし。

かなり負けたとか嘘つけ！

俺はそう思った。

そんなこんなでライブの開始を待っていると、準備が終わったようでもステージでライトが煌めく。

URAFファイナルズではお決まりの音楽が鳴り響き、奥のステージに3人のウマ娘が登場した。

位置について

よーい

ドン!

アグネスタキオン、ゴールドシップ、シンボリルドルフがステージから降りてくる。それを見て、よくここまでできたものだなあとタキオンとの出会いを思い出す。

うー

うまだつち

うー

うまびよい

うまびよい

最初の出会いはもう最悪だった。

保健室で薬を飲まされそうになっていたんだから。しかも3本。

うー

すきだつち

うー

うまぼい

うまうまうみやうにや

3

2

1

F i g h t !

そのあとシンボリドルフとの模擬レースを見て、惚れこんだんだ。

凄まじいスピードとその素質、そして可能性の先を目指すその姿勢に。

おひさまぱっぱか快晴レース

はいっ

ちよこちよこなにげに

そーわ So What

スカウトしたくて薬を飲んだし、役に立ちたくて何度も発光した。

今思うととんでもないことだな。

第一第二第三しーごー

だんだんだんだん出番が近づき

わかつてはいたけどデビューでは圧勝だった。

その後のホープフルステークスでも快勝。

やっぱり強いんだ。そう思った。

めんたまギラギラ出走でーす

はいっ!

今日もめちやめちやはちやめちやだつ

ちやー!

がち追い込み

糖質カッツ

コメくいてー

でもやせたーい!

タキオンから弥生賞に出ると言われた時は驚いたな。

あの時はやる気が出てきたのは嬉しいとしか思っていなかった。

あのこは

ワツフオー

そのこは

ベイゴ

どいつもこいつも あらら

リバンドー

泣かないで

はいっ

拭くんぢやねー

おいっ

あかちん塗つても

なおらないっ

はーっ？

皐月賞でも強かったな。

その後からはずつと混乱しっぱなしだったけど。

レースに出るのか出ないのかわからず、トレーニングはいつぱいやるし。

きよようの勝利の女神は

あたしだけにチユウする

虹のかなたへゆこう

自分の脚について教えてくれた時は、情けなくて悔しくて。

絶対にタキオンを走らせてやるんだって気持ちでいつぱいだった。

風を切つて 大地けつて

きみのなかに 光ともす

どーきどきどきどきどきどきどきどきどき

きみの愛バが！

俺の愛バが！

菊花賞を終えて、しっかりと休養して研究を続けて。

シニア級になってからは常に全速前進だった。

ずきゅんどきゅん 走り出しー

ふっふー

ばきゅんぶきゅん かけてーゆーくーよー

大阪杯、宝塚記念と中距離のGⅠに挑戦していった。

勝つたびに夢が広がったし、タキオンの走りに魅了された。

こんなーレースーはー

はーじめてー

3

2

1

Fight!!

天皇賞と有馬記念。

何度も戦うライバルたちとのレースは、タキオンにとって理想の条件だった。

そして有馬記念で可能性の先に手が届くところまで来たんだ。

ずきゅんどきゅん

胸が鳴り

ふっふー

ばきゅんぶきゅん

だいすーきーだーよー

URAFアインナルズでは観察するとか言っていたが、なんだかんだタキオンは走りた

かったんだ。

だってもう少して自分が思い描いた瞬間にまで行けそうなんだから。

今日もーかなでーるー

はぴはぴ だーりん

3 2 1 Go Fight

うびうび はにー

3 2 1

うーF i g h t !!

予選でも準決勝でも、タキオンは自分の実力が出せると証明した。
残すは決勝で、今までの全てを出し切れるかどうかだった。

うー

うまだつち

うー

うまびよい

うまびよい

今まで以上にハイレベルなレースで、タキオンがどんどん抜かされていった時は思わず心臓が止まるところだった。

でもタキオンが諦めていないから、俺も頑張れ！ と応援していた。

うー

すきだつち

うー

うまぼい

うまうまうみやうにや

きみの愛バが！

俺の愛バが！

タキオンが加速してどんどん追い抜いていくのを見て、涙がこぼれた。

あと少し！ あと少しで理想に届くんだ！

順位なんか気にしないで、タキオンの走りだけを見ていた。

ずきゅんどきゅん 走り出しー

ふっふー

ばきゅんぶきゅん かけてーゆーくーよー

全力で走って、自分の理想で碎けそうな脚を回転させて。

一瞬で先頭まで駆け抜けていく姿に目が灼かれた。

こんなーおもいーはー

はーじめてー

3

2

1

F i g h t !!

ゴールドシツプと並んだ時、いけると。

何故か思ってたんだ。

行つてくれ！ そう願ったら、タキオンは何もかもを置き去りにしていった。

ずきゅんどきゅん

胸が鳴り

ふっふー

ばきゅんぶきゅん

だいすーきーだーよー

ゴールインしても走り去っていく姿を見た時、ついにやったんだ……そう思った。

ゴールドシツプが止めてくれなかったら、きつと大変なことになっていただろう。

トレーナーとして失格かもしれないが、俺は止めれなかっただろうなと感じた。

今日もーかなでーるー

はびはび だーりん

3 2 1 Go F i g h t

うびうび はにー

3 2 1

うーF i g h t !!

タキオンとの3年間。それは超光速で過ぎた最高の時間。

センターでポーズを決めたタキオンを見て、似合わないな、なんて思うのであった。

epilogue : 私に必要なもの

「随分長く語ってしまったね」

外は既に暗くなってきた、太陽が沈んでいくのが見える。

私は紅茶を口に含み、香りと甘さを楽しむ。

トレーナー君も紅茶をぐいっと飲み干し、お腹がぱんぱんだと息を吐いた。

「茶葉がなくなってしまうぐらいには飲んだからね。明日買いに行こうじゃないか」

そう提案すると、トレーナー君は構わないよと答える。

前からそうだし今も変わらないが、大抵のことを許容するのは甘すぎる気がするね。

私にとっては都合がいいから黙っているけど。

「さて、もう過去の話は終わりでいいだろう。私たちが目指すべきは前にある」

次なる研究の計画について話そうじゃないかと言うと、なんだか面倒だという表情をする。

「なんだ、君は。私に話すだけ話させて、自分は逃げようというのかい？ それは許さないぞ。君はいつまでも私からは逃げられないんだ。観念して聞くことだよ」

しょうがないなと息を吐き、眉尻を下げながら笑うトレーナー君。

「ここ最近トレーナー君は私に遠慮が無さすぎる。前まではなんでもわかったといっ
てくれたのになあ。」

「計画といっても、進むべき道は見えている。決勝で出したあのスピードは、私の肉体の
限界を超えた先にあつた。なら、話は簡単だ。肉体の限界値を上げればいい」

要はもつと鍛えるということだね。

私は研究ばかりしていたから、どうしても他のウマ娘より筋力が劣る。

飛び抜けているのはやはりスピードだけだ。それは決勝のレースでも感じたこと
だった。

ゴールドシップ君がわかりやすい例だ。

全てを完璧に鍛え上げた肉体と、天性の丈夫さ、そしてそれをフルに使える走法。

速く走るための理想を現実にしたなら、きっと彼女のようになるんだろうね。

私が限界を超えたというのに平然と追いついてきたわけだし。

「私の肉体の完成度はトウインクル・シリーズのウマ娘と平均すると下のほうだろう。
なにせ鍛えている時間があまりにも違う」

それはそうだとトレーナー君は頷く。研究をしている時点で絶対負けるからな、と。

事実なわけだが研究だって速く走るために必要なことだ。トレーナー君に言及され
るとムツとする。

「確かに研究では体を鍛えることはできないが、私の目指すところに行きつくには必要なことだっただろう。トレーナー君だつてわかっているじゃないか」

思わず口にする、軽率だったな、ごめんと謝られた。

わかればいいんだよ、わかれば。

「ともかく、私たちに必要なのは鍛え上げた肉体さ。次に必要になる物は鍛えながら考えることにしよう」

計画を結論付けて立ち上がる。

今日は遅いし、解散だね。

トレーナー君がカップやポットを片付けるのを眺めつつ、私も実験道具をまとめる。

後始末が終わつて、トレーナー室から出ようとする、声をかけられた。

「どうしたんだい、トレーナー君」

忘れ物。そう言つてノートを差し出された。

「ああ、これか」

毎日書いている自分自身のレポートだ。

日記ともいうね。

手に取つて頭からめくつていく。

R e p o r t : ●×年4月△日

興味深い新人トレーナーを見つけた。

どうやら私のことを知らなかったようで、話しても特に拒否反応を示さない。

実験を嫌がってはいたがそこまで否定的な雰囲気ではなかったため、今後彼を2人目の成人男性被検体Bとして観察することにする。

もう1人の被検体Aは、チームリーダーからの監視が厳しいからね。

問題児をあそこまで手懐けているというのも興味深いものだ。

「いやはや3年前の私は随分と手厳しいなー」

トレーナー君と会った時のページを見て、思わず笑ってしまった。

続けてペラペラと次のページへ目を走らせる。

R e p o r t : ●×年7月◆日

デビュー戦で1着。圧勝だったようだ。

ウイニングライブも行って疲れた。

研究の結果としては、脚の強度は上がっていることがわかった。

この調子で研究を続けよう。

それにしても、紅茶を買ってくれといったのになんで買ってこないんだ。それでもトレーナーなのか、モルモット君。

——そんなことあつたな。

2人で読みながら、トレーナー君が呟く。

デビューの時は勝てるかわかっていたからね。なんで頼んだのについて思っていたよ。

Report：●△年4月×○日

皐月賞に勝利した。

トレーナー君はとても喜んでいた。やったやったと手を握られたよ。

しかし心配もしてくれているようで、すぐに脚を確認された。

すぐに大丈夫と行って控え室まで行ったが……危ないところだった。

わかつてはいたけれど。

こんなにも弱いとは思わなかったよ。

期待外れさ、まったく。

トレーナー君に話すべきだろうか。

「結構落ち込んでいたんだね、私も」

この時はまだ脚に不安を抱えたままだったからね。

GIレースには耐えられないことが改めてわかってひどく辛い思いをしたのを覚えている。

Report : ●△年10月□×日

走り切ることができた。

これでもう何も心配はいらない。

これからはトレーナー君に期待してもらおうじゃないか。

きっといいプレゼントになるはずさ。

GIレースの勝利はね。

「元気になったなあ!」

トレーナー君と2人で笑い合う。

菊花賞を終えて走れることがわかり、とても元気になっていた。

我ながら現金なものだね。

Report: ●△年12月○▲日

いつたいなんなんだトレーナー君は！

大体紛らわしいことこの上ない！

しかも私があんなに気にしていたのにそれよりつてなんだ！

いつも思っているがトレーナー君は……

） 中略 ）

とりあえず何もなかったから良しとしよう。

なにかと脚のことを気にしているから、私も大丈夫だと意思表示をもつとしないといけないみたいだね。

世話のやけるトレーナーだな、君は。

「ああ、これはさつきの話だね。私は大丈夫だといっていたのにトレーナー君が心配するとうやつさ」

いやあ、面目ないと頭をかいた。

この時はお互いに心配し合ってすれ違うという変な時期だった。
今は2人とも大いに反省しているよ。

Report : ●◇年4月◎▽日

ファンとの交流、中々いいデータがとれた

深淵を覗くものはなんとやらと言うものだけどね

高揚しているファンを見ると、私も高揚してしまう

感情というものはおもしろいものだね

「これはファン感謝祭のことかな。かなり有意義だったよ」

昔のタキオンでは考えられないな、と言われてしまった。

確かにそうだねと答える。

まあ、今も昔も自分の目的のために動いているのは変わらない。

Report : ●◇年12月▽×日

今日は最高にいい気分だ

自分が思い描いた最高の結果を出せたのだから

思わずトレーナー君の手を握ってふりまわしてしまったよ

はしゃいで喜ぶなんていつぶりだろうね

さて、次は何を研究してみようか

カフェのお友だちを調べれば、また新たな知見が得られるかもしれないね

さらなる果てへ向かって行こうじゃないか

「有マ記念だね」

そうだな、と頷くトレーナー君。

あの時は嬉しくて2人きりになってから思わずはしゃいでしまった。

でもトレーナー君もすごい嬉しそうだったしお互い様だよ？

Report: ●▼年3月○△日

人生で一番嬉しいひとときだった

また味わいたいものだね

ああ、これは。

「この前の日記だよ。決勝の時の」

トレーナー君の顔を見ると、穏やかな笑みを浮かべて頷く。

方々からものすごい心配されたし、カフェやシャル君からは物凄い怒られたよ。

しかし私もトレーナー君も、一番求めていたところに踏み込んだんだ。

これを成功と言わずしてなんというか！

ちらつとトレーナー君の横顔を見る。

楽しそうに嬉しそうに私の日記を眺めていた。

色々あったが、トレーナー君がいたからここまでこれたわけだ。

少しぐらいいいたわってあげようじゃないか。

「少し照れくさいからね」

私はそう話して、日記を書きこんでいく。

書き終えて隣を見ると、くつくつと笑うトレーナー君の顔。

そして、頭をわしわしと撫でられた。

髪と耳は触らないでほしいとあれだけ言っているのにね！

「なんで君はいつもそうやって触るんだい！」

悪い悪いと言いながらまだ頭を撫でてくる。

そして楽しそうに笑顔を見せた。

——いつしよに果てを見るからな！

ああ、そうか。

私が必要だったのは——。

「まったく……ほら、帰ろう。いつしよに」

トレーナー君の腕を叩きながら、歩いていく。

隣で共に歩くトレーナー君。

ほんの少しだけ感じる暖かさに、私は目を細めるのだった。